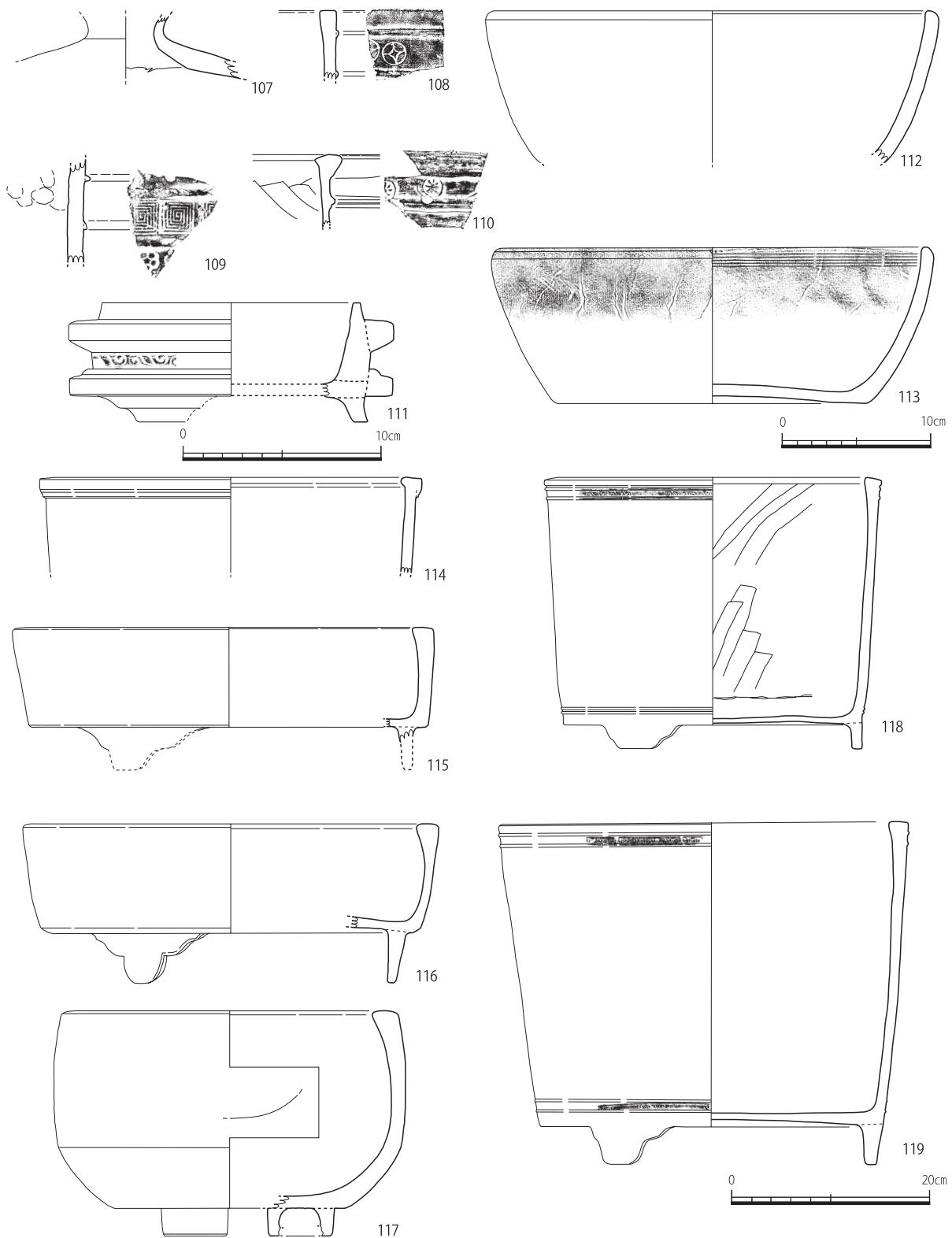




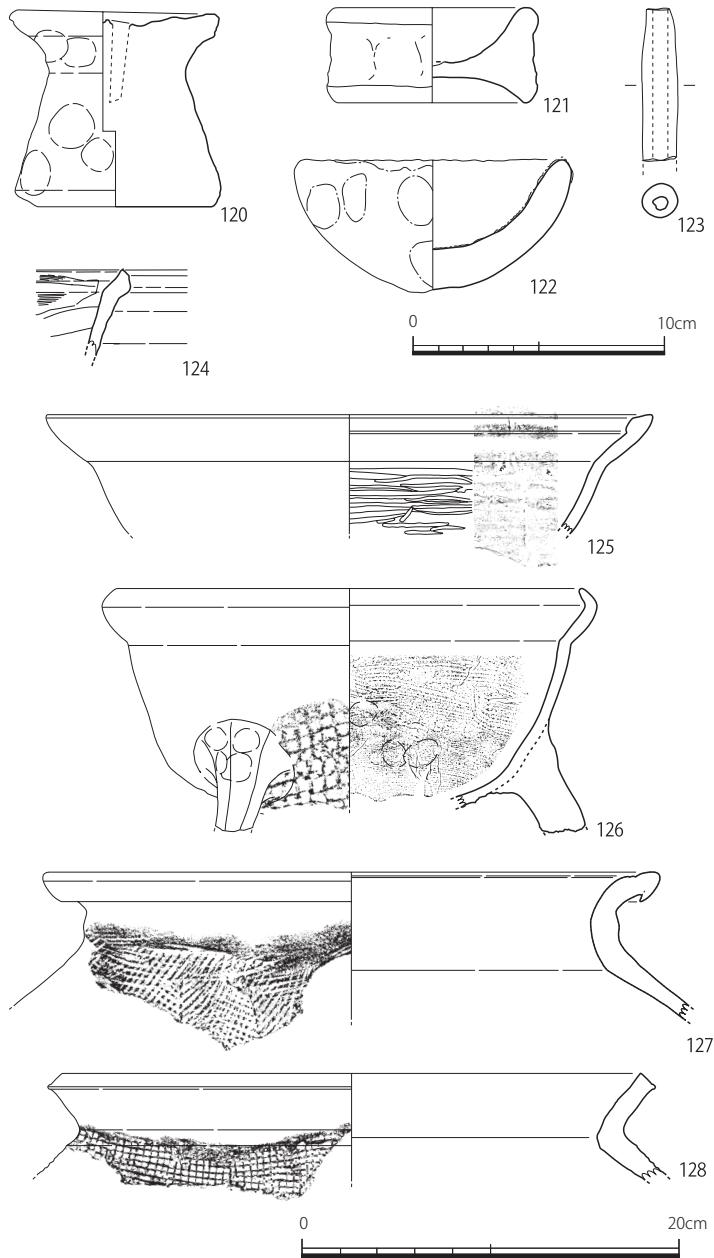
第28図 町60次調査 S-200出土遺物⑦ (1/6)

に、横方向のミガキ調整が観察される。126は、防長系瓦質土器足鍋。外面体部下半に、格子目状の叩き痕跡が観察される。127は、東播系須恵器甕の口縁部から肩部片。口縁部は、頸部上方から短く外反し、外面に面が形成され、下方に垂れる。口縁端部上面は、ヨコナデ調整による凹線が、肩部外面は、「樹枝文様」の叩き目が観察される。荻野編年IV期に相当し、13世紀後葉～14世紀前半に比定される。128は、瓦質土器甕の口縁部から肩部片。頸部が、「く」字状に外反し、口縁部は断面形状が方形を呈し、外面端部をやや摘み出す。肩部外面には、正格子の叩き目が観察される。

129・130は、軒丸瓦の瓦当部片。型押しにより、「左巻き三巴文」を中心に「珠文」が配され、外圈線が巡る。S-177・178出土資料に比べて、外縁高が1.2cmと高く、「巴文」・「珠文」も大きく造られる。「巴文」・「珠文」の頂部は、平坦に造る。胎土に、石英とみられる白色粒子が含まれており、海部郡産と推定される。129の凹面に、コビキA痕跡・布目痕・横方向に連続する吊り紐痕が観察される。131～133は、玉縁を有する丸瓦。



第29図 町60次調査 S-200出土遺物⑧ (107・111 1/3、108~110・112~114 1/4、115~119 1/6)



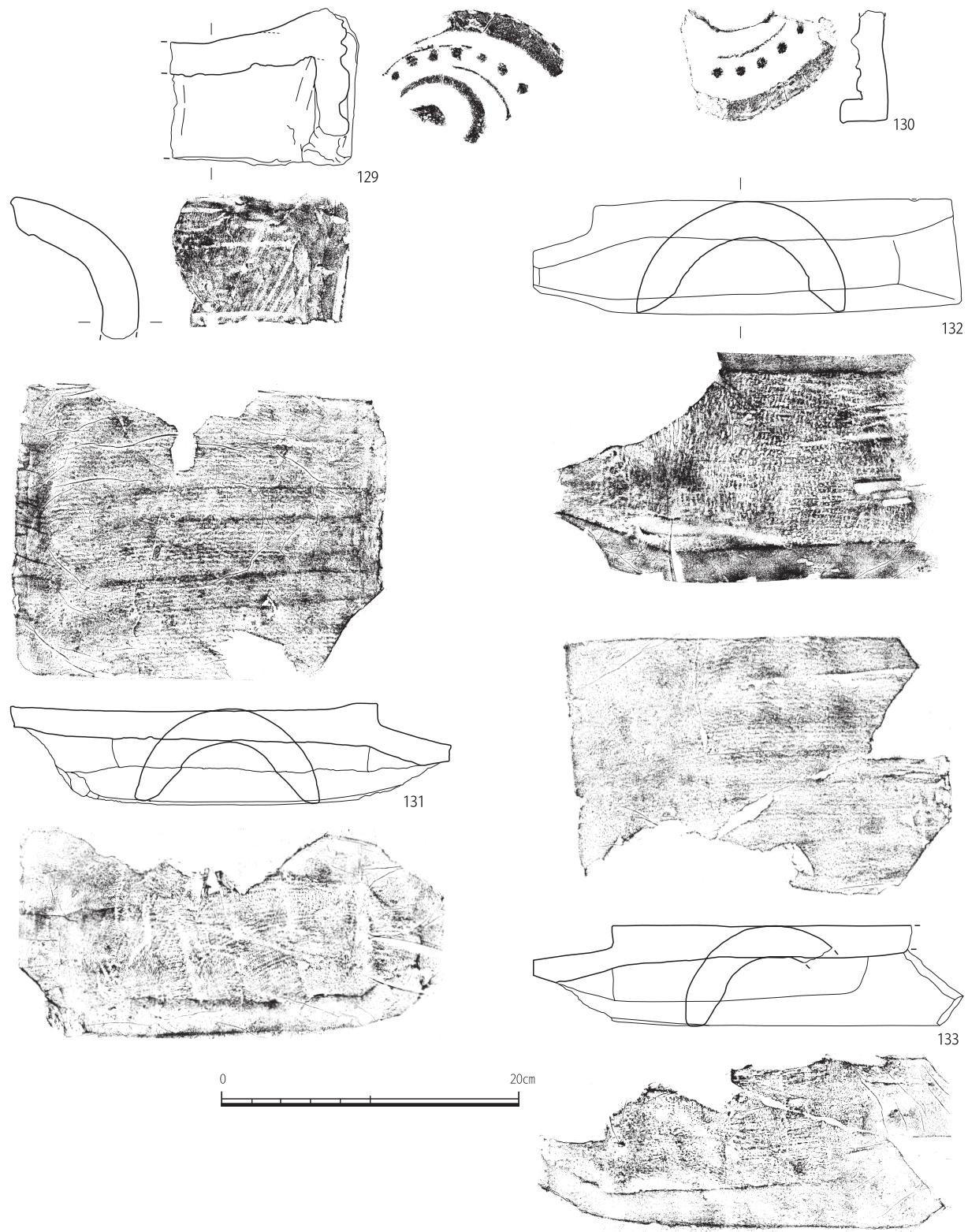
第30図 町60次調査 S-200出土遺物⑨ (120～123 1/3、
124～128 1/4)

SX023出土資料に、共伴遺物から14世紀代に比定される蓮華唐草文軒平瓦があり、同型とみられる。胎土に、石英とみられる白色粒子が含まれており、海部郡産と推定される。

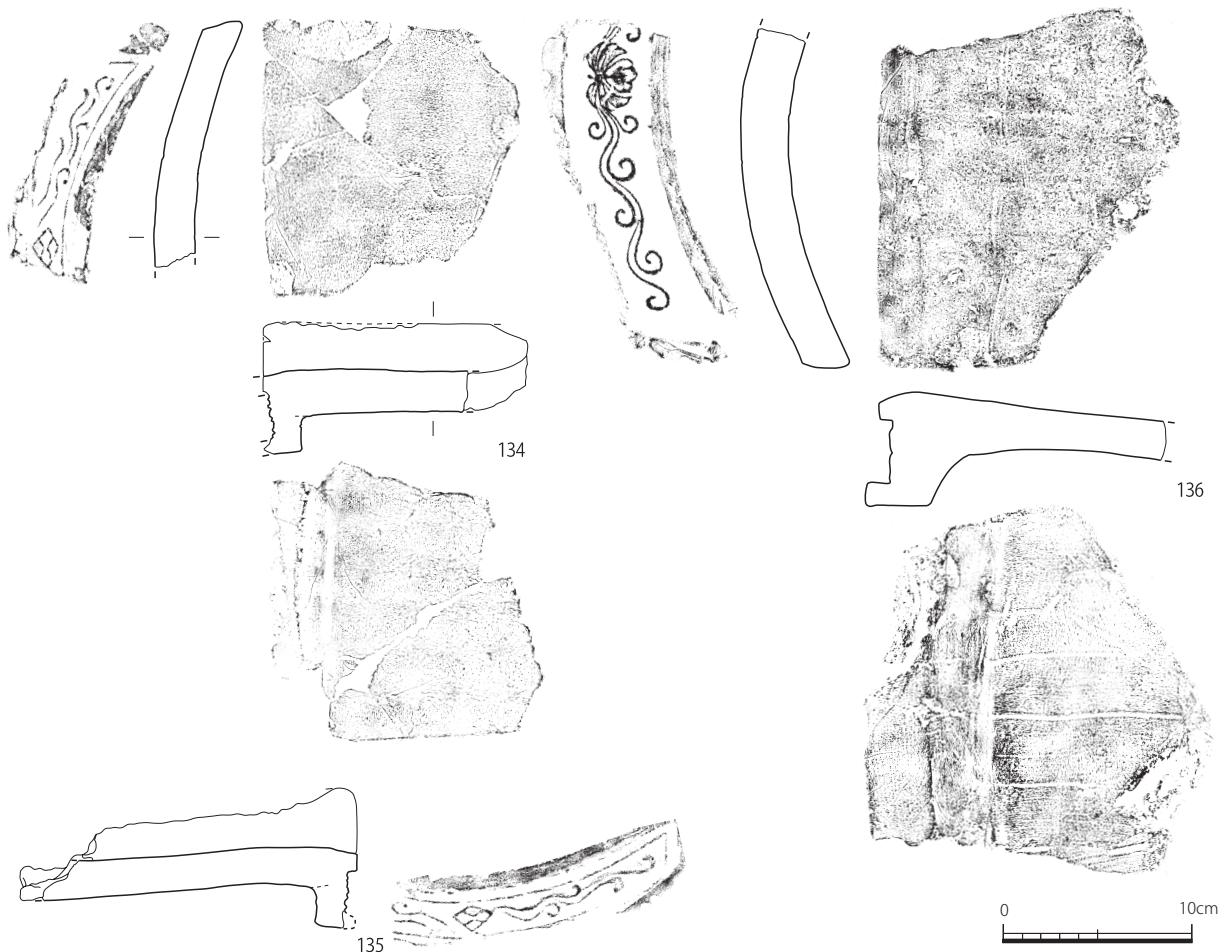
137は、平瓦片。凹面狭端面に、幅1.5cm程度の面取りが観察される。138は、道具瓦。形状から、博と考える。上面に、離れ砂痕が、下面に、2次被熱の痕跡が観察される。139は、石製スタンプか。石材は、滑石。表面は、「草花文」と推定される文様ほかが陽刻される。裏面は、2条の溝を削りだすことで中央に凸部が形成される。凸部中央には、紐孔と推定される痕跡が観察される。町20次B区調査地の整地土及び包含層出土資料・町10次I区4-B区P001出土資料・朽網南塚遺跡の(遺物包含層)3層中層出土資料・草戸千軒町遺跡第10次調査区表土層出土資料などに類例がみられる。石材・形状および類例を参考にすると、滑石製石鍋を転用して、裏面に握り手をつくり、表面に文様を刻したスタンプと考えられる。140～142は、石硯。140は、硯材が、頁岩あるいは粘板岩。硯側は、ほぼ垂直に切断し、硯陰は、平坦に造る。長方形を呈する。141は、硯材が、結晶片岩。

玉縁両側縁に、面取りをおこなうが、132は、凸面狭端縁連結面まで、面取りがおよぶ。131・133の凸面に、縄目痕が観察される。凹面に、コビキA痕跡・布目痕が観察されるが、132の布目は131・133に比べて目が粗い。32の凹面には、内叩き痕とみられる成形時の痕跡が残存する。また、凹面玉縁面・側面が、131・132に比べて、幅が非常に狭い。法量にも差がみられるため、葺かれた箇所が異なる可能性が指摘される。131・132の胎土には、石英粒とみられる白色粒子が含まれるため、海部郡産と推定される。

134～136は、軒平瓦。134・135の瓦当面は、「菱形唐草文」が施文される。瓦当面・凹面・凸面に、離れ砂痕が観察される。頸部瓦当裏面は、ヨコナデ調整が、134には、幅約1.5cmの縦方向の工具ナデ調整の痕跡が、観察される。また、134の瓦当が欠損する箇所に、瓦当部との接合を強化するために施された連続する斜め方向の刻み目が観察される。いわゆる、「芋付け」の痕跡と、みられる。136は、瓦当面の中心飾りは「蓮華文」、上向き・下向き「唐草」が各々3つ、明瞭に施文される。瓦当外縁上端面に、幅2.0cm程度の面取りが、凸面に、縦方向の幅約3.2cmの工具ナデ調整が、観察される。頸部瓦当裏面は、ヨコナデ調整がおこなわれる。向かって、右端において、縦方向に圈線の一部がみられるが、上端・下端には、みられないことが、この範型の特徴と考える。町6次



第31図 町60次調査 S-200出土遺物⑩ (1/4)



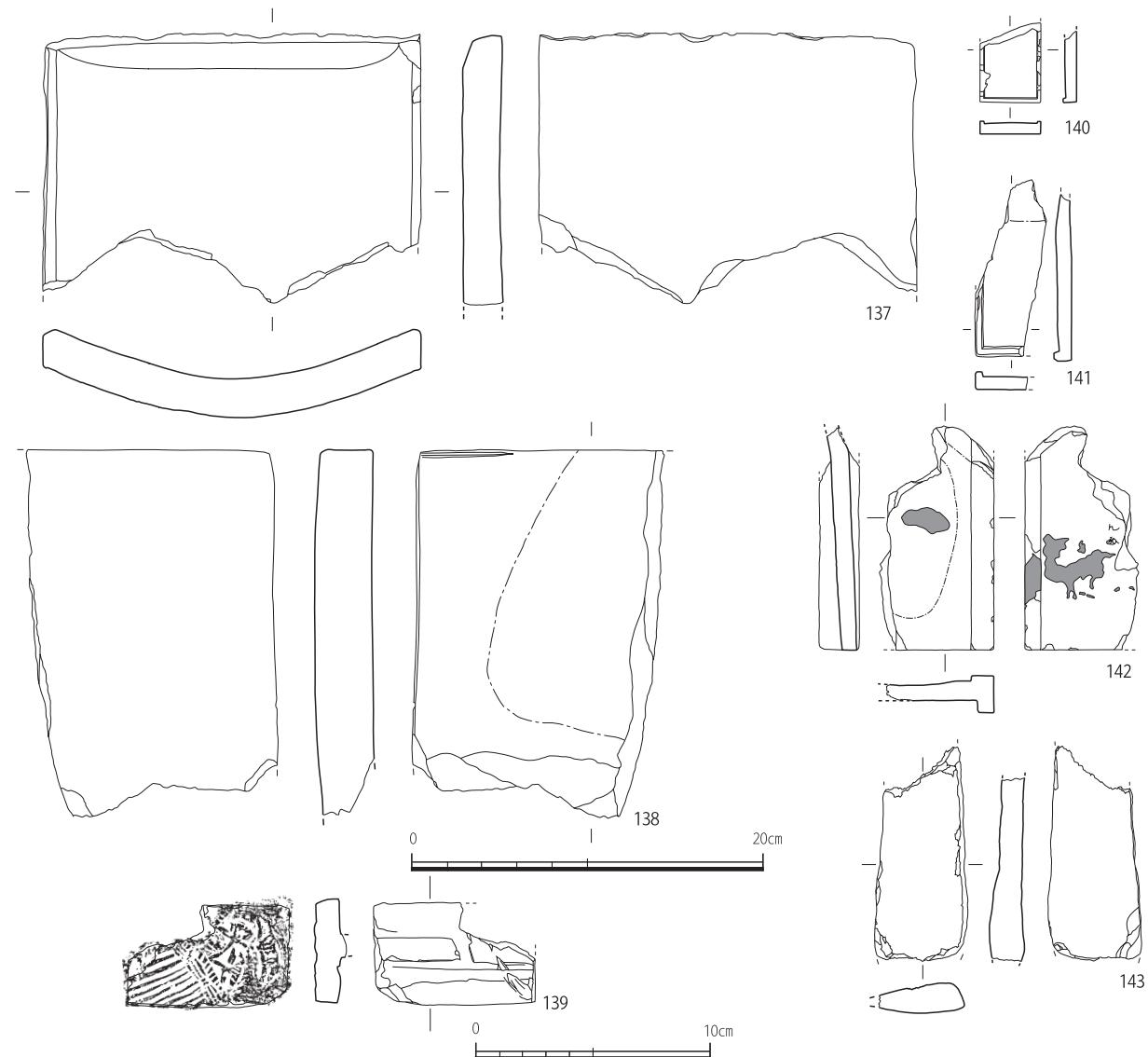
第32図 町60次調査 S-200出土遺物⑪ (1/4)

硯陰は、平坦に造り、長方形を呈する。縁の内形・外形の角は面取りがおこなわれ、断面が台形状を呈する。隅部は、外形を隅丸に、内形を直角に造る。142の硯材は、輝緑凝灰岩、山口産の「赤間石」。中央横断面が「H」字状を呈し、硯陰に脚が削り出される長方形硯。硯面・硯陰に、擦痕・墨痕が観察される。縁幅に比して、脚が幅狭に造られる。硯面中央に、池が造られ、硯陰に、判読はできないが文字が線刻される。143は、結晶片岩製砥石。上面・下面・両側面に磨耗痕が観察される。

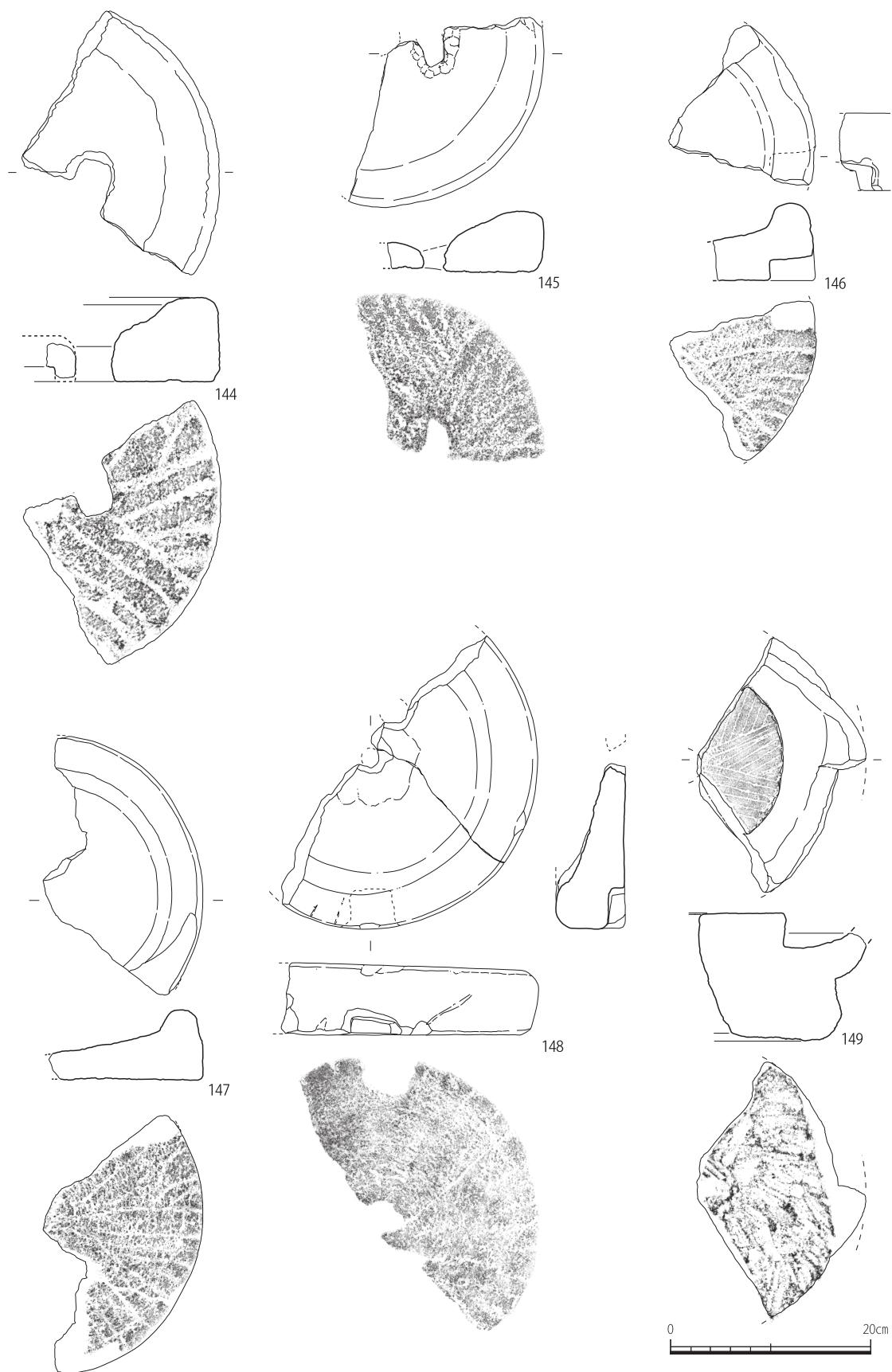
144は、粉挽き臼の上臼片。石材は、安山岩。芯棒受け部と供給口が残存する。上縁部から側面にかけてミガキ調整により平滑に仕上げる。臼面は、磨耗し、幅0.5～1.2cmの主溝2条・副溝3条が残存する。擂目は、目と目の間隔が一定せず、線も不規則に刻まれ、断面が幅広の「U」字形状を呈する。145は、粉挽き臼の上臼片。石材は、安山岩。供給口および芯棒受けが、残存する。臼面が、ほとんど摩滅しており、主溝・副溝が不明瞭。146・148は、粉挽き臼の上臼片。石材は、安山岩。146の臼面は、磨耗し、幅0.3cm程度の主溝2条・副溝4条が残存する。擂目は、目と目の幅が一定ではなく、線も不規則に刻まれる。148の臼面は、擂目の磨耗が著しく、主溝・副溝が不明瞭である。供給口と芯棒受けが残存しており、芯棒受けは、くぼみまで貫通する。146・148の側面に残存する旧挽手孔痕は、臼面に達していることから、当初、上臼の中位ほどに穿たれた挽手孔が、臼面に達するまで、「目立て」を繰り返しながら使用されたと考えられる。147は、粉挽き臼の上臼片。石材は、安山岩。臼面は、磨耗し、幅0.4cm程度の主溝3条・副溝3～5条が残存する。使用によって著しく摩滅した箇所の擂目が不規則であり、擂目を刻みかえる「目立て」がおこなわれたと考えられる。149は、

茶白の下白片。石材は、安山岩。底部は、ケズリ調整が観察される。白面は、磨耗し、幅0.2cm程度の主溝2条・副溝5~8条が残存する。擂目は、周縁まで続く。目と目の幅が一定ではなく、使用によって著しく摩滅した箇所の擂目が枝分かれするなど不規則であるため、擂目を刻みかえる「目立て」がおこなわれたと考えられる。

150~157は、金属製品。150は、青銅製鍵。町7次SK571・町17次SD220出土の類似資料を参考にすると、「コ」字状を呈すると推定される。外側に張り付いた状態の青銅製板状部片は、鍵本体との間に泥の詰まった空間があること、鍵の持ち手と考えられる部分までは青銅製板が覆っていないことなどから、鍵が差し込まれた状態で埋没した錠の一部が残存していると推定される。151は、鉄製鍵。152~157は銭貨。152は、唐銭で、表面に「開元通寶」と真書で鋳出され、裏面は無文。初鋳造年は、621年。153は、北宋銭で、表面に「元豊通寶」と行書で鋳出され、裏面は無文。初鋳造年は、1078年。側面に、ミガキ調整が観察されるため、周囲を削り取った磨輪銭と考えられる。154は、2枚の銭貨が背面で溶着している。ともに北宋銭。表面は「祥符元寶」と真書で鋳出される。初鋳造年は、1009年。裏面は「熙寧元寶」と真書で鋳出される。初鋳造年は、1068年。155は、北宋銭で、表面に「元祐通寶」と行書で鋳出され、裏面は無文。初鋳造年は、1086年。156は、北宋銭で、表面に「治平元寶」と真書で鋳出され、裏面は無文。初鋳造年は、1064年。157は、北宋銭で、表面に



第33図 町60次調査 S-200出土遺物⑫ (139 1/3, 137・138・140~143 1/4)



第34図 町60次調査 S-200出土遺物⑬ (1/6)

「大觀通寶」と真書で鋳出され、裏面は無文。初鋳造年は、1107年。

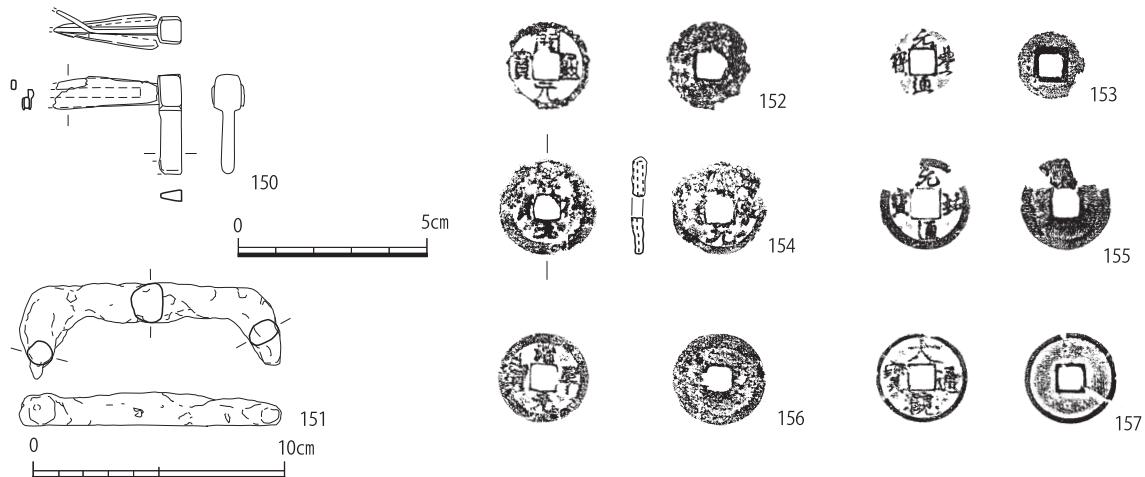
S-221・222 出土遺物（第36図）

1は、S-221から、2～3は、S-222からの出土である。1は、京都系土師器皿。塩地編年第2期に相当し、16世紀後半に比定される。2は、土師器坏。底部は、回転糸切り離し後の板状圧痕が観察される。3は、備前焼鉢。体部が内湾し、口縁端部は、ヨコナデ調整により、平坦に仕上げる。外面の口縁部下に、笠状工具により、1条の沈線を巡らせる。4は、備前焼壺。頸部が短く外反し、口縁部が肥厚する。底部は、ほぼ平底状を呈するが、成形時の圧痕により、やや凹凸がみられる。外面の体部下半に、「|」の記号が笠描きされる。内面の体部上半に、粘土紐接合痕が観察される。乗岡編年中世6期aに相当し、16世紀前半に比定される。

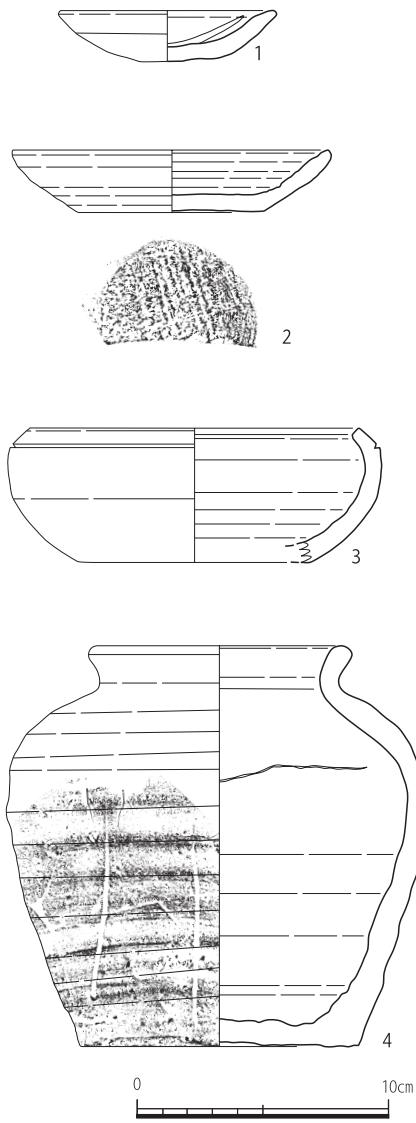
S-230・231・223 出土遺物（第37～48図）

S-230 出土遺物（第37～39図）

1は、土師器小皿あるいは焼塩壺の蓋か。2は、土師器小皿。底部は、回転糸切り離し。14世紀代か。3は、土師器坏。底部は、回転糸切り離し後の板状圧痕が観察される。強いヨコナデ調整により内外面に2条以上の稜が形成される。いわゆる「ロクロ目」。16世紀前半に比定される。4～34は、内面の最終調整にナデアゲが施される京都系土師器皿。法量に大小の違いがあるが、大部分が塩地編年第2期に相当し、16世紀後半に比定される。15は、塩地編年第1期に相当し、16世紀中頃に比定される。33・34は、口縁端部をつまみあげ、他の京都系土師器皿に比べて器高が高く、深い塊型を呈する。内面の最終調整に、ナデアゲを施すなど京都系土師器皿の技法でつくられる。河野G-2類に相当し、16世紀後半に比定される。7～14・17～20は、口縁部内外面に煤痕が観察されるため、灯明皿として用いられたと推定される。35は、中国産青磁碗。釉調・胎土などから龍泉窯系以外の産地と推定される。36・37は、中国南方産緑釉陶器小皿。いわゆる「交趾焼」。型づくりで、花弁状を呈し、37は、高台内に方形2条の圈線がスタンプで形成される。博多遺跡群第124次調査において、類似出土資料がみられる。38は、景德鎮窯系五彩稜花皿の口縁部片。口縁部が、外反し、端部が、輪花状を呈する。内面に、「四方襍文」ほかが上絵具で絵付けされる。内面は、透明釉が、外面は、黄茶色を呈する釉が施される。39～41は、景德鎮窯系青花碗。見込みが「饅頭心」状を呈する小野分類染付碗E群に相当し、16世紀中頃以降に比定される。畠付の釉を剥ぐ。39は、高台片。染付けで、見込みに、「巻貝」・「海藻」・「波涛



第35図 町60次調査 S-200出土遺物¹⁴⁾ (150・152～157 1/2、151 1/3)



第36図 町60次調査 S-221・
S-222出土遺物 (1/3)

筒状を呈する鉢。体部下半から口縁部にかけて、ほぼ直立する。口縁端部は、ヨコナデ調整により平坦に仕上げる。底部は、ナデ調整により上げ底状を呈し、窯印と考えられる「○」のスタンプが観察される。53は、水屋甕の口縁部から体部片。頸部が短く、口縁部は肥厚させ、外面に張り出す。口縁端部は、ヨコナデ調整により平坦に仕上げる。体部中位に1条凸帯が貼り付けられる。凸帯は、断面が台形状を呈する。乗岡編年中世6期aに相当し、16世紀前半に比定される。54・55は、擂鉢。54は、口縁部の形状や内面の放射状の擂目などから、乗岡編年中世6期aに相当し、16世紀前半に比定され、55は、口縁部の形状や内面の交差状の擂目などから、乗岡編年近世1期bに相当し、16世紀末に比定される。擂目は、ともに使用により磨耗する。56～58は、瓦質土器。還元焰焼成を指向するが、燻しをおこなわず、橙色系を呈する。56・57は、焼塩壺。56は、口縁部から体部片。頸部から口縁部にかけて、ヨコナデ調整により窄まり、直立する。口縁端部は、丸みを帯びる。体部内外面は、ナデ調整が、内面に粘土紐接合痕が観察される。57は、口縁部から体部外面にかけて器面剥離のため、調整不明瞭。底部は、ナデ調整により、平底を呈する。体部内面に、ナデ調整・粘土紐接合痕が観察される。16世紀末～17世紀初頭に比定される府内城三ノ丸遺跡SK23出土の無刻印の焼塩壺に比べて、器高が低

文」が描かれ、高台内に字款状に「精製」の略字銘が記される。40は、染付けで、見込みと外面に「蛟龍文」が描かれ、高台内に字款状に「富貴佳器」の略字銘が記される。41は、高台片。染付けで、見込みに「花文」が、外面に「唐草文」が描かれ、高台内に字款状に「精製」の略字銘が記される。42・43は、漳州窯系青花碗。42は、畳付の釉を剥ぐ。外面に、「草花文」が、見込みに簡略化された「花弁文」が、染付けで描かれる。43は、高台を削りだし、高台内中央は、やや削り残す。畳付は面取りをおこなう。体部が、やや内湾しつつ、立ち上がり、口縁部は、わずかに肥厚する。高台は露胎を呈し、見込みは、輪花状に釉を剥ぐ。染付けで、内外面口縁部下、内外面体部境に、それぞれ界線をめぐらし、見込み中央には「・」を描く。42に比べて、胎土が陶質に近く、貫入が発達する。44は、景德鎮窯系青花皿。底部が「碁笥底」状を呈する小野分類染付皿C群に相当し、15世紀後半以降に比定される。外面に、「芭蕉葉文」が、見込みに、「花弁文」が染付けで描かれる。45は、景德鎮窯系青花皿の高台片。畳付の釉を剥ぐ。見込みに、「蛟龍文」が、高台内に、字款状の「福」の吉祥字が染付けで描かれる。小野分類染付皿E群に相当し、16世紀後半以降に比定される。

46は、景德鎮窯系青花合子蓋片。口縁端部は、釉を剥ぐ。外面に、「花唐草文」が染付けで描かれる。47は、景德鎮窯系白磁稜花皿。型押しにより、体部内外面を花弁状に、口縁端部を輪花状につくる。畳付の釉を剥ぎ、砂粒と植物纖維が付着する。高台内中央に、字款状の「福」の吉祥字が染付けで記される。48は、朝鮮王朝産粉青沙器碗の口縁部片。いわゆる「彫三島」。口縁部内外面下端の2条沈線内に、斜線の文様帯を彫り込み、白土を埋め込んだ後に、白化粧が施される。49は、瀬戸・美濃産天目碗の口縁部から体部片。口縁部が稜をつくり立ち上がり、外反する。釉を外面体部下半で拭き取る。藤沢編年大窯第4段階に相当し、16世紀末に比定される。50・51は、瀬戸・美濃産陶器卸皿。50は、口縁部から体部片。51は、底部片。底部に、回転糸切り離し痕跡が観察される。52～55は、備前焼。52は、

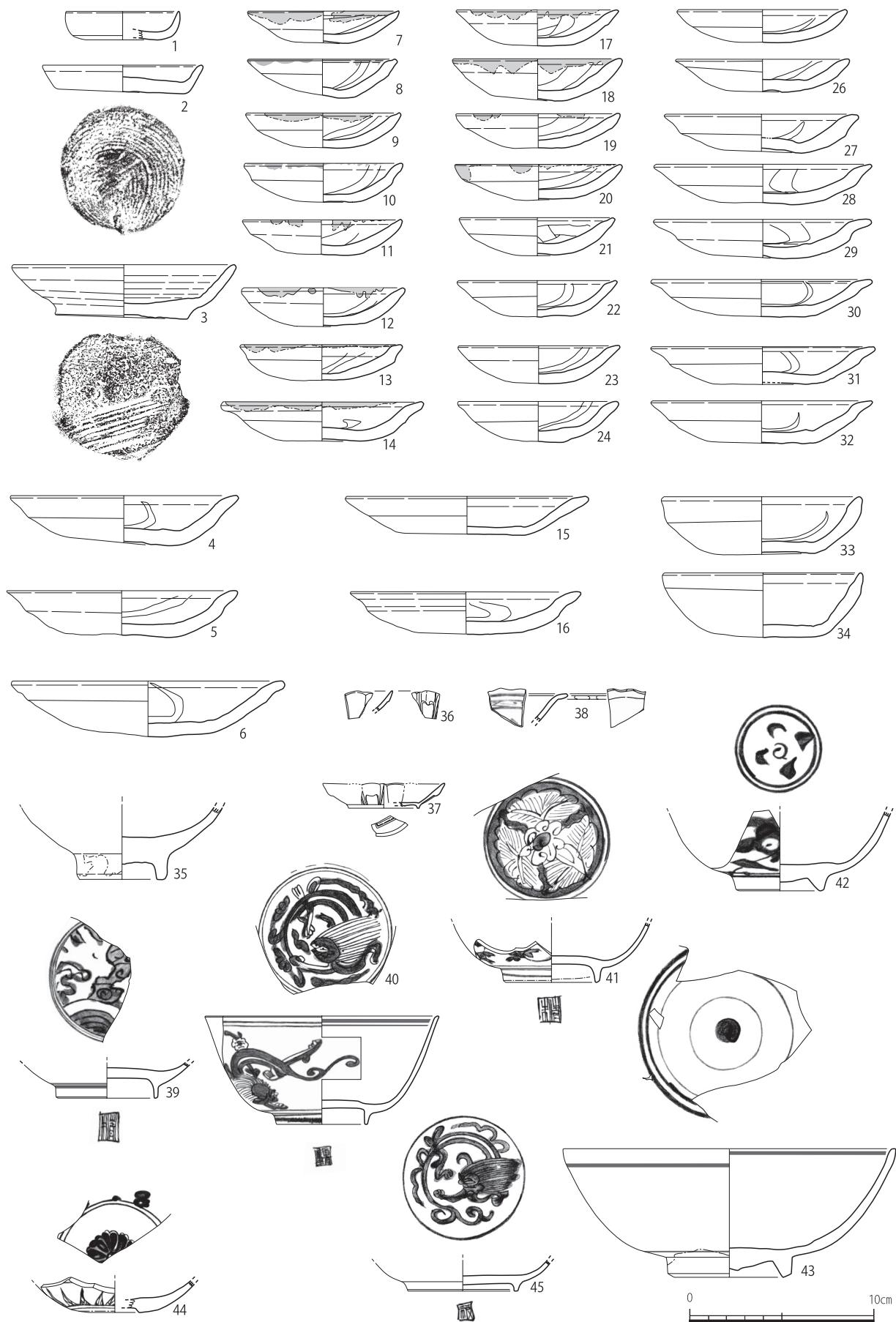
く、体部が球形状を呈し、体部内面の布目痕、外面の面取りも、観察されない。58は、鉢。底部は、平底を呈し、体部が内湾気味に立ち上がり、口縁部はやや肥厚し、端部が丸みを帯びる。内外面をミガキ調整により平滑に仕上げ、底部に離れ砂の痕跡が観察される。59は、銭貨。北宋銭で、表面は「政和通寶」と篆書で鋳出され、裏面は無文。初鋳造年は、1111年。60は、砥石。石材は、砂岩。表面・両側面・裏面に使用痕と考えられる磨耗が、表面に黒茶色の付着物が観察される。

61は砥石。石材は、結晶片岩。表面・右側面・裏面に使用痕と考えられる擦痕と磨耗が観察される。特に表面上方の2箇所に釘状の金属製品を研いだと推定される溝の痕跡が観察される。62は、鎧状木製品。表・裏面を平坦につくり、中央から端部にかけて細くなる。

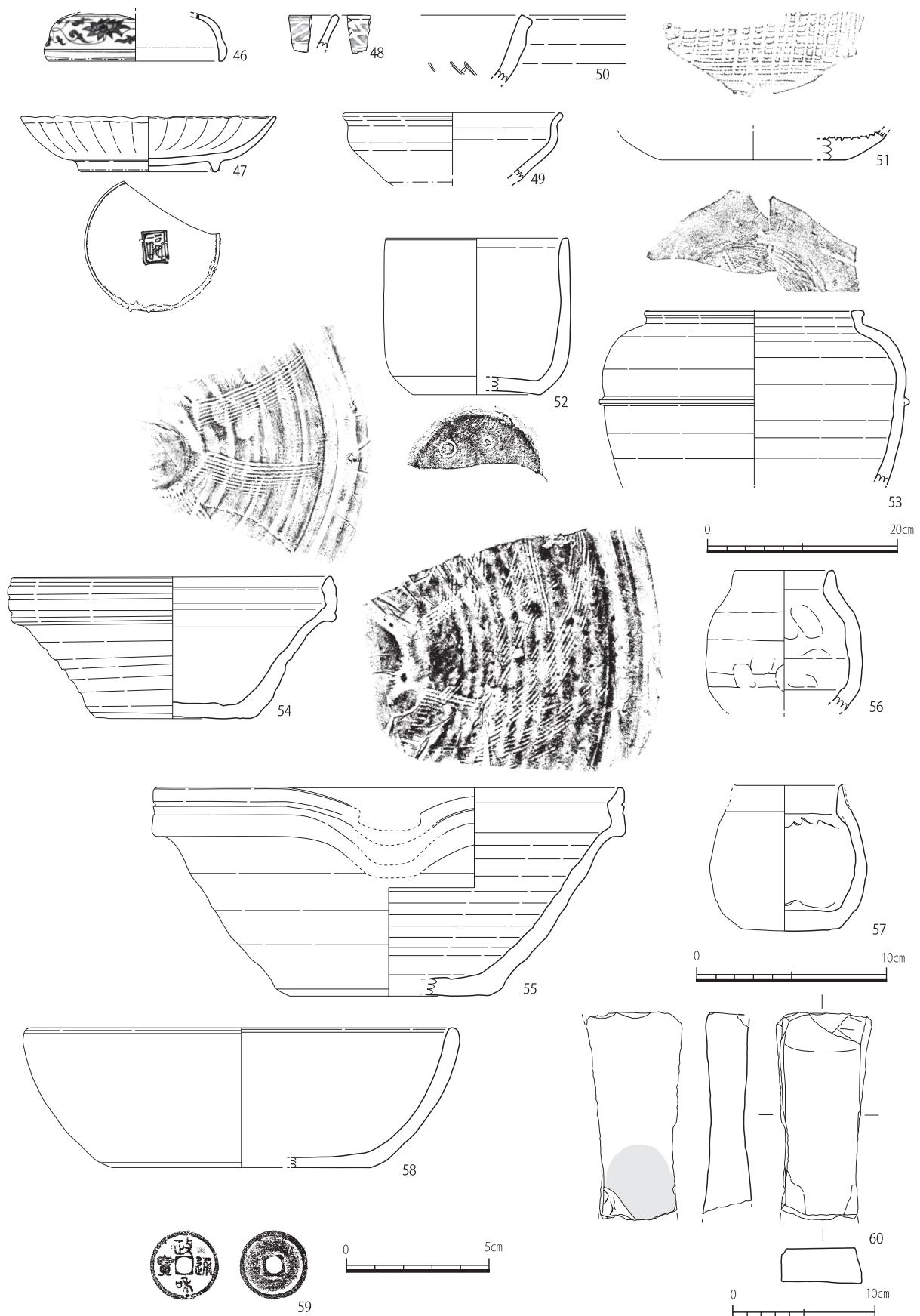
S-231 出土遺物（第40～42図）

1は、土師器小皿。底部は、回転糸切り離し。2は、土師器皿。底部は、回転糸切り離し。体部内面の最終調整に、ナデアゲが観察されるため、京都系土師器皿の模倣をしたタイプと考えられる。16世紀代か。3～10は、土師器坏。底部は、回転糸切り離し。いわゆる「ロクロ目」。体部に強いヨコナデによる稜が2条以上形成される。16世紀前半に比定される。3・9・10は、底部に、回転糸切り離し後の板状圧痕が観察される。11～22は、内面の最終調整にナデアゲが施される京都系土師器皿。法量に大小あるが、大部分が塩地編年第2期に相当し、16世紀後半に比定される。20～22は、河野「g類」のG-2類に相当し、16世紀後半に比定される。口縁端部をつまみあげ、他の京都系土師器皿に比べて器高が高く、深い塊型を呈する。内面の最終調整に、ナデアゲを施すなど京都系土師器皿の技法でつくられる。9・14・16・17は、内外面に煤痕が観察されるため、灯明皿としての使用が推定される。23は、白磁壺あるいは瓶の体部片。内外面ともに施釉され、内面に、工具ナデ調整による稜が2条以上形成される。24は、景德鎮窯系白磁稜花皿。小野分類染付皿F群の鍔皿と同様の器型を呈する。25は、景德鎮窯系青白磁合子身。型づくりにより、体部外面に縦方向の稜を形成する。受け部・体部下半から高台にかけては露胎を呈する。2次被熱による釉変が観察される。26は、景德鎮窯系五彩碗の体部片。上絵具で、外面に「格子文」ほかを絵付けする。27は、景德鎮窯系青花小坏の高台片。染付けで、体部外面と見込みに「蛟龍文」が描かれ、高台内に字款状に「富貴佳貴」の略と推定される「富永分類仮称方形格子目文」が記される。28・29・33・34は、景德鎮窯系青花碗。28・29・34は、口縁部から体部片。29は、内面に「四方櫛文」を染付けで描き、外面体部に「草花文」を櫛描きする。33は、見込みが「饅頭心」状を呈する小野分類染付碗E群に相当し、16世紀中頃以降に比定される。染付けで、見込みに、「蛟龍文」が、体部に、「蛟龍文」・「草花文」が描かれ、高台内に字款状の「富貴佳器」の略字銘が記される。34は、見込み境に「蓮弁文帯」が、染付けで記される。30～35は、漳州窯系青花。30は、碗の口縁部片。体部外面に砂粒・植物纖維が付着する。31は、皿あるいは碗の高台片。高台を削りだし、高台脇を水平に削りこむ。見込みを輪状に釉を剥ぎ、体部下半から高台内まで、露胎を呈する。32は、碗。見込みは、釉を剥ぎ、高台内は、露胎を呈する。30ほかに比べて、胎土が陶質に近い。外面に、胎土の付着が観察される。35は、端反りのやや大型な碗。やや青味がかる釉で、貫入が発達する。

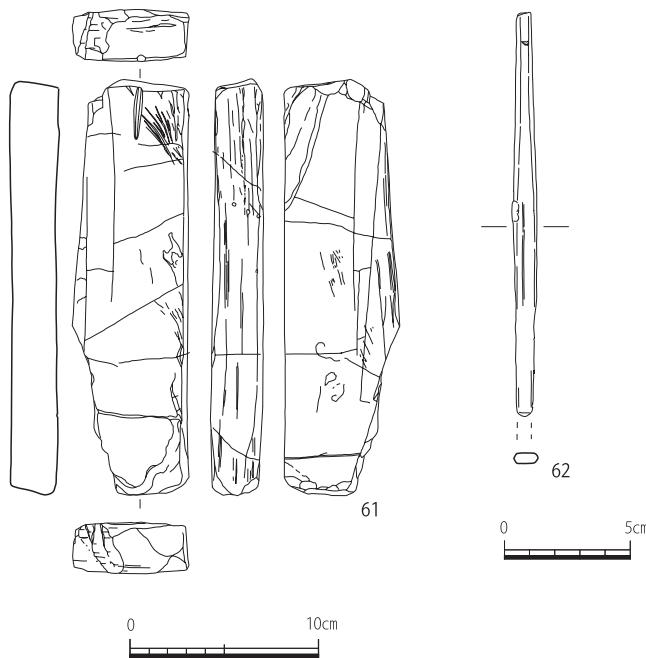
36・37は、景德鎮窯系青花皿。36は、「端反り」となる小野分類染付皿B群に相当し、15世紀後半以降に比定される。畳付の釉を剥ぐ。外面に、「花唐草文」を染付けで描く。37は、「鍔皿」となる小野分類染付皿F群に相当し、16世紀末以降に比定される。内面に、染付けで、「果実文」・「文具文」などを描く。38は、朝鮮王朝産灰青釉陶器瓶の底部片。いわゆる「舟徳利」。器面が薄い。上げ底状を呈する。39は、備前焼壺の口縁部から体部片。頸部は短く、口縁部が肥厚し、端部はヨコナデ調整により外面に稜をつくる。肩部に、1単位6条の「波状文」が鎧描きされる。内面に粘土紐接合痕が観察される。乗岡編年中世6期aに相当し、16世紀前半に比定される。40は、中国南方産褐釉陶器蓋片。つまみ頂部が窪む。41は、備前焼甕あるいは壺の口縁部片。口縁部が玉縁状を呈し、色調が灰茶色を呈する。乗岡編年中世2期bに相当し、14世紀前半に比定される。42は、備前焼鉢の体部片。深い筒状を呈すると考えられる。体部はヨコナデ調整により内外面に2条以上の稜が形成



第37図 町60次調査 S-230出土遺物① (1/3)



第38図 町60次調査 S-230出土遺物② (59 1/2、46~52・56・57 1/3、54・55・58・60 1/4、53 1/6)

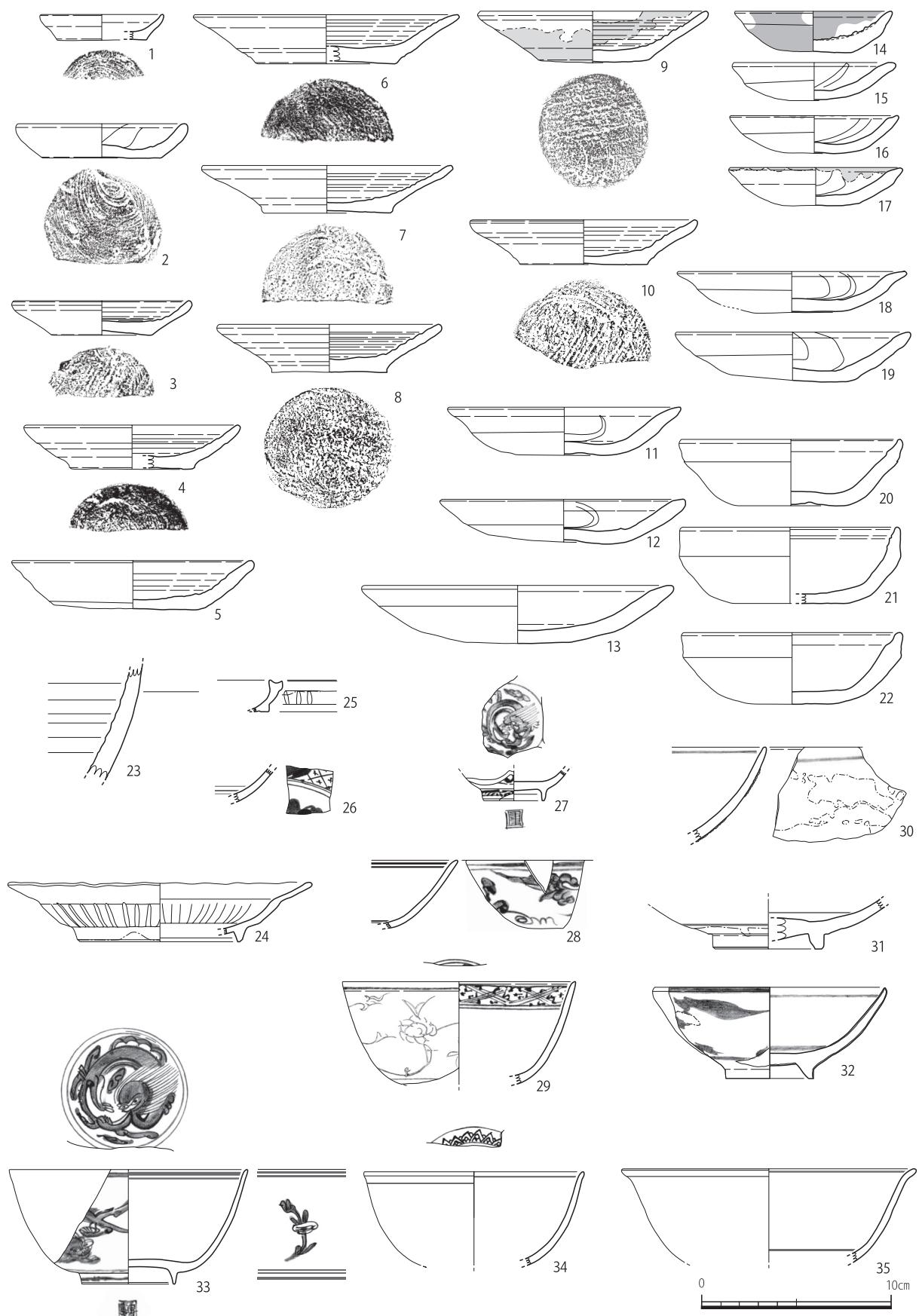


第39図 町60次調査 S-230出土遺物③ (61 1/4、62 1/3)

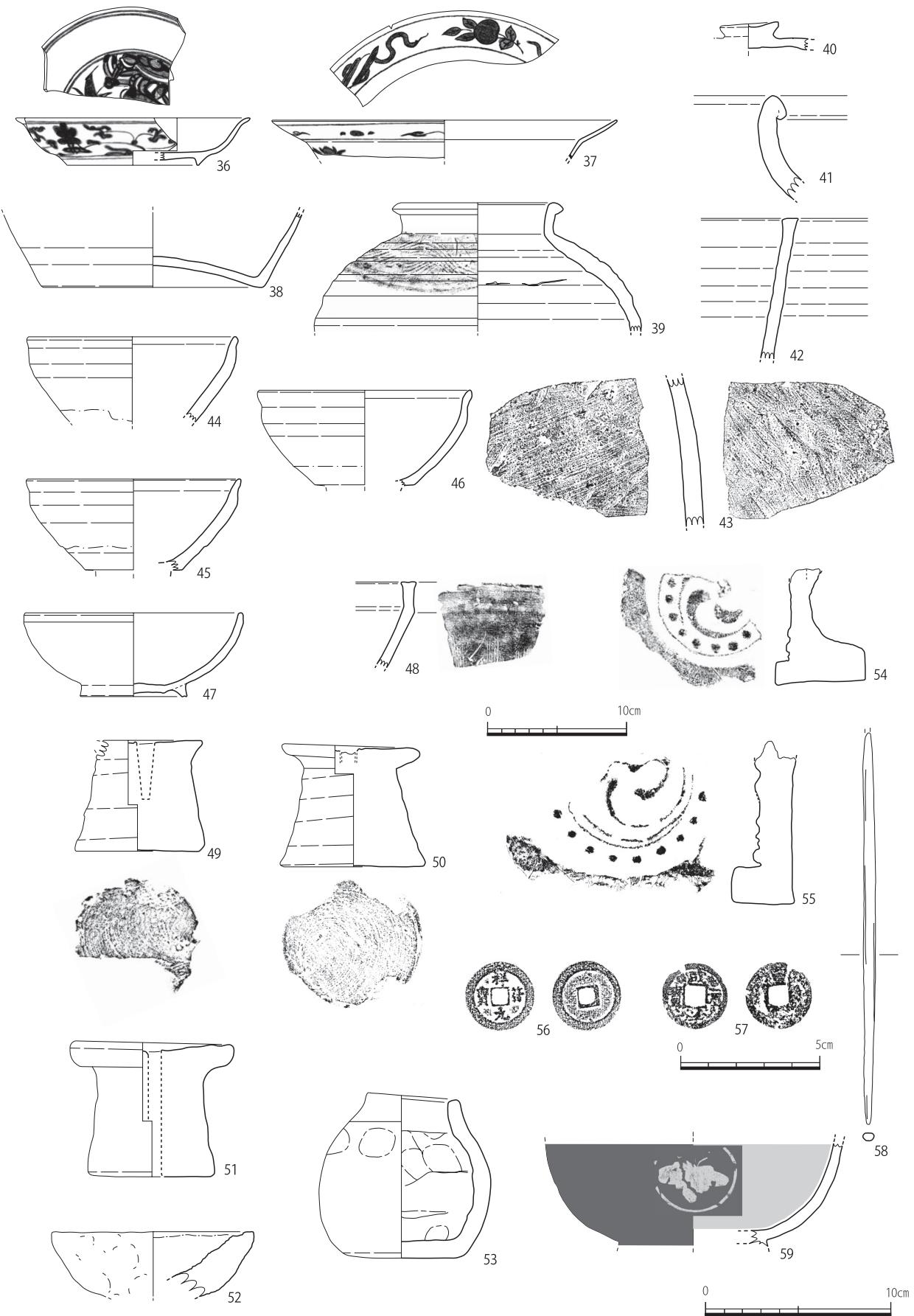
ない。色調は、橙茶色を呈し、田中分類土師器燭台A1類に相当し、16世紀第1四半期に比定される。50の底部は、回転糸切り離し。台部に、ヨコナデ調整による稜が2条以上形成される。色調は、橙茶色を呈する。皿部は、ナデ調整が観察される。見込み中央を穿孔するが、底部までは貫通しない。調整・色調から、田中分類土師器燭台A1～A2類に相当し、16世紀第1～3四半期に比定される。また、これらのタイプの土器が、蠅燭用の灯火具とする傍証となった町20次C-SD01の泥炭層出土資料ほど良好ではないが、皿部見込み中央の穿孔部に、木芯の一部が残存する。51は、見込み・台部外面・底部に、ナデ調整が観察される。口縁部内面に、ヨコナデ調整による凹線が形成される。見込み中央を穿孔し、底部まで貫通する。色調は、京都系土師器に似る淡橙茶色であり、田中分類土師器燭台B類に相当し、16世紀第3～4四半期に比定される。52は、土製の坩堝、あるいは取瓶。鉱滓が、内面に多量に付着する。53は、瓦質土器焼塩壺。頸部から口縁部にかけて、ヨコナデ調整により窄まり、直立気味に立ち上がる。口縁端部は、丸みを帯びる。体部内外面は、ナデ調整が、内面に粘土紐接合痕が観察される。底部は、ナデ調整により、平底を呈する。16世紀末～17世紀初頭に比定される府内城三ノ丸遺跡SK23出土の無刻印の焼塩壺に比べて、器高が低く、体部が球形状を呈し、体部内面の布目痕、外面の面取りも、観察されない。54は、隅瓦あるいは鳥食瓦の瓦当片。型押しにより、「左巻き三巴文」を中心に「珠文」が配され、外圈線が巡る。外縁高が1.0cm程度と高く、「巴文」・「珠文」頂部を平坦につくり、巴頭部が尖る。外縁に、離れ砂痕が観察される。55は、軒丸瓦の瓦当片。型押しにより、「左巻き三巴文」を中心に「珠文」が配され、外圈線が巡る。外縁は、ほとんど消失する。S-177・178出土資料に比べて、外縁高が1.2cmと高いが、巴文・珠文は、ほぼ同程度の大きさである。「巴文」・「珠文」の頂部は、やや丸みを帯びる。56・57は、錢貨。56は、北宋錢で、表面に「祥符元寶」と真書で鋳出され、裏面は無文。初鋳造年は、1009年。57は、南宋錢で、表面は「咸淳元寶」と真書で鋳出され、裏面は無文。初鋳造年は、1265年。58は、箸状木製品。面取りをおこない、先端部を細く仕上げる。59は、漆器椀体部片。内面に赤色が、外面に黒色が上塗りされる。外面体部に、赤色漆による加飾が施される。丸に「桐文」もしくは「蝶文」と考えられる。

60は、五輪塔受花(風輪)の転用品か。石材は、凝灰岩。上面が深い、下面が浅い播鉢状の窪みが形成され、中心に、径1.7cm程度の孔が貫通する。下面の窪みは、中央にみられるが、上面の窪みは、中央から外れて、側面の一部まで削りとる。法量・形状などから、五輪塔受花(風輪)を転用したものと考えられるが、用途は不明である。

される。口縁端部は平坦に仕上げる。43は、備前焼甕の体部片。色調が、灰茶色を呈することなどから14世紀代の所産と推定される。44～46の瀬戸・美濃産天目碗の口縁部から体部片。口縁部が稜をつくり立ち上がり、やや外反する。46は、釉を外面体部下部で拭き取る。概ね藤沢編年大窯第3～4段階に相当し、16世紀後半代に比定される。47は、瓦質土器碗。焼成不良のため、淡灰茶色を呈する。体部が内湾気味に立ち上がり、底部に高台を貼り付ける。内型を用いて成形したものか。48は、宇佐高村産瓦質土器播鉢の口縁部片。口縁部が直立気味に立ち上がり、口縁端部を平坦に仕上げる。1単位5条の播目が観察される。小柳分類IV期に相当し、16世紀前半から中頃に比定される。49～51は、土師質土器燭台。49の底部は、回転糸切り離し。皿部・台部に、ヨコナデ調整による稜が2条以上形成される。見込み中央を穿孔するが、底部までは貫通し



第40図 町60次調査 S-231出土遺物① (1/3)

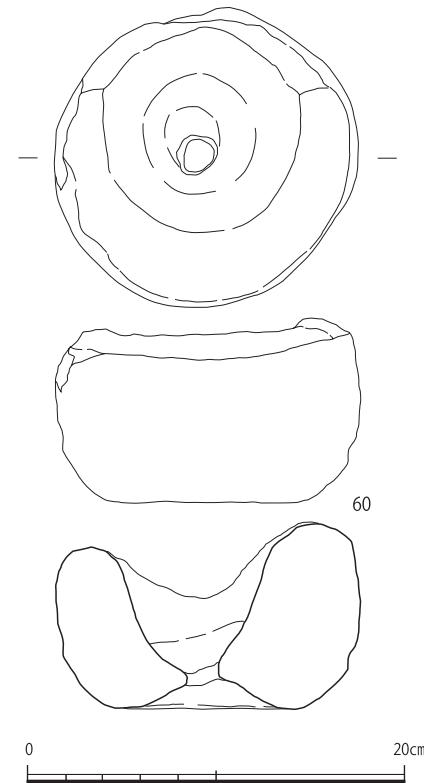


第41図 町60次調査 S-231出土遺物② (56・57 1/2、36~38・40・44~53・58・59 1/3、39・41~43・54・55 1/4)

S-223 出土遺物 (第 43 ~ 48 図)

1 ~ 22 は、内面の最終調整にナデアゲが施される京都系土師器皿。法量に大小あるが、大部分が塩地編年第2期に相当し、16世紀後半に比定される。18 ~ 21 は、河野「g類」の G-2 類に相当し、16世紀後半に比定される。口縁端部をつまみあげ、他の京都系土師器皿に比べて器高が高く、深い塊型を呈する。内面の最終調整に、ナデアゲを施すなど京都系土師器皿の技法でつくられる。4・20 は、内外面に煤痕が観察されるため、灯明皿としての使用が推定される。6 は、外面が、17・22 は、内面が2次被熱により黒化する。23・25 は、龍泉窯系青磁碗。23 は、外面に、「鎧蓮弁文」が施される。太宰府龍泉窯系青磁碗III-2-C 類に相当し、太宰府陶磁器出土傾向 F 期にあたり、13世紀中頃から 14世紀初頭以降に比定される。25 は、高台片。見込みに、「福」の吉祥字が施文される。26 は、同安窯系青磁碗の高台片。12世紀後半以降。24・27 は、中国産青磁碗の高台片。胎土・釉調などから、龍泉窯系以外の産地と推定される。27 は、外面に、線彫りをおこない、畳付が、斜めに削られる。細かい貫入が発達する。2次被熱による釉変がみられる。28 は、景德鎮窯系青磁稜花皿。型押しにより、口縁部と体部が花弁状を呈する。畳付の釉を剥ぎ、高台内は、透明釉が施され、「裏白」となる。29 は、中国産白磁小坏。畳付と見込みの釉を剥ぐ。30 は、景德鎮窯系白磁稜花皿。小野分類染付皿 F 群の「鍔皿」と同様の器型を呈する。31・32・34 ~ 37 は、景德鎮窯系青花碗。31 は、染付けで、体部に「蛟龍文」・「草花文」を描く。32 は、内面口縁部下に、染付けで、「四方襍文」を描く。体部外面に、「花唐草文」を櫛描きする。34 ~ 37 は、「饅頭心」碗の高台片。小野分類染付碗 E 群に相当し、16世紀中頃以降に比定される。畳付の釉を剥ぐ。34・35 は、2次被熱による釉変がみられる。34 は、染付けで、見込みに、簡略化された「貴人」が、高台内に「天下太平」の4字銘が記される。35 は、染付けで、見込みに「草花文」を描き、高台内に「富貴佳器」の2行4字銘を記す。36 は、染付けで、見込みに「草花文」を描き、高台内に、字款状に「福」の吉祥字を記す。37 は、染付けで、見込みに「蓮弁文帶」・「仙人」が描かれ、高台内に、「萬福攸同」の4字銘が記される。体部に砂粒が付着する。33 は、景德鎮窯系青花蓋。外面に、染付けで「如意雲文」が描かれる。内面口縁部から天井部まで、輪状に釉を剥ぐ。鍔部内面に、砂粒が付着する。

38 ~ 40 は、景德鎮窯系青花皿。畳付の釉を剥ぐ。38・39 は、畠付に砂粒が付着する。38 は、高台内に、「宣德年造」と2行4字銘を染付けで記す。39 は、小野分類染付皿 E 群に相当し、16世紀後半以降に比定される。内面に「蛟龍文」・「唐草文」を染付けで描く。40 は、「鍔皿」の小野分類染付皿 F 群に相当し、16世紀末以降に比定される。内面に、「渦文」・「鳳凰」・「雲文」が、外面に「果実文」が染付けで描かれる。41 は、中国南方産褐釉陶器壺あるいは甕の体部片。42 は、産地不明陶器瓶あるいは壺の底部片。胎土・器壁の薄さなどから、朝鮮王朝産灰青釉陶器と推定される。43・44 は、朝鮮王朝産灰青釉陶器碗の高台片。いわゆる「雜釉陶器」。高台内・脇を削りこみ、高台は、緩い逆台形状を呈する。高台内まで施釉される。43 は、見込み境に段をつくる。44 は、体部が内湾しつつ、立ち上がる。43 は、畠付に、44 は見込み・畠付に、目痕が観察される。44 の胎土は、43 ほかに比べて、硬質で、より磁器に近い。45 ~ 47 は、備前焼の筒状を呈する鉢。体部下半から口縁部にかけて、ほぼ直立する。口縁端部は、ヨコナデ調整により平坦に仕上げる。底部は、ナデ調整により上げ底状を呈する。45 の底部には、窯印と考えられる「○」のスタンプが観察される。47 は、体部にヨコナデ調整によ

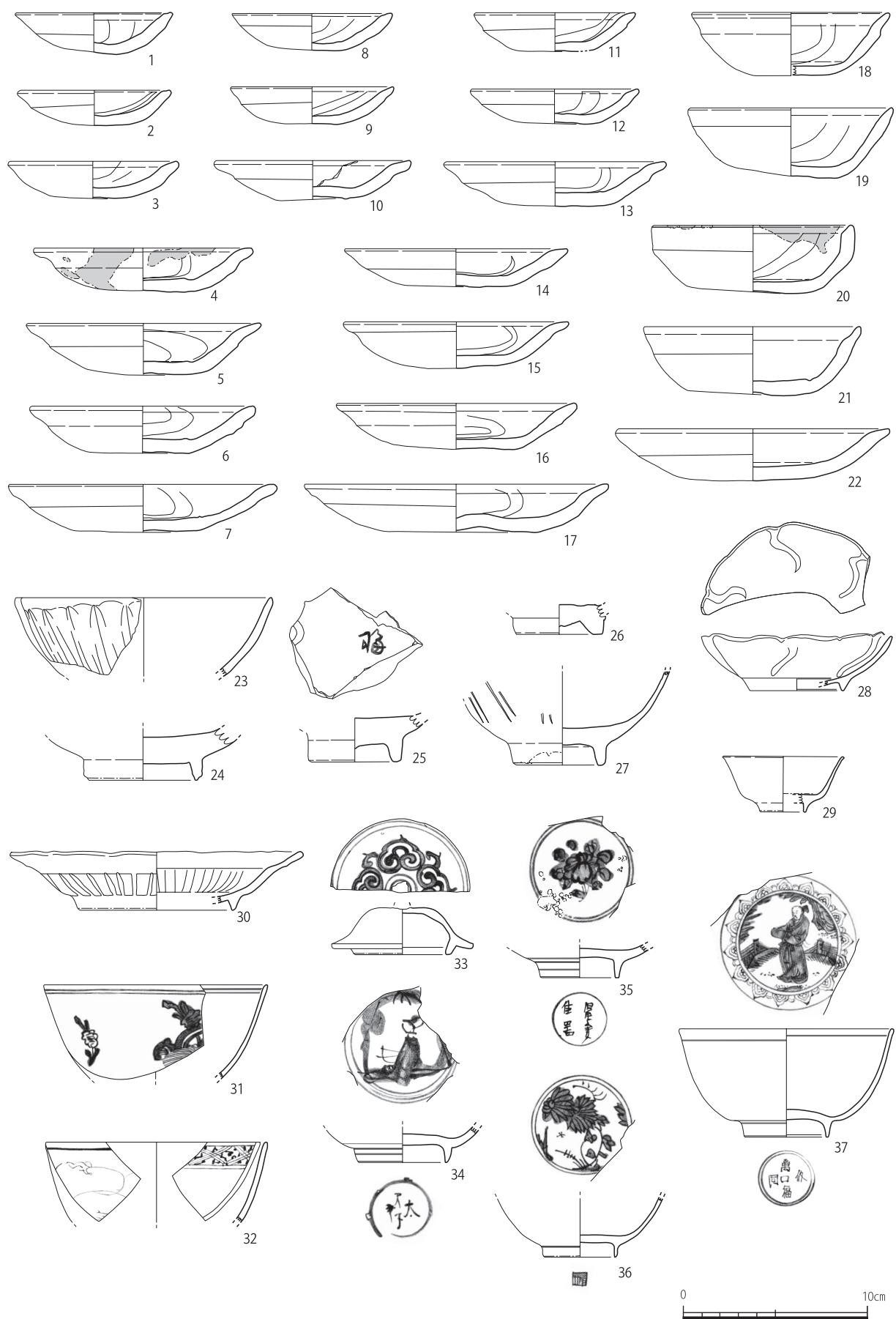


第 42 図 町 60 次調査 S-231 出土遺物③ (1/4)

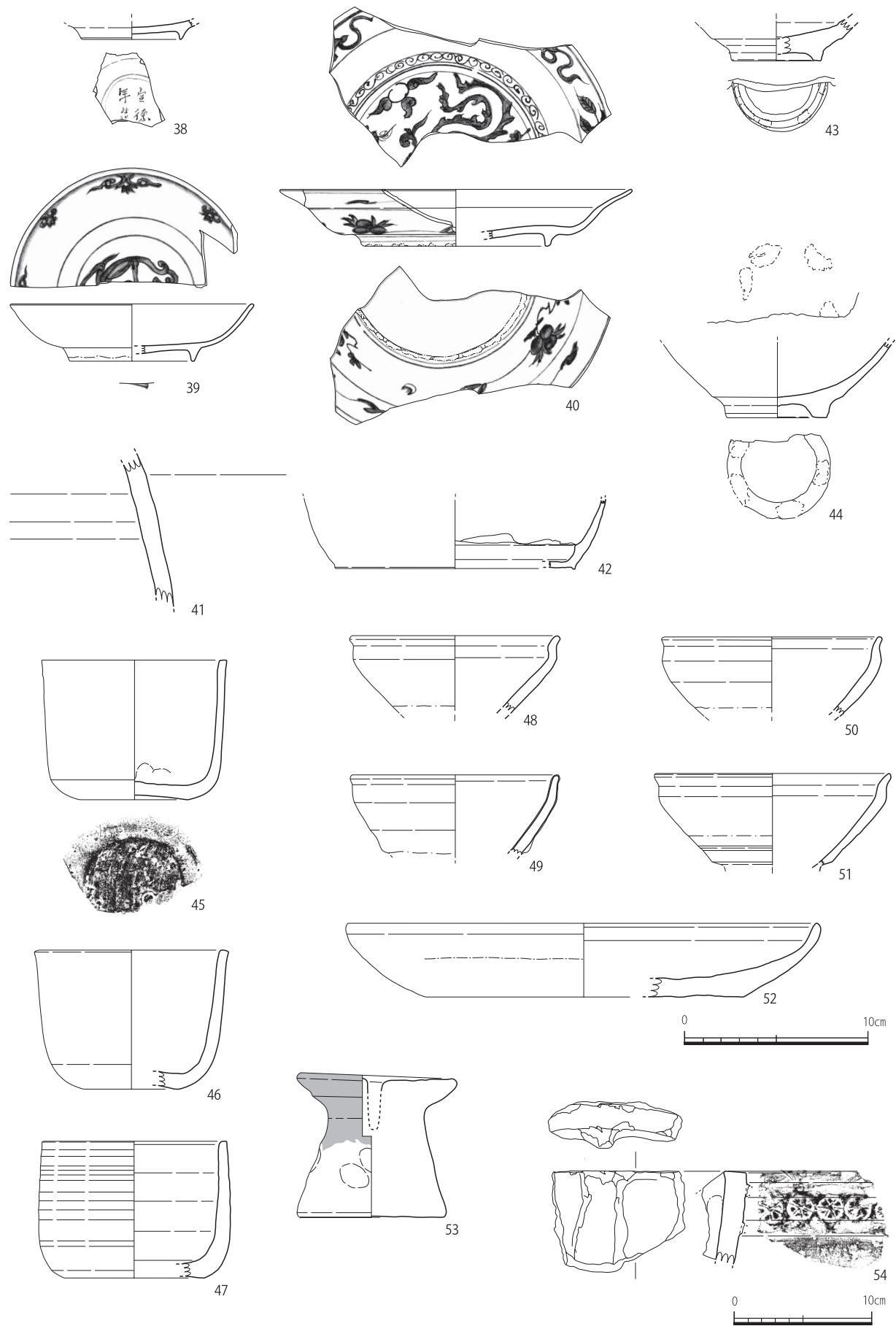
り、2条以上の稜が形成される。48～51は、瀬戸・美濃産天目碗の口縁部から体部片。口縁部が稜をつくり立ち上がり、やや外反する。48・50は、釉を外面体部下半で拭き取る。概ね藤沢編年大窯第4段階に相当し、16世紀末に比定される。52は、備前焼平鉢。体部が、やや内湾しながら大きく開き、口縁部は稜をもって立ち上がる。外面に重ね焼きの痕跡が観察される。53は、土師質土器燭台。台部外面・底部に、ナデ調整が観察される。見込みは、器面剥離・付着物のため、調整が不明瞭である。皿部から台部にかけて、煤痕が観察される。見込み中央を穿孔するが、底部までは、貫通しない。色調は、京都系土師器に似る淡橙茶色であり、田中分類土師器燭台B類に相当し、16世紀第3～4四半期に比定される。54～58は、瓦質土器。還元焰焼成を指向するが、燻しをおこなわず、断面が茶色系を呈する。54は、火鉢の口縁部片。口縁部下に2条の突帯を貼り付け、「車輪文」をスタンプによって連続施文する。内面に、縦方向に幅広の突帯が貼り付けられる。その形状から、茶釜などを据え暖める際に用いられた茶道具か、と推定される。

55は、焼塙壺の口縁部から体部片。頸部から口縁部にかけて直立する。体部が球形状を呈し、頸部が窄まり、口縁部にかけて直立する。口縁端部は、丸みを帯びる。体部内外面は、ナデ調整が、内面に粘土紐接合痕が観察される。内面と口縁部外面の一部が、2次被熱により黒化する。56は、脚付浅鉢。三脚と推定される。57は、甕の口縁部から肩部片。頸部から直立気味に立ち上がり、口縁部が肥厚し、口縁端部上面が平坦につくられる。体部内面に、工具ナデ調整が観察される。58は、茶釜の体部片。縦耳が貼り付けられ、鍔が巡る。外面は、ミガキ調整により平滑に仕上げる。外面体部下半に離れ砂の痕跡が、内面に煤状付着物が観察される。59は、管状土錘。両端の切断面が明瞭であるため、田中分類管状土錘A類に相当する。60は、用途不明土製品。上部は、ナデ調整により半円状につくり、下部は、ナデ調整により平坦面を形成する。上部には径約1.2cmの孔が3箇所に穿たれる。形状から、遊戯具か、と考える。61は、玉縁を有する丸瓦の筒部片。凸面に、縄目痕が、凹面に、コビキA痕跡・「W」字状に垂れ下がる吊り紐痕・内叩き痕が観察される。62は、平瓦片。凹面に、布目痕が、凹面狭端面に、幅2.5cm程度の面取りが、凸面に、コビキA痕跡が観察される。2次被熱により、煤状の付着物が観察される。63は、銭貨。北宋銭で、表面に「天聖元寶」と真書で鋳出され、裏面は無文。初鑄造年は、1023年。64は、ガラス製品片。大部分が欠損するため、全体形状の復元は困難だが、残存部分は弧状を呈する。表面は風化によって白濁し、全体に貫乳状の鱗が生じる。色調は緑灰色を呈する。

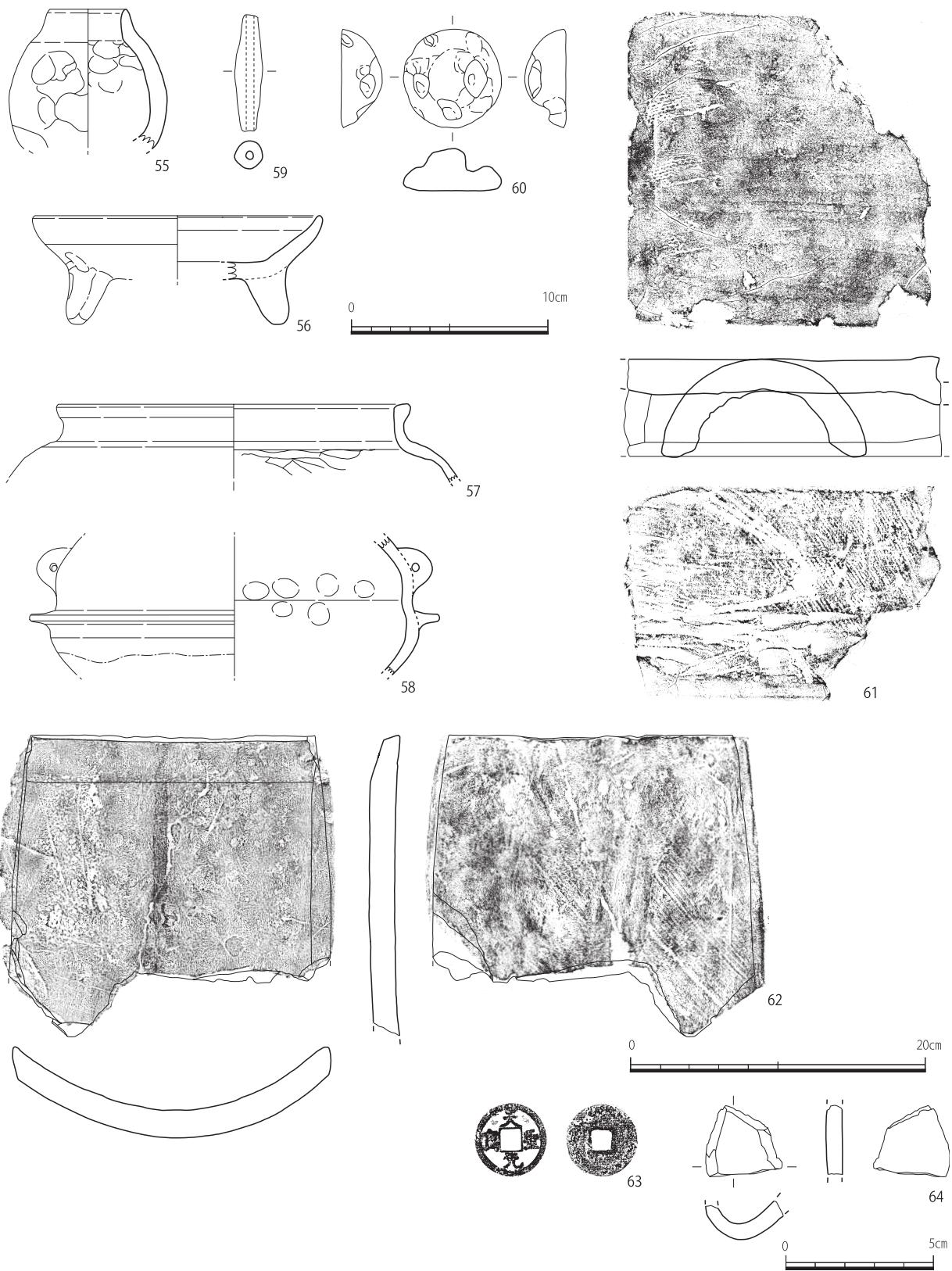
65は、木札。表面に、「廿」字状の墨書が確認できる。そのため、数量を示す荷札として用いられたと推定される。66～75は漆器。66は、椀高台片。上塗り色は、総黒色。見込み中央に、赤色漆による加飾が施される。丸に「左三つ巴」形を呈する「藤」の花・茎が描かれる。67は、椀口縁部片。内面に赤色が、外面に黒色が上塗りされる。外面に、赤色漆による加飾が施される。丸に「唐花亀甲文」が描かれる。68は、椀高台片。上塗り色は、総黒色。69は、椀高台片。上塗り色は、総黒色。見込み中央と高台裏に、赤色漆による加飾が施される。見込みには、「唐花亀甲文」が描かれる。高台裏には、「上」の一字が記される。器のセット関係を示す識別記号と考えられる。70は、椀。内面に赤色が、外面に黒色が上塗りされる。体部外面に、赤色漆による加飾が施される。漆の剥離が著しいため、文様は不明瞭である。71は、椀。高台は欠損する。上塗り色は、総黒色。体部外面・見込みに、赤色漆による加飾が施される。体部外面には、対になる丸に「抱き沢瀉文」が描かれる。見込みにも、同様の丸に「抱き沢瀉文」が大きく描かれる。72・73は、椀。上塗り色は、内面に赤色が、外面に黒色が上塗りされる。73の高台は、72に比して高く、高台内は浅く挽く。74は、椀。口縁部は欠損する。内面に赤色が、外面に黒色が上塗りされる。高台裏中央に、「三つ星」状の記号が、赤色漆により加飾される。器のセット関係を示す識別記号と考えられる。75は、椀。口縁部は欠損する。上塗り色は、総黒色。体部外面と見込み中央に、赤色漆による加飾が施される。文様は一部で漆が剥離するが、71と同様に、丸に「抱き沢瀉文」と考えられる。71・75は、上塗り色・加飾の文様意匠・描画位置が一致し、且つ、器形が異なることから、一組の膳に並べた器セットと考える。76・77は、箸状木製品。面取りをおこない、先端部を細く仕上げる。78は、骨角製笄。先端部を耳搔き状に仕上げる。全面に、整形に伴う擦痕が認められる。79・80は、円板形木製品。80は半損する。用途不明。81は、杓子状木製品。折敷の転用品と考える。右上端を丁寧に隅丸に仕上げ、左側面の2箇所には、



第43図 町60次調査 S-223出土遺物① (1/3)



第44図 町60次調査 S-223出土遺物② (38~53 1/3, 54 1/4)



第45図 町60次調査 S-223出土遺物③ (63・64 1/2、55・56・59・60 1/3、57・58・61・62 1/4)

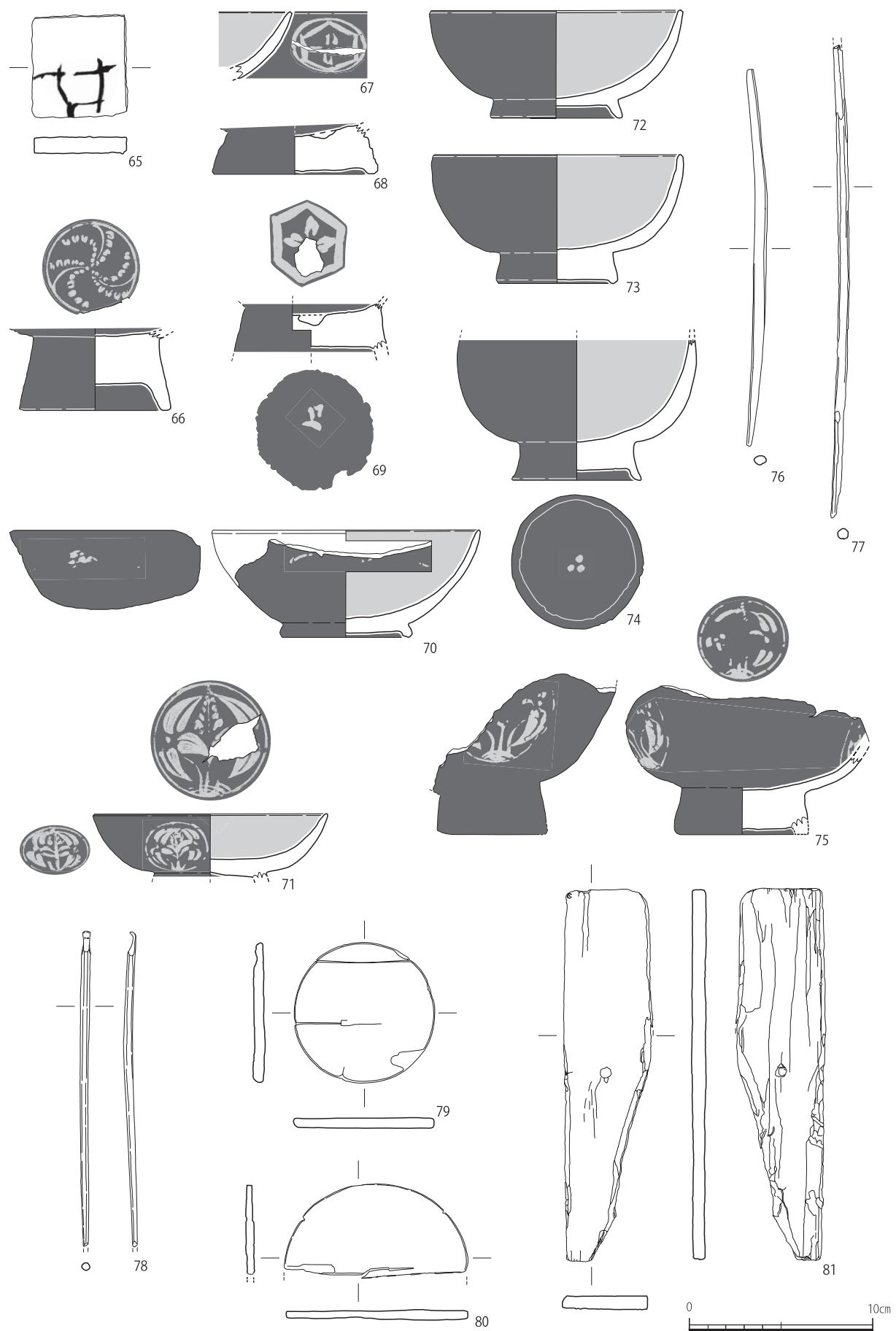
同様の木板を連結させた木製の楔が観察される。形状から、当初は折敷としての用途が想定される。その後、右下端から中位にかけて面取りをおこない、持ち手をつくり、杓子として転用したと推定される。

82～91は、木製球。面取りを繰返すことで、丸く仕上げる。径約3.0～6.0cmの法量差がみられる。毬杖などの遊びに用いた毬と考えられる。92は、木製の曲物蓋。円形に復元される。裏面は、周縁を幅2.0cm程度斜方向に削り出し、段部をつくる。段部には、厚さ約0.2cmを測る曲物の側板を接着するための漆状付着物と、上板と側板を連結するための対になる孔が、3箇所に観察される。表・側面にも、漆状付着物が残存するため、外面は、すべて塗りがおこなわれていたと考えられる。93は、木製連歯下駄の歯。中央に台形の挟みをつくる。町60次S-224出土資料(51図43)の前歯と同様の形状を呈する。94・95は、木製連歯下駄。95の後歯は、94に比して高く削り出される。

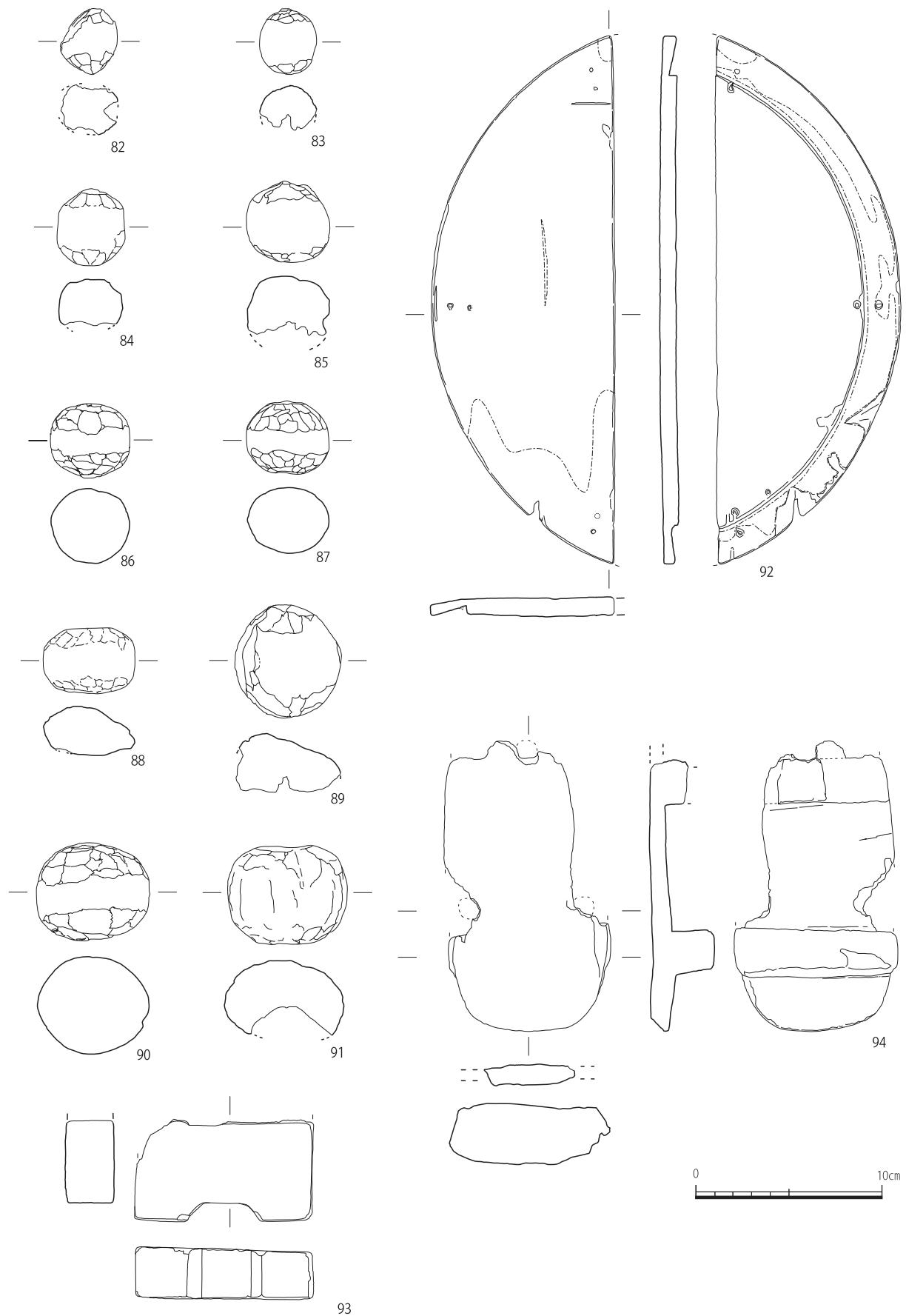
S-224出土遺物(第49～51図)

1は、土師器坏。2は、土師器皿。1・2は、強いヨコナデ調整により、内外面に稜が2条以上形成される。いわゆる「ロクロ目」。16世紀前半に比定される。1の底部は、ナデ調整が観察される。2の底部は、回転糸切り離し。3～9は、内面の最終調整にナデアゲが施される京都系土師器皿。法量に大小あるが、塙地編年第2期に相当し、16世紀後半に比定される。8は、河野「g類」のG-2類に相当し、16世紀後半に比定される。口縁端部をつまみあげ、他の京都系土師器皿に比べて器高が高く、深い塊型を呈する。内面の最終調整に、ナデアゲを施すなど京都系土師器皿の技法でつくられる。10は、景德鎮窯系白磁稜花皿。畳付の釉を剥ぎ、砂粒が付着する。型押しにより、内外面を花弁状につくる。高台内中央に字款状に「福」の吉祥字が染付けで記される。11は、景德鎮窯系青花小坏。畳付の釉を剥ぎ、見込みは輪花状に釉を剥ぐ。見込みの露胎部に重ね焼きの痕跡が観察される。12・13は、備前焼。12は、壺の口縁部片。口縁部が玉縁状を呈し、頸部が直立気味に立ち上がる。口縁端部外面が、ヨコナデ調整により、稜が形成される。乗岡編年中世3期bに相当し、15世紀前半に比定される。13は、甕の口縁部片。口縁部が玉縁状を呈し、頸部が直立気味に立ち上がる。色調が灰青色を呈する。14世紀代の所産と推定される。14～19は、瀬戸・美濃産天目碗。14～17は、口縁部から体部片。口縁部が稜をつくり立ち上がり、やや外反する。釉を外面体部下部で拭き取る。18・19の高台は、輪高台で、畳付を面取りする。概ね藤沢編年大窯第3～4段階に相当し、16世紀後半に比定される。20は、石硯片。硯材が、頁岩あるいは粘板岩。硯側は、硯面が硯陰の幅よりやや広くなる斜め方向に切断され、硯陰は平坦に造られ、長方形を呈すると推定される。海部に、墨痕が、陸部中央付近に使用による窪みと擦痕が、観察される。21は、鉄製鎌。刃部は弧状を呈する。茎部断面は、0.3×0.2cmの方形で、刃部に比して細く非常に丁寧につくる。また、茎部には、炭化した木製柄の一部が装着された状態で残存する。裏面の銹浸食が著しいため、茎を柄に差込むか、柄に溝を切り茎を挟み込む形態かは、不明である。茎上部には、柄を固定するための目釘が残存する。断面は方形を呈する。22・23は、漆器。22は、椀体部片。上塗り色は、総赤色。体部外面に、黒色漆による加飾が施される。界線で区切らず、体部全面に文様を描く。左端は、「梅花文」と考えられるが、右側2つの意匠は判然としない。「草花文」か。23は、椀。図上復元をおこなった。上塗り色は、総黒色。体部外面に、赤色漆による加飾が施される。漆の剥離が著しく、文様は不明瞭である。24・25は、木製球。毬杖などの遊びに用いた毬と考えられる。25は、欠損が著しい。26は、木製柄。上端部の両側より、4.0cm程度の切込みを入れて内部を抉り、差込み部をつくる。また、外面には、茎装着後に紐などで縛った痕跡が確認できる。27・28は、用途不明環状木製品。

29は、骨角製笄。先端部を耳掻き状に仕上げる。全面に、整形に伴う擦痕が認められる。30は、骨角製笄。表・裏面を平坦につくり、下端を細く尖らせる。全面に、整形に伴う擦痕が認められる。31～37は、箸状木製品。面取りをおこない、先端部を細く仕上げる。38は、木製の形代。直線的な上辺、大きく内湾する左辺といった、「人形」などを意図した整形が看取される。表・裏面と側面に至るまで、全面に赤色顔料が塗布される。形状などから、祭祀などに用いる形代と推定される。39は、用途不明板状木製品。方形を呈し、径0.2cmの穿孔が、



第46図 町60次調査 S-223出土遺物④ (1/3)



第47図 町60次調査 S-223出土遺物⑤ (1/3)

2箇所に施される。40は、円板形木製品片。水屋甕などの蓋か。41は、用途不明木製品。裏面は、平坦につくる。42は、用途不明木製品。「凸」字状を呈する。上端の2箇所に、径0.4cmの穿孔が施される。結合部をもつ建築部材と推定される。

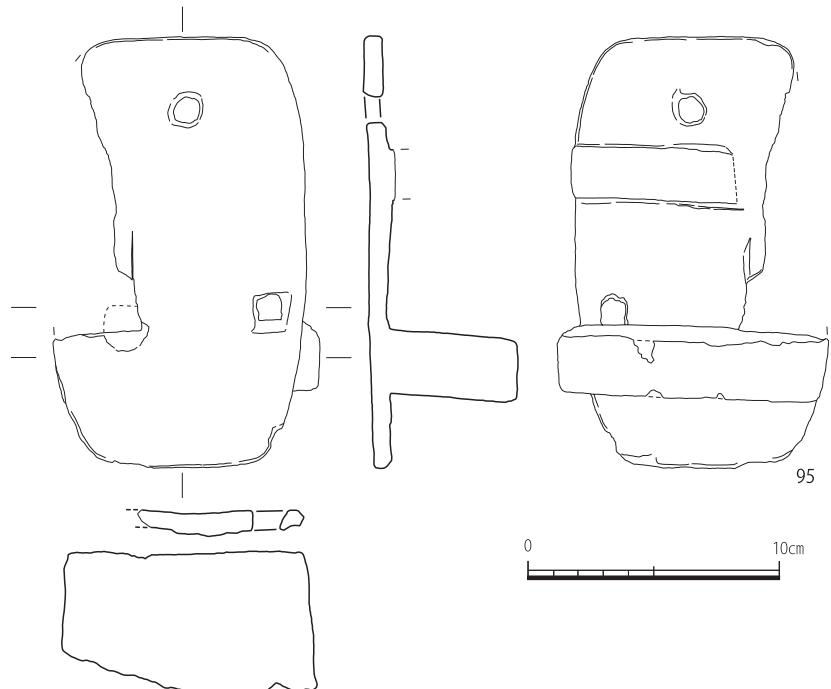
43は、木製連歯下駄。前歯中央に、抉りが観察できる。

SD210 (S-205・232・233・234・

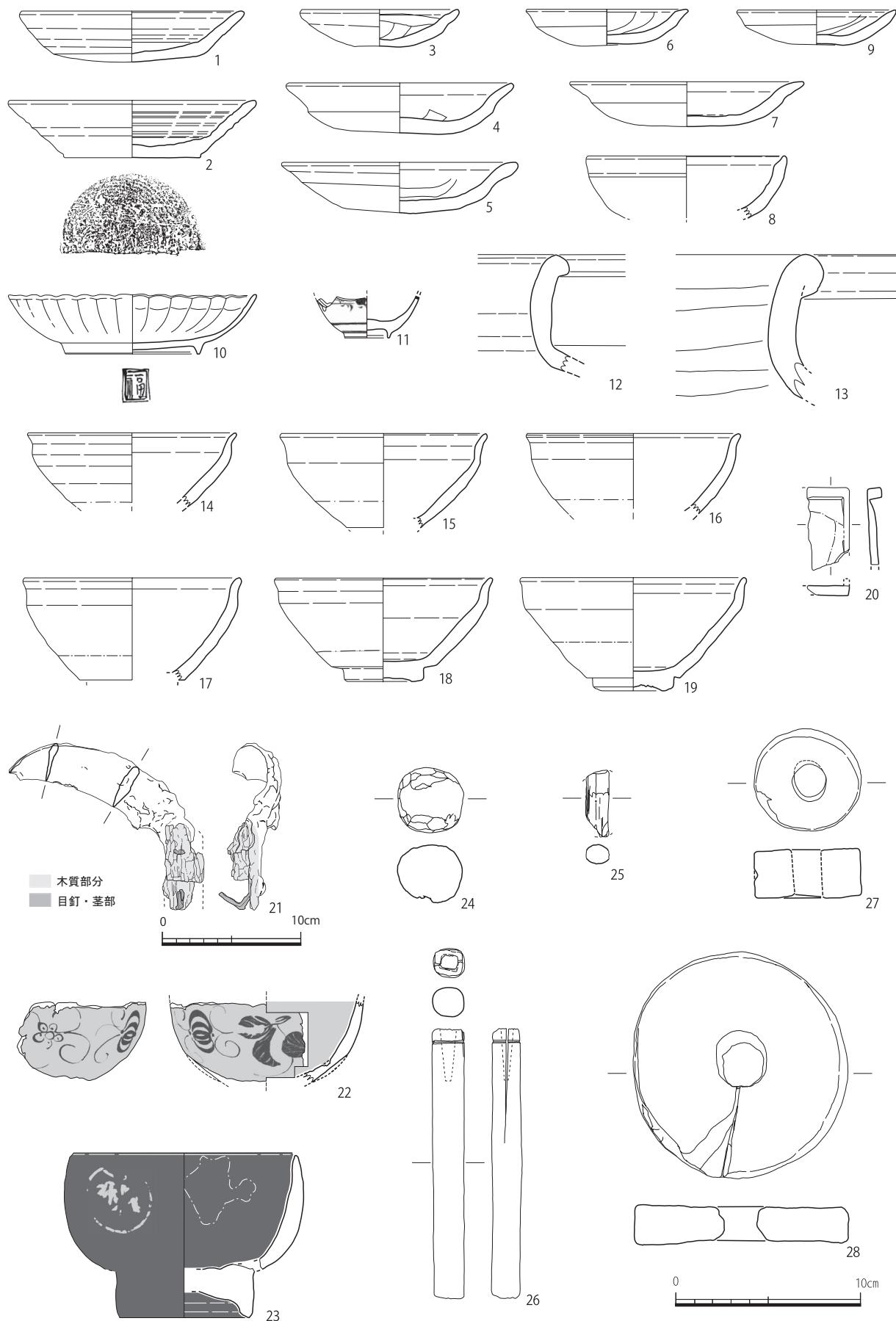
235が帰属) 出土遺物(第52~53図)

1は、土師器小皿。15世紀代か。底部は、回転糸切り離し。口縁部外面に煤痕が観察されるため、灯明皿としての使用が推定される。2~14は、内面の最終調整にナデアゲが施される京都系土師器皿。法量に大小あるが、13は、河野g類に、それ以外は塙地編年第2期に相当し、16世紀後半に比定される。5・

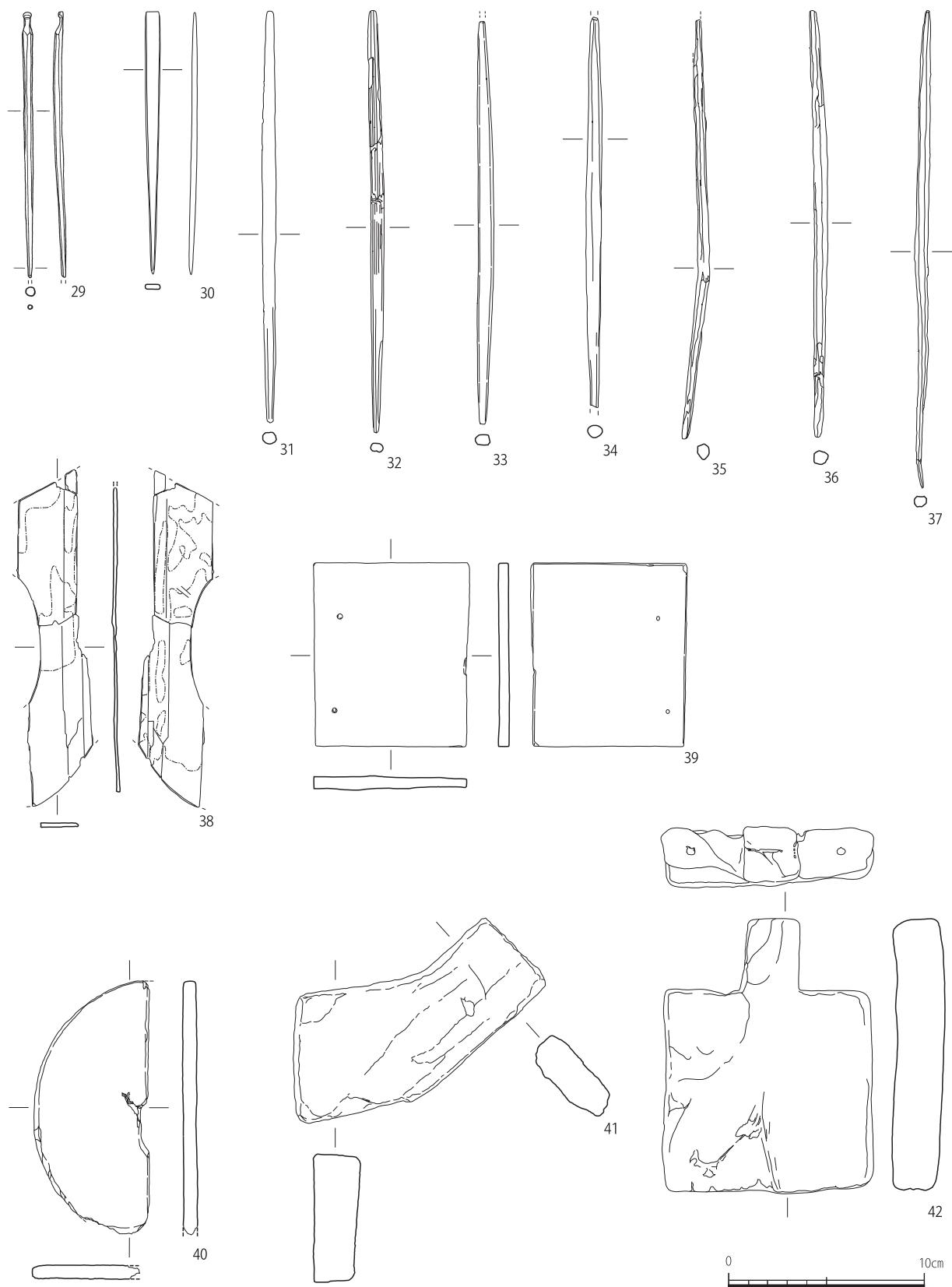
8・9は、口縁部内外面に煤痕が観察されるため、灯明皿としての使用が推定される。11は、2次被熱により内面が黒化する。15は、中国産青磁碗。口縁部下に、簡略化した「波状文」と1条界線が施される。釉調・胎土から龍泉窯系以外の産地と推定される。湯築城青磁碗F類に相当し、16世紀後半以降に比定される。16・17は、中国産青磁。釉調・胎土などから、龍泉窯系以外の産地と考えられる。16は、碗の高台片。17は、皿。口縁部が外反する。高台を削り出し、畳付を細くつくる。18~21は、景德鎮窯系青花碗。18は、内面口縁部下に「四方櫻文」が、外面に「飛龍文」・「波涛文」が染付けで描かれる。19は、小碗で、小野分類染付碗B群に相当し、15世紀前半以降に比定される。いわゆる「端反り」。染付けで、体部外面に「唐子」・「蟠螭」などが描かれ、高台内に「寿」の吉祥字が記される。畳付の釉を剥ぎ、露胎を呈する。20は、外面に「鳥」・「樹木」などが染付けで描かれる。21は、染付けで、体部に「蝶」・「折枝」が、見込みに「桃」が描かれ、高台内に字款状に「富貴佳貴」の略と推定される「富永分類仮称方形格子目文」が記される。小野分類染付碗E群に相当し、16世紀中頃以降に比定される。22は、漳州窯系青花小坏。畳付の釉を剥ぐ。口縁部が外反し、腰がやや張る。見込みに、意匠不明の文様が、体部に「草花文」が染付けで描かれる。23・24は、景德鎮窯系青花皿。畳付の釉を剥ぐ。23は、小野分類染付皿E群に相当し、16世紀後半以降に比定される。見込みに「蛟龍文」が染付けで描かれ、外面は無文。24は、稜花皿。小野分類染付皿F群に相当し、16世紀末に比定される。いわゆる「鷂皿」。大型の皿で、口縁部が稜をもって外反し、口縁端部は、輪花状を呈する。体部内外面に鎧状の沈線が施される。外面には「渦文帯」が、内面には「波涛文帯」などが染付けで描かれる。2次被熱による釉変が観察される。25は、景德鎮窯系白磁稜花皿。型押しにより、内外面が花弁状を呈する。畳付の釉を剥ぐ。26は、朝鮮王朝産粉青沙器碗の体部片。いわゆる「彫三島」。沈線・斜線の文様帯を彫り込み、白土を埋め込んだ後に、白化粧が施される。27・28は、産地不明陶器壺。27・28は、同様の破片が多数出土しており、胎土・釉調・形状などから同一個体と推定される。外面は、暗褐茶色の、内面は、光沢のある暗褐灰色の釉が施される。胎土には、黒色粒子がみられる。器壁が薄い。27は、口縁部から体部片。体部内面に、横方向のナデ調整・粘土紐接合痕が観察される。



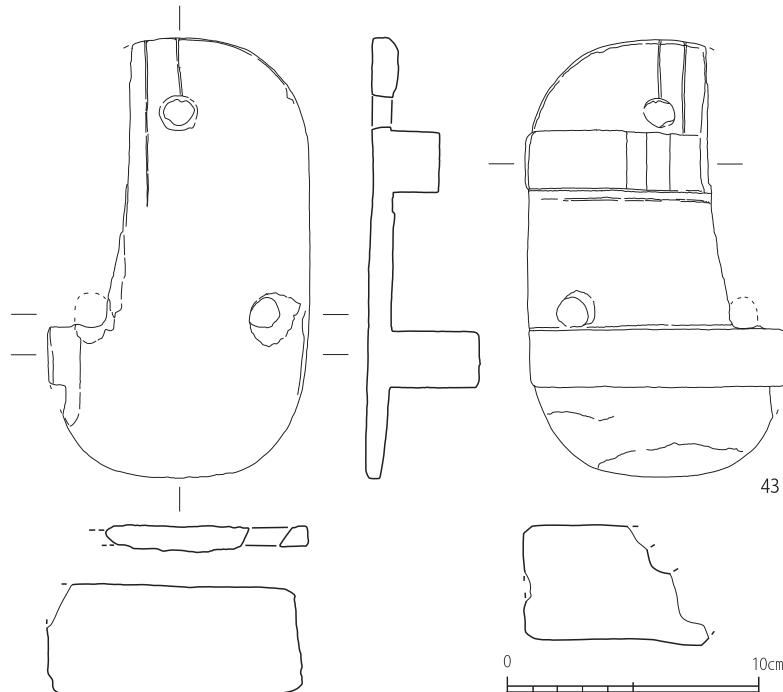
第48図 町60次調査 S-223出土遺物⑥ (1/3)



第49図 町60次調査 S-224出土遺物① (1~20・22~28 1/3, 21 1/4)



第50図 町60次調査 S-224出土遺物② (1/3)



第 51 図 町 60 次調査 S-224 出土遺物③ (1/3)

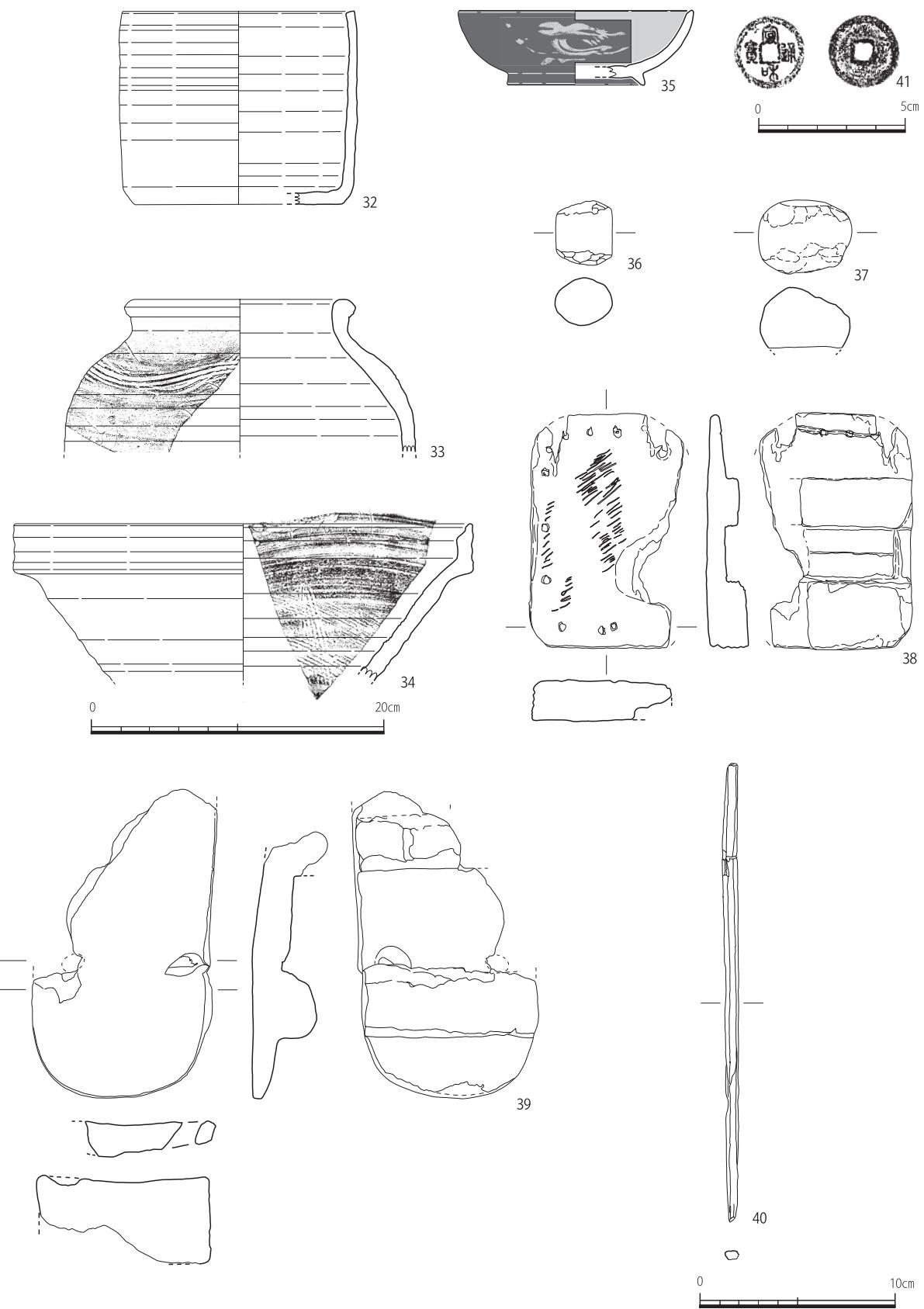
体部は直線的に立ち上がり、肩部が張る。口縁部は、ほぼ垂直に立ち上がり、肥厚し、口縁部内面に、幅広の角度が緩い 1 条の段を巡らせる。体部内面に、横方向の工具ナデ調整と粘土紐接合痕が観察される。口縁端部は、釉が削り取られ、口縁部内面に釉だれがみられる。28 は、底部片。底部は、上げ底状を呈し、器面が荒れる。底部から体部にかけては、反り気味に立ち上がる。底部内面に幅約 1.7cm、厚さ約 0.8cm 褐茶色粘土が輪状に残存する。29・30 は、瀬戸・美濃産天目碗。29 は、口縁部から体部片。口縁部が稜をつくり立ち上がり、やや外反する。釉を外面体部下半で拭き取る。30 の高台は、輪高台で、置付を面取りする。概ね藤沢編年大窯第 3～4 段階に相当し、16 世紀後半に比定される。31 は、吉備系土師質土器碗の底部片。小さい高台が貼り付けられ

る。

32～34 は、備前焼。32 は、筒状を呈する鉢。底部は平底を呈し、体部から口縁部まで、ほぼ垂直気味に立ち上がる。口縁端部は平滑に仕上げる。体部内外面は、ヨコナデ調整により、2 条以上の稜が形成される。形状などから「水指」などの茶道具と推定される。33 は、壺の口縁部から体部片。口縁部を玉縁状に肥厚させる。肩部に篦描きで 1 単位 3 条の「波状文」を巡らせる。乗岡編年中世 6 期 a に相当し、16 世紀前半に比定される。34 は、擂鉢の口縁部から体部片。内面体部に、1 単位 5～9 条の交差擂目を施す。乗岡編年近世 1 期 b に相当し、16 世紀末に比定される。35 は、漆器椀。内面に赤色が、外面に黒色が上塗りされる。体部外面に、赤色漆による加飾が施される。界線で区切らず、体部に文様を描く。文様意匠は、判然としない。36・37 は、木製球。毬杖などの遊びに用いた毬と考えられる。38 は、木製草履下駄の台部。縁辺部に、草履を装着するための木釘穴がめぐる。裏面前方部の木釘穴に沿って、紐の痕跡が観察できる。39 は、木製連歯下駄。40 は、箸状木製品。面取りをおこない、先端部を細く仕上げる。41 は、錢貨。北宋錢で、表面は「宣和通寶」と篆書で鋳出され、裏面は無文。初鑄造年は 1119 年。



第52図 町60次調査 SD210出土遺物① (1~26・29~31 1/3、27・28 1/6)



第53図 町60次調査 SD210出土遺物② (42 1/2、32・33・35～40 1/3、34 1/4)

②堀埋没後の遺構

堀埋没後の遺構は、土坑状遺構（SX107）・石列（SX122）・ピット（SP116 ほか）などが検出された。

土坑状遺構（SX107）

SX107（第56図）は、調査区中央（第54図）で検出され、調査区の制約上、全面検出はできなかった。検出長径約3.7m、検出短径約3.5m、現存深さ約0.4mを測り、平面は不整形状を呈する。底面は、北側に浅い平坦面があり南側を中心とし深くなる浅い擂鉢状を呈する。埋土は、自然堆積が観察されず、人為的な埋め戻しによる砂質土が主体であり、炭化物・焼土粒・礫が、各層に観察された。特に最下層には炭化物・焼土粒が集中して検出された。また、礫は被熱により表面が変色したものや破裂したものが多くみられた。底面自体からは、被熱の痕跡が認められることから、これらの埋土は、別の場所から持ち込まれたものと考えられる。遺物についても2次被熱の痕跡をもつものが認められた。堆積状況からSX107は掘削されたのち、礫および炭化物・焼土粒が多量に含まれる土により短期間に埋め戻されたと考えられる。以上のような形状と埋土堆積状況から、SX107は、火災処理に関係する遺構と推定される。SX107の埋没後、SP113ほかが掘り込まれる。

土坑状遺構（SX107）出土遺物（第59図）

1～3は、内面の最終調整にナデアゲが施される京都系土師器皿。1～2は、塩地編年第2期に相当し、16世紀後半に比定される。内外面に煤痕が観察され、灯明皿としての使用が推定される。1は、2次被熱により内面が黒化する。3は、河野「g類」のG-2類に相当し、16世紀後半に比定される。4は、龍泉窯系青磁碗。外面に、「鎌蓮弁文」が施される。太宰府龍泉窯系青磁碗II-b類に相当し、太宰府陶磁器出土傾向E期にあたる13世紀前半以降に比定される。5・6は、瓦質土器。還元焰焼成を指向するが、焼しをおこなわず、断面あるいは器面が橙色系を呈する。5は、高台付坏。口縁が、やや肥厚し、外反する。内外面をミガキ調整により平滑に仕上げる。6は、火鉢の体部片。三脚を欠損する。外面は、ミガキ調整により、平滑に仕上げる。体部下半の2条突帯内に「双頭蕨手飛雲文」をスタンプで施文する。内面に、粘土紐接合痕が観察される。7は、玉縁を有する丸瓦。玉縁側縁に、面取りをおこなう。凸面に、縄目痕が、凹面に、コビキA痕跡・布目痕・横方向に連続する吊り紐痕が観察される。胎土に、石英粒とみられる白色粒子が含まれており、海部郡産と推定される。側面と筒部にナデ調整による面取りがおこなわれ、その間に明瞭な稜が形成される。8・9は、粉挽き臼の上臼片。石材は、安山岩。8は、臼面に、幅0.5～0.7cmの主溝1条・副溝3～5条が残存する。9は、供給口・芯棒受け部・挽手孔が残存する。臼面は、磨耗し、幅0.3～0.5cmの主溝4条・副溝3～6条が残存し、8分画と推定される。

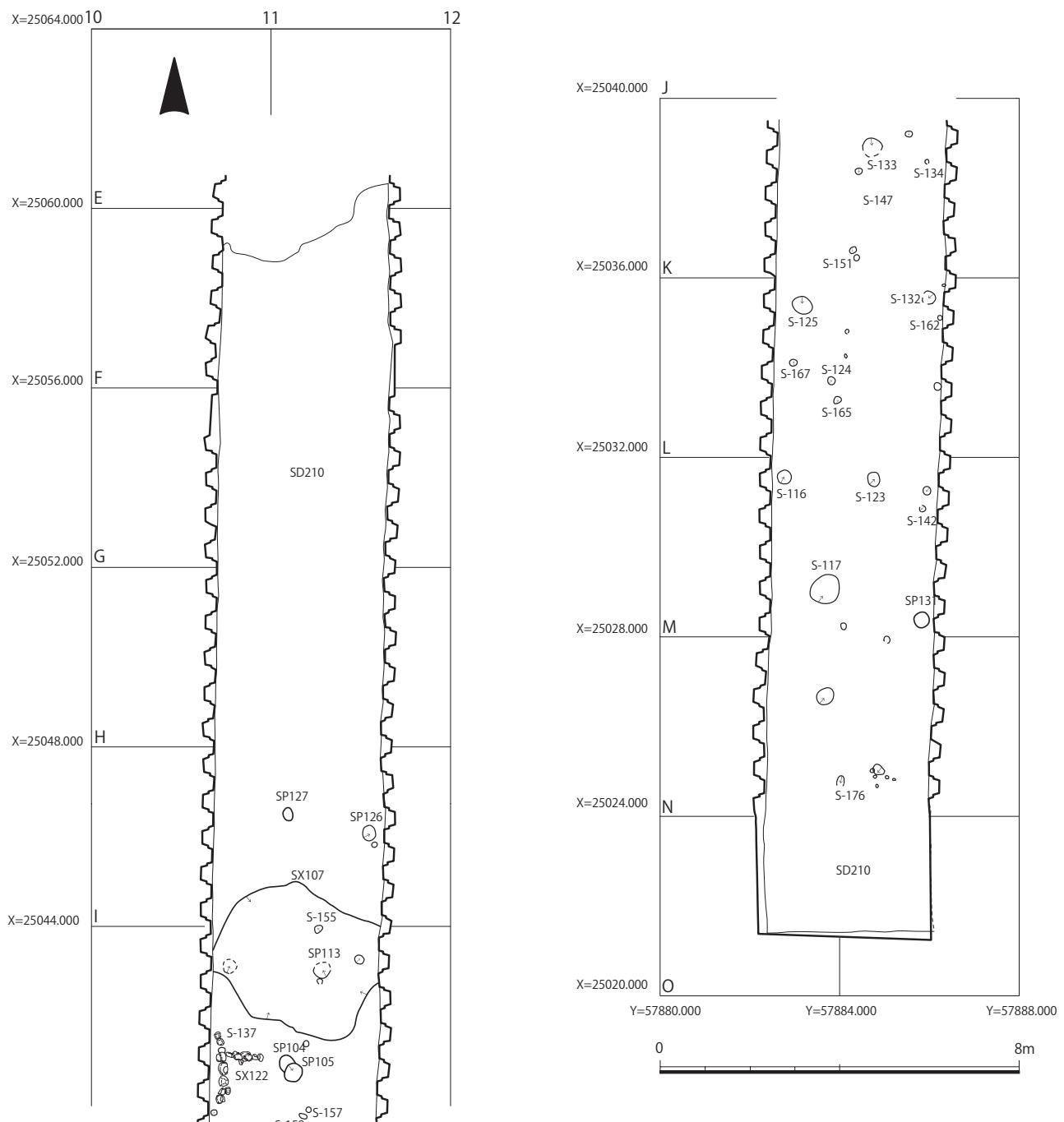
石列（SX122）

SX122（第56図）は、調査区中央（第54図）において検出された。径約0.1～0.3mの礫が、南北に8個、東西に5個、ほぼ一列に「|」状に配置される。SX122の一部は、2段積みで構築されていた。明確な掘り方は、平面検出および土層観察で把握することができなかつたため、その詳細については不明であるが、その平面形状などから堀埋め戻しの作業工程に伴う、あるいは堀埋め戻し後の土地利用に伴うなどの「区画」を意識した遺構と推定される。

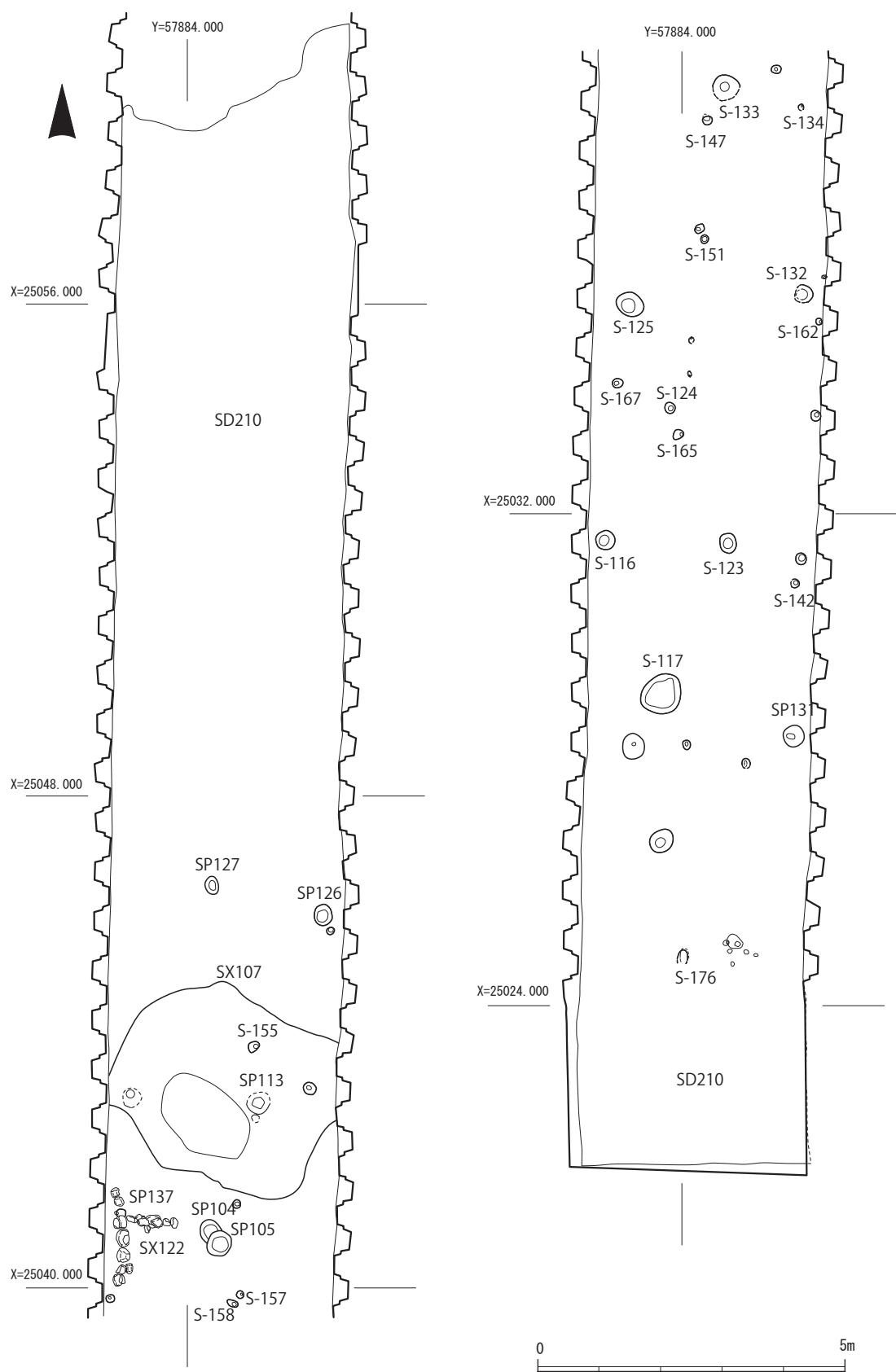
ピット（SP104ほか）・柱穴（SP131ほか）

新旧関係（SP104→SP105）（第56図）があるピットや柱痕が観察される柱穴（SP131）（第58図）などが一部検出されたが、その並びや性格についてなどの詳細は不明である。SP104からは、土師器片が、SP105からは、土師器片・瓦質土器片・須恵器片など、SP131からは土師器片が出土している。

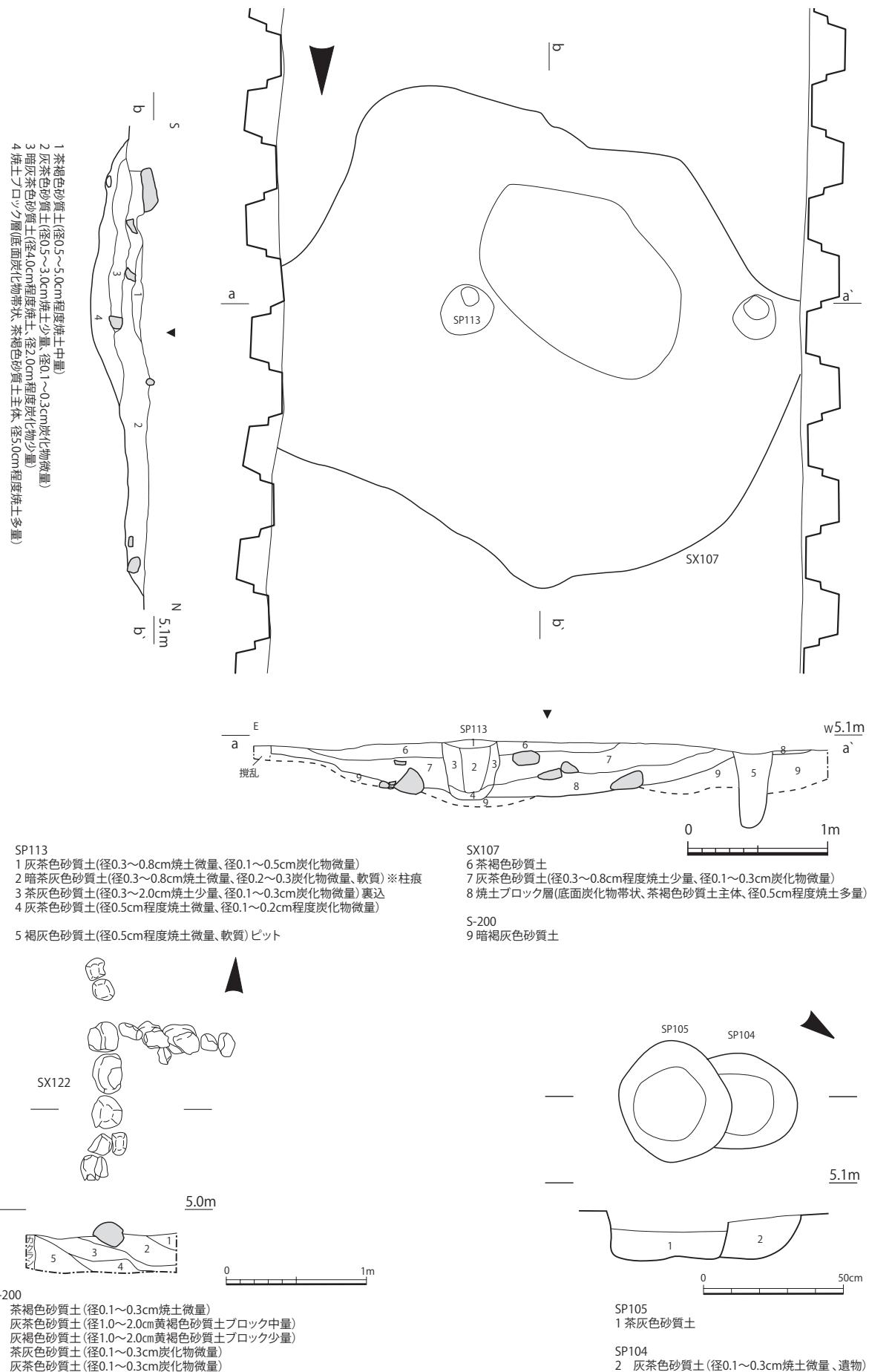
II-JF14-3-10-14



第 54 図 町 60 次調査遺構配置図① 1/150



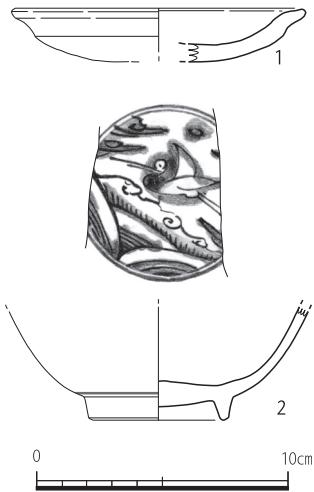
第 55 図 町 60 次調査遺構平面図① 1/100



第56図 SX107・122 (1/40)・SP104・105 (1/20) 平面・土層断面図

ピット出土遺物（第 57 図）

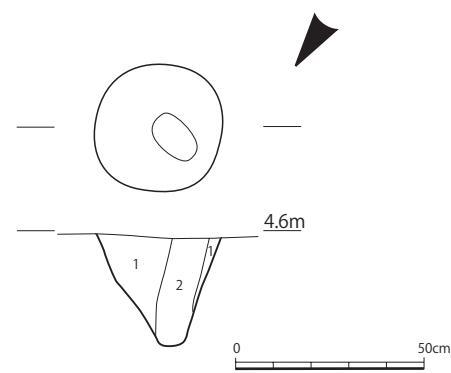
1 は、SP127（第 54 図）出土の京都系土師器。塩地編年第 2 期に相当し、16 世紀後半に比定される。2 は、SP123（第 54 図）出土の漳州窯系青花碗。畳付の釉を剥ぐ。見込みに「鶴」「波涛文」「雲文」が染付けで描かれる。文様に、明瞭な輪郭線が観察される。細かい貫入が発達する。胎土および呉須の発色から、漳州窯系青花と推定される。



SX001 出土遺物（第 60 図）

1 は、土師器坏。底部は、回転糸切り離し。体部に強いヨコナデ調整による 2 条以上の稜が形成される。いわゆる「ロクロ目」。16 世紀前半。口縁部内外面に煤痕が観察されるため、灯明皿として使用されたと推定される。2～5 は、内面の最終調整にナデアゲが施される京都系土師器皿。2・3 は、塩地編年第 2 期に相当し、16 世紀後半に比定される。3 は、内面に煤痕が観察されるため、灯明皿として使用されたと推定される。2 次被熱により内面が黒化する。6 は、景德鎮窯系青花碗。小野分類染付碗 E 群に相当し、16 世紀中頃以降に比定される。染付けで、見込みに「瑞果文」が、体部に「橋」「鹿」「馬」が描かれ、高台内に、字款状に「富貴佳器」の略字銘が記される。7 は、漳州窯系青花皿。いわゆる「碁笥底」。小野分類染付皿 C 群に相当し、15 世紀後半以降に比定される。底部は、露胎で、植物纖維が付着する。外面口縁部下に、「列点文帯」が染付けで描かれる。8 は、景德鎮窯系青花皿。畳付の釉を剥ぐ。内外面に「草花文」などが、染付けで描かれる。小野分類染付皿 E 群に相当し、16 世紀後半以降に比定される。9 は、常滑産陶器甕の口縁部から体部片。口縁部が「N」字状に屈曲する。体部内面に、粘土紐接合痕が観察される。14 世紀代の所産と推定される。10 は、備前焼大甕の口縁部から体部片。頸部が外傾し、口縁部が丸い玉縁状を呈する。胎土は、粗く、内外面ともに還元焰焼成のために、青灰色を呈する。乗岡編年中世 3 期 a に相当し、14 世紀後半に比定される。11・13 は、瓦質土器。還元焰焼成を指向するが、燻しをおこなわず、橙色系を呈する。11 は、蓋。器高が低いため器形が扁平となる。受け口の突出部も低い。口縁端部は、ナデ調整による面取りをおこなう。12 は、丸瓦筒部片。凹面に、布目痕・九州タイプの吊り紐痕が観察される。13 は、火鉢。外面の口縁部下に 3 条突帯を巡らせる。上段の突帯内に、斜め方向の刻目が、下段の突帯内に、スタンプによって施文された 2 個一組の「雷文」が観察される。内面は、工具ナデ調整をおこない、外面は、ミガキ調整によって、器面を平滑に仕上げる。14 は、粉挽き臼の上臼片。石材は、安山岩。臼面は、磨耗し、幅 0.3～0.6cm の主溝 1 条・副溝 5 条が残存する。芯棒受けの一部と挽手孔が残存する。15 は、青銅製笄。両端が欠損する。全面をミガキ調整により、平滑に仕上げる。16 は、錢貨。北宋錢で、表面に「天禧通寶」と真書で鋳出され、裏面は無文。初鋳造年は、1017 年。

第 57 図 町 60 次調査
SP123・127 出土遺物(1/3)



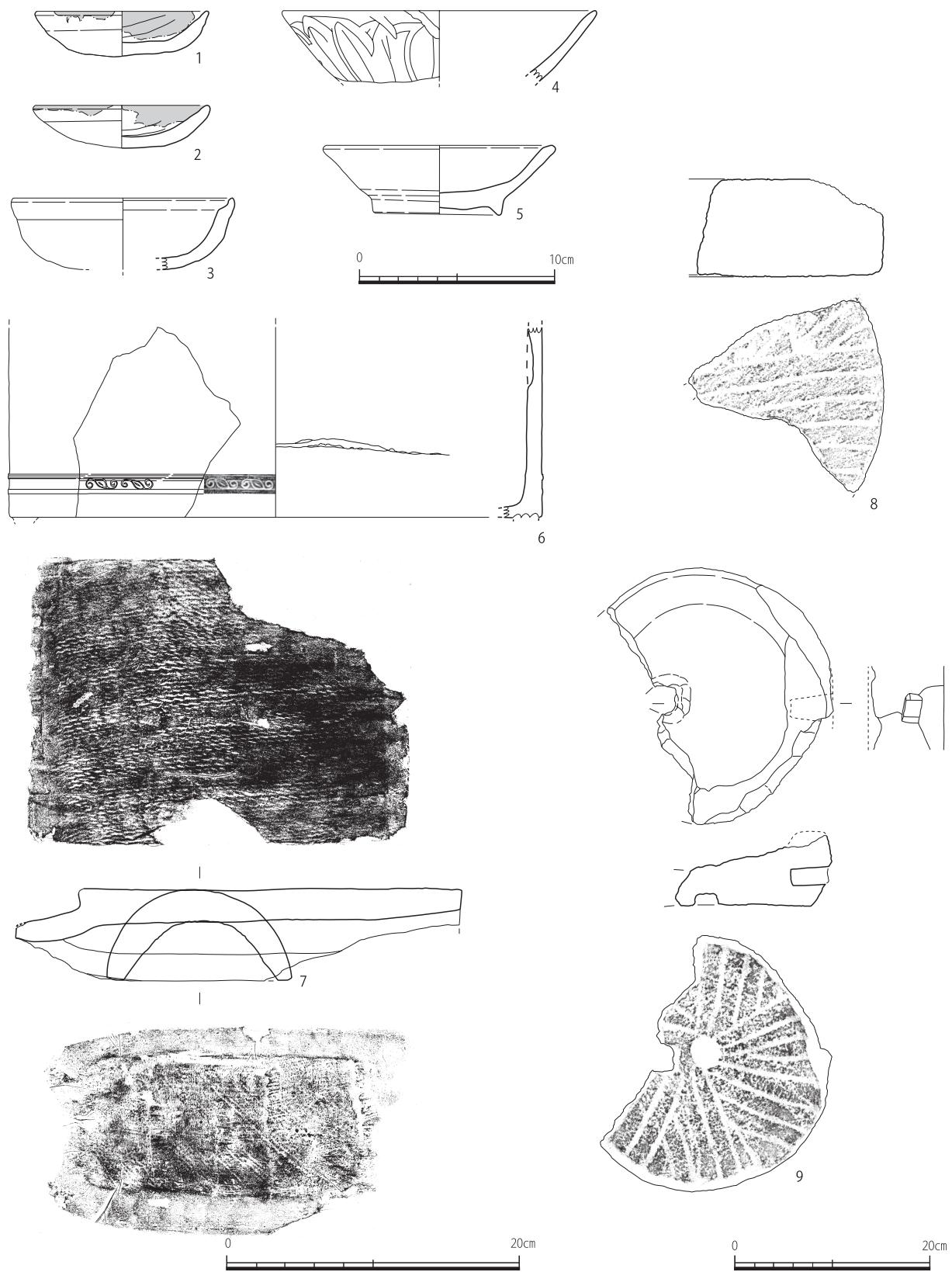
1 暗茶褐色砂質土(径 0.1～0.5cm 焼土ブロック、径 0.1～0.3cm 炭化物微量)

2 灰褐色砂質土(径 1.0～2.0cm 暗黄褐色ブロック少量、径 0.1～0.2cm 炭化物微量、やや軟質)

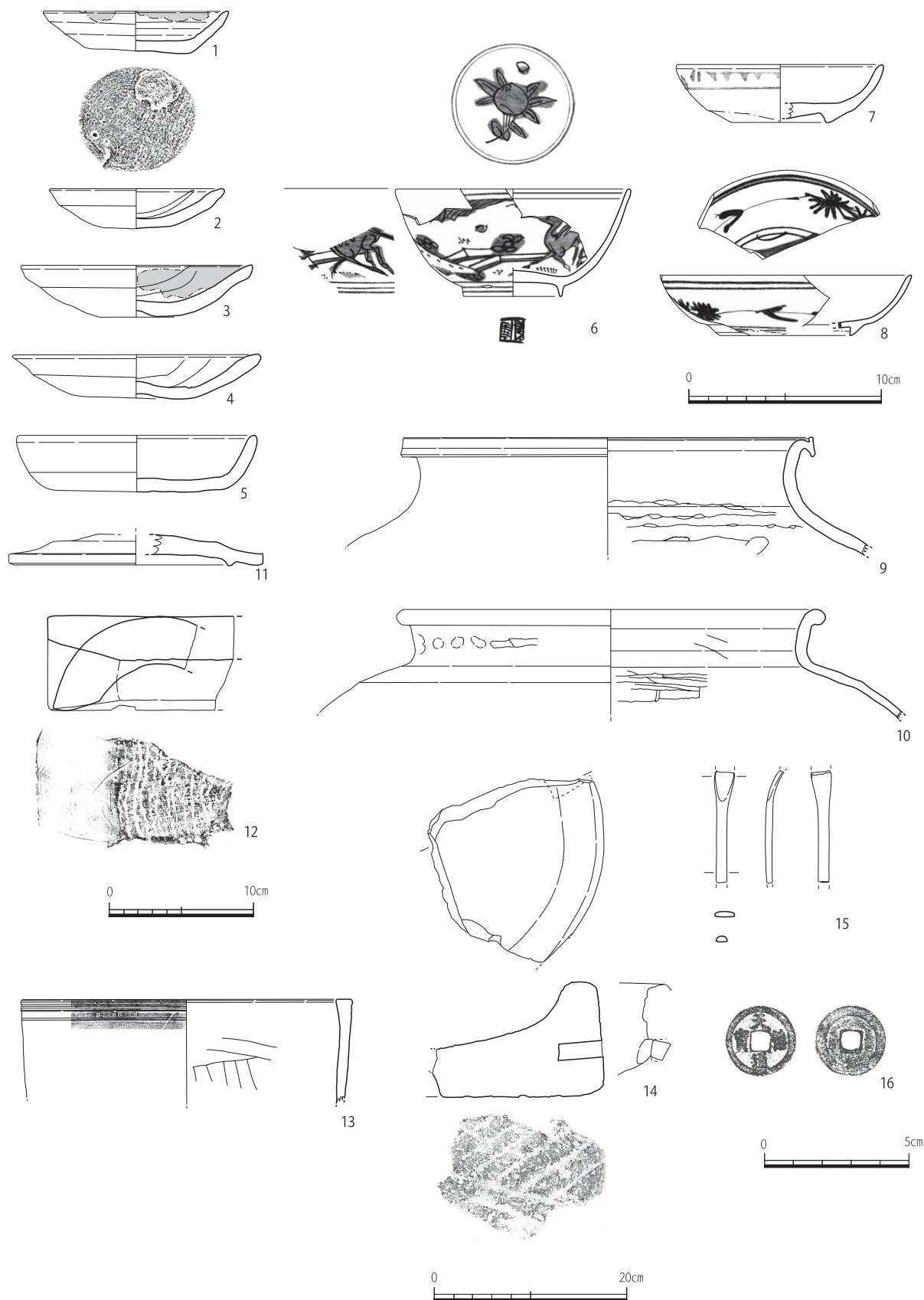
第 58 図 SP131 平面・土層断面図 (1/20)

表土出土遺物（第 61 図）

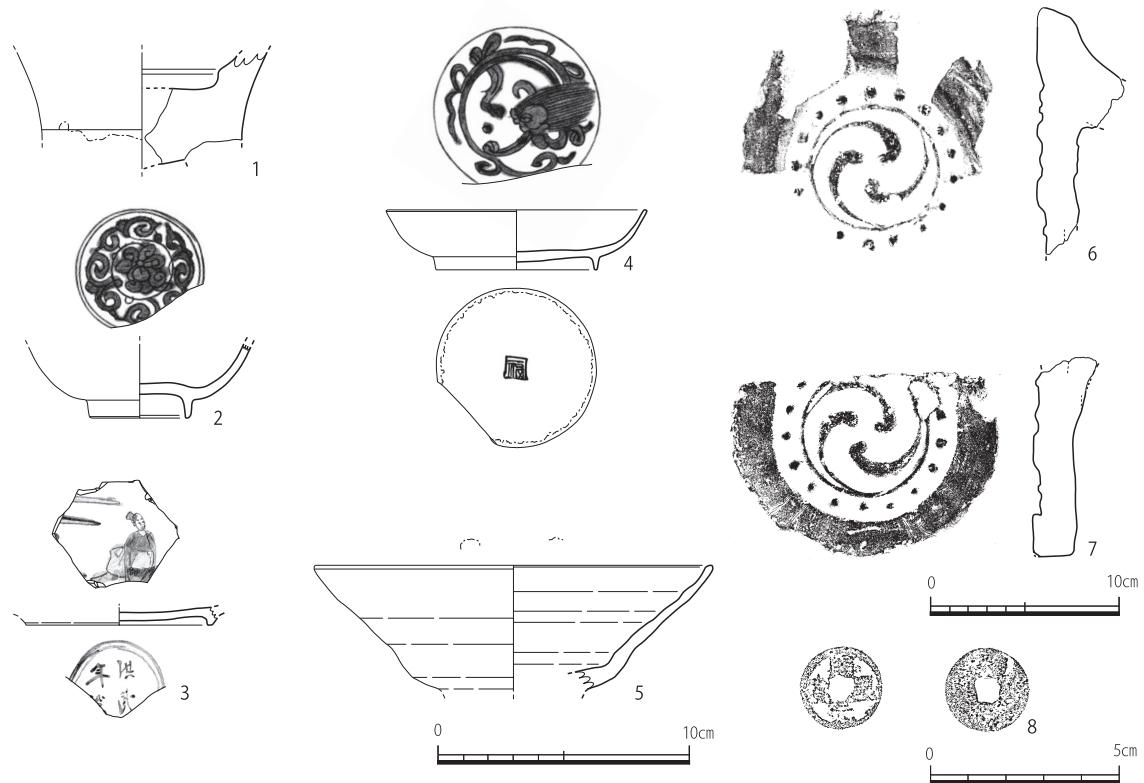
1 は、中国産白磁壺の底部片。14 世紀代か。2 は、景德鎮窯系青花碗。畳付の釉を剥ぎ、砂粒が付着する。見込みが「饅頭心」型の小野分類染付碗 E 群相当し、16 世紀中頃以降に比定される。見込みに「花唐草文」を染付けで描く。呉須の発色が悪く、やや黒味がかる。3・4 は、景德鎮窯系青花皿。3 は、小野分類染付皿 E 群



第59図 町60次調査 SX107出土遺物 (1~5 1/3、6・7 1/4、8・9 1/6)



第 60 図 町 60 次調査 SX001 出土遺物 (16 1/2, 1~8・11・15 1/3, 12 1/4, 9・10・13・14 1/6)



第61図 町60次調査 表土・攪乱出土遺物 (8 1/2、1~5 1/3、6・7 1/4)

に相当し、16世紀後半以降に比定される。畳付の釉を剥ぐ。4は、砂粒が付着する。3は、染付けで、見込み内に「貴人」・「雲文」が描かれ、高台内に「洪武年（製）」の2行4字銘が記される。4は、染付けで、見込みに「蛟龍文」が、高台内に字款状に「福」の吉祥字が描かれる。5は、朝鮮王朝産灰青釉陶器碗の口縁部から体部片。いわゆる「雑釉」。体部下位に丸みを、見込み境に段をもち、口縁部まで大きく開く。内外面に、ヨコナデ調整により、2条以上の稜が形成される。見込みに、目痕が観察される。6・7は、軒丸瓦の瓦当片。6は、瓦当外縁上半部の幅が広いため、隅瓦あるいは鳥衾瓦と考えられる。型押しにより、「左巻き三巴文」を中心に17個の「珠文」が配される。外縁の高さが0.5cmと低く、「巴文」と「珠文」の頂部に平坦面が観察される。7は、型押しにより、「左巻き三巴文」を中心に $13 + \alpha$ 個の「珠文」が配される。外縁の高さが0.5cmと低く、「巴文」と「珠文」の頂部に平坦面が観察される。指頭圧痕により、珠文の一部が不明瞭となる。8は、錢貨。唐錢で、表面に「開元通寶」と真書で鋳出され、裏面は無文。初鋳造年は、621年。

2. 町 60 次調査出土の動物遺存体について

町 60 次の堀跡(S D 210)の堀底に堆積した泥炭質粘質土を主体とする層から、多くの動物遺存体が出土した。残存状況が良好なものを中心として、以下の文献を参考に、若林・廣瀬が作表をおこなった。とくに、主要なものを松井章氏が来跡した際に、鑑定していただいた。ここに深く感謝申し上げます。

参考文献：松井章編 2006 『動物考古学の手引き』独立行政法人 文化財研究所 奈良文化財研究所 埋蔵文化財センター

松井章編 2003 『環境考古学マニュアル』同成社

表 1 町60次調査 出土動物遺存体同定表①

番号	調査次数	遺構番号	種別	種名	部位	左右	破片数	備考
1	町60	S-223.14-O10.P-41	哺乳類	ウシ	大腿骨	L	1	カットマーク
2	町60	S-223.14-L11.P-20	哺乳類	ウシ	肩甲骨	R	1	-
3	町60	S-223.14-F11	哺乳類	ウシ	距骨	L×R	1	-
4	町60	S-223.14-M10.P-37	哺乳類	ニホンジカ	肩甲骨	R	1	-
5	町60	S-223.14-M10	哺乳類	ニホンジカ	肩甲骨	L	1	カットマーク
6	町60	S-223.14-O11.P-31	哺乳類	ブタ×イノシシ	大腿骨	R	3	カットマーク
7	町60	S-223.14-O11	哺乳類	ブタ×イノシシ	脛骨	R	2	カットマーク
8	町60	S-223.14-M11	硬骨魚類	マダイ	椎骨	-	1	-
9	町60	S-223.14-L11.P-32	硬骨魚類	クエ×アラ	頭骨	L	1	ハタ科
10	町60	S-223.14-L11.P-33	哺乳類	ブタ	上顎前頭骨	-	11	-
11	町60	S-223.14-M10	哺乳類	ブタ	肩甲骨	L	1	-
12	町60	S-223.14-O10.P-29	哺乳類	ブタ	腓骨	L	1	カットマーク
13	町60	S-223.14-L11	哺乳類	ブタ	上腕骨	L	1	カットマーク
14	町60	S-224.14-I11	哺乳類	ニホンジカ	上顎骨・臼歯	L	1	P ₃ ・P ₄ ・M ₁
15	町60	S-224.14-K11.P-13	哺乳類	ニホンジカ	上腕骨	L	1	カットマーク
16	町60	S-224.14-K11.P-18	哺乳類	シカ×イノシシ	肋骨	-	1	-
17	町60	S-224.14-L10	哺乳類	ニホンジカ	大腿骨？	L	1	カットマーク
18	町60	S-224.14-K11.P-17	哺乳類	ネコ	肩甲骨	L	2	-
19	町60	S-224.14-L11.P-8	哺乳類	ブタ×イノシシ	大腿骨	R	1	-
20	町60	S-224.14-L10	哺乳類	ブタ	上腕骨	L	1	カットマーク
21	町60	S-224.14-J11.P-5	哺乳類	ブタ	大腿骨	L	1	-
22	町60	S-224.14-O11	哺乳類	ブタ	脛骨	L	1	-
23	町60	S-224.14-O11	哺乳類	ブタ	橈骨	R	1	-
24	町60	S-224.14-K11.P-19	哺乳類	シカ×ブタ	椎骨	-	1	-
25	町60	SD210(S-231.14-I11)	哺乳類	ブタ×イノシシ	上顎骨	-	5	-
26	町60	SD210.14-N10	哺乳類	ブタ×イノシシ	尺骨	L	1	カットマーク



第62図 町60次調査 出土動物遺存体写真図版①

1. ニホンザルの骨について

町 60 次の堀跡 (SD210) の堆積土層中に動植物遺存体が数多く出土したなかでニホンザルの骨も確認することができた。このため、ニホンザルの骨の形態については、京都大学靈長類研究所の山本亜由美博士に、傷跡については京都大学自然人類学研究室の大藪由美子博士に鑑定をいただいた。

鑑定により少なくとも 2 頭のニホンザルが確認された。その 2 頭のサルは、オスとメス 1 頭ずつである。以下に鑑定いただいた観察結果をもとに池邊が作表した。

1 は、ニホンザル右尺骨近位端で性別不明である。滑車と橈骨切痕上に数個の傷がある。

2 は、ニホンザル左寛骨おそらくメスである。腸骨に浅い傷が 3 本程度確認できる。

3 は、ニホンザル左大腿骨遠位端おそらくオスである。骨体は割られていて、遠位端後面に数条の浅い傷が確認できる。

4 は、ニホンザル頭蓋骨の若いオトナメスで割創 (叩き切った傷) が 9 箇所ある。左眼窓上に 3 箇所、項稜上に 1 箇所、右頭頂骨に 4 箇所 (うち 2 箇所は肉眼では見難い程小さい)、前頭骨 (切断面がフラットになっている所) に 1 箇所確認できる。骨折は、3 箇所確認される。鼻骨、左頭頂骨、右頭頂骨 (割創と交差している) がそれぞれ 1 箇所確認できる。加えて、おそらく陥没骨折だと思われるへこみが、小断片の方に 1 箇所確認できる。

5 は、ニホンザル左上腕骨おそらくメスである。骨体部分に数条の浅い傷が確認できる。

以上、ニホンザルの骨にはいずれにもカット痕等が残っており、人為的に解体されたことを示唆する資料となつた。これが食用のためにおこなわれたのであれば、当時の食生活を考える上で非常に興味深い。

今回の鑑定では、山本博士・大藪博士のほか、京都大学靈長類研究所の濱田穣博士のご協力を頂きました。ここに深く感謝申し上げます。

表2 町60次調査 出土動物遺存体同定表②

番号	調査次数	遺構番号	種別	種名	性別	部位	左右	破片数	備考
1	町60次	S-223.14-N10	哺乳類	ニホンザル	性別不明	尺骨	R	1	カットマークあり
2	町60次	S-223.14-N10.P-13	哺乳類	ニホンザル	おそらくメス	寛骨	L	1	カットマークあり
3	町60次	S-223.14-L11	哺乳類	ニホンザル	おそらくオス	大腿骨	L	1	カットマークあり
4	町60次	S-224.14-M11.P-21	哺乳類	ニホンザル	メス	頭蓋骨	—	2	カットマークあり
5	町60次	S-224.14-M10	哺乳類	ニホンザル	おそらくメス	上腕骨	L	1	カットマークあり



写真のスケールは全て実物の0.5倍

第62図 町60次調査 出土動物遺存体写真図版②

表3 遺物観察表①

遺構番号	図版番号	種類/器種	法量(cm) ()は復元					成形	調整・装飾		焼成	胎土(石材)	色調・釉調外側/内側	備考	
			口径/最大長	器高/最大幅	底径/最大厚	孔径	重量		外面	内面					
S-120 14-L11	第10図-1	土師器/小皿	(10.2)	2.4	(6.4)	—	—	ロクロ	口縁~体部ヨコナデ、底部回転糸切り離し	付着物のため調整不明瞭	良好	径0.1cm以下褐色粒子少量	橙茶色/橙茶色	遺構間接合(S-140 14-L11)	
S-120 14-L11	第10図-2	京都系土師器/皿	8.9	2.0	—	—	—	手づくね	付着物のため調整不明瞭	付着物のため調整不明瞭	良好	径0.1cm以下白色粒子少量	橙茶色/橙茶色	塙地編年第2期	
S-120 14-L11	第10図-3	京都系土師器/皿	8.7	2.4	—	—	—	手づくね	口縁部ヨコナデ、体部ナデ	ナデアゲ	良好	径0.1cm以下白色粒子少量	淡橙茶色/淡橙茶色	塙地編年第2期 口縁部内外焼痕 遺構間接合(S-140 14-L11)	
S-120 14-L11	第10図-4	青花(漳州窯系)/碗	12.8	6.0	4.5	—	—	ロクロ	口縁部下・高台境各1条界線、体部「草花文」一施釉、体部~底部露胎	口縁部下・見込み境各1条界線、見込み中央「」文様一施釉	良好	径0.1cm以下白色粒子少量、陶質に近い	灰白色/灰白色	2次被熱による釉変 遺構間接合(S-136)	
S-120 14-L11	第10図-5	青花(景德鎮窯系)/皿	(11.8)	2.9	(6.6)	—	—	ロクロ	口縁部下・高台境各1条界線、「萬福攸(同)」一施釉、壹付露胎	口縁部下・高台境各1条界線、一施釉	良好	径0.1cm以下白色粒子少量	透明釉/透明釉	小野分類染付皿E群 遺構間接合(S-136 14-L11)	
S-120 14-L11	第10図-6	青花(景德鎮窯系)/皿	11.4	2.9	6.3	—	—	ロクロ	口縁部下1条界線、高台1条界線、高台内界線が一施釉、壹付露胎	口縁部下1条界線、見込み2条界線内文様一施釉	良好	径0.1cm以下白色粒子少量	透明釉/透明釉	《S-120 P-1》 小野分類染付皿E群	
S-120 14-L11	第10図-7	白磁(景德鎮窯系)/木瓜皿	4.0+ α × 6.4	2.0	2.2+ α × 2.8	—	—	型つくり	高台内紀年銘「天(文)年(製×造)」一施釉、壹付釉剥ぎ	施釉	良好	径0.1cm以下白色粒子少量	暗白灰色(やや光沢あり)/暗白灰色(やや光沢あり)	—	
S-120 14-L11	第10図-8	青花(景德鎮窯系)/皿	13.3	2.7	8.0	—	—	ロクロ	施釉、壹付釉ケズリ、貰入	見込み境・見込み内各2条界線内文様、見込み渦文・花卉文一施釉、貰入	良好	径0.1cm以下白色粒子少量	透明釉(やや青味がかる)/透明釉(やや青味がかる)	《S-120 P-10》 小野分類染付皿B群 遺構間接合(S-200 14-L11・S-136)	
S-120 14-L11	第10図-9	瓦質土器/鉢	(37.5)	10.5	(27.6)	—	—	粘土紐 積上げ	口縁部ヨコナデ、体部ナデ	口縁部ヨコナデ、体部ナデ、底部工具ナデ	良好	径0.2cm以下白色粒子少量	淡橙茶色/淡橙茶色	遺構間接合(S-136 14-L11)	
S-120 14-L10	第10図-10	瓦質土器/火鉢	—	11.6+ α	(30.6)	—	—	粘土紐 積上げ	体部ミガキ、2条突帯、脚部接合痕	体部工具ナデ	良好	径0.1cm以下黄金光沢粒子少量	茶橙色/茶橙色	遺構間接合(S-120 14-L11・S-140・S-139 14-L10)	
S-120	第10図-11	備前焼/水屋甕	(19.9)	9.0+ α	—	—	—	粘土紐 積上げ	ヨコナデ・体部突帯貼り付け	ヨコナデ	良好	径1.4cm以下灰色粒子、径0.1cm以下白色粒子少量	灰茶色/赤茶色	外面2次被熱による釉変 内面焼き弾け 遺構間接合(S-200 14-L11)	
S-120 14-F11	第10図-12	備前焼/大甕	(50.2)	14.0+ α	—	—	—	粘土紐 積上げ	ナデ、肩部~体部自然釉、頸部接合痕	工具ナデ	良好	径0.4cm以下褐色・白色粒子少量	渴灰色/渴灰色	遺構間接合(S-174 P-1)	
S-120 14-L10	第10図-13	石製品/茶臼・下臼	—	6.5+ α	5.2+ α	—	—	ケズリ	ケズリ	受け皿ミガキ	—	安山岩	黒灰色	遺構間接合(S-139 14-L10)	
S-120 14-L11	第10図-14	石製品/茶臼・下臼	磨18.4 底26.4+ α			12.0	2.0	—	ケズリ	侧面~底部ケズリ	臼面擦目磨耗、幅0.2cm残存主溝4条・副溝10~11条、芯棒孔、受け皿ミガキ	—	砂岩	暗灰茶色	《S-120 P-7》 推定8分画
S-120 14-L11	第11図-15	瓦/平瓦	22.9+ α	18.0+ α	2.0	—	—	タタキ	凹面コビキA痕跡・ナデ	凸面コビキA痕跡・ナデ	良好	径0.8cm以下白色粒子少量	凹面青灰色/凸面青灰色	海部郡産 遺構間接合(S-136 14-L11)	
S-120 14-L10	第11図-16	瓦/丸瓦	12.1+ α	12.0	1.9	—	—	タタキ	凸面縞目タタキーナデ	凹面コビキA痕跡・布目痕・ナデ・吊紐痕	良好	径1.2cm以下白色粒子少量	凸面青灰色/凹面灰青色	海部郡産 遺構間接合(S-139 14-L10)	
S-121 14-K11	第12図-1	京都系土師器/皿	8.6	1.8+ α	—	—	—	手づくね	口縁部ヨコナデ、体部ナデ	黒化のため調整不明瞭	良好	径0.1cm以下褐色・白色粒子少量	淡橙茶色/淡橙茶色	塙地編年第2期 内面2次被熱により黒化	
S-121 14-L11	第12図-2	備前焼/小壺	—	6.5+ α	(5.1)	—	—	粘土紐 積上げ	ナデ、自然釉(緑灰色)	粘土紐接合痕、ナデ	良好	径0.1cm以下褐色・白色粒子少量	赤茶色/茶灰色	器面焼きはじけ	
S-121 14-K11	第12図-3	石製品/粉挽き臼・上臼	—	7.4+ α	6.4+ α	1.5+ α	—	ケズリ	側面ミガキ、臼面幅0.5~0.7cm残存主溝1条・副溝3条	窪みミガキ	—	安山岩	灰茶色	《S-121 P-2》	
S-121 14-K10	第12図-4	瓦/丸瓦	29.8	13.3	2.0	—	—	タタキ	凸面縞目タタキーナデ	凹面コビキA痕跡・布目痕・ナデ	良好	径0.2cm以下白色粒子少量	凸面灰青色/凹面灰青色	《S-121 P-1》	
S-174 14-F11	第13図-1	京都系土師器/皿	(9.0)	2.1	—	—	—	手づくね	口縁部ヨコナデ、体部ナデ	口縁部ヨコナデ、体部ナデ	良好	径0.1cm以下白色粒子少量	暗橙茶色/暗橙茶色	塙地編年第2期	
S-174 14-F11	第13図-2	青花(景德鎮窯系)/皿	(10.6)	2.4	(6.6)	—	—	ロクロ	施釉、壹付釉ケズリ	口縁部下1条界線、見込み草花文一施釉	良好	径0.1cm以下白色粒子少量	透明釉/透明釉	—	
S-174 14-G11	第13図-3	青花(漳州窯系)/皿	(24.8)	5.5	(10.4)	—	—	ロクロ	口縁部下1条界線、体部下半2条界線、高台2条界線一施釉	口縁部下2条界線、体部下半2条界線、見込み草花文?見込み内草花文一施釉	良好	径0.1cm以下白色粒子少量	透明釉/透明釉	壹付~高台内砂粒付着	
S-174 14-F11	第13図-4	瓦質土器/火鉢	(30.0)	8.2+ α	—	—	—	粘土紐 積上げ	ミガキ	工具ナデ	良好	径0.1cm以下白色粒子少量	暗茶褐色/茶褐色	—	
S-174	第13図-5	備前焼/大甕	(56.8)	48.7+ α	—	—	—	粘土紐 積上げ	口縁部ヨコナデ、体部工具ナデ、肩部「二石入」・「吉」へら書き、点状自然釉(黄緑色)	口縁部ヨコナデ、体部工具ナデ+ナデ、粘土紐接合痕	良好	径1.0cm以下白色粒子少量	暗赤茶色/赤茶色	《S-174 P-18》 乘岡編年近世1期 a 遺構間接合(S-177 P-5・S-178)	
S-174 14-F11	第13図-6	石製品/粉挽き臼・上臼	—	19.1+ α	9.3	芯1.6+ α 換4.2×2.3	—	ケズリ	側面ケズリ・挽手孔、臼面擦目磨耗、副溝不明瞭	上縁部~窪みミガキ	—	安山岩	灰橙色	くぼみ摩滅→使用痕 くぼみ付着物	
S-174	第13図-7	石製品/茶臼・上臼	磨(21.0)	—	13.8	芯(3.0) 挽2.3×2.2	—	ケズリ	側面ミガキ、挽手孔方形段跡り、臼面擦目磨耗、幅0.2cm×字目残存主溝4条・副溝7~9条	上縁部~窪みミガキ、供給口	—	安山岩	暗灰茶色	《S-174 P-20》 目規則的周線に到る推定8分画	

表4 遺物観察表②

遺構番号	図版番号	種類/器種	法量(cm) ()は復元					成形	調整・装飾		焼成	胎土(石材)	色調・釉調外顔/内顔	備考
			口径/最大長	器高/最大幅	底径/最大厚	孔径	重量		外面	内顔				
S-174	第13図-8	石製品/粉挽き臼・上臼	—	18.8+ α	12.6	芯2.0+ α 供4.2	—	ケズリ	側面ケズリ、臼面擦目磨耗、幅0.5~0.8cm残存主溝2条・副溝3~5条、芯棒受け	上縁部ミガキ、窪みケズリ、供給口	—	安山岩	暗灰茶色	(S-174 P-8)
S-175 14-G11	第14図-1	中国産青磁/碗	(12.6)	6.1+ α	—	—	—	ロクロ	口縁部下・体部下半2条界線内蓮弁文様→施釉	施釉	良好	径0.1cm以下黒色粒子少量	緑灰色(やや透明釉)/緑灰色	(S-175 P-2) 龍泉窯系以外
S-175 14-H11	第14図-2	青花(景德鎮窯系)/碗	—	2.3+ α	4.8	—	—	ロクロ	体部文様・体部高台境3条界線、高台内字款「精製」→施釉、蓋付露胎	見込み境2条界線、見込み瑞雲文→施釉	良好	径0.1cm以下黒色粒子少量	透明釉/透明釉	小野分類染付碗E群
S-175 14-G11	第14図-3	青花(景德鎮窯系)/碗	—	4.1+ α	5.2	—	—	ロクロ	体部文様(蛟龍文・草花文)、高台境3条界線・高台内字款状→施釉、蓋付釉ケズリ	口縁部下1条界線→施釉	良好	径0.1cm以下白色粒子少量	透明釉/透明釉	(S-175 P-1) 小野分類染付碗E群
S-175	第14図-4	石製品/茶臼・下臼	磨8.0+ α 底14.2+ α	15.0	10.2	—	—	ケズリ	底部ケズリ、側面斜方向のケズリ	臼面磨耗、幅0.1cm残存主溝1条・副溝4~7条、受け皿ミガキ	—	凝灰岩	灰橙色	(S-175 P-5)
S-177 14-G11	第15図-1	京都系土器器皿	8.5	1.9	—	—	—	手づくね	口縁部ヨコナデ、体部ナデ	ナデアゲ	良好	径0.1cm以下白色粒子少量	淡橙茶色/淡橙茶色	塩地編年第2期 口縁部内外面煤痕
S-177 14-H11	第15図-2	京都系土器器皿	9.0	2.3	—	—	—	手づくね	口縁部ヨコナデ、体部ナデ	ナデアゲ	良好	径0.1cm以下褐色粒子少量	淡橙茶色/淡橙茶色	塩地編年第3期 口縁部内外面煤痕
S-177 14-H11	第15図-3	京都系土器器皿	12.3	2.4	—	—	—	手づくね	口縁部ヨコナデ、体部ナデ	ナデアゲ	良好	径0.1cm以下透明粒子少量	淡橙茶色/淡橙茶色	塩地編年第2期
S-177 14-G10	第15図-4	京都系土器器皿	(13.0)	2.5	—	—	—	手づくね	口縁部ヨコナデ、体部ナデ	ナデアゲ	良好	径0.1cm以下白色粒子少量	淡橙茶色/淡橙茶色	塩地編年第2期
S-177 14-F10	第15図-5	中国産白磁/皿	(11.1)	2.5	6.1	—	—	ロクロ	施釉、蓋付釉剥ぎ	施釉	良好	径0.1cm以下白色粒子少量	白灰色/白灰色	湯瀬城白磁皿B-1類
S-177 14-G11	第15図-6	中国産白磁/皿	(15.2)	3.7	(8.0)	—	—	ロクロ	施釉、蓋付釉剥ぎ	施釉	良好	径0.1cm以下白色粒子少量	白灰色/白灰色	湯瀬城白磁皿B-1類
S-177	第15図-7	青花(漳州窯系)/碗	(12.9)	4.8	(4.5)	—	—	ロクロ	口縁部下・体部境各1条界線→施釉、蓋入	見込み境2条界線→施釉、蓋入	良好	径0.1cm以下白色粒子少量・陶質に近い	透明釉/透明釉	—
S-177 14-F10	第15図-8	青花(景德鎮窯系)/碗	(13.6)	5.5+ α	—	—	—	ロクロ	口縁部下2条界線・体部文様(魚・虫・水生植物)→施釉	口縁部下1条界線→施釉	良好	径0.1cm以下白色粒子少量	透明釉/透明釉	—
S-177 14-F10	第15図-9	青花(景德鎮窯系)/碗	—	3.5+ α	5.0	—	—	ロクロ	体部文様・体部下半2条界線・高台境2条界線・高台内字款状→施釉、蓋付釉剥ぎ	見込み2条界線内草花文→施釉	良好	径0.1cm以下白色粒子少量	透明釉/透明釉	小野分類染付碗E群
S-177 14-G11	第15図-10	青花(景德鎮窯系)/碗	—	4.4+ α	(5.4)	—	—	ロクロ	体部草花文・体部下半文様帶・体部境→高台1条界線・高台内2条界線内「宣(徳)年(製)」→施釉、蓋付釉剥ぎ	体部境~見込み3条界線・見込み草花文→施釉	良好	径0.1cm以下白色粒子少量	透明釉/透明釉	2次被熱による釉変
S-177	第15図-11	青花(漳州窯系)/皿	—	4.6+ α	—	—	—	ロクロ	口縁部下1条界線・体部下半2条界線→施釉	口縁部下2条界線・体部文様帶・見込み2条界線内蓮弁文→施釉	良好	径0.1cm以下白色粒子少量	透明釉/透明釉	—
S-177 14-H11	第15図-12	青花(景德鎮窯系)/皿	—	1.6+ α	—	—	—	ロクロか	屈曲部2条界線上半・下半文様→施釉	屈曲部2条界線→施釉	良好	径0.1cm以下白色粒子少量	透明釉/透明釉	—
S-177	第15図-13	青花(景德鎮窯系)/皿	—	1.9+ α	—	—	—	ロクロか	文様(鳥・果樹)→施釉	見込み1条界線・渦文帯→施釉	良好	径0.1cm以下白色粒子少量	透明釉/透明釉	—
S-177	第15図-14	青花(漳州窯系)/皿	—	2.0+ α	(10.3)	—	—	ロクロ	高台2条界線→施釉	見込み2条界線内蓮弁文・見込み1条界線内草花文→施釉	良好	径0.1cm以下白色粒子少量	透明釉/透明釉	蓋付~高台内砂粒付着
S-177	第15図-15	青花(景德鎮窯系)/皿	(14.0)	2.8	(6.4)	—	—	ロクロ	施釉、蓋付釉剥	口縁部下1条界線・見込み1条界線内文様→施釉	良好	径0.1cm以下白色粒子少量	透明釉/透明釉	2次被熱による釉変
S-177 14-G11	第15図-16	白磁(景德鎮窯系)/棱花皿	(12.4)	2.9	6.4	—	—	型づくり	高台内字款状「福」→施釉、蓋付釉剥ぎ	施釉	良好	径0.1cm以下白色粒子少量	白灰色(やや光沢あり)/白灰色(やや光沢あり)	2次被熱による釉変
S-177 14-H10	第15図-17	中国南方産褐釉陶器/壺	—	3.5+ α	—	—	—	粘土紐積上げ	龍体部貼り付け→施釉	体部上半施釉、体部下半露胎	良好	径0.4cm以下白色・黒色粒子少量	暗緑褐色/暗緑褐色・灰褐色(露胎部)	—
S-177 14-G11	第15図-18	产地不明陶器/瓶×壺	—	5.2+ α	—	—	—	粘土紐積上げか	施釉	施釉、一部露胎	良好	径0.1cm以下白色粒子少量	黒褐色/黒褐色・灰茶色	2次被熱による釉変
S-177 14-H11	第15図-19	朝鮮王朝産灰青釉陶器/瓶	(6.4)	5.2+ α	—	—	—	粘土紐積上げ	施釉	施釉	良好	径0.1cm以下白色粒子少量	灰緑色/灰緑色	舟徳利
S-177 14-H10	第15図-20	朝鮮王朝産灰青釉陶器/碗	(15.2)	4.9+ α	—	—	—	ロクロ	施釉	施釉	良好	径0.1cm以下白色・黒色粒子少量	暗灰緑色/暗灰緑色	雜釉 2次被熱による釉変
S-177 14-G11	第15図-21	瀬戸・美濃産陶器/天目碗	(11.4)	3.9+ α	—	—	—	ロクロ	施釉	施釉	良好	径0.1cm以下白色粒子少量	黒茶色/黒茶色	藤沢編年大窯第3~4段階
S-177 14-H10	第15図-22	瓦質土器/焼塩壺	(5.0)	6.6+ α	—	—	—	粘土紐積上げ	口縁部ヨコナデ・体部ナデ	口縁部ヨコナデ・体部ナデ・接合痕	良好	径0.1cm以下白色・褐色粒子少量	暗橙茶色/暗橙茶色	2次被熱黒化
S-177 14-H10	第15図-23	瓦質土器/鉢	(32.0)	10.0	(20.4)	—	—	粘土紐積上げ	器面磨耗のため調整不明瞭	器面磨耗のため調整不明瞭・見込みミガキ	良好	径0.1cm以下白色・黄金光沢粒子少量	暗橙茶色/暗橙茶色	—
S-177 14-G11	第15図-24	瓦質土器/鉢	(32.2)	10.8	(20.2)	—	—	粘土紐積上げ	ナデ	工具ナデ	良好	径0.2cm以下褐色・白色粒子中量	淡橙茶色/淡橙茶色	—

表5 遺物観察表③

遺構番号	図版番号	種類／器種	法量(cm) ()は復元					成形	調整・装飾		焼成	胎土(石材)	色調・釉調外面／内面	備考
			口径／最大長	器高／最大幅	底径／最大厚	孔径	重量		外面	内面				
S-177	第15図-25	備前焼／水屋甕	(31.4)	40.9	(26.4)	—	—	粘土紐積上げ	口縁～体部ヨコナデ・1条凸帯貼り付け、体部～底部工具ナデ・粘土紐接合痕	口縁～体部ヨコナデ・1条凸帯貼り付け、体部～底部工具ナデ・粘土紐接合痕	良好	径0.3cm以下白色・褐色・黒色粒子少量	赤茶色／赤茶色	遺構間接合(S-178)
S-177 14-G11	第16図-26	瓦質土器／茶釜	(16.0)	3.4+ α	—	—	—	粘土紐積上げ	ミガキ	ナデ	良好	径0.1cm以下黄金光沢粒子少量	淡橙茶色／淡橙茶色	—
S-177 14-G11	第16図-27	土師質土器／焰焰	(27.6)	5.6+ α	—	—	—	粘土紐積上げ	ナデ、タタキ痕	工具ナデ	良好	径0.1cm以下白色粒子少量	暗茶灰色／暗茶灰色	—
S-177 14-G10	第16図-28	瓦質土器／火鉢	37.4	7.0+ α	—	—	—	粘土紐積上げ	口縁端部ミガキ、口縁部下2条突帯内「×」スタンプ	工具ナデ	良好	径0.1cm以下褐色・白色粒子少量	淡橙茶色／淡橙茶色	—
S-177 14-G11	第16図-29	瓦質土器／火鉢	(34.4)	11.2+ α	—	—	—	粘土紐積上げ	ミガキ	ミガキ	良好	径0.1cm以下白色・黄金光沢粒子少量	橙茶色／橙茶色	—
S-177 14-G10	第16図-30	石製品／硯	8.8+ α	7.8	1.5	—	—	ケズリ	硯陰・硯側研ぎ	硯面研ぎ	—	輝綠凝灰岩	淡赤褐色	—
S-177 14-G10	第16図-31	石製品／硯	6.4+ α	7.6	1.8+ α	—	—	ケズリ	硯陰・硯側研ぎ	硯面研ぎ	—	輝綠凝灰岩	赤紫色	—
S-177 14-G10	第16図-32	石製品／茶臼・下臼	臼(19.6) 底(25.4)	—	10.2	(2.5)	—	ケズリ	底部ケズリ・側面斜方向のケズリ	臼面磨耗、幅0.1cm残存主溝4条・副溝3~7条、受け皿ミガキ	—	凝灰岩	灰橙色	推定8分画
S-177	第16図-33	土壁	10.0+ α	13.0+ α	4.0+ α	—	—	壁面鍛當て	木舞痕・間渡痕	良好	径2.0cm以下黒色粒子、径1.0cm以下白色・褐色粒子少量、藁を捻りとして混入	茶褐色／茶褐色	2次被熱痕 鉛滓付着	
S-177 14-G11	第16図-34	土壁	14.8+ α	19.0+ α	4.4	—	—	壁面鍛當て	木舞痕・間渡痕	良好	径3.0cm以下褐色粒子少量、切藁を捻りとして混入	茶褐色／茶褐色	2次被熱痕	
S-177 14-G11	第16図-35	土壁	14.9+ α	5.5+ α	3.9	—	—	壁面・柱面鍛當て	木舞痕・間渡痕	良好	径1.0cm以下白色・褐色粒子少量、切藁を捻りとして混入	茶褐色／茶褐色	2次被熱痕	
S-177 14-G11	第16図-36	土製品／轆羽口	14.2+ α	—	(8.4)	(3.2)	—	手づくね	工具ナデ	—	良好	径0.2cm以下褐色粒子、径1.0cm以下白色・黒色光沢粒子少量	橙茶色／橙茶色	—
S-177 14-E11	第16図-37	土製品／灯火具か	4.6	4.7	3.7	1.1	—	手づくね	ナデ	ナデ	良好	径0.2cm以下褐色粒子少量	淡橙茶色／淡橙茶色	—
S-177 14-G11	第16図-38	青銅製品／不明	2.7+ α	0.8	0.2	—	—	鑄造	—	—	—	—	—	
S-177	第16図-39	鉄製品／不明	24.7	5.7	2.4	1.1	—	—	—	—	—	—	—	(S-177 P-1)
S-177	第16図-40	鉄製品／不明	25.5	6.5	3.8	—	—	—	—	—	—	—	—	(S-177 P-1)
S-177	第17図-41	瓦／軒平瓦	27.2	21.2	4.0	—	—	タタキ	瓦当表面宝珠唐草文、外縁ミガキ、凹面布目痕・ナデ	頬～裏面ヨコナデ・凸面ナデ・凹型台压痕	良好	径1.4cm以下黒色粒子、径1.0cm以下白色・褐色粒子少量	凹面 灰青色／凸面 灰青色	—
S-177	第17図-42	瓦／軒平瓦	20.0+ α	21.7	3.9	—	—	タタキ	瓦当表面宝珠唐草文、外縁ミガキ、凹面ナデ	頬凸～裏面ヨコナデ・凸面凹型台压痕・ナデ	良好	径0.6cm以下白色粒子、径1.0cm以下黄金光沢粒子少量	凹面 灰青色／凸面 灰青色	—
S-177	第18図-43	瓦／軒丸瓦	4.1+ α	13.4	2.0+ α	—	—	タタキ	瓦当表面左巻き三巴文・残存珠文9、外縁ミガキ	瓦当裏面ナデ	良好	径0.2cm以下白色粒子少量	表面 青灰色／裏面 青灰色	—
S-177 14-G11	第18図-44	瓦／軒丸瓦	3.4+ α	10.9+ α	2.2+ α	—	—	タタキ	瓦当表面左巻き三巴文・残存珠文14	瓦当裏面ナデ	良好	径0.1cm以下白色粒子少量	表面 青灰色／裏面 青灰色	(S-177 P-9)
S-177 14-G11	第18図-45	瓦／軒丸瓦	3.3+ α	11.5+ α	2.2+ α	—	—	タタキ	瓦当表面左巻き三巴文・残存珠文16、外縁ミガキ	瓦当裏面ナデ	良好	径0.1cm以下白色・褐色粒子少量	表面 暗灰青／裏面 灰青色	(S-177 P-8)
S-177	第18図-46	瓦／丸瓦	27.0+ α	13.6	2.0	—	—	タタキ	凸面縦方向のナデ	凹面コビキA痕跡・布目痕・吊り紐痕・ナデ	良好	径0.2cm以下褐色・白色粒子少量	凸面 茶灰色／凹面 茶灰色	—
S-177	第18図-47	瓦／丸瓦	28.7	13.3	2.0	—	—	タタキ	凸面狭端縁～連結面横方向のナデ、広端横方向のナデ、簡部縦方向のナデ	凹面コビキA痕跡・布目痕・吊り紐痕・ナデ	良好	径0.1cm以下白色・褐色・黒色粒子少量	凸面 青灰色／凹面 灰青色	—
S-177	第18図-48	瓦／丸瓦	28.0	13.4	2.1	—	—	タタキ	凸面狭端縁～連結面横方向のナデ、広端横方向のナデ、簡部縦方向のナデ	凹面コビキA痕跡・布目痕・吊り紐痕・ナデ	良好	径0.2cm以下褐色粒子少量	凸面 茶灰色／凹面 茶灰色	—
S-177 14-G10	第19図-49	道具瓦／埴	15.0+ α	14.7+ α	3.2	—	—	タタキか	上面工具ナデ	下面ナデか	良好	径0.2cm以下白色粒子、径0.1cm以下黑色粒子少量	上面 暗灰茶色／下面 灰茶色	敷埴か
S-177	第19図-50	道具瓦／埴	19.3+ α	21.6	2.4	—	—	タタキか	上面ナデ	下面ナデ	良好	径0.1cm以下白色・褐色粒子少量	上面 茶褐色／下面 茶褐色	敷埴か
S-178 14-H11	第20図-1	京都系土師器／皿	9.0	2.0	—	—	—	手づくね	口縁部ヨコナデ・体部ナデ	ナデアゲ	良好	径0.1cm以下白色・褐色粒子少量	淡橙茶色／淡橙茶色	塩地編年第2期
S-178 14-H11	第20図-2	五彩／碗	—	2.9+ α	—	—	—	口クロ	口縁部下1条界線～施釉～赤絵、2条界線、格子目文内「十」字文	口縁部下1条界線～施釉～赤絵、3条界線、文様帶	良好	径0.1cm以下白色粒子少量、陶質に近い	透明釉／透明釉	—
S-178	第20図-3	青花(景徳鎮窯系)／碗	—	2.3+ α	(5.0)	—	—	口クロ	体部文様体、体部下半1条界線・高台境2条界線、高台内「富貴如意器」一施釉、豊付霜剥ぎ	見込み2条界線内蛟龍文一施釉	良好	径0.1cm以下白色粒子少量	透明釉／透明釉	小野分類染付碗E群

表6 遺物観察表④

遺構番号	図版番号	種類／器種	法量(cm) ()は復元					成形	調整・装飾		焼成	胎土(石材)	色調・釉調外面／内面	備考
			口径／最大長	器高／最大幅	底径／最大厚	孔径	重量		外面	内面				
S-178	第20図-4	中国南方産褐釉陶器／壺	—	4.7+ α	—	—	—	粘土紐積上げ	龍貼り付け、ヘラ描き→施釉	粘土紐接合痕→体部上半施釉、体部下半露胎	良好	径0.5cm以下黒色粒子、径0.1cm以下白色粒子少量	暗緑褐色／暗緑褐色・灰褐色(露胎部)	2次被熱による釉変
S-178 14-H11	第20図-5	朝鮮王朝産灰青釉陶器／碗	(15.6)	6.4	(5.0)	—	—	ロクロ	施釉	施釉	良好	径0.1cm以下白色粒子少量	灰青色／灰青色	(S-178 P-1) 雜釉 2次被熱 遺構間接合(表採・S-177)
S-178	第20図-6	タイ産メナムノイ窯系焼締陶器／四耳壺	—	5.2+ α	—	—	—	粘土紐積上げ	肩部5条沈線、耳貼り付け→施釉	ヨコナデ	良好	径0.1cm以下黒色・白色・褐色粒子少量	緑灰色／青灰色	2次被熱による釉変
S-178	第20図-7	タイ産メナムノイ窯系焼締陶器／四耳壺	—	13.4+ α	—	—	—	粘土紐積上げ	肩部6条沈線、耳貼り付け→施釉	ヨコナデ	良好	径0.1cm以下黒色・白色・褐色粒子少量	緑灰色／青灰色	2次被熱による釉変
S-178	第20図-8	備前焼／甕	—	7.1+ α	—	—	—	粘土紐積上げ	「二石入」	工具ナデ	良好	径0.7cm以下白色粒子少量	赤茶色／赤茶色	—
S-178	第20図-9	備前焼／甕	—	13.9+ α	—	—	—	粘土紐積上げ	「ひ(ねり土)」	工具ナデ	良好	径0.6cm以下褐色粒子、径0.2cm以下白色粒子少量	赤茶色／赤茶色	—
S-178	第20図-10	備前焼／小壺か	(9.0)	2.5+ α	—	—	—	粘土紐積上げか	ナデ、自然釉(黄緑色)	ナデ	良好	径0.1cm以下白色・褐色粒子少量	暗赤茶色／暗赤茶色	—
S-178	第20図-11	備前焼／水屋甕	—	11.0+ α	—	—	—	粘土紐積上げ	口縁～体部ヨコナデ、体部輪状の耳貼り付け(黄緑色)	口縁～体部ヨコナデ、体部輪状の耳貼り付けのためのナデ	良好	径0.2cm以下白色・褐色・黑色粒子少量	赤茶色／赤茶色	北野双耳B3類
S-178	第20図-12	備前焼／水屋甕	—	15.3+ α	—	—	—	粘土紐積上げ	体部1条凸帯・輪状の耳貼り付け	ヨコナデ	良好	径0.3cm以下白色・褐色・黑色粒子少量	赤茶色／赤茶色	北野双耳B4類
S-178	第20図-13	石製品／硯	4.3+ α	6.0	1.4	—	—	ケズリ	硯陰・硯側研ぎ	硯面研ぎ	良好	輝緑凝灰岩	灰褐色	海部墨痕
S-178 14-H11	第20図-14	石製品／茶臼・下臼	—	8.8+ α	7.0+ α	1.8	—	ケズリ	臼面磨耗、幅0.2cm残存主溝4条・副溝5～6条	—	—	凝灰岩	暗灰茶色	—
S-178	第21図-15	瓦／軒丸瓦	3.4+ α	10.0+ α	2.8+ α	—	—	タタキ	瓦当表面左巻き三巴文・残存珠文9、外縁ミガキ	瓦当裏面ナデ	良好	径0.1cm以下白色・褐色粒子少量	表面 淡橙茶色／裏面 茶灰色	—
S-178	第21図-16	瓦／軒丸瓦	3.3+ α	13.8+ α	2.3	—	—	タタキ	瓦当表面左巻き三巴文・珠文17、外縁ミガキ	瓦当裏面ナデ	良好	径0.2cm以下褐色粒子、径0.1cm以下白色粒子少量	表面 灰青色／裏面 灰青色	遺構間接合(S-174)
S-178	第21図-17	瓦／軒丸瓦	3.2+ α	13.3	2.7	—	—	タタキ	瓦当表面左巻き三巴文・珠文17、外縁ミガキ	瓦当裏面ナデ	良好	径0.1cm以下白色・黃金光沢粒子少量	表面 暗灰青色／裏面 青灰色	—
S-178	第21図-18	瓦／軒平瓦	12.1+ α	15.9+ α	4.0	—	—	タタキ	瓦当表面宝珠唐草文、外縁ミガキ、凹面布目痕・ナデ	額凸～裏面ヨコナデ、凸面凹型台压痕・ナデ	良好	径0.1cm以下白色・褐色粒子少量	凹面 青灰色／凸面 青灰色	(S-178 P-4)
S-178 14-H11	第21図-19	瓦／軒平瓦	15.4+ α	12.2+ α	3.9	—	—	タタキ	瓦当表面宝珠唐草文、外縁ミガキ、凹面ビヨウ痕・布目痕・ナデ	額凸～裏面ヨコナデ、凸面ナデ	良好	径0.1cm以下白色・褐色・黃金光沢粒子少量	凹面 暗灰青色／凸面 青灰色	(S-178 P-2)
S-178	第21図-20	瓦／平瓦	21.5+ α	21.2	2.1	—	—	タタキ	凹面ナデ	凸面ナデ	良好	径0.2cm以下白色・黃金光沢粒子少量	凹面 灰青色／凸面 灰青色	—
S-200 14-M10	第22図-1	土師器／小皿	8.4	1.3	7.2	—	—	ロクロ	口縁部ヨコナデ、体部ナデ、底部回転糸切り離し	口縁部ヨコナデ、体部ナデ、見込みナデ	良好	径0.2cm以下褐色・白色粒子少量	淡橙茶色／淡橙茶色	—
S-200 14-L11	第22図-2	土師器／小皿	8.1	1.5	5.9	—	—	ロクロ	口縁～体部ヨコナデ、底部回転糸切り離し	口縁～体部ヨコナデ、見込みナデ	良好	径0.1cm以下白色・褐色粒子少量	淡橙茶色／淡橙茶色	—
S-200 14-011	第22図-3	土師器／小皿	9.4	1.9	5.8	—	—	ロクロ	口縁～体部ヨコナデ、底部回転糸切り離し	口縁～体部ヨコナデ、透明粒子少量	良好	径0.1cm以下透明粒子少量	淡橙茶色／淡橙茶色	—
S-200 14-K11	第22図-4	土師器／坏	(8.9)	2.1	(6.2)	—	—	ロクロ	口縁部ヨコナデ、体部ナデ、底部回転糸切り離し	口縁部ヨコナデ、体部・見込みナデ	良好	径0.1cm以下黑色・黃金光沢粒子少量	橙茶色／橙茶色	ロクロ目
S-200 14-H11	第22図-5	土師器／坏	(10.4)	1.8	(5.8)	—	—	ロクロ	口縁部ヨコナデ、体部ナデ、底部回転糸切り離し後ナフ	口縁～体部ヨコナデ、見込みナデ	良好	径0.1cm以下白色粒子少量	橙茶色／橙茶色	ロクロ目
S-200 14-L11	第22図-6	土師器／坏	12.0	2.8	6.7	—	—	ロクロ	口縁部ヨコナデ、体部ナデ～底部ナフ	口縁～体部ヨコナデ、見込みナデ	良好	径0.1cm以下白色・黒色粒子少量	橙茶色／橙茶色	(S-200 P-35) ロクロ目
S-200 14-011	第22図-7	土師器／坏	13.1	2.9	6.6	—	—	ロクロ	口縁～体部ヨコナデ、底部回転糸切り離し	口縁～体部ヨコナデ、見込みナデ	良好	径0.1cm以下白色粒子少量	橙茶色／橙茶色	ロクロ目
S-200 14-N10	第22図-8	土師器／耳皿	5.8	1.3	3.5	—	—	手づくね	ナデ、底部回転糸切り離し	ナデ	良好	径0.1cm以下白色粒子少量	橙茶色／橙茶色	—
S-200 14-G10	第22図-9	京都系土師器／皿	9.3	2.1	—	—	—	手づくね	口縁部ヨコナデ、体部ナデ	ナデアゲ・ツメ痕	良好	径0.1cm以下褐色・白色粒子少量	淡橙茶色／淡橙茶色	塩地編年第2期
S-200 14-H11	第22図-10	京都系土師器／皿	9.6	2.2	—	—	—	手づくね	口縁部ヨコナデ、体部ナデ	ナデアゲ	良好	径0.1cm以下褐色・白色粒子少量	淡橙茶色／淡橙茶色	塩地編年第2期
S-200 14-H10	第22図-11	京都系土師器／皿	9.8	2.0	—	—	—	手づくね	口縁部ヨコナデ、体部ナデ	ナデアゲ	良好	径0.1cm以下白色粒子少量	淡橙茶色／淡橙茶色	塩地編年第2期
S-200 14-F11	第22図-12	京都系土師器／皿	12.2	2.6	—	—	—	手づくね	口縁部ヨコナデ、体部ナデ	ナデアゲ	良好	径0.1cm以下褐色・白色粒子少量	淡橙茶色／淡橙茶色	塩地編年第2期
S-200 14-G11	第22図-13	京都系土師器／皿	8.6	2.1	—	—	—	手づくね	付着物のため調整不明瞭	ナデアゲ	良好	径0.1cm以下黃金光沢粒子少量	淡橙茶色／淡橙茶色	塩地編年第2期 2次被熱により黒化 遺構間接合(S-108 14-G11)
S-200 14-E11	第22図-14	京都系土師器／皿	8.5	2.1	—	—	—	手づくね	口縁部ヨコナデ、体部ナデ	ナデアゲ	良好	径0.1cm以下褐色・白色粒子少量	淡橙茶色／淡橙茶色	塩地編年第2期
S-200 14-F11	第22図-15	京都系土師器／皿	8.6	2.1	—	—	—	手づくね	口縁部ヨコナデ、体部ナデ	ナデアゲ	良好	径0.1cm以下白色粒子少量	橙茶色／橙茶色	塩地編年第2期
S-200 14-L11	第22図-16	京都系土師器／皿	9.1	2.0	—	—	—	手づくね	口縁部ヨコナデ、体部ナデ	ナデアゲ	良好	径0.1cm以下褐色・白色粒子少量	淡橙茶色／淡橙茶色	塩地編年第2期

表7 遺物観察表⑤

遺構番号	図版番号	種類/器種	法量(cm) ()は復元					成形	調整・装飾		焼成	胎土(石材)	色調・釉調 外面/内面	備考
			口径/最大長	器高/最大幅	底径/最大厚	孔径	重量		外面	内面				
S-200 14-G11	第22図-17	京都系土師器/皿	9.1	1.7	—	—	—	手づくね	口縁部ヨコナデ、 体部ナデ	ナデアゲ	良好	径0.1cm以下褐色 粒子少量	淡橙茶色/淡 橙茶色	塩地編年第2期
S-200 14-L11	第22図-18	京都系土師器/皿	9.3	2.3	—	—	—	手づくね	口縁部ヨコナデ、 体部ナデ	ナデアゲ	良好	径0.1cm以下褐色 粒子少量	淡橙茶色/淡 橙茶色	塩地編年第2期 口縁部内外面焼痕
S-200 14-H10	第22図-19	京都系土師器/皿	10.6	2.3	—	—	—	手づくね	口縁部ヨコナデ、 体部ナデ	ナデアゲ	良好	径0.1cm以下白色 黄色光沢粒子 少量	淡橙茶色/淡 橙茶色	塩地編年第2期
S-200 14-G10	第22図-20	京都系土師器/皿	10.8	2.3	—	—	—	手づくね	口縁部ヨコナデ、 体部ナデ	ナデアゲ	良好	径0.1cm以下褐色 白色粒子少量	淡橙茶色/淡 橙茶色	塩地編年第2期
S-200 14-K10	第22図-21	京都系土師器/皿	15.8	2.9	—	—	—	手づくね	口縁部ヨコナデ、 体部ナデ	口縁部ヨコナデ、 体部ナデ	良好	径0.1cm以下白色 褐色粒子少量	淡橙茶色/淡 橙茶色	塩地編年第2期
S-200 14-H11	第22図-22	京都系土師器/皿	12.2	2.2	—	—	—	手づくね	口縁部ヨコナデ、 体部ナデ	口縁部ヨコナデ、 体部ナデ	良好	径0.1cm以下褐色 白色粒子少量	淡橙茶色/淡 橙茶色	(S-200 P-9)
S-200 14-F11	第22図-23	京都系土師器/皿	12.9	2.7	—	—	—	手づくね	口縁部ヨコナデ、 体部ナデ	口縁部ヨコナデ、 体部ナデ	良好	径0.5cm以下褐色 粒子、径0.1cm 以下白色粒子少量	淡橙茶色/淡 橙茶色	塩地編年第2期 遺構間接合(S-108 14-F11)
S-200 14-L11	第22図-24	京都系土師器/皿	13.5	2.5	—	—	—	手づくね	口縁部ヨコナデ、 体部ナデ・ツメ痕	口縁部ヨコナデ、 体部ナデ	良好	径0.1cm以下褐色 黄色光沢粒子 少量	淡橙茶色/淡 橙茶色	(S-200 P-37) 塩地編年第2期
S-200 14-N10	第22図-25	京都系土師器/皿	12.4	2.6	—	—	—	手づくね	口縁部ヨコナデ、 体部ナデ	ナデアゲ	良好	径0.1cm以下白色 粒子少量	淡橙茶色/淡 橙茶色	塩地編年第2期
S-200 14-H10	第22図-26	京都系土師器/皿	(11.4)	3.4	—	—	—	手づくね	口縁部ヨコナデ、 体部ナデ	口縁部ヨコナデ、 体部ナデ	良好	径0.1cm以下褐色 粒子少量	淡橙茶色/淡 橙茶色	河野G-2類
S-200 14-F10	第22図-27	京都系土師器/皿	(11.2)	3.5	—	—	—	手づくね	口縁部ヨコナデ、 体部ナデ	ナデアゲ	良好	径0.1cm以下白色 褐色粒子少量	淡橙茶色/淡 橙茶色	河野G-2類 遺構間接合(S-108 14-F10)
S-200 14-I10	第22図-28	京都系土師器/皿	14.4	2.7+ α	—	—	—	手づくね	口縁部ヨコナデ、 体部ナデ	ナデアゲ	良好	径0.1cm以下褐色 粒子少量	黑灰色/黑灰色	塩地編年第2期
S-200 14-I10	第22図-29	青磁/碗	—	2.4+ α	—	—	—	口クロ	施釉	施釉	良好	径0.2cm以下白色 黑色粒子少量、 陶質に近い	淡綠黃色/淡 綠黃色	—
S-200 14-F10	第22図-30	青磁(龍泉窯系) /碗	(11.0)	3.3+ α	—	—	—	口クロ	鎌蓮弁文-施釉	施釉	良好	径0.1cm以下白色 粒子少量	淡綠灰色/淡 綠灰色	太宰府龍泉窯系青磁碗II-b 類 太宰府陶磁器出土傾向E期
S-200 14-011	第22図-31	青磁(龍泉窯系) /碗	—	4.9+ α	(5.2)	—	—	口クロ	体部細線蓮弁文、 高台描き線文-施釉	見込み中央「福」 字文スタンプか- 施釉	良好	径0.1cm以下白色 粒子少量	綠黃色/綠黃色	(S-200 P-47) 上田分類B類
S-200 14-I10	第22図-32	青磁/碗	—	4.5+ α	(3.8)	—	—	口クロ	施釉、畳付釉剥ぎ	施釉	良好	径0.1cm以下白色 黑色粒子少量、 陶質に近い	淡綠黃色/淡 綠黃色	2次被熱による釉変
S-200 14-L11	第22図-33	青磁(龍泉窯系) /碗	(13.4)	6.1	—	—	—	口クロ	口縁部下・体部下 半各2条沈線内細線 蓮弁文、体部境1条 界線-施釉、細かい 貴入、気泡	見込み境1条界線、 見込み中央印花文- 施釉、細かい貴入、 気泡	不良	径0.1cm以下白色 粒子少量、陶質に 近い	淡白灰色/淡 白灰色	(S-200 P-33)
S-200	第22図-34	青磁(龍泉窯系) /稜花皿	—	2.8+ α	—	—	—	型づくり	施釉	体部ハラ描き-施 釉	良好	径0.1cm以下白色 粒子少量	綠灰色/綠灰色	湯葉城青磁皿C類
S-200 14-011	第22図-35	青磁(龍泉窯系) /盤か	—	1.9+ α	(11.7)	—	—	口クロ か	ハラ描き文-施 釉、高台内輪状旋 剥ぎ	施釉	良好	径0.1cm以下白色 粒子少量	綠灰色/綠灰色	(S-200 P-46) 遺構間接合(S-200 14-H10)
S-200 14-I10	第22図-36	白磁/坏	5.9	2.8	2.2	—	—	口クロ	施釉-畳付釉ハギ	施釉-見込み輪状 にハギ	良好	径0.1cm以下白色 粒子少量	白灰色/白灰色	—
S-200 14-J11	第22図-37	白磁/坏	6.4	3.0	2.0	—	—	口クロ	施釉-畳付釉ハギ	施釉-見込み輪状 にハギ	良好	径0.1cm以下白色 粒子少量	白灰色/白灰色	(S-200 P-27)
S-200 14-K10	第22図-38	白磁/皿	(11.2)	3.3+ α	—	—	—	口クロ	施釉-口縁端部施 剥ぎ	施釉-口縁端部施 剥ぎ	良好	径0.1cm以下白色 粒子少量	灰白色/灰白色	—
S-200 14-M11	第22図-39	白磁(景德鎮窯系) /皿	13.0	3.2	6.6	—	—	口クロ	施釉、畳付釉剥ぎ	施釉	良好	径0.1cm以下白色 粒子少量	灰白色(やや光 沢あり)/灰白色 (やや光沢あり)	森田分類E群 疊付一部砂粒付着
S-200 14-K11	第22図-40	青白磁/瓶×壺	—	2.4+ α	—	—	—	型づくり	施釉	接合痕、工具ナデ	良好	径0.1cm以下白色 粒子少量	青白色(やや透 明に近い)/ 青白色(やや透 明釉に近い)	瓜形水注の部品片 2次被熱による釉変
S-200 14-I10	第23図-41	青花(景德鎮窯系) /小坏	(6.8)	2.7+ α	—	—	—	口クロ	施釉	口縁部下四方螺 文、体部上半1条界 線-施釉	良好	径0.1cm以下白色 粒子少量	透明釉/透明 釉	—
S-200 14-H11	第23図-42	青花(景德鎮窯系) /小坏	(7.0)	3.2+ α	—	—	—	口クロ	施釉	口縁部下四方螺 文、体部上半1条界 線、見込み2条界 線、見込み文様- 施釉	良好	径0.1cm以下白色 粒子少量	透明釉/透明 釉	—
S-200 14-N11	第23図-43	青花(景德鎮窯系) /碗	(11.8)	4.8+ α	—	—	—	口クロ	口縁部下2条界線内 唐草文、体部上半1 条界線-施釉	口縁部下・見込み 各1条界線内草花 文-施釉	良好	径0.1cm以下白色 粒子少量	透明釉/透明 釉	(S-200 P-31)
S-200 14-G10	第23図-44	青花(景德鎮窯系) /碗	(12.4)	2.7+ α	—	—	—	口クロ	口縁部下2条界線、 体部草花文(蒲公英 か)-施釉	口縁部下1条界線- 施釉	良好	径0.1cm以下白色 粒子少量	透明釉/透明 釉	遺構間接合(S-108 14-G10)
S-200 14-I11	第23図-45	青花(景德鎮窯系) /碗	—	5.4+ α	—	—	—	口クロ	口縁部下1条界線、 体部草花文描き- 施釉	口縁部下四方螺 文、体部上半1条界 線-施釉	良好	径0.1cm以下白色 粒子少量	透明釉/透明 釉	—
S-200 14-F10	第23図-46	青花(景德鎮窯系) /碗	—	2.5+ α	4.2	—	—	口クロ	体部文様、体部下 半~高台3条界線、 高台内字款状 略字旋-施釉、畳 付釉剥ぎ	見込み2条界線、 見込み内雲文-施 釉	良好	径0.1cm以下白色 粒子少量	透明釉/透明 釉	小野分類染付碗E群
S-200 14-H10	第23図-47	青花(景德鎮窯系) /碗	—	2.7+ α	4.7	—	—	口クロ	体部草花文?高台2 条界線、高台内 字品臣器-施釉、 畳付釉剥ぎ	見込み2条界線内 文様(文人・鹿)- 施釉、畳付釉剥 ぎ	良好	径0.1cm以下白色 粒子少量	透明釉/透明 釉	小野分類染付碗E群 遺構間接合(S-174 14-H11)

表8 遺物観察表⑥

遺構番号	図版番号	種類/器種	法量(cm) ()は復元					成形	調整・装飾		焼成	胎土(石材)	色調・釉調外面/内面	備考
			口径/最大長	器高/最大幅	底径/最大厚	孔径	重量		外面	内面				
S-200 14-M11	第23図-48	青花(景德鎮窯系)/碗	10.2	5.2	3.7	—	—	口クロ	口縁部下1条界線、 体部文様(松・竹・ 梅・月)、高台壇3 条界線、高台内2条 界線内「官府公用」 一施釉、蓋付 釉剥ぎ	口縁部下1条界線、 見込み2条界線、 見込み内「雲芝」 一施釉	良好	径0.1cm以下白色 粒子少量	透明釉/透明 釉	小野分類染付碗E群
S-200 14-F10	第23図-49	五彩(景德鎮窯系)/碗	—	1.8+ α	—	—	—	口クロ	施釉一絵付け(赤、 緑、蓮弁文か・格 子文か・界線)	施釉一絵付け(赤、 緑、見込み2条界線)	良好	径0.1cm以下白色 粒子少量	透明釉/透明 釉	(S-200 P-45)
S-200 14-L10	第23図-50	五彩(景德鎮窯系)/皿	—	1.2+ α	(6.0)	—	—	口クロ	高台内2条界線内 「天」(下)「太 (平)」一施釉、 蓋付釉剥ぎ、砂粒付 着	施釉一絵付け(赤、 緑?草花文か)	良好	径0.1cm以下白色 粒子少量	黄褐色/透明 釉	(S-200 P-43)
S-200 14-G10	第23図-51	青花(景德鎮窯系)/合子	(9.6)	2.5+ α	—	—	—	口クロ	口縁部下2条界線、 体部文様一施釉、 口縁端部~受部釉 剥ぎ	施釉	良好	径0.1cm以下白色 粒子少量	透明釉/透明 釉	—
S-200 14-M11	第23図-52	景德鎮窯系胸磁器/綠地金福字 棲花皿	—	1.3+ α	6.4	—	—	型づくり	施釉一高台1条界線 ほか金彩・蓋付露 胎、一部釉だれ	施釉一見込み2条界 線内金彩・塗付付 着物	良好	径0.1cm以下白色 粒子少量	浅緑黄色・高 台内浅黄茶色 /浅緑黄色	(S-200 P-42)
S-200 14-K11	第23図-53	青花(景德鎮窯系)/皿	(10.9)	2.1	(6.2)	—	—	口クロ	口縁部下2条界線内 文様帶、体部2条 界線内折枝一施 釉、蓋付釉剥ぎ、砂 付着	口縁部下2条界線 内・見込み2条界 線内文様帶一施釉	良好	径0.1cm以下白色 粒子少量	透明釉/透明 釉	—
S-200 14-N11	第23図-54	青花(景德鎮窯系)/皿	(9.8)	2.4	(5.6)	—	—	口クロ	高台境1条界線一施 釉、蓋付釉剥ぎ	見込み2条界線内 蛟龍文一施釉	良好	径0.1cm以下白色 粒子少量	透明釉/透明 釉	小野分類染付皿E群
S-200 14-K11	第23図-55	青花(景德鎮窯系)/皿	(10.0)	2.4	(5.8)	—	—	口クロ	高台内「正」一施 釉、蓋付釉剥ぎ、砂 が付着	見込み2条界線内 「壽」一施釉、蓋 付釉ケズトリ	良好	径0.1cm以下白色 粒子少量	透明釉/透明 釉	(S-200 P-40) 小野分類染付皿E群
S-200 14-G10	第23図-56	青花(景德鎮窯系)/皿	—	3.0+ α	(10.1)	—	—	型づくり	体部上半2条界線、 体部輪状沈線・高 台文様帶一施釉、 蓋付釉剥ぎ	見込み2条界線内 文様一施釉	良好	径0.1cm以下白色 粒子少量	透明釉/透明 釉	小野分類染付皿F群 2次被熱による釉変 遺構間接合(S-108 14-G10)
S-200 14-I10	第23図-57	青花(景德鎮窯系)/皿	—	1.5+ α	6.2	—	—	口クロ	高台内字款状 「福」一施釉、蓋 付釉剥ぎ	見込み2条界線内 蛟龍文一施釉	良好	径0.1cm以下白色 粒子少量	透明釉/透明 釉	小野分類染付皿E群
S-200 14-F11	第23図-58	青花(漳州窯系)/皿	(10.4)	2.5	(4.8)	—	—	口クロ	口縁部下2条界線内 文様帶、体部下半1 条界線一施釉、体 部下半露胎	口縁部下・見込み 境各1条界線一施 釉、見込み内環狀 に釉剥ぎ	良好	径0.1cm以下白色 粒子少量	透明釉/透明 釉	基筍底内・植物繊維が付着 小野分類染付皿C群
S-200 14-J11	第23図-59	青花(景德鎮窯系)/皿	(10.0)	2.6	(2.6)	—	—	口クロ	口縁部下2条界線内 波溝文帶、体部2 条界線内芭蕉葉文一 施釉、底部釉ケズ リ	口縁部下1条界線、 見込み2条界線、見 込み内挖花一施釉	良好	径0.1cm以下白色 粒子少量	透明釉/透明 釉	小野分類染付皿C群 2次被熱による釉変 遺構間接合(S-107 14-111)
S-200 14-G10	第23図-60	青花(景德鎮窯系)/碗	(10.6)	2.9	(4.2)	—	—	口クロ	口縁部下2条界線内 波溝文帶、体部上 半1条界線、体部芭 蕉葉文、見込み2条 界線一施釉、蓋付 釉ケズリ	口縁部下・見込み 境各2条界線、体部 下半草花文?見込 み花弁?一施釉	良好	径0.1cm以下白色 粒子少量	透明釉/透明 釉	小野分類染付皿C群
S-200 14-K10	第23図-61	青花(景德鎮窯系)/皿	—	2.8+ α	(10.5)	—	—	口クロ	体部唐草文、高台 2条界線、高台内 字款状一施釉、蓋 付釉剥ぎ、砂粒付 着	見込み2条界線、 見込み内文様(鳳 凰・雲文・日字・ 橋か)一施釉	良好	径0.1cm以下白色 粒子少量	透明釉/透明 釉	(S-200 P-30) 小野分類染付皿F群
S-200 14-G11	第23図-62	青花(景德鎮窯系)/皿	—	1.9+ α	(15.0)	—	—	口クロ	高台2条界線内半 円状文様帶、高台内 字款状「富貴佳 器」一施釉、蓋付 釉剥ぎ	見込み2条界線内 波溝文帶、見込み 1条界線内文様(果 実文・蝶)一施釉	良好	径0.1cm以下白色 粒子少量	透明釉/透明 釉	2次被熱による釉変 遺構間接合(S-177 14-G11 -S-178)
S-200	第24図-63	中国南方産綠釉 单彩×三彩陶器 /鳥形水注か	4.5+ α	3.0+ α	0.2~0.5	—	—	型づくり	型押し、施釉	ナデ	良好	径0.1cm以下白色 粒子少量	綠黄色/淡黄 茶色	—
S-200 14-G11	第24図-64	中国南方産褐釉 陶器/壺	—	4.6+ α	—	—	—	粘土紐 積上げ	龍頭部貼り付け、 ヘラ描き一施釉	体部施釉、露胎	良好	径0.3cm以下白 色・黒色粒子少量	暗緑褐色/暗 緑褐色・灰褐色 (露胎部)	遺構間接合(S-177 14-H10)
S-200 14-G10	第24図-65	中国南方産褐釉 陶器/壺	—	4.1+ α	—	—	—	粘土紐 積上げ	肩部施釉、横耳剥 離痕	施釉	良好	径0.1cm以下白 色・褐色粒子少量	黒褐色/黒褐 色	—
S-200 14-H11	第24図-66	中国南方産褐釉 陶器/壺	—	5.7+ α	—	—	—	粘土紐 積上げ	施釉	露胎、一部釉だれ	良好	径0.2cm以下白 色・白色粒子少量	褐茶色/茶灰 色	焼影れあり
S-200 14-L11	第24図-67	产地不明陶器/ 壺×壺	—	6.7+ α	—	—	—	粘土紐 積上げ	施釉	施釉	良好	径0.1cm以下白 色・白色粒子少量	暗緑褐色/暗 褐茶色	—
S-200 14-F11	第24図-68	中国南方産褐釉 陶器/壺	—	13.5+ α	—	—	—	粘土紐 積上げ	体部施釉、底部露 胎	施釉	良好	径0.1cm以下黑 色・褐色・白色粒 子少量	暗褐茶色/淡 茶色	遺構間接合(S-177)
S-200 14-H10	第24図-69	中国南方産褐釉 陶器/壺	—	5.1+ α	(12.0)	—	—	粘土紐 積上げ	体部下半施釉、底 部露胎	施釉	良好	径0.1cm以下白 色・褐色粒子少量	黒褐色・露胎 部淡灰黄色/茶褐色	底部重ね焼き融着痕
S-200 14-H10	第24図-70	中国南方産褐釉 陶器/壺	—	9.8+ α	(27.6)	—	—	粘土紐 積上げ	体部施釉、底部露 胎	施釉	良好	径0.1cm以下黑 色・褐色・白色粒 子少量	暗褐茶色/淡 茶色	遺構間接合(S-177 14-H11)
S-200 14-F10	第24図-71	朝鮮王朝産灰青 釉陶器/瓶	(5.6)	1.7+ α	—	—	—	粘土紐 積上げ	ヨコナデ	ヨコナデ	良好	径0.1cm以下白 色・褐色粒子少量	綠黒色/綠黑色	船徳利
S-200 14-F10	第24図-72	朝鮮王朝産灰青 釉陶器/碗	(14.9)	5.0	(4.7)	—	—	口クロ	施釉	施釉	良好	径0.1cm以下黑 色・白色粒子少量	灰綠色/灰綠 色(光沢アリ)	2次被熱痕 遺構間接合(S-174)

表9 遺物観察表⑦

遺構番号	図版番号	種類/器種	法量(cm) ()は復元					成形	調整・装飾		焼成	胎土(石材)	色調・釉調 外面/内面	備考
			口径/最大長	器高/最大幅	底径/最大厚	孔径	重量		外面	内面				
S-200 14-H10	第24図-73	タイ産メナム/ イ窯系焼締陶器 /四耳壺	(18.4)	12.5+ α	—	—	—	粘土紐 積上げ	肩部1条凸線・4条 凹線・横耳貼り付 け	粘土紐接合痕、ナ デ	不良	径0.2cm以下白 色・褐色・透明・ 黒色粒子少量	淡橙茶色/淡 橙茶色	高畠分類2類 遺構間接合(S-107 14-J11 S-175 14-H10)
S-200 14-K10	第24図-74	タイ産メナム/ イ窯系焼締陶器 /四耳壺	—	8.3+ α	(21.5)	—	—	粘土紐 積上げ	体部ヘラケズリ、 底部ナデ	粘土紐接合痕、ナ デ	不良	径0.2cm以下白 色・褐色・透明・ 黒色粒子少量	淡橙茶色/淡 橙茶色	遺構間接合(S-107 14-J15 14-H10)
S-200 14-J10	第24図-75	タイ産メナム/ イ窯系焼締陶器 /双耳瓶	—	7.5+ α	—	—	—	粘土紐 積上げ	ナデ、肩部に縫耳 貼り付け	ナデ	良好	径0.1cm以下白 色・褐色粒子少量	暗赤茶色/暗 赤茶色	—
S-200 14-J10	第24図-76	瀬戸・美濃産陶 器/卸皿	—	2.9+ α	—	—	—	ロクロ	施釉	卸目一施釉	良好	径0.1cm以下褐 色・白色粒子少量	綠黄色/綠黃 色	—
S-200 14-110	第24図-77	瀬戸・美濃産陶 器/天目碗	(8.8)	4.1+ α	—	—	—	ロクロ	口縁~体部施釉、 体部下半露胎	口縁~体部施釉	良好	径0.1cm以下褐 色粒子少量	黑褐釉/黑褐 釉	藤沢編年大窯第3~4段階
S-200 14-L11	第24図-78	瀬戸・美濃産陶 器/天目碗	12.4	5.1+ α	—	—	—	ロクロ	口縁~体部施釉、 体部下半露胎	口縁~体部施釉	良好	径0.1cm以下白色 粒子少量	黑褐色/黑褐 色	藤沢編年大窯第3~4段階
S-200 14-J11	第24図-79	備前焼/壺	10.2	3.0	4.9	—	—	ロクロ	口縁~体部ヨコナ デ、底部回転糸切 り離し	口縁~体部ヨコナ デ、見込み「」範 描き	良好	径0.1cm以下白色 粒子少量	赤茶色/赤茶 色	(S-200 P-26)
S-200 14-K11	第24図-80	備前焼/鉢×高 台付皿	15.2	4.9	7.6	—	—	ロクロ	口縁~体部ヨコナ デ、底部回転糸切 り離し後高台付 り付け、畳付目痕	口縁~体部ヨコナ デ、見込みナデ・ 目痕	良好	径0.2cm以下褐 色・白色粒子少量	赤茶色/赤茶 色	(S-200 P-29) 遺構間接合(S-200 14-K10)
S-200 14-L11	第24図-81	備前焼/鉢	—	5.4+ α	—	—	—	粘土紐 積上げ か	ナデ	ナデ	良好	径0.1cm以下白 色・黑色粒子少量	赤茶色/赤茶 色	—
S-200 14-N11	第24図-82	備前焼/平鉢	(20.0)	4.1	(11.8)	—	—	粘土紐 積上げ	口縁部ヨコナデ、 体部~底部ナデ	ヨコナデ	良好	径0.3cm以下白色 粒子、径0.2cm以 下黑色粒子少量	赤茶色/赤茶 色	—
S-200 14-L10	第24図-83	備前焼/瓶	—	6.0+ α	—	—	—	粘土紐 積上げ	ナデ、「」ヘラ 記号、自然釉(黄緑 色)	ナデ	良好	径0.1cm以下白 色・黑色粒子少量	暗赤茶色/暗 赤茶色	(S-200 P-23)
S-200 14-H10	第24図-84	備前焼/筒形容 器	—	2.7+ α	(7.6)	—	—	粘土紐 積上げ	ナデ	ナデ	良好	径0.2cm以下白色 粒子少量	赤茶色/赤茶 色	茶入れか
S-200 14-K11	第24図-85	備前焼/小壺	—	2.4+ α	(5.8)	—	—	ロクロ か	底部回転糸切り離 し	ナデ	良好	径0.1cm以下白 色・黒色・褐色粒 子少量	赤茶色/赤茶 色	—
S-200 14-K11	第25図-86	備前焼/小壺	(3.5)	6.0+ α	—	—	—	粘土紐 積上げ か	口縁~体部ヨコナ デ、自然釉(黄緑 色)	ヨコナデ	良好	径0.1cm以下白 色・黒色・褐色粒 子少量	赤茶色/赤茶 色	遺構間接合(S-136・表探)
S-200 14-L10	第25図-87	備前焼/瓶	5.9	25.9	(9.8)	—	—	粘土紐 積上げ	口縁~体部上半ナ デ、体部下半工具 ナデ、底部ナデ、 自然釉(黄緑色)	ナデ	良好	径0.2cm以下白 色・黑色粒子少量	赤茶色/赤茶 色	遺構間接合(S-120・S-139・ S-140 14-L11)
S-200	第25図-88	備前焼/水屋壺	—	11.8+ α	—	—	—	粘土紐 積上げ	体部ヨコナデ、 体部輪状の耳貼り付 け、自然釉(黄緑色)	ナデ	良好	径0.3cm以下白 色・褐色粒子少量	暗赤茶色/暗 赤茶色	北野双耳B2類 遺構間接合(S-174・S-177)
S-200 14-L11	第25図-89	備前焼/三耳壺	11.0	22.0	11.0	—	—	粘土紐 積上げ	口縁~体部上半ヨ コナデ、肩部横耳 貼り付け、「」 ラ号記号部下半 ~底部ナデ、自然 釉(黄緑色)、粘土 紐接合痕	ヨコナデ	良好	径0.3cm以下白 色・黑色・褐色粒 子少量	赤茶色/赤茶 色	湯築城備前焼C-2類 遺構間接合(SX001 14-J10・ SX107 14-J11 P-13・SX107 14-J11 P-15・SX107 14-J11 P-15・SX107 14-J11・SX107 14-111・S-113 14-J11)
S-200 14-H10	第25図-90	備前焼/水屋壺	(25.0)	9.5+ α	—	—	—	粘土紐 積上げ	ヨコナデ	ヨコナデ	良好	径1.0cm以下白色 粒子、径0.1cm以 下褐色粒子少量	赤茶色/赤茶 色	湯築城備前焼B-2類
S-200 14-N11	第25図-91	備前焼/水屋壺	(28.4)	30.8	18.8	—	—	粘土紐 積上げ	口縁部ヨコナデ、 体部ナデ、自然釉 (黄緑色)、体部下 半~底部工具ナ デ、底部「」字状 ラ号記号	ヨコナデ	良好	径0.4cm以下白 色・褐色・黑色粒 子少量	褐灰色/褐灰 色	湯築城備前焼B-2類 遺構間接合(S-200 14-M11・ S-200 14-011)
S-200 14-H11	第26図-92	備前焼/鉢	(17.6)	7.3	10.0	—	—	粘土紐 積上げ	口縁~体部ヨコナ デ、体部下半力キ ×底部ナデ、窯印	ヨコナデ	良好	径0.3cm以下白色 粒子少量	赤茶色/赤茶 色	遺構間接合(S-177・S-178・ S-200 14-G11・S-200 14- H10)
S-200 14-I11	第26図-93	備前焼/鉢	(27.2)	13.9	10.8	—	—	粘土紐 積上げ	口縁~体部ヨコナ デ、底部ナデ	ヨコナデ	良好	径0.3cm以下白 色・褐色粒子少量	暗赤茶色/暗 赤茶色	遺構間接合(S-174・S-177)
S-200 14-G11	第26図-94	備前焼/鉢	(27.4)	12.9	(13.6)	—	—	粘土紐 積上げ	口縁~体部ヨコナ デ、体部下半工具 ナデ、底部ナデ「吉」 窓描き、重ね焼き 痕跡	ヨコナデ	良好	径0.7cm以下褐色 粒子、径0.1cm以 下白色・黑色粒子 少量	暗赤茶色/暗 赤茶色	遺構間接合(S-174・S-175・ S-177・S-178・S-200 14- H11)
S-200 14-H11	第26図-95	備前焼/擂鉢	(31.4)	13.6	(12.4)	—	—	粘土紐 積上げ	口縁部ヨコナデ、 体部~底部ナデ	ヨコナデ	良好	径0.3cm以下白 色・褐色粒子少量	褐茶色/褐茶 色	乘岡編年近世1期b 遺構間接合(S-177・S-175・ S-200 14-H11)
S-200 14-M11	第26図-96	備前焼/擂鉢	21.5	9.5	(11.2)	—	—	粘土紐 積上げ	口縁帶2ヶ所縱方向 の窓描きあるいは 横描き痕跡、口縁 部ヨコナデ、体部 ~底部ナデ	ヨコナデ	良好	径0.7cm以下褐色 粒子、径0.2cm以 下白色粒子少量	暗赤茶色/暗 赤茶色	乘岡編年近世1期b
S-200 14-L10	第26図-97	備前焼/擂鉢	28.0	10.0	11.8	—	—	粘土紐 積上げ	口縁帶2ヶ所縱方向 の窓描きあるいは 横描き痕跡、口縁 部ヨコナデ、体部 ~底部ナデ	ヨコナデ	良好	径0.5cm以下白色 粒子、径0.2cm以 下褐色粒子少量	灰褐色/灰褐 色	乘岡編年近世1期b 遺構間接合(S-120 14-L11・ S-140 14-L11・S-136・S- 200 14-K10)
S-200 14-K11	第26図-98	常滑産焼締陶器 /壺	—	5.8+ α	—	—	—	粘土紐 積上げ	口縁~頸部ヨコナ デ	ヨコナデ	良好	径0.3cm以下白色 粒子少量	茶褐色/茶褐 色	—
S-200 14-I11	第26図-99	備前焼か/壺	—	8.2+ α	—	—	—	粘土紐 積上げ	ナデ	粘土紐接合痕、ナ デ	不良	径0.2cm以下白色 粒子少量	淡茶褐色/黑 茶色/淡茶褐色 ・黑茶色	—

表 10 遺物観察表⑧

遺構番号	図版番号	種類／器種	法量(cm) ()は復元					成形	調整・装飾		焼成	胎土(石材)	色調・釉調外面／内面	備考
			口径／最大長	器高／最大幅	底径／最大厚	孔径	重量		外面	内面				
S-200 14-H10	第26図-100	備前焼／水屋壺	—	10.0+ α	—	—	—	粘土紐 積上げ	体部ヨコナデ、体部輪状の耳、1条凸 帶貼り付け、自然 釉(黄緑色)	ナデ	良好	径0.3cm以下白 色・褐色・黒色粒 子少量	暗赤茶色／暗 赤茶色	北野双耳B2類
S-200 14-111	第26図-101	備前焼／大壺	—	7.9+ α	—	—	—	粘土紐 積上げ	「武石入」か・自 然釉	ヨコナデ、接合痕	良好	径0.5cm以下白 色・黒色粒 子少量	赤茶色／赤茶 色	遺構間接合(S-174・S-175)
S-200 14-H10	第26図-102	備前焼／鉢	(13.6)	2.9+ α	—	—	—	粘土紐 積上げ	ヨコナデ	ヨコナデ	良好	径0.4cm以下白 色・黒色粒 子少量	暗赤茶色／暗 赤茶色	茶入れか
S-200 14-F11	第27図-103	備前焼／大壺	57.0	27.9+ α	—	—	—	粘土紐 積上げ	口縁部ヨコナデ、 体部工具ナデ、肩 部「二石入」・ 「田」へラ描き、 点状自然釉(黄緑 色)	口縁部ヨコナデ、 体部工具ナデ+ナ デ・粘土紐接合痕	良好	径3.0cm以下白 色・褐色・黒色粒 子少量	暗赤茶色／赤 茶色	乗岡編年近世1期b 遺構間接合(S-174・P-7・S- 174 P-10・S-174 P-13・S- 174 14-F11 P-2・S-174 P- 11・S-178・S-200 14-H11)
S-200 14-H10	第27図-104	備前焼／大壺	57.0	34.4+ α	—	—	—	粘土紐 積上げ	口縁部ヨコナデ、 体部工具ナデ、肩 部「二石入」・ 「人」へラ描き	口縁部ヨコナデ、 体部工具ナデ+ナ デ・粘土紐接合痕、當 て具痕	良好	径1.0cm以下白 色・褐色・黒色粒 子少量	赤茶色／赤茶 色	乗岡編年近世1期b 遺構間接合(S-174 14-F11 P-5・S-177・S-178・S-200 14-H11)
S-200 14-F11	第27図-105	備前焼／大壺	—	39.0+ α	39.4	—	—	粘土紐 積上げ	体部～底部工具ナ デ・粘土紐接合痕	体部工具ナデ・粘 土紐接合痕、見込 みナデ	良好	径1.5cm以下白 色粒子、径0.5cm以 下褐色・黒色粒 子少量	暗赤茶色／暗 赤茶色	乗岡編年近世1期b 遺構間接合(S-174・S-178)
S-200 14-F11	第28図-106	備前焼／大壺	54.0	94.8	38.0	—	—	粘土紐 積上げ	体部～底部工具ナ デ	体部工具ナデ+ナ デ・粘土紐接合痕、見 込みナデ	良好	径2.0cm以下黒色 粒子、径0.1cm以 下白色・黒色粒 子少量	赤茶色／赤茶 色	園上復元 乗岡編年近世1期b 遺構間接合(S-174・S-177・ S-178)
S-200 14-K10	第29図-107	瓦質土器／壺	—	3.1+ α	—	—	—	粘土紐 積上げ	付着物のため調整 不明瞭	口縁部ヨコナデ、 体部工具ナデ	良好	径0.1cm以下白 色・黃金光沢粒 子少量	橙茶色／橙茶 色	—
S-200 14-J11	第29図-108	瓦質土器／火鉢	—	4.6+ α	—	—	—	粘土紐 積上げ	口縁部下2条突帯内 「七宝文」スタン プ	ナデ	良好	径0.1cm以下白 色粒子少量	黒灰色／黒灰色	—
S-200 14-H10	第29図-109	瓦質土器／火鉢	—	6.8+ α	—	—	—	粘土紐 積上げ	口縁部下2条突帯間 雷文スタンプ、2条 突帯下梅花文スタン プ	ナデ	良好	径0.1cm以下白 色・褐色粒子少量	暗灰茶色／暗 灰茶色	—
S-200 14-H10	第29図-110	瓦質土器／火鉢	—	4.6+ α	—	—	—	粘土紐 積上げ	1条突帯貼り付け・ 車輪文スタンプ	工具ナデ	良好	径0.1cm以下白 色粒子少量	灰青色／灰青 色	—
S-200 14-L11	第29図-111	瓦質土器／脚付 火鉢	(13.0)	6.0	13.8	—	—	粘土紐 積上げ	ミガキ、体部2条突 帯貼り付け、双頭 厥手飛雲文スタン プ、底部ナデ	口縁部～体部工具ナ デ	良好	径0.1cm以下褐 色・白色・黒色光 沢・黃金光沢粒 子少量	橙茶色／橙茶 色	—
S-200 14-M11	第29図-112	瓦質土器／鉢	(30.4)	10.2+ α	—	—	—	粘土紐 積上げ	ミガキ	付着物のため調整 不明瞭	良好	径0.1cm以下白 色粒子少量	淡橙茶色／淡 橙茶色	(S-200 P-16)
S-200 14-G11	第29図-113	瓦質土器／鉢	28.4	10.5	20.8	—	—	粘土紐 積上げ	口縁部下斜方向の 工具ナデ、口縁部 ミガキ、底部ナデ・離 れ砂痕	口縁部下横方向の 工具ナデ、体部～見 込ミガキ	良好	径0.5cm以下白 色粒子、径0.1cm以 下黃金光沢・褐色 粒子少量	橙茶色／橙茶 色	遺構間接合(擾乱・S-200 14- K11)
S-200 14-G11	第29図-114	瓦質土器／火鉢	(25.6)	6.4+ α	—	—	—	粘土紐 積上げ	ミガキ	工具ナデ	良好	径0.1cm以下白 色粒子少量	黒灰色／黒灰色	—
S-200 14-M11	第29図-115	瓦質土器／鉢	39.0	12.3+ α	39.6	—	—	粘土紐 積上げ	ミガキ、底部ナ デ・離れ砂痕	ミガキ	良好	径0.2cm以下白 色・褐色・黃金光 沢粒子少量	橙茶色／橙茶 色	(S-200 P-17) 三脚付き
S-200 14-M10	第29図-116	瓦質土器／火鉢	(40.8)	16.7	(38.0)	—	—	粘土紐 積上げ	ミガキ、底部ナ デ・離れ砂痕	ミガキ	良好	径0.1cm以下白 色・褐色・黃金光 沢粒子少量	橙茶色／橙茶 色	三脚付き
S-200 14-H11	第29図-117	瓦質土器／風炉	(30.5)	22.7	(23.2)	—	—	粘土紐 積上げ	ミガキ	ミガキ	良好	径0.2cm以下白 色・褐色・黃金光 沢粒子少量	橙茶色／橙茶 色	三脚付き 遺構間接合 (S-177 14-G11・S-177 14- G10・S-200 14-G11)
S-200 14-M10	第29図-118	瓦質土器／火鉢	33.7	27.3	29.0	—	—	粘土紐 積上げ	口縁部下2条突帯間 双頭厥手飛雲文stan プ、体部ミガキ、底部 2条突帯間双頭厥手 飛雲文スタンプ、底 部ナデ・離れ砂痕	口縁部～体部ミガ キ・工具ナデ・体 部下半粘土紐接合 痕、見込み工具ナ デ	良好	径0.1cm以下白 色・褐色・黃金光 沢粒子少量	橙茶色／橙茶 色	三脚付き 遺構間接合(S-120 14-L11・ SX001 14-M10・SX107)
S-200 14-N11	第29図-119	瓦質土器／火鉢	41.4	34.6+ α	34.8	—	—	粘土紐 積上げ	口縁部下2条突帯間 雷文スタンプ、体部 ミガキ、底部2条 突帯間双頭厥手 飛雲文スタンプ、底 部ナデ・離れ砂痕	ミガキ	良好	径0.1cm以下白 色・褐色・黃金光 沢粒子少量	橙茶色／橙茶 色	三脚付き 遺構間接合(SX107 14-J11・ S-120 14-L11・S-200 14- K11・S-120 14-O11)
S-200 14-H11	第30図-120	土師質土器／燭 台	8.2	7.8	6.9	—	—	手づく ね	台部ナデ、底部ナ デ	見込みナデ、中央 穿孔貫通せず	良好	径0.1cm以下白 色粒子、径0.3cm以 下褐色粒子少量	淡橙茶色／淡 橙茶色	田中分類土師器燭台B類
S-200 14-N11	第30図-121	土製品／不明	(7.6)	3.8	(7.6)	—	—	手づく ね	ナデ	ナデ	良好	径0.3cm以下黒 色光沢・透明・白 色粒子少量	茶褐色／茶褐色	用途不明
S-200 14-M11	第30図-122	土製品／埴 錐	(10.8)	5.4	—	—	—	手づく ね	ナデ	鉛滓が多量に付着	良好	径0.1cm以下白 色・褐色粒子少量	灰橙色／黒茶 色	—
S-200 14-K11	第30図-123	土製品／管状土 錐	6.1+ α	1.8	0.5	0.5	—	手づく ね	ナデ	—	良好	径0.2cm以下白 色・黒色光沢粒子 少量	暗灰茶色	田中分類管状土錐A類
S-200 14-I10	第30図-124	土師質土器／鍋	—	4.5+ α	—	—	—	粘土紐 積上げ	ナデ	工具ナデ	良好	径0.2cm以下白 色・黒色光沢粒子 少量	橙茶色	—
S-200 14-N11	第30図-125	防長系瓦質土器 ／鍋	(32.0)	6.3+ α	—	—	—	粘土紐 積上げ	口縁部ヨコナデ、 体部ミガキ	口縁部ヨコナデ、 体部ミガキ	良好	径0.2cm以下白 色・褐色粒子少量	黒灰色／黒灰色	—

表 11 遺物観察表⑨

遺構番号	図版番号	種類/器種	法量(cm) ()は復元					成形	調整・装飾		焼成	胎土(石材)	色調・釉調外面/内面	備考
			口径/最大長	器高/最大幅	底径/最大厚	孔径	重量		外面	内面				
S-200 14-N11	第30図-126	防長系瓦質土器 ／足鍋	(25.2)	13.0+ α	—	—	—	粘土紐 積上げ	口縁部ヨコナデ、 体部上半工具ナデ、 体部下半格子 目叩き	口縁部ヨコナデ、 体部工具ナデ	良好	径0.1cm以下白色 粒子少量	灰黒色／灰黒色	—
S-200 14-N11	第30図-127	東播系須恵器 ／壺	(32.0)	7.8+ α	—	—	—	粘土紐 積上げ	口縁～頸部ヨコナ デ、肩部叩き目	ナデ	良好	径0.2cm以下白色 粒子少量	灰青色／灰青色	荻野編年IV期
S-200 14-N11	第30図-128	瓦質土器／壺	(30.6)	5.7+ α	—	—	—	粘土紐 積上げ	口縁～頸部ヨコナ デ、肩部叩き目	器面剥離のため調 整不明瞭	良好	径0.1cm以下白色 粒子少量	黒灰色／黒灰色	—
S-200 14-N11	第31図-129	瓦／軒丸瓦	12.3+ α	10.6+ α	2.0	—	—	タタキ	瓦当表面左巻き三 巴文・残存珠文・ 圈線・外縁ミガ キ、凸面ナデ	瓦当裏面ナデ、凹 面コビキA痕跡・布 目痕・ナデ・吊り 紐痕	良好	径0.5cm以下白色 粒子、径0.1cm以 下褐色粒子少量	凸面 灰青色／ 凹面 灰青色	海部郡産
S-200 14-J11	第31図-130	瓦／軒丸瓦	3.0+ α	7.5+ α	2.0	—	—	タタキ	瓦当表面左巻き三 巴文・残存珠文・ 圈線・外縁ミガ キ、凸面ナデ	瓦当裏面ナデ	良好	径0.2cm以下白色 粒子少量	凸面 灰青色／ 凹面 灰青色	海部郡産
S-200 14-K11	第31図-131	瓦／丸瓦	29.6	12.4	2.0	—	—	タタキ	凸面紐目タタキ～ 狹端線～連結面横 方向のナデ、広端 横方向のナデ、筒 部縱方向のナデ	凹面コビキA痕跡・ 布目痕・ナデ	良好	径1.5cm以下白色 粒子、径0.1cm以 下黒色粒子少量	凸面 灰茶色／ 凹面 灰茶色	海部郡産
S-200 14-K11	第31図-132	瓦／丸瓦	28.8	14.0	2.4	—	—	タタキ	凸面狹端線～連結 面横方向のナデ、筒 部～広端縦方向 のナデ	凹面布目痕・ナ デ・内叩き痕か ノ	良好	径0.2cm以下褐色 粒子少量	凸面 黑茶色／ 凹面 黑茶色	(S-200 P-28)
S-200 14-K11	第31図-133	瓦／丸瓦	29.6	9.8+ α	2.0	—	—	タタキ	凸面紐目タタキ～ 狹端線～連結面横 方向のナデ、広端 横方向のナデ、筒 部縱方向のナデ	凹面コビキA痕跡・ 布目痕・ナデ	良好	径0.7cm以下白 色・褐色粒子少量	凸面 灰茶色／ 凹面 淡灰茶色	海部郡産
S-200 14-J11	第32図-134	瓦／軒平瓦	14.0	7.0	2.2	—	—	タタキ	瓦当表面菱形唐草 文・離れ砂痕・外 縁ミガキか、凹面 ナデ・離れ砂痕	額凸～裏面ヨコナ デ・接合痕、凹面 ナデ・離れ砂痕	良好	径0.2cm以下褐色 粒子少量	凹面 暗灰青色／ 凸面 暗灰青色	—
S-200 14-H11	第32図-135	瓦／軒平瓦	17.8+ α	7.4	2.0	—	—	タタキ	瓦当表面菱形唐草 文・離れ砂痕・外 縁ミガキか、凹面 ナデ・離れ砂痕	額凸～裏面ヨコナ デ・接合痕、凹面 ナデ・離れ砂痕	良好	径0.2cm以下褐色 粒子少量	凹面 暗灰青色／ 凸面 暗灰青色	—
S-200 14-H11	第32図-136	瓦／軒平瓦	15.8	17.9	2.6	—	—	タタキ	瓦当表面蓮華唐草 文・外縁ナデ・面 広端部幅2cm程度 ヨコナデによる 面取り・ナデ	額凸～裏面ヨコナ デ・面広端部幅2cm程度 ヨコナデによる 面取り・ナデ	良好	径1.0cm以下白色 粒子少量	凹面 青灰色／ 凸面 青灰色	(S-200 P-7) 大型石美粒→海部郡産
S-200 14-G10	第33図-137	瓦／平瓦	15.3	21.5	2.2	—	—	タタキ	凹面ナデ	凸面ナデ	良好	径0.1cm以下白 色・透明粒子少量	凹面 暗茶灰色／ 凸面 暗茶灰色	遺構間接合(S-108 14-G10)
S-200 14-H11	第33図-138	道具瓦／埴	20.7	14.4	3.3	—	—	タタキか	上面離れ砂痕・ナ デ	下面ナデ	良好	径0.1cm以下白色 粒子少量	上面 灰青色／ 下面 灰青色	—
S-200 14-L11	第33図-139	石製品／スタン プか	7.0+ α	4.5+ α	1.4+ α	—	—	ケズリ	表面草花文か、縦 線・横線・陽刻、側 面ミガキ	裏面2条溝、紐孔痕 か	—	滑石	綠灰色	—
S-200 14-H11	第33図-140	石製品／硯	4.5+ α	3.4	0.6	—	—	ケズリ	硯陰・硯側研ぎ	硯面研ぎ	—	真岩×粘板岩	綠灰色	—
S-200 14-K11	第33図-141	石製品／硯	10.0+ α	1.0	3.0	—	—	ケズリ	硯陰・硯側研ぎ	硯面研ぎ	—	結晶片岩	灰青色	—
S-200 14-H10	第33図-142	石製品／脚付硯	12.7	6.6	2.2	—	—	ケズリ	硯陰・硯側研ぎ	硯面研ぎ	—	輝綠凝灰岩	橙灰色	硯陰墨痕・硯陰線刻
S-200 14-N10	第33図-143	石製品／研石	11.8+ α	5.2	2.0	—	—	ミガキ	—	—	良好	結晶片岩	綠灰色	—
S-200 14-K11	第34図-144	石製品／粉挽き 臼・上臼	—	20.3+ α	8.4	供5.0 ×5.5 + α	—	ケズリ	側面ミガキ、臼面 磨耗、芯棒受け 部・幅0.5~1.2cm 残存主溝3条・副溝 3条	上縁部ミガキ、窪 みケズリ、供給口	—	安山岩	暗灰茶色	(S-200 P-3)
S-200 14-M11	第34図-145	石製品／粉挽き 臼・上臼	—	15.0+ α	6.0	芯0.3 + α 供5.0	—	ケズリ	側面ミガキ、臼面 擦目磨耗、主溝・副 溝不明瞭	上縁部・窪みミガ キ、供給口	—	安山岩	灰茶色	(S-200 P-5)
S-200 14-K11	第34図-146	石製品／粉挽き 臼・上臼	—	14.5+ α	7.7	挽2.6 ×3.0 + α	—	ケズリ	側面ケズリ・旧挽 手孔痕、臼面擦目 磨耗・幅0.3cm残存 主溝2条・副溝4条	上縁部ミガキ、窪 みケズリ	—	安山岩	灰茶色	(S-200 P-2)
S-200 14-L11	第34図-147	石製品／粉挽き 臼・上臼	—	14.2+ α	7.0	—	—	ケズリ	側面ケズリ、臼面 擦目磨耗・幅0.4cm 残存主溝3条・副溝 3~5条	上縁部ミガキ、窪 みケズリ	—	安山岩	灰茶色	(S-200 P-20)
S-200 14-G11	第34図-148	石製品／粉挽き 臼・上臼	—	25.8+ α	7.0	芯2.2 供4.4 挽5.0 ×1.8 + α	—	ケズリ	側面ミガキ・旧挽 手孔痕、臼面擦目 磨耗・主溝・副溝 不明瞭	上縁部ミガキ、窪 みケズリ、供給口、芯 棒受け貫通	—	安山岩	灰茶色	(S-200 P-44)
S-200 14-M11	第34図-149	石製品／茶臼・ 下臼	臼8.5+ a 底12.0+ a	—	12.7	4.7+ a	—	ケズリ	臼面磨耗・幅0.2cm 残存主溝2条・副溝 5~8条、受け皿ケ ズリ	臼面磨耗・幅0.2cm 残存主溝2条・副溝 5~8条、受け皿ケ ズリ	—	安山岩	暗灰茶色	(S-200 P-4)
S-200 14-J11	第35図-150	青銅製品／鍵	2.7	3.4+ α	0.8	—	—	鍛造	—	—	—	—	—	—
S-200 14-J11	第35図-151	鉄製品／鎧	10.4	3.8	1.5	—	—	鍛造	—	—	—	—	—	—
S-200 14-J11	第35図-152	銭貨／唐銭	2.4	—	0.1	1辺 0.6	1.9	鍛造	「開元通寶」真書	無文	—	—	—	初鋳造年621年
S-200 14-J11	第35図-153	銭貨／北宋銭	1.8	—	0.1	1辺 0.6	1.0	鍛造	「元豐通寶」行書	無文	—	—	—	初鋳造年1078年 磨輪銭(側面ミガキ調整)

表 12 遺物観察表⑩

遺構番号	図版番号	種類/器種	法量(cm) ()は復元					成形	調整・装飾		焼成	胎土(石材)	色調・釉調 外面/内面	備考
			口径/最大長	器高/最大幅	底径/最大厚	孔径	重量		外面	内面				
S-200 14-110	第35図-154	銭貨/北宋銭	2.7	—	0.2	1辺 0.7	6.4	鋳造	「祥符元寶」真書	「熙寧元寶」真書	—	—	—	2枚背面で接着 祥符元寶初鋳造年1009年 熙寧元寶初鋳造年1068年
S-200 14-K11	第35図-155	銭貨/北宋銭	2.4	—	0.1	1辺 0.7	1.9	鋳造	「元祐通寶」行書	無文	—	—	—	初鋳造年1086年
S-200 14-K11	第35図-156	銭貨/北宋銭	2.4	—	0.1	1辺 0.7	2.1	鋳造	「治平元寶」真書	無文	—	—	—	⟨S-200 P-32⟩ 初鋳造年1064年
S-200 14-K11	第35図-157	銭貨/北宋銭	2.4	—	0.2	1辺 0.6	1.8	鋳造	「大觀通寶」真書	無文	—	—	—	初鋳造年1107年
S-221 14-110	第36図-1	京都系土師器/皿	8.7	2.0	—	—	—	手づくね	口縁部ヨコナデ、 体部ナデ	ナデアゲ	良好	径0.1cm以下褐色 白色粒子少量	淡橙茶色/淡 橙茶色	塩地編年第2期
S-222 14-K10	第36図-2	土師器/坏	12.4	2.5	7.4	—	—	ロクロ	口縁部ヨコナデ、 底部回転糸切り離し 板状圧痕	口縁~体部ヨコナ デ、見込みナデ	良好	径0.1cm以下白色 褐色・黒色光沢粒子少量	淡橙茶色/淡 橙茶色	—
S-222 14-L11	第36図-3	備前焼/鉢	(13.1)	5.4	(9.2)	—	—	粘土組 積上げか	口縁~体部ナデ、 口縁部下1条沈線	口縁~体部ナデ	良好	径0.1cm以下白色 褐色粒子少量	赤茶色/暗赤 茶色	⟨S-222 P-1⟩
S-222 14-010	第36図-4	備前焼/壺	9.5	15.9	11.0	—	—	粘土組 積上げ	口縁~体部上半ヨ コナデ、肩部自然 輪(黄緑色)、体部 「」へラ描き、 体部下半ナ デ、底部叩き痕か ナデ	口縁~体部ヨコナ デ、見込みナデ、 自然輪(黄緑色)	良好	径0.5cm以下白 色・褐色粒子少量	赤茶色/赤茶 色	秉同編年中世6期a 遺構間接合(S-200 14-N11)
S-230 14-110	第37図-1	土師器/小皿× 蓋	(6.1)	1.6	—	—	—	手づくね	口縁部ヨコナデ、 体部ナデ	口縁部ヨコナ デ、見込みナデ	良好	径0.1cm以下白色 褐色粒子少量	暗橙茶色/暗 橙茶色	焼塗壺の蓋か
S-230 14-J10	第37図-2	土師器/小皿	8.6	1.6	7.0	—	—	ロクロ	口縁~体部ヨコナ デ、底部回転糸切 り離し	口縁~体部ヨコナ デ、見込みナデ	良好	径0.1cm以下白色 黃金光沢粒子少 量	橙茶色/橙茶 色	⟨S-230 P-5⟩
S-230 14-K10	第37図-3	土師器/坏	12.0	3.0	7.1	—	—	ロクロ	口縁~体部ヨコナ デ、底部板状圧痕	口縁~体部ヨコナ デ、見込みナデ	良好	径0.1cm以下褐色 粒子少量	橙茶色/橙茶 色	ロクロ目
S-230 14-G10	第37図-4	京都系土師器/皿	12.2	2.7	—	—	—	手づくね	口縁部ヨコナデ、 体部ナデ	ナデアゲ	良好	径0.1cm以下白色 粒子少量	淡橙茶色/淡 橙茶色	塩地編年第2期
S-230 14-K10	第37図-5	京都系土師器/皿	12.4	2.5	—	—	—	手づくね	口縁部ヨコナデ、 体部ナデ	ナデアゲ	良好	径0.1cm以下白色 褐色粒子少量	淡橙茶色/淡 橙茶色	塩地編年第2期
S-230 14-N10	第37図-6	京都系土師器/皿	14.6	3.0	—	—	—	手づくね	口縁部ヨコナデ、 体部ナデ	ナデアゲ	良好	径0.2cm以下白色 粒子少量	暗橙茶色/暗 橙茶色	⟨S-230 P-3⟩ 塩地編年第2期
S-230 14-H11	第37図-7	京都系土師器/皿	8.1	1.8	—	—	—	手づくね	口縁部ヨコナデ、 体部ナデ	ナデアゲ	良好	径0.1cm以下白色 粒子少量	淡橙茶色/淡 橙茶色	塩地編年第2期 口縁部内外面に煤痕
S-230 14-L10	第37図-8	京都系土師器/皿	7.9	2.1	—	—	—	手づくね	口縁部ヨコナデ、 体部ナデ	ナデアゲ	良好	径0.1cm以下褐色 粒子少量	淡橙茶色/淡 橙茶色	塩地編年第2期 口縁部内外面に煤痕
S-230 14-N10	第37図-9	京都系土師器/皿	8.5	1.9	—	—	—	手づくね	口縁部ヨコナデ、 体部ナデ	ナデアゲ	良好	径0.1cm以下白色 褐色粒子少量	淡橙茶色/淡 橙茶色	塩地編年第2期 口縁部内外面に煤痕
S-230 14-G10	第37図-10	京都系土師器/皿	8.5	2.1	—	—	—	手づくね	口縁部ヨコナデ、 体部ナデ	ナデアゲ	良好	径0.1cm以下白色 粒子少量	暗橙茶色/暗 橙茶色	塩地編年第2期 口縁部内外面に煤痕
S-230 14-L10	第37図-11	京都系土師器/皿	8.6	1.9	—	—	—	手づくね	口縁部ヨコナデ、 体部ナデ	ナデアゲ	良好	径0.1cm以下褐色 粒子少量	淡橙茶色/淡 橙茶色	⟨S-230 P-6⟩ 塩地編年第2期 口縁部内外面に煤痕
S-230 14-L10	第37図-12	京都系土師器/皿	8.6	2.1	—	—	—	手づくね	口縁部ヨコナデ、 体部ナデ	ナデアゲ	良好	径0.1cm以下褐色 粒子少量	淡橙茶色/淡 橙茶色	塩地編年第2期 口縁部内外面に煤痕
S-230 14-G10	第37図-13	京都系土師器/皿	8.6	1.9	—	—	—	手づくね	口縁部ヨコナデ、 体部ナデ	ナデアゲ	良好	径0.3cm以下褐色 粒子少量	淡橙茶色/淡 橙茶色	塩地編年第2期 口縁部内外面に煤痕
S-230 14-G10	第37図-14	京都系土師器/皿	10.8	2.1	—	—	—	手づくね	口縁部ヨコナデ、 体部ナデ	ナデアゲ	良好	径0.1cm以下白色 褐色粒子少量	淡橙茶色/淡 橙茶色	塩地編年第2期 口縁部内外面に煤痕
S-230 14-L10	第37図-15	京都系土師器/皿	13.2	2.1	—	—	—	手づくね	口縁部ヨコナデ、 体部ナデ	ナデアゲ	良好	径0.1cm以下白色 粒子少量	淡橙茶色/淡 橙茶色	塩地編年第1期
S-230 14-G10	第37図-16	京都系土師器/皿	12.4	2.3	—	—	—	手づくね	口縁部ヨコナデ、 体部ナデ	ナデアゲ	良好	径0.1cm以下白色 粒子少量	淡橙茶色/淡 橙茶色	塩地編年第2期
S-230 14-K10	第37図-17	京都系土師器/皿	8.7	2.0	—	—	—	手づくね	口縁部ヨコナデ、 体部ナデ	ナデアゲ	良好	径0.1cm以下白色 褐色粒子少量	淡橙茶色/淡 橙茶色	塩地編年第2期
S-230 14-H10	第37図-18	京都系土師器/皿	9.0	2.3	—	—	—	手づくね	口縁部ヨコナデ、 体部ナデ	ナデアゲ	良好	径0.1cm以下褐色 粒子少量	淡橙茶色/淡 橙茶色	塩地編年第2期 口縁部内外面に煤痕
S-230 14-L10	第37図-19	京都系土師器/皿	8.8	1.9	—	—	—	手づくね	口縁部ヨコナデ、 体部ナデ	ナデアゲ	良好	径0.1cm以下褐色 白色粒子少量	淡橙茶色/淡 橙茶色	塩地編年第2期 口縁部内外面に煤痕
S-230 14-H10	第37図-20	京都系土師器/皿	8.9	2.0	—	—	—	手づくね	口縁部ヨコナデ、 体部ナデ	ナデアゲ	良好	径0.1cm以下白色 粒子少量	淡橙茶色/淡 橙茶色	塩地編年第2期 口縁部内外面に煤痕
S-230 14-G10	第37図-21	京都系土師器/皿	8.5	2.0	—	—	—	手づくね	口縁部ヨコナデ、 体部ナデ	ナデアゲ	良好	径0.1cm以下黄金 光沢粒子少量	淡橙茶色/淡 橙茶色	塩地編年第2期
S-230 14-N10	第37図-22	京都系土師器/皿	8.5	2.0	—	—	—	手づくね	口縁部ヨコナデ、 体部ナデ	ナデアゲ	良好	径0.1cm以下白色 粒子少量	淡橙茶色/淡 橙茶色	塩地編年第2期
S-230 14-H11	第37図-23	京都系土師器/皿	8.7	2.1	—	—	—	手づくね	口縁部ヨコナデ、 体部ナデ	ナデアゲ	良好	径0.1cm以下白色 粒子少量	淡橙茶色/淡 橙茶色	塩地編年第2期
S-230 14-H10	第37図-24	京都系土師器/皿	8.6	2.2	—	—	—	手づくね	口縁部ヨコナデ、 体部ナデ	ナデアゲ	良好	径0.1cm以下白色 粒子少量	淡橙茶色/淡 橙茶色	塩地編年第2期
S-230 14-G11	第37図-25	京都系土師器/皿	9.0	1.8	—	—	—	手づくね	口縁部ヨコナデ、 体部ナデ	ナデアゲ	良好	径0.1cm以下白色 粒子少量	淡橙茶色/淡 橙茶色	塩地編年第2期
S-230 14-H10	第37図-26	京都系土師器/皿	9.4	1.8	—	—	—	手づくね	口縁部ヨコナデ、 体部ナデ	ナデアゲ	良好	径0.1cm以下白色 粒子少量	淡橙茶色	塩地編年第2期
S-230 14-H10	第37図-27	京都系土師器/皿	10.3	2.1	—	—	—	手づくね	口縁部ヨコナデ、 体部ナデ	ナデアゲ	良好	径0.1cm以下褐色 白色粒子少量	淡橙茶色/淡 橙茶色	塩地編年第2期
S-230 14-H10	第37図-28	京都系土師器/皿	11.6	2.2	—	—	—	手づくね	口縁部ヨコナデ、 体部ナデ	ナデアゲ	良好	径0.1cm以下白色 粒子少量	淡橙茶色/淡 橙茶色	塩地編年第2期
S-230 14-H11	第37図-29	京都系土師器/皿	11.6	2.2	—	—	—	手づくね	口縁部ヨコナデ、 体部ナデ	ナデアゲ	良好	径0.1cm以下白色 粒子少量	暗橙茶色/暗 橙茶色	⟨S-230 P-7⟩ 塩地編年第2期
S-230 14-M10	第37図-30	京都系土師器/皿	11.8	2.0	—	—	—	手づくね	口縁部ヨコナデ、 体部ナデ	ナデアゲ	良好	径0.2cm以下白色 粒子少量	暗橙茶色/暗 橙茶色	—
S-230 14-K10	第37図-31	京都系土師器/皿	11.9	2.1	—	—	—	手づくね	口縁部ヨコナデ、 体部ナデ	ナデアゲ	良好	径0.2cm以下褐色 粒子少量	淡橙茶色/淡 橙茶色	塩地編年第2期

表 13 遺物観察表(11)

遺構番号	図版番号	種類／器種	法量(cm) ()は復元					成形	調整・装飾		焼成	胎土(石材)	色調・釉調外面／内面	備考
			口径／最大長	器高／最大幅	底径／最大厚	孔径	重量		外面	内面				
S-230 14-G10	第37図-32	京都系土器器皿	11.8	2.3	—	—	—	手づくね	口縁部ヨコナデ、体部ナデ	ナデアゲ	良好	径0.1cm以下黄金光沢粒子少量	暗橙茶色／暗橙茶色	塩地編年第2期
S-230 14-G10	第37図-33	京都系土器器皿	10.6	3.1	—	—	—	手づくね	口縁部ヨコナデ、体部ナデ	ナデアゲ	良好	径0.1cm以下白色粒子少量	淡橙茶色／淡橙茶色	河野G-2類
S-230 14-M10	第37図-34	京都系土器器皿	10.7	3.5	—	—	—	手づくね	口縁部ヨコナデ、体部ナデ	口縁部ヨコナデ、体部ナデ	良好	径0.1cm以下褐色、白色粒子少量	淡橙茶色／淡橙茶色	河野G-2類
S-230 14-L10	第37図-35	青磁／碗	—	3.9+ α	(4.6)	—	—	口クロ	施釉、高台内～蓋付露胎	施釉	良好	径0.1cm以下白色・褐色粒子少量、やや陶質に近い	綠黄色／綠黄色	—
S-230 14-L10	第37図-36	中国南方産綠釉陶器／小皿	—	1.1+ α	—	—	—	型づくり	蓮弁文、高台内落款状方形界線一施釉、高台内露胎	施釉	良好	径0.1cm以下白色粒子少量、磁質に近い	綠黄色／綠黄色	(S-230 P-1)
S-230 14-L10	第37図-37	中国南方産綠釉陶器／小皿	(6.6)	1.3	(3.8)	—	—	型づくり	蓮弁文、高台内落款状方形界線一施釉、高台内露胎	施釉	良好	径0.1cm以下白色粒子少量、磁質に近い	綠黄色／綠黄色	(S-230 P-4)
S-230 14-K10	第37図-38	五彩(景德鎮窯系)／棱花皿	—	1.5+ α	—	—	—	口クロか	施釉	施釉一絵付け(赤、3条界線ほか)	良好	径0.1cm以下白色粒子少量	黄茶色／透明釉	—
S-230 14-G10	第37図-39	青花(景德鎮窯系)／碗	—	1.9+ α	(5.4)	—	—	口クロ	高台2条界線、高台内字款状「精製」一施釉、蓋付釉剥ぎ	見込み3条界線、見込み卷貝波瀾文一施釉	良好	径0.1cm以下白色粒子少量	透明釉／透明釉	小野分類染付碗E群
S-230 14-G10	第37図-40	青花(景德鎮窯系)／碗	(12.6)	5.9	4.8	—	—	口クロ	口縁部下2条界線、体部草花文、蛟龍文、体部下半～高台3条界線、高台内「富貴佳器」一施釉、蓋付釉剥ぎ	見込み2条界線、見込み蛟龍文一施釉	良好	径0.1cm以下白色粒子少量	透明釉／透明釉	小野分類染付碗E群 遺構間接合(S-200 14-E11)
S-230 14-G10	第37図-41	青花(景德鎮窯系)／碗	—	3.3+ α	(5.2)	—	—	口クロ	体部唐草文、体部下半1条界線、高台2条界線、高台内字款状「精製」一施釉、蓋付釉剥ぎ	見込み2条界線内花文一施釉	良好	径0.1cm以下白色粒子少量	透明釉／透明釉	小野分類染付碗E群
S-230 14-G11	第37図-42	青花(漳州窯系)／碗	—	4.3+ α	(4.8)	—	—	口クロ	体部草花文、体部下半2条界線一施釉、蓋付釉剥ぎ	見込み2条界線内花文一施釉	良好	径0.1cm以下白色粒子少量	透明釉／透明釉	—
S-230 14-M10	第37図-43	青花(漳州窯系)／碗	(18.0)	7.0	5.9	—	—	口クロ	口縁部下、体部境各1条界線一施釉、高台境露胎	口縁部下1条界線、見込み2条界線、見込み中央点文一施釉、見込み輪状釉剥ぎ	良好	径0.1cm以下白色粒子少量、陶質に近い	透明釉(やや灰色味あり)／透明釉(やや灰色味あり)	遺構間接合(S-223 14-N10・S-223 14-K10)
S-230 14-K10	第37図-44	青花(景德鎮窯系)／皿	—	1.7+ α	3.2	—	—	口クロ	体部芭蕉葉文、体部下半2条界線一施釉、蓋付釉剥ぎ	体部文様、見込み2条界線内花文一施釉	良好	径0.1cm以下白色粒子少量	透明釉／透明釉	小野分類染付皿C群
S-230 14-H10	第37図-45	青花(景德鎮窯系)／皿	—	1.7+ α	6.0	—	—	口クロ	高台内字款状「福」一施釉、蓋付釉剥ぎ	見込み1条界線内花文一施釉	良好	径0.1cm以下白色粒子少量	透明釉／透明釉	小野分類染付皿E群
S-230 14-G10	第38図-46	青花(景德鎮窯系)／合子蓋	(9.2)	2.5+ α	—	—	—	口クロ	天井部・口縁部各2条界線、肩部花唐草文一施釉、口縫端部釉剥ぎ	施釉、口縁部釉剥ぎ	良好	径0.1cm以下白色粒子少量	透明釉／透明釉	—
S-230 14-G10	第38図-47	白磁(景德鎮窯系)／棱花皿	(13.4)	2.9	(7.0)	—	—	型づくり	高台内字款状「福」一施釉、蓋付釉剥ぎ	施釉	良好	径0.1cm以下白色粒子少量	白灰色／白灰色	蓋付・高台内一部に砂粒・食繊維付着
S-230 14-G10	第38図-48	朝鮮王朝粉青沙器／碗	—	1.7+ α	—	—	—	口クロ	2条沈縫内、斜縫文様帶一白象嵌一施釉	2条沈縫内、斜縫文様帶一白象嵌一施釉	良好	径0.1cm以下白色粒子少量、陶質に近い	灰白色／灰白色	彌三島
S-230 14-I11	第38図-49	瀬戸・美濃産陶器／天目碗	(11.2)	3.7+ α	—	—	—	口クロ	施釉、体部下半露胎	施釉	良好	径0.1cm以下黄金光沢粒子少量	茶褐釉(光沢あり)／茶褐釉(光沢あり)	藤沢編年大窯第4段階
S-230 14-H11	第38図-50	瀬戸・美濃産陶器／鉢皿	—	3.6+ α	—	—	—	口クロ	施釉	鉢目一施釉	良好	径0.1cm以下褐色、白色粒子少量	淡綠黄色／露胎部灰褐色／淡綠黄色	—
S-230 14-L10	第38図-51	瀬戸・美濃産陶器／鉢皿	—	1.7+ α	(9.6)	—	—	口クロ	体部ナデ、底部回転糸切り離し	鉢目一施釉	良好	径0.1cm以下褐色、白色粒子少量	灰褐色／綠黄色	遺構間接合(S-223 14-J11)
S-230 14-H10	第38図-52	備前焼／鉢	(9.6)	8.3	(6.7)	—	—	粘土紐積上げか	ナデ、底部「〇」窯印か、自然釉(黄緑色)	ナデ、自然釉(黄緑色)	良好	径0.1cm以下白色、黒色粒子少量	暗赤茶色／暗赤茶色	遺構間接合(S-223 14-H11・S-230 14-G10)
S-230 14-G11	第38図-53	備前焼／水屋蓋	(23.4)	18.8+ α	—	—	—	粘土紐積上げ	口縁～体部ヨコナデ、体部1条凸帯貼り付け、自然釉(黄緑色)	ヨコナデ	良好	径0.5cm以下黒色粒子、径0.2cm以下褐色粒子少量	暗赤茶色／暗赤茶色	備岡編年中世6期a
S-230 14-G10	第38図-54	備前焼／擂鉢	22.3	10.0	10.9	—	—	粘土紐積上げ	口縁部ヨコナデ、体部～底部ナデ	口縁部ヨコナデ、体部放射状捲目(1単位9条)、見込みナデ	良好	径0.7cm以下白色粒子、径0.2cm以下褐色粒子少量	暗灰褐色／暗灰褐色	備岡編年中世6期a 遺構間接合(S-224 14-G11)
S-230 14-M10	第38図-55	備前焼／擂鉢	(33.0)	14.6	(14.0)	—	—	粘土紐積上げ	口縁部ヨコナデ、体部ナデ	口縁部ヨコナデ、体部ナデ	良好	径0.5cm以下白色粒子、径0.2cm以下褐色粒子少量	赤茶色／赤茶色	備岡編年近世1期b 焼き窯み 遺構間接合(S-200 14-M11・S-200 14-L11・S-223 14-J11・S-223 14-L10・S-223 14-L11・)
S-230 14-K10	第38図-56	瓦質土器／焼塩壺	(5.2)	7.4+ α	—	—	—	粘土紐積上げ	口縁部ヨコナデ、体部ナデ	口縁部ヨコナデ、体部ナデ	良好	径0.1cm以下白色、黒色光沢・褐色粒子少量	暗橙茶色／暗橙茶色	—
S-230 14-G10	第38図-57	瓦質土器／焼塩壺	(5.6)	7.7	5.3	—	—	粘土紐積上げ	器面剥離のため調整不明瞭	口縁部ヨコナデ、体部ナデ、接合痕、底部ナデ	良好	径0.3cm以下白色、褐色粒子少量	淡橙茶色／淡橙茶色	—
S-230 14-G11	第38図-58	瓦質土器／鉢	(29.6)	9.8	(18.0)	—	—	粘土紐積上げ	ミガキ、底部離れ砂	ミガキ	良好	径0.1cm以下黄金光沢粒子少量	橙茶色／橙茶色	遺構間接合(攪乱・S-230 14-G10・S-233 14-F11)
S-230 14-H10	第38図-59	銭貨／北宋錢	2.5	—	0.1	1辺0.5	2.2	鑄造	「政和通寶」篆書	無文	—	—	—	初鑄造年1111年

表 14 遺物観察表(12)

遺構番号	図版番号	種類/器種	法量(cm) ()は復元					成形	調整・装飾		焼成	胎土(石材)	色調・釉調 外面/内面	備考
			口径/最大長	器高/最大幅	底径/最大厚	孔径	重量		外面	内面				
S-230 14-K10	第38図-60	石製品/研石	14.2+ α	6.2	3.4	—	—	—	ミガキ	ミガキ	—	砂岩	茶灰色	—
S-230 14-K10	第39図-61	石製品/研石	22.0	5.9	2.4	—	—	—	ミガキ	ミガキ	—	結晶片岩	灰白色	—
S-230 14-G11	第39図-62	木製品/箆状製品	16.0+ α	0.9	0.4	—	—	—	—	—	—	—	—	—
S-231 14-L11	第40図-1	土師器/小皿	6.4	1.4	4.6	—	—	ロクロ	口縁部ヨコナデ、 体部ナデ、底部回転糸切り離し	口縁部ヨコナデ、 体部ナデ	良好	径0.5cm以下褐色 粒子少量	橙茶色/橙茶色	—
S-231 14-J11	第40図-2	土師器/小皿	8.8	1.8	6.2	—	—	ロクロ	口縁部ヨコナデ、 体部ナデ、底部回転糸切り離し	ナデアゲ	良好	径0.1cm以下褐色 白色粒子少量	淡橙茶色/淡 橙茶色	—
S-231 14-L11	第40図-3	土師器/小壺	9.5	1.3	5.1	—	—	ロクロ	口縁部ヨコナデ、 底部回転糸切り離し	口縁部ヨコナデ、 見込みナデ	良好	径0.1cm以下白色 粒子少量	淡橙茶色/淡 橙茶色	ロクロ目
S-231	第40図-4	土師器/壺	10.1	2.4	6.4	—	—	ロクロ	口縁~体部ヨコナ デ、底部回転糸切り離し	口縁~体部ヨコナ デ、見込みナデ	良好	径0.1cm以下褐色 白色粒子少量	橙茶色/橙茶色	ロクロ目
S-231 14-011	第40図-5	土師器/杯	12.6	2.6	8.0	—	—	ロクロ	口縁~体部ナデ	口縁~体部ヨコナ デ、見込みナデ	良好	径0.1cm以下褐色 白色粒子少量	橙茶色/橙茶色	ロクロ目
S-231 14-L11	第40図-6	土師器/壺	13.8	2.6	7.2	—	—	ロクロ	口縁~体部ヨコナ デ、底部回転糸切り離し	口縁~体部ヨコナ デ、見込みナデ、 工具ナデ	良好	径0.1cm以下白色 粒子少量	淡橙茶色/淡 橙茶色	ロクロ目
S-231 14-M11	第40図-7	土師器/壺	13.0	2.5	6.8	—	—	ロクロ	口縁~体部ナデ	口縁~体部ヨコナ デ、見込みナデ	良好	径0.1cm以下白色 粒子少量	橙茶色/橙茶色	ロクロ目
S-231 14-011	第40図-8	土師器/壺	11.5	2.6	6.1	—	—	ロクロ	口縁~体部ヨコナ デ、底部回転糸切り離し	口縁~体部ヨコナ デ、見込みナデ	良好	径0.1cm以下白色 粒子少量	橙茶色/橙茶色	ロクロ目
S-231 14-M11	第40図-9	土師器/壺	(11.9)	2.7	(5.8)	—	—	ロクロ	口縁部ヨコナデ、 体部ナデ、底部回転糸切り離し	口縁部ヨコナデ、 体部ナデ、見込みナデ	良好	径0.1cm以下白色 粒子少量	暗橙茶色/暗 橙茶色	ロクロ目 外面煤痕
S-231 14-K11	第40図-10	土師器/壺	12.0	2.7	6.7	—	—	ロクロ	口縁~体部ヨコナ デ、底部回転糸切り離し	口縁~体部ヨコナ デ、見込みナデ	良好	径0.1cm以下褐色 白色粒子少量	淡橙茶色/淡 橙茶色	ロクロ目
S-231 14-N11	第40図-11	京都系土師器/皿	12.3	2.5	—	—	—	手づくね	口縁部ヨコナデ、 体部ナデ	ナデアゲ	良好	径0.3cm以下白色 粒子少量	淡橙茶色/淡 橙茶色	塩地編年第2期
S-231 14-011	第40図-12	京都系土師器/皿	13.0	2.6	—	—	—	手づくね	口縁部ヨコナデ、 体部ナデ	ナデアゲ	良好	径0.1cm以下白色 粒子少量	暗橙茶色/暗 橙茶色	塩地編年第2期
S-231 14-K11	第40図-13	京都系土師器/皿	16.2	3.1	—	—	—	手づくね	口縁部ヨコナデ、 体部ナデ	口縁部ヨコナデ、 体部ナデ	良好	径0.2cm以下褐色 粒子少量	暗橙茶色/暗 橙茶色	塩地編年第2期
S-231 14-N11	第40図-14	京都系土師器/皿	8.2	2.2	—	—	—	手づくね	付着物のため調整 不明瞭	付着物のため調整 不明瞭	良好	径0.1cm以下黄金 光沢粒子少量	黑灰色/黑灰色	内外面煤付着
S-231 14-111	第40図-15	京都系土師器/皿	8.4	2.0	—	—	—	手づくね	口縁部ヨコナデ、 体部ナデ	ナデアゲ	良好	径0.1cm以下褐色 粒子少量	淡橙茶色/暗 橙茶色	塩地編年第2期
S-231 14-L11	第40図-16	京都系土師器/皿	8.9	2.0	—	—	—	手づくね	口縁部ヨコナデ、 体部ナデ	ナデアゲ	良好	径0.1cm以下褐色 粒子少量	淡橙茶色/暗 橙茶色	塩地編年第2期 口縁部外面煤痕
S-231 14-K11	第40図-17	京都系土師器/皿	9.0	2.0	—	—	—	手づくね	口縁部ヨコナデ、 体部ナデ	ナデアゲ	良好	径0.1cm以下白色 粒子少量	淡橙茶色/暗 橙茶色	塩地編年第2期 口縁部外面煤痕
S-231 14-111	第40図-18	京都系土師器/皿	12.1	2.0	—	—	—	手づくね	口縁部ヨコナデ、 体部ナデ	ナデアゲ	良好	径0.2cm以下褐色 粒子少量	暗橙茶色/暗 橙茶色	塩地編年第2期
S-231 14-K11	第40図-19	京都系土師器/皿	12.2	2.6	—	—	—	手づくね	口縁部ヨコナデ、 体部ナデ	ナデアゲ	良好	径0.1cm以下褐色 粒子少量	淡橙茶色/暗 橙茶色	塩地編年第2期
S-231 14-N11	第40図-20	京都系土師器/皿	(11.8)	3.5	—	—	—	手づくね	口縁部ヨコナデ、 体部ナデ	口縁部ヨコナデ、 体部ナデ	良好	径0.1cm以下白色 粒子少量	淡橙茶色/暗 橙茶色	河野G-2類
S-231 14-111	第40図-21	京都系土師器/皿	11.2	4.0	—	—	—	手づくね	口縁部ヨコナデ、 体部ナデ	口縁部ヨコナデ、 体部ナデ	良好	径0.4cm以下褐色 粒子少量	淡橙茶色/暗 橙茶色	河野G-2類
S-231 14-M11	第40図-22	京都系土師器/皿	11.3	3.8	—	—	—	手づくね	口縁部ヨコナデ、 体部ナデ	口縁部ヨコナデ、 体部ナデ	良好	径0.1cm以下褐色 粒子少量	淡橙茶色/暗 橙茶色	河野G-2類
S-231 14-111	第40図-23	白磁/壺×瓶	—	6.2+ α	—	—	—	粘土紐 横上げ	施釉	工具ナデー施釉	良好	径0.1cm以下白 色褐色粒子少量 (やや光沢あり)/暗 灰白色(やや光沢 あり)	—	—
S-231 14-G11	第40図-24	白磁(景德鎮窯系)/稜花皿	(16.0)	3.2	(8.2)	—	—	型づく りか	体部縫状沈線ー施 釉、蓋付釉剥ぎ	体部縫状沈線ー施 釉、蓋付釉剥ぎ	良好	径0.1cm以下白色 粒子少量	白灰色(やや光 沢あり)/白灰色 (やや光沢あり)	—
S-231 14-K11	第40図-25	青白磁(景德鎮窯系)/合子身	—	1.7	—	—	—	型づく り	施釉	施釉、体部~高台 内露胎	良好	径0.1cm以下白色 粒子少量	綠青色(やや透 明に近い)/綠青色 (やや透 明に近い)	2次被熱による釉変
S-231 14-G11	第40図-26	五彩(景德鎮窯系)/碗	—	1.9+ α	—	—	—	ロクロ	施釉ー絵付け(赤、 緑、蓮弁文か・格子文か・3条界線)	施釉ー絵付け(赤、 見込み3条界線)	良好	径0.1cm以下白色 粒子少量	透明釉/透明 釉	—
S-231 14-L11	第40図-27	青花(景德鎮窯系)/小壺	—	1.6+ α	(3.2)	—	—	ロクロ	体部文様、体部下 半1条界線、高台2 条界線内斜文様 帶、高台内字款状 「富貴佳器」ー施 釉、蓋付釉剥ぎ	見込み境1条界線内 蝶龍文ー施釉	良好	径0.1cm以下白色 粒子少量	透明釉/透明 釉	—
S-231	第40図-28	青花(景德鎮窯系)/碗	—	3.6+ α	—	—	—	ロクロ	口縁部下2条界線、 体部文様ー施釉	口縁部下2条界線、 体部文様ー施釉	良好	径0.1cm以下白色 粒子少量	透明釉/透明 釉	遺構間接合(S-223 14-M11)
S-231 14-J11	第40図-29	青花(景德鎮窯系)/碗	(12.2)	5.4+ α	—	—	—	ロクロ	口縁部下・体部下 半各1条界線、体部 草花文様ー施釉	口縁部下・四方櫛 文、体部上半1条界 線、見込み境2条界 線ー施釉	良好	径0.1cm以下白色 粒子少量	透明釉/透明 釉	—
S-231 14-111	第40図-30	青花(漳州窯系)/碗	—	5.0+ α	—	—	—	ロクロ	口縁部下・体部下 半各1条界線ー施 釉	口縁部下・1条界線ー 施釉	良好	径0.1cm以下白色 粒子少量	透明釉/透明 釉	体部外面に砂粒・植物繊維が 付着
S-231 14-J11	第40図-31	青花(漳州窯系)/皿×碗	—	2.7+ α	(5.7)	—	—	ロクロ	口縁部下・見込み 境各1条界線ー施 釉、見込み輪状 剥ぎ	口縁部下・見込み 境各1条界線ー施 釉	良好	径0.1cm以下白色 粒子少量	透明釉/透明 釉	遺構間接合(S-223 14-J11)

表 15 遺物観察表(13)

遺 構 番 号	図 版 番 号	種類／器種	法量(cm) ()は復元					成形	調整・装飾		焼成	胎土(石材)	色調・釉調 外面／内面	備 考
			口径／ 最大長	器高／ 最大幅	底径／ 最大厚	孔径	重量		外面	内面				
S-231 14-M11	第40図-32	青花(漳州窯系) ／碗	(12.2)	4.8	4.6	—	—	口クロ	口縁部・体部下半 各1条界線、体部文 様帶一施釉、高台 内露胎(一部粘 れ)	口縁部・体部下半 各1条界線一施釉、 見込み露胎	良好	径0.1cm以下黒色 粒子少量、陶質に 近い	白灰色／白灰 色	遺構間接合(S-200 14-L11・ S-231 14-L11)
S-231 14-I11	第40図-33	青花(景德鎮窯 系)／碗	12.6	6.0	4.8	—	—	口クロ	口縁部下2条界線、 体部蛟龍文・草花 文、高台境3条界 線、高台内「富貴 佳器」一施釉、量 付釉剥ぎ	口縁部下2条界線、 見込み境2条界線内 蛟龍文一施釉	良好	径0.1cm以下白色 粒子少量	透明釉／透明 釉	小野分類染付碗E群
S-231 14-M11	第40図-34	青花(景德鎮窯 系)／碗	(11.6)	4.9+ α	—	—	—	口クロ	口縁部下1条界線一 施釉	口縁部下1条界線、 見込み境2条界線内 蓮弁文一施釉	良好	径0.1cm以下白色 粒子少量	透明釉／透明 釉	—
S-231 14-I11	第40図-35	青花(漳州窯系) ／碗	(15.2)	5.0+ α	—	—	—	口クロ	口縁部下1条界線一 施釉	口縁部下・見込み 各1条界線、見込み 境1条線一施釉	良好	径0.1cm以下白色 粒子少量	透明釉(やや青 味がかる)／透 明釉(やや青味 がかる)	遺構間接合(S-231 14-J11)
S-231 14-K11	第41図-36	青花(景德鎮窯 系)／皿	(12.6)	2.6	(7.0)	—	—	口クロ	口縁部下・高台境 各2条界線内唐草文 一施釉、量付釉剥 ぎ	口縁部下・見込み 各2条界線、見込み 文様一施釉	良好	径0.1cm以下白色 粒子少量	透明釉／透明 釉	小野分類染付皿B群 遺構間接合(S-222 14-K11)
S-231 14-G11	第41図-37	青花(景德鎮窯 系)／皿	(18.6)	2.1+ α	—	—	—	口クロ	口縁部下2条界線内 草花文、体部果実 文一施釉	口縁部下2条界線内 果実文・文具文一 施釉	良好	径0.1cm以下白色 粒子少量	透明釉／透明 釉	小野分類染付皿F群
S-231 14-J11	第41図-38	朝鮮王朝産青 釉陶器／瓶	—	4.0+ α	(11.8)	—	—	粘土紐 積上げ	工具ナデ	工具ナデ	良好	径0.1cm以下白 色・褐色粒子少量	褐茶色／褐茶 色	船德利
S-231	第41図-39	備前焼／壺	(12.4)	9.4+ α	—	—	—	粘土紐 積上げ	口縁～体部ヨコナ 子、肩部へラ描き 波状文(1単位6 条)、自然釉(黄綠 色)	口縁～体部ヨコナ 子、粘土紐接合痕	良好	径0.3cm以下白 色・褐色粒子少量	灰褐色／赤茶 色	乗岡編年中世6期a 遺構間接合(S-224 14-010)
S-231 14-011	第41図-40	中国南方産陶器 ／蓋	つまみ 3.3	1.5+ α	—	—	—	口クロ	ヨコナデ	ヨコナデ	良好	径0.1cm以下白 色・黒色粒子少量	赤茶色／赤茶 色	—
S-231 14-I11	第41図-41	備前焼／壺×壺	—	7.5+ α	—	—	—	粘土紐 積上げ	口縁部ヨコナデ	口縁部ヨコナデ	良好	径0.8cm以下白色 粒子・径0.2cm以 下黒色粒子少量	灰茶色／灰茶 色	乗岡編年中世2期b
S-231 14-011	第41図-42	備前焼／鉢	—	10.1+ α	—	—	—	粘土紐 積上げ	ナデ	ナデ	良好	径0.2cm以下白 色・褐色粒子少量	暗赤茶色／暗 赤茶色	—
S-231 14-I11	第41図-43	備前焼／壺	—	10.6+ α	—	—	—	粘土紐 積上げ	体部工具ナデ	体部工具ナデ	良好	径0.8cm以下白色 粒子・径0.2cm以 下黒色粒子少量	灰茶色／灰茶 色	—
S-231 14-K11	第41図-44	瀬戸・美濃産陶 器／天目碗	(11.2)	4.6+ α	—	—	—	口クロ	施釉、体部下半露 胎	施釉	良好	径0.1cm以下白色 粒子少量	褐灰釉／褐灰 釉	藤沢編年大窯第3～4段階
S-231 14-K11	第41図-45	瀬戸・美濃産陶 器／天目碗	(11.6)	4.9+ α	—	—	—	口クロ	施釉、体部下半露 胎	施釉	良好	径0.1cm以下黑色 粒子少量	黒褐釉(光沢あ り)／黒褐釉(光沢 あり)	藤沢編年大窯第3～4段階
S-231 14-J11	第41図-46	瀬戸・美濃産陶 器／天目碗	(11.4)	5.2+ α	—	—	—	口クロ	施釉、体部下半露 胎	施釉	良好	径0.1cm以下褐色 粒子少量	黒茶釉／黒茶 釉	藤沢編年大窯第3～4段階
S-231 14-011	第41図-47	瓦質土器／塊	11.7	4.5	5.5	—	—	型つくり	体部工具ナデ、高 台内ナデ	工具ナデ	不良	径0.1cm以下白色 粒子少量	淡灰茶色／淡 灰茶色	—
S-231 14-M11	第41図-48	瓦質土器／擂鉢	—	5.9+ α	—	—	—	粘土紐 積上げ	口縁部ヨコナデ、 体部へラケズリ	口縁部ヨコナデ、 擂目(1単位5条)	良好	径0.6cm以下灰色 粒子・径0.1cm以 下白色粒子少量	灰茶色／暗灰 茶色	宇佐産
S-231 14-M11	第41図-49	土師質土器／燭 台	5.1+ α	6.0+ α	6.6	—	—	口クロ	台部ヨコナデ、底 部回転糸切り離し	見込みヨコナデ、 中央糸孔貫通せず	良好	径0.1cm以下白色 ・褐色・黒色光 沢粒子少量	橙茶色／橙茶 色	田中分類土師器燭台A1類
S-231	第41図-50	土師質土器／燭 台	7.5	6.6	7.6	—	—	口クロ	台部ヨコナデ、底 部回転糸切り離し	見込みナデ、中央 糸孔貫通せず、穿 孔部木芯残存	良好	径0.1cm以下白 色・褐色・黒色光 沢粒子少量	橙茶色／橙茶 色	田中分類土師器燭台A1～A2類
S-231 14-J11	第41図-51	土師質土器／燭 台	8.3	7.3	6.4	—	—	手づく ね	台部ナデ、底部ナ デ	口縁部ヨコナデ、 見込みナデ、中央 穿孔貫通	良好	径0.1cm以下白 色・褐色粒子少量	淡橙茶色／淡 橙茶色	田中分類土師器燭台A類 見込み煤痕
S-231 14-N11	第41図-52	土製品／坩堝× 取瓶	(10.8)	3.5+ α	—	—	—	手づく ね	ナデ	付着物のため調整 不明瞭	良好	径0.1cm以下白色 粒子少量	灰茶色	内面に鉛滓が付着
S-231 14-K11	第41図-53	瓦質土器／焼塩 壺	4.9	8.9	6.5	—	—	粘土紐 積上げ	口縁部ヨコナデ、 体部～底部ナデ	口縁部ヨコナデ、 見込みナデ	良好	径0.5cm以下白 色・黒色光沢粒子 少量	淡橙茶色／淡 橙茶色	遺構間接合(S-223 14-K11)
S-231 14-J11	第41図-54	瓦／隅×鳥糞瓦	8.1+ α	8.4+ α	2.2	—	—	タタキ	瓦当表面左巻き三 巴文・残存珠文・ 圈線、外縁離れ砂 か	瓦当裏面ナデ	良好	径0.5cm以下白色 粒子・径0.1cm以 下黒色光沢粒子少 量	表面 黒灰色／ 裏面 黑灰色	—
S-231 14-L11	第41図-55	瓦／軒丸瓦	3.3+ α	8.8	3.3	—	—	タタキ	瓦当表面左巻き三 巴文・残存珠文・ 圈線、外縁離れ砂 か	瓦当裏面ナデ	良好	径0.1cm以下白 色・黒色光沢粒子 少量	凸面 灰青色／ 凹面 灰青色	—
S-231 14-J11	第41図-56	錢貨／北宋錢	2.6	—	0.1	1辺 0.5	3.4	鍛造	「祥符元寶」篆書	無文	—	—	—	初鑄造年1009年
S-231 14-L11	第41図-57	錢貨／南宋錢	2.4	—	0.1	1辺 0.7	2.2	鍛造	「咸淳元寶」真書	無文	—	—	—	初鑄造年1265年
S-231 14-H11	第41図-58	木製品／箸	21.0+ α	0.6	0.4	—	—	—	—	—	—	—	—	—
S-231 14-D11	第41図-59	漆器／椀	(16.0)	5.4+ α	—	—	—	挽物	体部に赤色漆で 「桐文」×「蝶文」	—	—	—	黑色／赤色	体部片
S-231 14-O11	第42図-60	石製品／五輪塔 愛花(風輪)軸用 品か	16.0	9.9	16.1	1.7	—	ケズリ	上面ケズリ、穿 孔貫通、側面一部ミ ガキ	下面ケズリ、穿孔 貫通	—	凝灰岩	灰茶色	—
S-223 14-N16	第43図-1	京都系土師器／ 皿	8.4	2.3+ α	—	—	—	手づく ね	口縁部ヨコナデ、 体部ナデ	ナデアゲ	良好	径0.2cm以下褐色 粒子少量	暗橙茶色／暗 橙茶色	塙地編年第2期

表 16 遺物観察表¹⁴⁾

遺構番号	図版番号	種類/器種	法量(cm) ()は復元					成形	調整・装飾		焼成	胎土(石材)	色調・釉調 外面/内面	備考	
			口径/最大長	器高/最大幅	底径/最大厚	孔径	重量		外面	内面					
S-223 14-H11	第43図-2	京都系土師器/皿	8.3	1.9	—	—	—	手づくね	口縁部ヨコナデ、体部ナデ	ナデアゲ	良好	径0.1cm以下白色粒子少量	淡橙茶色/淡橙茶色	塩地編年第2期	
S-223 14-L11	第43図-3	京都系土師器/皿	9.3	2.2	—	—	—	手づくね	口縁部ヨコナデ、体部ナデ	ナデアゲ	良好	径0.1cm以下白色粒子少量	淡橙茶色/淡橙茶色	塩地編年第2期	
S-223 14-N10	第43図-4	京都系土師器/皿	12.0	2.3+ α	—	—	—	手づくね	口縁部ヨコナデ、体部ナデ	ナデアゲ	良好	径0.1cm以下白色粒子少量	暗橙茶色/暗橙茶色	塩地編年第2期 口縁~体部内外面に煤痕	
S-223 14-H11	第43図-5	京都系土師器/皿	12.8	2.8	—	—	—	手づくね	口縁部ヨコナデ、体部ナデ	ナデアゲ	良好	径0.1cm以下褐色粒子少量	茶灰色/茶灰色	塩地編年第2期	
S-223 14-N10	第43図-6	京都系土師器/皿	12.0	2.6	—	—	—	手づくね	口縁部ヨコナデ、体部ナデ	ナデアゲ	良好	径0.1cm以下白色粒子少量	暗橙茶色/暗橙茶色	塩地編年第2期 2次被熱により外面黒化	
S-223 14-M10	第43図-7	京都系土師器/皿	14.6	2.5	—	—	—	手づくね	口縁部ヨコナデ、体部ナデ	ナデアゲ	良好	径0.1cm以下白色粒子少量	黒茶色/黒茶色	塩地編年第2期	
S-223 14-G11	第43図-8	京都系土師器/皿	8.6	2.0	—	—	—	手づくね	口縁部ヨコナデ、体部ナデ	ナデアゲ	良好	径0.1cm以下褐色粒子少量	橙茶色/橙茶色	塩地編年第2期	
S-223 14-H11	第43図-9	京都系土師器/皿	8.8	2.0	—	—	—	手づくね	口縁部ヨコナデ、体部ナデ	ナデアゲ	良好	径0.1cm以下白色粒子少量	淡橙茶色/淡橙茶色	塩地編年第2期	
S-223 14-H11	第43図-10	京都系土師器/皿	10.7	2.2	—	—	—	手づくね	口縁部ヨコナデ、体部ナデ	ナデアゲ、接合痕	良好	径0.1cm以下褐色粒子少量	淡橙茶色/淡橙茶色	塩地編年第2期	
S-223 14-L10	第43図-11	京都系土師器/皿	8.8	2.1	—	—	—	手づくね	口縁部ヨコナデ、体部ナデ	ナデアゲ	良好	径0.1cm以下褐色粒子少量	暗橙茶色/暗橙茶色	塩地編年第2期	
S-223 14-G11	第43図-12	京都系土師器/皿	9.0	1.9	—	—	—	手づくね	口縁部ヨコナデ、体部ナデ	ナデアゲ	良好	径0.1cm以下白色粒子少量	淡橙茶色/淡橙茶色	塩地編年第2期	
S-223 14-I11	第43図-13	京都系土師器/皿	12.1	2.4+ α	—	—	—	手づくね	口縁部ヨコナデ、体部ナデ	ナデアゲ	良好	径0.1cm以下褐色、白色粒子少量	暗橙茶色/暗橙茶色	塩地編年第2期	
S-223 14-G11	第43図-14	京都系土師器/皿	12.1	2.1	—	—	—	手づくね	口縁部ヨコナデ、体部ナデ	ナデアゲ	良好	径0.1cm以下褐色粒子少量	淡橙茶色/淡橙茶色	塩地編年第2期	
S-223 14-L10	第43図-15	京都系土師器/皿	12.2	2.4	—	—	—	手づくね	口縁部ヨコナデ、体部ナデ	ナデアゲ	良好	径0.1cm以下白色粒子少量	暗橙茶色/暗橙茶色	塩地編年第2期	
S-223 14-O10	第43図-16	京都系土師器/皿	12.8	2.4	—	—	—	手づくね	口縁部ヨコナデ、体部ナデ	ナデアゲ	良好	径0.1cm以下白色粒子少量	淡橙茶色/淡橙茶色	塩地編年第2期	
S-223 14-K11	第43図-17	京都系土師器/皿	16.4	2.6	—	—	—	手づくね	口縁部ヨコナデ、体部ナデ	ナデアゲ	良好	径0.1cm以下褐色、白色粒子少量	暗黄茶色/暗黄茶色	塩地編年第2期 2次被熱により内面黒化	
S-223 14-M10	第43図-18	京都系土師器/皿	(10.6)	3.4	—	—	—	手づくね	口縁部ヨコナデ、体部ナデ	ナデアゲ	良好	径0.2cm以下褐色、白色粒子少量	暗橙茶色/暗橙茶色	河野G-2類	
S-223 14-O11	第43図-19	京都系土師器/皿	11.0	3.8	—	—	—	手づくね	口縁部ヨコナデ、体部ナデ	ナデアゲ	良好	径0.1cm以下褐色、黄色光沢粒子少量	淡橙茶色/淡橙茶色	河野G-2類	
S-223 14-J11	第43図-20	京都系土師器/皿	10.8	3.7	—	—	—	手づくね	口縁部ヨコナデ、体部ナデ	ナデアゲ	良好	径0.1cm以下褐色、黄色光沢粒子少量	暗橙茶色/暗橙茶色	河野G-2類 口縁部内外面に煤痕	
S-223 14-L10	第43図-21	京都系土師器/皿	11.7	3.7	—	—	—	手づくね	口縁部ヨコナデ、体部ナデ	口縁~体部ヨコナデ、見込みナデ	良好	径0.1cm以下黄金光沢粒子少量	淡橙茶色/淡橙茶色	河野G-2類	
S-223 14-K11	第43図-22	京都系土師器/皿	(14.8)	2.8	—	—	—	手づくね	口縁部ヨコナデ、体部ナデ	口縁部ヨコナデ、体部ナデ	良好	径0.2cm以下褐色、白色粒子少量	暗黄茶色/暗黄茶色	塩地編年第2期 2次被熱により内面黒化	
S-223 14-J11	第43図-23	青磁(龍泉窯系)/碗	(14.0)	4.3+ α	—	—	—	ロクロ	鎧蓮弁文一施釉	施釉	良好	径0.2cm以下白色粒子少量	暗緑灰色/暗緑灰色	太宰府龍泉窯系青磁碗III-2C類	
S-223 14-N11	第43図-24	中国産青磁/碗	—	2.6+ α	(5.8)	—	—	ロクロ	施釉、高台内露胎	施釉	良好	径0.1cm以下透明、白色粒子少量	綠灰色/綠灰色	—	
S-223 14-L11	第43図-25	青磁(龍泉窯系)/碗	—	2.5+ α	(5.0)	—	—	ロクロ	施釉、高台内露胎	見込み中央スタンプ「福」か一施釉	良好	径0.1cm以下白色粒子少量	浅緑色(光沢あり)/浅緑色(光沢あり)	—	
S-223 14-M11	第43図-26	青磁(同安窯系)/碗	—	1.6+ α	(4.6)	—	—			露胎	施釉	良好	—	灰黄色/黄綠色(光沢アリ)	—
S-223 14-M10	第43図-27	中国産青磁/碗	—	5.1+ α	4.8	—	—	ロクロ	蓮弁文一施釉、細かい貫入、墨書き~高台内露胎	施釉	良好	径0.1cm以下白色粒子少量、やや陶質に近い	黄綠色/黄綠色(やや光沢あり)	⟨S-223 P-3⟩ 2次被熱による釉変	
S-223 14-K11	第43図-28	青磁(景德鎮窯系)/葵花皿	(10.4)	3.0	(5.1)	—	—	型づくり	施釉、墨書き一施釉	施釉	良好	径0.1cm以下白色、黑色粒子少量	綠灰色/綠灰色	—	
S-223 14-L10	第43図-29	中国産白磁/小杯	(6.4)	3.0	(2.4)	—	—	ロクロ	施釉、墨書き~高台内露胎	施釉、見込み露胎	良好	径0.1cm以下白色粒子少量	白灰色/白灰色	—	
S-223 14-H11	第43図-30	白磁(景德鎮窯系)/葵花皿	(16.0)	3.2	(8.2)	—	—	型づくり	体部模状沈線一施釉、墨書きケズリ	体部模状沈線一施釉	良好	径0.1cm以下白色粒子少量	白灰色(やや光沢あり)/白灰色(やや光沢あり)	—	
S-223 14-H11	第43図-31	青花(景德鎮窯系)/碗	(12.2)	5.2+ α	—	—	—	ロクロ	口縁部下2条界線、体部蛟龍文・草花文一施釉	口縁部下2条界線一施釉	良好	径0.1cm以下白色粒子少量	透明釉/透明釉	—	
S-223 14-I11	第43図-32	青花(景德鎮窯系)/碗	(12.0)	4.4+ α	—	—	—	ロクロ	口縁部下1条界線、体部草花文描き一施釉	口縁部下4方櫛文、体部上半1条界線一施釉	良好	径0.1cm以下白色粒子少量	透明釉/透明釉	—	
S-223 14-J11	第43図-33	青花(景德鎮窯系)/蓋	5.2	2.6+ α	—	—	—	ロクロ	つまみ・鎧部各2条界線、天井部如意雲文一施釉	鎧部・天井頂部中央施釉、口縁部~天井部露胎(輪状に釉剥ぎ)	良好	径0.1cm以下白色粒子少量	透明釉/透明釉	⟨S-223 P-28⟩	
S-223 14-H11	第43図-34	青花(景德鎮窯系)/碗	—	2.0+ α	4.8	—	—	ロクロ	体部文様、高台2条界線、高台内1条界線内「天下太平」一施釉、墨書き	見込み境2条界線内貴人一施釉	良好	径0.1cm以下白色粒子少量	透明釉/透明釉	小野分類染付碗E群 2次被熱による釉変	
S-223 14-N10	第43図-35	青花(景德鎮窯系)/碗	—	1.8+ α	4.3	—	—	ロクロ	体部草花、高台境3条界線、高台内1条界線内「富貴佳器」一施釉、墨書き	見込み境2条界線内花文一施釉	良好	径0.1cm以下白色粒子少量	透明釉/透明釉	小野分類染付碗E群 2次被熱による痕跡あり	
S-223 14-I11	第43図-36	青花(景德鎮窯系)/碗	—	3.3+ α	4.0	—	—	ロクロ	高台境1条界線、高台内字款状「福」一施釉、墨書き	見込み境2条界線内草花文一施釉	良好	径0.1cm以下白色粒子少量	透明釉/透明釉	小野分類染付碗E群	

表17 遺物観察表(15)

遺構番号	図版番号	種類/器種	法量(cm) ()は復元					成形	調整・装飾		焼成	胎土(石材)	色調・釉調外面/内面	備考
			口径/最大長	器高/最大幅	底径/最大厚	孔径	重量		外面	内面				
S-223 14-N11	第43図-37	青花(景德鎮窯系)／碗	(11.6)	5.9	(4.6)	—	—	口クロ	口縁部下・高台境内1条界線、高台内2条界線内「萬福攸同」口・施釉、蓋付釉剥ぎ	口縁部下1条界線、体部下半2条界線内蓮弁文帶、見込み1条界線内文様(仙人・橋)→施釉	良好	径0.1cm以下白色粒子少量	透明釉／透明釉	(S-223 P-9) 小野分類染付碗E群 体部に砂粒が付着
S-223 14-M10	第44図-38	青花(景德鎮窯系)／皿	—	1.1+ α	(5.4)	—	—	口クロ	高台内2条界線内「宣德年造」→施釉、蓋付釉剥ぎ	施釉	良好	径0.1cm以下白色粒子少量	透明釉／透明釉	—
S-223 14-F11	第44図-39	青花(景德鎮窯系)／皿	(13.2)	3.1	(6.8)	—	—	口クロ	高台内字款状→施釉、蓋付釉剥ぎ	口縁部下1条界線、体部上半唐草文、体部下半~見込み2条界線・見込み鉢文・鳳凰文→施釉	良好	径0.1cm以下白色粒子少量	透明釉／透明釉	小野分類染付皿E群 蓋付一部砂粒付着
S-223 14-H11	第44図-40	青花(景德鎮窯系)／皿	(19.2)	3.1	(10.2)	—	—	口クロ	口縁部下唐草文、体部2条界線内果実文、高台1条界線→施釉、蓋付釉剥ぎ	口縁部下2条界線内文様、見込み境2条界線内渦文帶、見込み2条界線・文様(雲文・鳳凰文)→施釉	良好	径0.1cm以下白色粒子少量	透明釉／透明釉	小野分類染付皿E群 蓋付砂粒付着 遺構間接合(搅乱)
S-223 14-M10	第44図-41	中国南方産褐釉陶器／壺×蓋	—	8.3+ α	—	—	—	粘土紐 積上げ	体部施釉	体部ナデ	良好	径0.1cm以下黑色 色・褐色・白色粒子少量	茶褐色／淡黃茶色	遺構間接合(搅乱)
S-223 14-H11	第44図-42	产地不明陶器／瓶×壺	—	3.8+ α	(13.0)	—	—	粘土紐 積上げ	体部ヨコナデ、底部ナデ	体部ヨコナデ、底部ナデ・接合痕アリ	良好	径0.1cm以下白色 色・褐色粒子少量	灰茶色／暗灰茶色	—
S-223 14-N11	第44図-43	朝鮮王朝産灰青釉陶器／碗	—	2.3+ α	(4.8)	—	—	口クロ	施釉、蓋付目痕	施釉	良好	径0.1cm以下白色 粒子少量	黒緑色／黒緑色	雜釉
S-223 14-H11	第44図-44	朝鮮王朝産灰青釉陶器／碗	—	4.2+ α	(5.5)	—	—	口クロ	施釉、蓋付目痕	施釉、見込み目痕	良好	径0.1cm以下白色 ・黒色粒子少量、 磁質に近い	暗灰緑色／暗 灰緑色	雜釉
S-223 14-J11	第44図-45	備前焼／鉢	10.0	7.6	5.8	—	—	粘土紐 積上げ か	ナデ、底部「〇」 窯印か、自然釉(黄 緑色)	ナデ、自然釉(黄 緑色)	良好	径0.3cm以下褐色 粒子、径0.1cm以 下白色・黑色粒子少 量	赤茶色／赤茶色	—
S-223 14-J11	第44図-46	備前焼／鉢	(9.9)	7.6	(5.2)	—	—	粘土紐 積上げ か	ナデ、口縁部自然 釉(黄緑色)	ナデ	良好	径0.4cm以下褐色 粒子、径0.1cm以 下白色・黑色粒子少 量	暗赤茶色／暗 赤茶色	—
S-223 14-J11	第44図-47	備前焼／鉢	(10.0)	7.4	(7.6)	—	—	粘土紐 積上げ か	口縁~体部ヨコナ デ、底部ナデ	口縁~体部ヨコナ デ	良好	径0.4cm以下褐色 粒子少量	赤茶色／赤茶色	—
S-223 14-H11	第44図-48	瀬戸・美濃産陶器／天目碗	(11.5)	4.3+ α	—	—	—	口クロ	施釉、体部下半露 胎	施釉	良好	径0.1cm以下褐色 粒子少量	黒茶釉／茶褐 釉	藤沢編年大窯第4段階
S-223 14-J11	第44図-49	瀬戸・美濃産陶器／天目碗	(11.2)	4.5+ α	—	—	—	口クロ	施釉、体部下半露 胎	施釉	良好	径0.1cm以下白色 粒子少量	暗茶褐釉(やや 光沢あり)／暗 茶褐釉(やや光 沢あり)	(S-223 P-42) 藤沢編年大窯第4段階
S-223 14-K11	第44図-50	瀬戸・美濃産陶器／天目碗	(12.0)	4.4+ α	—	—	—	口クロ	施釉、体部下半露 胎	施釉	良好	径0.1cm以下白色 粒子少量	暗茶褐釉／暗 茶褐釉	藤沢編年大窯第3~4段階
S-223 14-N11	第44図-51	瀬戸・美濃産陶器／天目碗	(12.7)	5.0+ α	—	—	—	口クロ	施釉、体部下半露 胎	施釉	良好	径0.1cm以下白色 ・黒色粒子少量	黒褐釉(光沢あ り)／黒褐釉(光 沢あり)	藤沢編年大窯第4段階
S-223 14-K11	第44図-52	備前焼／平鉢	(25.6)	4.0	(17.2)	—	—	粘土紐 積上げ か	口縁~体部ヨコナ デ、底部ナデ	口縁~体部ヨコナ デ	良好	径0.1cm以下白色 粒子少量	暗赤茶色／暗 赤茶色	重ね焼きの痕跡
S-223 14-M11	第44図-53	土師質土器／燭台	8.4	8.1	8.0	—	—	手づくね	台部ナデ、底部ナ デ	器面剥離・付着物 のため調整不明瞭、 中央穿孔貫通せ ず	良好	径0.1cm以下白色 ・褐色粒子少量	淡黄茶色／淡 黄茶色	(S-223 P-46) 田中分類土師器燭台B類 見込み~体部外面痕
S-223 14-N10	第44図-54	瓦質土器／火鉢	—	6.7+ α	—	—	—	粘土紐 積上げ	口縁部下2条突帯間 車輪文スタンプ	器面剥離のため調 整不明瞭	良好	径0.2cm以下白 色・褐色・黑色光 沢粒子少量	暗灰茶色／暗 灰茶色	—
S-223 14-M11	第45図-55	瓦質土器／焼塩壺	(3.8)	7.1+ α	—	—	—	粘土紐 積上げ	ナデ、器面剥離	ナデ、接合痕	良好	径0.2cm以下褐色 粒子、径0.1cm以 下白色粒子少量	淡橙茶色／淡 橙茶色	(S-223 P-15) 2次被熱により黒化
S-223 14-G11	第45図-56	瓦質土器・脚付浅鉢	(14.5)	5.1	(8.0)	—	—	口クロ	口縁部ヨコナデ、 体部ナデ	口縁~体部ヨコナ デ、見込ナデ	良好	径0.1cm以下白 色・黒色光沢・褐 色粒子少量	淡橙茶色／淡 橙茶色	—
S-223 14-N11	第45図-57	瓦質土器／壺	(23.6)	5.0+ α	—	—	—	粘土紐 積上げ	ナデ	口縁部ヨコナデ、 肩部工具ナデ	良好	径0.1cm以下白 色・粒子少量	暗灰青色／灰 茶色	—
S-223 14-L11	第45図-58	瓦質土器／茶釜	—	9.4+ α	—	—	—	粘土紐 積上げ	ミガキ	ナデ	良好	径0.1cm以下白 色・黄金光沢粒子 少量	灰橙色／黒茶 色	(S-223 P-19) 内面様状付着物
S-223 14-L10	第45図-59	土製品／管状土錘	6.0	1.5	0.6	0.4	—	手づくね	ミガキ	—	良好	径0.1cm以下白色 粒子少量	黄橙色	田中分類管状土錘A類
S-223 14-H11	第45図-60	土製品／器種不明	5.0	5.0	2.2	—	—	手づくね	ナデ	ナデ	良好	径0.1cm以下白 色・黒色光沢・褐 色粒子少量	暗茶褐色／暗 茶褐色	—
S-223 14-G11	第45図-61	瓦／丸瓦	21.0+ α	13.8	2.4	—	—	タタキ	凸面繩目タタキ ナデ	凸面コピキA痕跡・ 吊り組痕・ナデ、 内叩き痕	良好	径0.7cm以下褐色 粒子、径0.1cm以 下黄金光沢粒子少 量	凸面茶灰色／ 凹面茶灰色	—
S-223 14-H11	第45図-62	瓦／平瓦	20.4+ α	21.6	1.9	—	—	タタキ	凹面布目痕・ナデ	凸面コピキA痕跡・ ナデ	良好	径0.3cm以下白色 粒子、径0.1cm以 下黑色光沢・褐色 粒子少量	凹面暗茶灰色 ／凸面暗茶灰色	2次被熱痕跡
S-223 14-L11	第45図-63	錢貨／北宋錢	2.5	—	0.1	1辺 0.7	3.6	铸造	「天聖元寶」真書	無文	—	—	—	初鑄造年1023年
S-223 14-K11	第45図-64	ガラス製品／不明	2.4+ α	2.6+ α	0.6	—	—	—	—	—	—	—	綠灰色	(S-223 P-26)
S-223 14-J11	第46図-65	木製品／木札	5.6	5.1	0.9	—	—	—	「廿」字状の墨書	無文	—	—	—	—
S-223 14-N10	第46図-66	漆器／椀	—	4.2+ α	8.2	—	—	挽物	無文	見込みに赤色漆で 丸に「藤の左三つ 巴」	—	—	黑色／黑色	(S-223 P-8)
S-223 14-N10	第46図-67	漆器／椀	—	3.6+ α	—	—	—	挽物	体部に赤色漆で丸 に「唐花亀甲文」	無文	—	—	黑色／赤色	(S-223 P-12)

表 18 遺物観察表^⑯

遺構番号	図版番号	種類／器種	法量(cm) ()は復元					成形	調整・装飾		焼成	胎土(石材)	色調・釉調外面／内面	備考
			口径／最大長	器高／最大幅	底径／最大厚	孔径	重量		外面	内面				
S-223 14-N10	第46図-68	漆器／椀	—	2.6+ α	9.0	—	—	挽物	無文	無文	—	—	黒色／黒色	(S-223 P-36)
S-223 14-M11	第46図-69	漆器／椀	—	2.2+ α	(9.3)	—	—	挽物	高台裏に赤色漆で「上」字	見込みに赤色漆で「唐花龜甲文」	—	—	黒色／黒色	(S-223 P-4)
S-223 14-N10	第46図-70	漆器／椀	(14.4)	5.8	(7.2)	—	—	挽物	体部に赤色漆で文様	無文	—	—	黒色／赤色	(S-223 P-35)
S-223 14-M11	第46図-71	漆器／椀	12.6	3.2+ α	—	—	—	挽物	体部に赤色漆で丸に「抱き沢瀉文」	見込みに赤色漆で丸に「抱き沢瀉文」	—	—	黒色／黒色	(S-223 P-7)
S-223 14-M10	第46図-72	漆器／椀	(13.6)	5.8	7.2	—	—	挽物	無文	無文	—	—	黒色／赤色	(S-223 P-3)
S-223 14-N10	第46図-73	漆器／椀	(13.8)	7.2	6.8	—	—	挽物	無文	無文	—	—	黒色／赤色	(S-223 P-38)
S-223 14-H11	第46図-74	漆器／椀	13.0	7.6+ α	7.0	—	—	挽物	高台裏に赤色漆で「三つ星」状記号	無文	—	—	黒色／赤色	—
S-223 14-H11	第46図-75	漆器／椀	(11.5)	8.0	(7.3)	—	—	挽物	体部に赤色漆で丸に「抱き沢瀉文」	見込みに赤色漆で丸に「抱き沢瀉文」	—	—	黒色／黒色	—
S-223	第46図-76	木製品／箸	20.4+ α	0.7	0.5	—	—	—	—	—	—	—	—	—
S-223 14-M11	第46図-77	木製品／箸	25.7+ α	0.6	0.6	—	—	—	—	—	—	—	—	—
S-223 14-K11	第46図-78	骨角製品／笄	17.1	0.5	0.4	—	—	擦痕	擦痕	擦痕	—	—	—	—
S-223 14-O10	第46図-79	木製品／不明	7.6	7.6	0.6	—	—	—	—	—	—	—	—	—
S-223 14-K11	第46図-80	木製品／不明	5.0+ α	10.0	0.5	—	—	—	—	—	—	—	—	(S-223 P-16)
S-223 14-111	第46図-81	木製品／杓子	20.1	4.8	0.7	—	—	—	—	—	—	—	—	折敷の転用品
S-223 14-O10	第47図-82	木製品／毬杖の玉	3.5+ α	3.0+ α	2.6+ α	—	—	—	—	—	—	—	—	—
S-223 14-M10	第47図-83	木製品／毬杖の玉	3.5	3.0	2.4+ α	—	—	—	—	—	—	—	—	—
S-223 14-O10	第47図-84	木製品／毬杖の玉	4.1	3.6	2.4+ α	—	—	—	—	—	—	—	—	—
S-223 14-L11	第47図-85	木製品／毬杖の玉	4.3	4.4	2.8+ α	—	—	—	—	—	—	—	—	—
S-223 14-K11	第47図-86	木製品／毬杖の玉	4.0	4.2	4.0	—	—	—	—	—	—	—	—	—
S-223 14-H11	第47図-87	木製品／毬杖の玉	3.9	4.4	3.5	—	—	—	—	—	—	—	—	—
S-223 14-O10	第47図-88	木製品／毬杖の玉	3.5	4.9	2.6	—	—	—	—	—	—	—	—	—
S-223 14-K11	第47図-89	木製品／毬杖の玉	6.0	5.6	3.1+ α	—	—	—	—	—	—	—	—	—
S-223 14-K11	第47図-90	木製品／毬杖の玉	5.1	6.0	5.1	—	—	—	—	—	—	—	—	—
S-223 14-O10	第47図-91	木製品／毬杖の玉	5.2	6.3	3.5+ α	—	—	—	—	—	—	—	—	—
S-223 14-M11	第47図-92	木製品／曲物蓋	28.2+ α	9.9+ α	1.0	—	—	—	—	—	—	—	漆塗り	(S-223 P-34)
S-223 14-L11	第47図-93	木製品／下駄齒	9.5	5.4+ α	2.6	—	—	歯を台形に抉込む	—	—	—	—	—	—
S-223 14-L11	第47図-94	木製品／下駄	15.6+ α	8.7	3.2	—	—	—	—	—	—	—	—	(S-223 P-11) 連歯下駄
S-223 14-K11	第48図-95	木製品／下駄	17.3	10.6	5.8	—	—	—	—	—	—	—	—	(S-223 P-23) 連歯下駄
S-224 14-O11	第49図-1	土師器／壺	11.9	2.8	8.3	—	—	ロクロ	口縁～体部ヨコナデ、底部ナデ	口縁～体部ヨコナデ、見込みナデ	良好	径0.1cm以下黒色粒子少量	暗橙茶色／暗橙茶色	ロクロ目
S-224 14-O10	第49図-2	土師器／皿	13.2	3.1	7.2	—	—	ロクロ	口縁～体部ヨコナデ、底部回転糸切り離し	口縁～体部ヨコナデ、見込みナデ	良好	径0.1cm以下白色粒子少量	淡橙茶色／暗橙茶色	ロクロ目
S-224 14-H11	第49図-3	京都系土師器／皿	8.4	2.0	—	—	—	手づくね	口縁部ヨコナデ、体部ナデ	ナデアゲ	良好	径0.1cm以下白色粒子少量	淡橙茶色／淡橙茶色	(S-224 P-25) 塩地編年第2期
S-224 14-O10	第49図-4	京都系土師器／皿	12.1	2.8	—	—	—	手づくね	口縁部ヨコナデ、体部ナデ	ナデアゲ	良好	径0.1cm以下白色粒子少量	淡橙茶色／淡橙茶色	(S-224 P-20) 塩地編年第2期
S-224 14-H11	第49図-5	京都系土師器／皿	12.6	2.8	—	—	—	手づくね	口縁部ヨコナデ、体部ナデ	ナデアゲ	良好	径0.1cm以下白色粒子少量	淡黄茶色／淡黄茶色	塩地編年第2期
S-224 14-H11	第49図-6	京都系土師器／皿	8.5	2.0+ α	—	—	—	手づくね	口縁部ヨコナデ、体部ナデ	ナデアゲ	良好	径0.1cm以下白色粒子少量	淡黄茶色／淡黄茶色	(S-224 P-24) 塩地編年第2期
S-224 14-H11	第49図-7	京都系土師器／皿	(12.6)	2.4	—	—	—	手づくね	口縁部ヨコナデ、体部ナデ	口縁部ヨコナデ、体部ナデ	良好	径0.1cm以下褐色粒子少量	茶灰色／茶灰色	塩地編年第2期
S-224 14-H11	第49図-8	京都系土師器／皿	(10.8)	3.7	—	—	—	手づくね	口縁部ヨコナデ、体部ナデ	口縁部ヨコナデ、体部ナデ	良好	径0.1cm以下褐色粒子少量	淡橙茶色／淡橙茶色	河野G-2類
S-224 14-H11	第49図-9	京都系土師器／皿	8.6	2.0	—	—	—	手づくね	口縁部ヨコナデ、体部ナデ	ナデアゲ	良好	径0.2cm以下褐色粒子少量	淡橙茶色／淡橙茶色	塩地編年第2期
S-224 14-H11	第49図-10	白磁(景德鎮窯系)／葵花皿	(13.4)	3.2	(7.2)	—	—	型づくり	高台内字款状「福」→施釉、蓋付釉剥ぎ	施釉	良好	径0.1cm以下白色粒子少量	白灰色(やや光沢あり)／白灰色(やや光沢あり)	(S-224 P-26)
S-224 14-K10	第49図-11	青花(景德鎮窯系)／小壺	—	2.3+ α	2.4	—	—	ロクロ	体部草花文、体部下半・高台壠各1条界縁→施釉、蓋付釉剥ぎ	施釉、見込み輪状釉剥ぎ	良好	径0.1cm以下白色粒子少量	透明釉／透明釉	見込露胎部に重ね焼き痕跡
S-224 14-L11	第49図-12	備前焼／壺	—	6.3+ α	—	—	—	粘土紐積上げ	ヨコナデ	ヨコナデ	良好	径0.2cm以下白色粒子少量	暗赤茶色／赤茶色	備岡編年中世3期b
S-224 14-O11	第49図-13	備前焼／甕	—	7.8+ α	—	—	—	粘土紐積上げ	ヨコナデ	口縁部ナデ、頭部工具ナデ	良好	径1.0cm以下灰色粒子、径2.0cm以下黒色粒子少量	灰青色／灰青色	—

表19 遺物観察表(17)

遺構番号	図版番号	種類／器種	法量(cm) ()は復元					成形	調整・装飾		焼成	胎土(石材)	色調・釉調外顔／内顔	備考
			口径／最大長	器高／最大幅	底径／最大厚	孔径	重量		外面	内顔				
S-224 14-L11	第49図-14	瀬戸・美濃産陶器／天目碗	(11.2)	4.0+ α	—	—	—	ロクロ	施釉、体部下半露胎	施釉	良好	径0.1cm以下白色粒子少量	黒褐釉(やや光沢あり)／黒褐釉(やや光沢あり)	藤沢編年大窯第3～4段階
S-224 14-L11	第49図-15	瀬戸・美濃産陶器／天目碗	(11.0)	5.1+ α	—	—	—	ロクロ	施釉、体部下半露胎	施釉	良好	径0.2cm以下白色粒子少量	黒茶釉(やや光沢あり)／黒茶釉(やや光沢あり)	藤沢編年大窯第3～4段階
S-224 14-J11	第49図-16	瀬戸・美濃産陶器／天目碗	(11.4)	4.4+ α	—	—	—	ロクロ	施釉、体部下半露胎	施釉	良好	径0.1cm以下白色粒子少量	黒褐釉／黒褐釉	藤沢編年大窯第3～4段階
S-224 14-J11	第49図-17	瀬戸・美濃産陶器／天目碗	(11.6)	5.5+ α	—	—	—	ロクロ	施釉、体部下半露胎	施釉	良好	径0.1cm以下白色粒子少量	茶褐色／茶褐色	藤沢編年大窯第3～4段階
S-224 14-111	第49図-18	瀬戸・美濃産陶器／天目碗	11.6	5.6	4.0	—	—	ロクロ	施釉、体部下半露胎	施釉	良好	径0.1cm以下白色粒子少量	茶褐色／茶褐色	(S-224 P-15) 藤沢編年大窯第3～4段階
S-224 14-H11	第49図-19	瀬戸・美濃産陶器／天目碗	12.0	6.1	3.4	—	—	ロクロ	施釉、体部下半釉 ハギ	施釉	良好	径0.1cm以下白色粒子少量	暗茶褐色／暗茶褐色	(S-224 P-27) 藤沢編年大窯第3～4段階
S-224 14-J11	第49図-20	石製品／硯	4.5+ α	2.3+ α	0.8	—	—	ケズリ	硯陰、硯側研ぎ	硯面研ぎ	—	頁岩×粘板岩	暗緑灰色	—
S-224 14-111	第49図-21	鉄製品／鎌	12.1+ α	14.1+ α	0.8	—	—	—	—	—	—	—	—	木柄一部残存
S-224 14-L11	第49図-22	漆器／椀	(10.5)	4.3+ α	—	—	—	挽物	体部に黒色漆で「梅花文」など	無文	—	—	赤色／赤色	(S-224 P-1)
S-224 14-J11	第49図-23	漆器／椀	—	9.0	(7.5)	—	—	挽物	体部に赤色漆で文様	無文	—	—	黒色／黒色	—
S-224 14-M10	第49図-24	木製品／毬杖の玉	3.5	3.5	3.1	—	—	—	—	—	—	—	—	—
S-224 14-H11	第49図-25	木製品／毬杖の玉	3.6	1.2+ α	1.0+ α	—	—	—	—	—	—	—	—	—
S-224 14-M10	第49図-26	木製品／柄	14.5	1.7	1.5	長辺 0.7 短辺 0.8	—	—	—	—	—	—	—	—
S-224 14-H11	第49図-27	木製品／不明	5.5	5.7	2.6	1.8	—	—	—	—	—	—	—	—
S-224 14-M11	第49図-28	木製品／不明	12.2	11.5	2.2	3.0	—	—	—	—	—	—	—	—
S-224 14-L11	第50図-29	骨角製品／笄	13.5	0.5	0.4	—	—	—	擦痕	擦痕	—	—	—	(S-224 P-10)
S-224 14-D10	第50図-30	骨角製品／笄	13.3	0.8	0.3	—	—	—	擦痕	擦痕	—	—	—	—
S-224 14-H11	第50図-31	木製品／箸	20.8	0.7	0.6	—	—	—	—	—	—	—	—	—
S-224 14-H11	第50図-32	木製品／箸	21.4	0.7	0.4	—	—	—	—	—	—	—	—	—
S-224 14-H11	第50図-33	木製品／箸	20.5+ α	0.8	0.5	—	—	—	—	—	—	—	—	—
S-224 14-H11	第50図-34	木製品／箸	19.8+ α	0.7	0.6	—	—	—	—	—	—	—	—	—
S-224 14-M11	第50図-35	木製品／箸	21.2+ α	0.6	0.8	—	—	—	—	—	—	—	—	—
S-224 14-H11	第50図-36	木製品／箸	21.7	0.7	0.7	—	—	—	—	—	—	—	—	—
S-224 14-H11	第50図-37	木製品／箸	24.3	0.6	0.5	—	—	—	—	—	—	—	—	—
S-224 14-N11	第50図-38	木製品／形代	17.1+ α	3.3+ α	0.2	—	—	赤色顔料	赤色顔料	—	—	—	—	—
S-224 14-H11	第50図-39	木製品／不明	9.3	7.9	0.7	0.2	—	—	—	—	—	—	—	—
S-224 14-O11	第50図-40	木製品／蓋か	12.8+ α	5.7+ α	0.7	—	—	—	—	—	—	—	—	—
S-224 14-O11	第50図-41	木製品／不明	12.8	6.6	2.3	—	—	—	—	—	—	—	—	—
S-224 14-L11	第50図-42	木製品／建糸部材か	14.0	10.4	3.0	0.4	—	—	—	—	—	—	—	(S-224 P-9)
S-224 P-4	第51図-43	木製品／下駄	17.6	10.2+ α	4.4	—	—	前歯中央を抉る	—	—	—	—	—	連歯下駄
SD210 14-E11	第52図-1	土師器／小皿	8.1	2.3	4.4	—	—	ロクロ	口縁～体部ヨコナデ、底部回転糸切り離し	口縁～体部ヨコナデ、見込みナデ	良好	径0.1cm以下白色粒子少量	淡橙茶色／淡橙茶色	口縁部煤痕
SD210 14-F10	第52図-2	京都系土師器／皿	8.8	2.1	—	—	—	手づくね	口縁部ヨコナデ、体部ナデ	ナデアゲ	良好	径0.1cm以下白色粒子少量	淡橙茶色／淡橙茶色	塙地編年第2期 遺構間接合(S-232 14-F10)
SD210 14-F10	第52図-3	京都系土師器／皿	12.2	2.5	—	—	—	手づくね	口縁部ヨコナデ、体部ナデ	ナデアゲ	良好	径0.1cm以下褐色粒子少量	淡橙茶色／淡橙茶色	塙地編年第2期 遺構間接合(S-232 14-F10)
SD210 14-F10	第52図-4	京都系土師器／皿	7.9	1.9+ α	—	—	—	手づくね	口縁部ヨコナデ、体部ナデ	ナデアゲ	良好	径0.1cm以下白色粒子少量	暗橙茶色／暗橙茶色	塙地編年第2期 遺構間接合(S-233 14-F11)
SD210 14-F10	第52図-5	京都系土師器／皿	8.8	2.2	—	—	—	手づくね	口縁部ヨコナデ	ナデアゲ	良好	径0.1cm以下白色、褐色粒子少量	淡橙茶色／淡橙茶色	塙地編年第2期 口縁部内外面煤痕 遺構間接合(S-232 14-F10)
SD210 14-F10	第52図-6	京都系土師器／皿	9.1	2.1	—	—	—	手づくね	口縁部ヨコナデ、体部ナデ	ナデアゲ	良好	径0.1cm以下白色、黒色粒子少量	淡橙茶色／淡橙茶色	塙地編年第2期 遺構間接合(S-232 14-F10)
SD210 14-E11	第52図-7	京都系土師器／皿	12.8	2.8	—	—	—	手づくね	口縁部ヨコナデ、体部ナデ	ナデ	良好	径0.1cm以下白色、褐色粒子少量	淡橙茶色／淡橙茶色	塙地編年第2期
SD210 14-F11	第52図-8	京都系土師器／皿	8.6	2.0+ α	—	—	—	手づくね	口縁部ヨコナデ、体部ナデ	ナデアゲ	良好	径0.1cm以下褐色粒子少量	淡橙茶色／淡橙茶色	塙地編年第2期 口縁部内外面煤痕 遺構間接合(S-233 14-F11)
SD210 14-F10	第52図-9	京都系土師器／皿	8.7	1.9	—	—	—	手づくね	口縁部ヨコナデ、体部ナデ	ナデアゲ	良好	径0.1cm以下褐色粒子少量	淡橙茶色／淡橙茶色	塙地編年第2期 口縁部内外面煤痕 遺構間接合(S-233 14-F10)
SD210 14-F10	第52図-10	京都系土師器／皿	8.8	2.2	—	—	—	手づくね	口縁部ヨコナデ、体部ナデ	ナデアゲ	良好	径0.3cm以下白色粒子、径0.1cm以下褐色粒子少量	淡橙茶色／淡橙茶色	塙地編年第2期 遺構間接合(S-232 14-F10)

表 20 遺物観察表⑩

遺構番号	図版番号	種類/器種	法量(cm) ()は復元					成形	調整・装飾		焼成	胎土(石材)	色調・釉調 外面/内面	備考
			口径/最大長	器高/最大幅	底径/最大厚	孔径	重量		外面	内面				
SD210 14-F11	第52図-11	京都系土師器/皿	12.1	2.2+ α	—	—	—	手づくね	口縁部ヨコナデ、 体部ナデ	ナデアゲ	良好	径0.1cm以下褐色 粒子少量	淡橙茶色/暗 橙茶色	塩地編年第2期 2次被熱により内面黒化 遺構間接合(S-233 14-F11)
SD210 14-E11	第52図-12	京都系土師器/皿	12.2	2.7	—	—	—	手づくね	口縁部ヨコナデ、 体部ナデ	口縁部ヨコナデ、 体部ナデ	良好	径0.1cm以下褐色 粒子少量	淡橙茶色/淡 橙茶色	塩地編年第2期
SD210 14-E11	第52図-13	京都系土師器/皿	11.2	3.0	—	—	—	手づくね	口縁部ヨコナデ、 体部ナデ	ナデアゲ	良好	径0.1cm以下褐色 粒子少量	橙茶色/橙茶 色	河野G-2類
SD210 14-F10	第52図-14	京都系土師器/皿	12.4	2.4	—	—	—	手づくね	口縁部ヨコナデ、 体部ナデ	ナデアゲ	良好	径0.1cm以下白色 粒子少量	暗橙茶色/暗 橙茶色	塩地編年第2期 遺構間接合(S-232 14-F10)
SD210 14-E11	第52図-15	中国産青磁/碗	(13.2)	4.9	(4.9)	—	—	口クロ	口縁部下波状文・1 条界線一施釉、疊 付・高台内露胎	見込み境1条界線一 施釉	良好	径0.1cm以下黒色 粒子少量	綠灰色(光沢あ り)/綠灰色(光沢あ り)	湯葉城青磁碗F類
SD210 14-F10	第52図-16	中国産青磁/碗	—	1.9+ α	5.6	—	—	口クロ	高台露胎	施釉	良好	径0.1cm以下白色 粒子少量、やや陶 質に近い	淡橙茶色/浅 黃綠色	遺構間接合(S-232 14-F10)
SD210 14-F10	第52図-17	中国産青磁/皿	(11.5)	2.9	4.2	—	—	口クロ	施釉、疊付釉ケズ り、細かい貢入	施釉、細かい貢入	良好	径0.1cm以下白色 粒子少量、やや陶 質に近い	淡綠灰色(透明 釉に近い)/淡 綠灰色(透明釉 に近い)	遺構間接合(S-200 14-F10 · S-233 14-F10)
SD210 14-E11	第52図-18	青花(景德鎮窯 系)/碗	(16.2)	5.7+ α	—	—	—	口クロ	口縁部下2条界線、 体部下半1条界線内 文様(龍・波涛 文)一施釉	口縁部下四方櫛文 一施釉	良好	径0.1cm以下白色 粒子少量	透明釉/透明 釉	—
SD210 14-F10	第52図-19	青花(景德鎮窯 系)/碗	(9.4)	4.5	(3.4)	—	—	口クロ	口縁部下1条界線、 体部文様(唐子、 虫)、高台境2条界 線、高台内「寿」 一施釉、疊付釉ケズ り	口縁部下・見込み 境各2条界線、見込み 文様一施釉	良好	径0.1cm以下白色 粒子少量	透明釉/透明 釉	小野分類染付碗B群 遺構間接合(S-232 14-F10)
SD210 14-E11	第52図-20	青花(景德鎮窯 系)/碗	(12.0)	5.5+ α	—	—	—	口クロ	口縁部下2条界線、 体部文様(草花、 鳥)体部下半1条界 線一施釉	口縁部下・見込み 各2条界線一施釉	良好	径0.1cm以下白色 粒子少量	透明釉/透明 釉	—
SD210 14-F10	第52図-21	青花(景德鎮窯 系)/碗	(12.0)	6.0	4.8	—	—	口クロ	口縁部下・高台境 各2条界線、体部文 様(折枝・蝶)一施 釉	口縁部下・見込み 各2条界線、見込み 内文様(桃)一施 釉	良好	径0.1cm以下白色 粒子少量	透明釉/透明 釉	小野分類染付碗E群 遺構間接合(S-210 14-E11 · S-232 14-F10)
SD210 14-F11	第52図-22	青花(漳州窯系) /碗	(6.8)	2.8+ α	—	—	—	口クロ	口縁端部1条界線、 口縁部下・体部半 各1条界線、体部下 半各1条界線、體 草花文一施釉、疊 付釉剥ぎ	口縁部下1条界線、 見込み境2条界線、 見込み草花文一施 釉	良好	径0.1cm以下白色 粒子少量、やや陶 質に近い	透明釉(やや灰 色味あり)/透明 釉(やや灰色 味あり)	遺構間接合(S-233 14-F11)
SD210 14-F11	第52図-23	青花(景德鎮窯 系)/皿	(10.6)	2.7	(6.2)	—	—	口クロ	施釉、疊付釉剥 ぎ、貢入	見込み境1条界線内 蚊龍文一施釉、貢 入	良好	径0.1cm以下白色 粒子少量	透明釉/透明 釉	小野分類染付皿E群 遺構間接合(S-233 14-F11)
SD210 14-E11	第52図-24	青花(景德鎮窯 系)/稜花皿	(18.8)	3.6	(10.0)	—	—	型づく りか	口縁部下4条界線内 渦文帶、体部竪状 沈線、高台境2条界 線半各1条界線、體 稜花文一施釉、疊 付釉剥ぎ	口縁部下4条界線内 渦文帶、見込み2条 界線内文様一施 釉	良好	径0.1cm以下白色 粒子少量	透明釉/透明 釉	小野分類染付皿F群 2次被熱により釉変
SD210 14-E11	第52図-25	白磁(景德鎮窯 系)/棱花皿	(12.4)	2.9	(7.0)	—	—	型づく り	施釉、疊付釉剥 ぎ、貢入	施釉	良好	径0.1cm以下白色 粒子少量	白灰色(やや光 沢あり)/白 色(やや光沢あ り)	—
SD210 14-F10	第52図-26	朝鮮王朝産粉青 沙器/碗	—	2.8+ α	—	—	—	口クロ	沈線・斜線文様帶 一白象嵌一施釉	沈線・斜線文様帶 一白象嵌一施釉	良好	径0.1cm以下白色 粒子少量、陶質に 近い	灰白色/灰白 色	影三島 遺構間接合(S-232 14-F10)
SD210 14-F11	第52図-27	产地不明陶器/ 壺×甕	(37.8)	32.2+ α	—	—	—	粘土紐 積上げ	施釉、口縁端部 施釉	施釉、粘土紐接合 痕跡、釉だれ	良好	径0.1cm以下白 色・黒色粒子少量	暗褐茶色/光 沢のある暗褐 灰色	遺構間接合(S-210 14-F11)
SD210 14-F11	第52図-28	产地不明陶器/ 壺×甕	—	7.4+ α	41.8	—	—	粘土紐 積上げ	施釉、底部露胎	施釉	良好	径0.1cm以下白 色・黒色粒子少量	暗褐茶色/光 沢のある暗褐 灰色	内面に赤褐色粘土付着 遺構間接合(S-233 14-F11)
SD210 14-E11	第52図-29	瀬戸・美濃産陶 器/天目碗	(9.1)	4.2+ α	—	—	—	口クロ	施釉、体部下半露 胎	施釉	良好	径0.1cm以下白色 粒子少量	黒褐色/黒褐 色	遺構間接合(S-233 14-F11)
SD210 14-F11	第52図-30	瀬戸・美濃産陶 器/天目碗	11.4	6.1	4.0	—	—	口クロ	施釉、体部下半露 胎	施釉	良好	径0.1cm以下白色 粒子少量	黒茶色/黒茶 色	SD210 P-1) 藤沢編年大窯第3~4段階 遺構間接合(S-232 14-F10 P-1)
SD210 14-F11	第52図-31	土質質土器/壺	—	2.7+ α	(3.6)	—	—	型づく りか	ナデ	ナデ	良好	径0.1cm以下白 色・白色粒子少量	灰白色/灰白 色	遺構間接合(S-233 14-F11)
SD210 14-F11	第53図-32	備前焼/鉢	(11.8)	9.9	(10.6)	—	—	粘土紐 積上げ	口縁~体部ヨコナ デ、底部ナデ	口縁~体部ヨコナ デ、底部ナデ	良好	径0.1cm以下白 色・褐色粒子少量	赤茶色/赤茶 色	遺構間接合(S-232 14-F11)
SD210 14-F11	第53図-33	備前焼/壺	(12.1)	8.0+ α	—	—	—	粘土紐 積上げ	口縁~体部ヨコナ デ、肩部ハラズ波 状文(1单位3条)	口縁~体部ヨコナ デ	良好	径0.4cm以下白 色粒子、径0.2cm以 下黒色粒子少量	赤茶色/黒褐 色	備岡編年中世6期a 遺構間接合(S-233 14-F11)
SD210 14-F10	第53図-34	備前焼/擂鉢	(31.0)	10.7+ α	—	—	—	粘土紐 積上げ	口縁部ヨコナデ、 体部交差縫目(1单 位5~9条)・自然釉 (黄茶色)	口縁部ヨコナデ、 体部交差縫目(1单 位5~9条)・自然釉 (黄茶色)	良好	径0.3cm以下褐色 粒子、径0.1cm以 下白色粒子少量	暗赤茶色/暗 赤茶色	備岡編年近世1期b 遺構間接合(S-232 14-F10)
SD210 14-N10	第53図-35	漆器/椀	(11.8)	3.8	(6.9)	—	—	挽物	体部に赤色漆で文 様	無文	—	—	黒色/赤色	(SD210 P-5)
SD210 14-N10	第53図-36	木製品/杖杖の 玉	3.3	2.9	2.4	—	—	—	—	—	—	—	—	—
SD210 14-N10	第53図-37	木製品/杖杖の 玉	3.7	4.7	3.1+ α	—	—	—	—	—	—	—	—	—
SD210 14-F11	第53図-38	木製品/下駄	11.9	7.7+ α	2.1	—	—	—	—	—	—	—	—	草履下駄
SD210 14-N10	第53図-39	木製品/下駄	15.8+ α	9.5	4.5	—	—	—	—	—	—	—	—	(SD210 P-4) 連齒下駄

表 21 遺物観察表^⑯

遺 構 番 号	圖 版 番 号	種類／器種	法量(cm) ()は復元					成形	調整・装飾		焼成	胎土(石材)	色調・釉調 外側／内側	備 考
			口径／ 最大長	器高／ 最大幅	底径／ 最大厚	孔径	重量		外面	内面				
SD210 14-N10	第53図-40	木製品／箸	23.4	0.7	0.5	—	—	—	—	—	—	—	—	—
SD210 14-F11	第53図-41	銭貨／北宋錢	2.6	—	0.1	1.2 0.6	3.6	鋳造	「宣和通寶」篆書	無文	—	—	—	初鑄年1119年
SP-127 14-111	第57図-1	京都系土師器／皿	(10.7)	2.2+ α	—	—	—	手づくね	口縁部ヨコナデ、 体部ナデ	口縁部ヨコナデ、 体部ナデ	良好	径0.1cm以下白色 粒子少量	橙茶色／橙茶 色	塙地編年第2期
SP-123 14-M11	第57図-2	青花(漳州窯系) ／碗	—	4.5+ α	5.2	—	—	ロクロ	高台境1条界線	ナデアゲ	良好	径0.1cm以下白色 粒子少量、陶質に 近い	透明釉(やや灰 色味あり)／透 明釉(やや灰色 味あり)	—
SX107 14-J11	第59図-1	京都系土師器／皿	8.9	2.4	—	—	—	ロクロ	口縁部ヨコナデ、 体部ナデ	ナデアゲ	良好	径0.1cm以下白色 粒子少量	淡橙茶色／淡 橙茶色	塙地編年第2期 口縁部内外面煤痕 2次被熱により黒化
SX107 14-111	第59図-2	京都系土師器／皿	9.0	2.2	—	—	—	ロクロ	付着物のため調整 不明瞭	ミガキ	良好	径0.1cm以下褐色 ・白色粒子少量	淡橙茶色／淡 橙茶色	〈SX107 P-6〉 塙地編年第2期 口縁部内外面煤痕
SX107 14-J11	第59図-3	京都系土師器／皿	11.4	3.6+ α	—	—	—	手づくね	付着物のため調整 不明瞭	付着物のため調整 不明瞭	良好	径0.1cm以下白色 粒子少量	淡黄茶色／淡 黄茶色	河野G-2類
SX107 14-J11	第59図-4	青磁(龍泉窯系) ／碗	(16.0)	3.6+ α	—	—	—	ロクロ	鎬蓮弁文一施釉	施釉	良好	径0.1cm以下白色 粒子少量	綠灰色／綠灰 色	〈SX107 P-14〉 太宰府龍泉窯系青磁碗II-b 類
SX107 14-J11	第59図-5	瓦質土器／高台 付坏	11.9	3.6	6.6	—	—	ロクロ	ミガキ	ミガキ	良好	径0.1cm以下白色 ・黄金光沢粒子 少量	淡橙茶色／淡 橙茶色	〈SX107 P-18〉
SX107 14-J10	第59図-6	瓦質土器／火鉢	—	13.2+ α	(36.0)	—	—	粘土紐 積上げ	ミガキ、体部下半2 条突帯双頭戲手飛 雲文のスタンプ	ナデ、粘土紐接合 痕	良好	径0.1cm以下白色 ・黄金光沢粒子 少量	黑灰色／黑灰 色	—
SX107 14-J10	第59図-7	瓦／丸瓦	30.5	12.7	2.2	—	—	タタキ	凸面縁目タタキ ナデ	凹面縁目A痕跡・ 布目痕・吊り紐 痕・ナデ	良好	径0.8cm以下白色 粒子少量	凸面 灰青色／ 凹面灰青色	〈SX107 P-16〉 海部郡産
SX107 14-J11	第59図-8	石製品／粉挽き 臼・上臼	(38.0)	10.0	9.9	2.5+ α	—	ケズリ	側面ケズリ、臼面 幅0.5~0.7cm残存 主溝1条・副溝3~5 条	窪みミガキ	—	安山岩	暗灰茶色	〈SX107 P-28〉
SX107 14-J11	第59図-9	石製品／粉挽き 臼・上臼	—	15.8+ α	7.2+ α	芯2.6 供5.0 挽1.8 ×3.0	—	ケズリ	側面ミガキ、臼面 磨耗、芯棒受け 部・幅0.3~0.5cm 残存主溝1条・副溝 3~6条・不規則、 芯棒受け	上縁部～窪みミガ キ、供給口、挽手 孔	—	安山岩	灰茶色	—
SX001 14-N10	第60図-1	土師器／坏	9.6	2.2	5.6	—	—	ロクロ	口縁～体部ナデ、 底部回転糸切り離 し	口縁～体部ヨコナ デ、見込みナデ	良好	径0.1cm以下白色 粒子少量	橙茶色／橙茶 色	口縁部内外面に煤痕
SX001 14-K10	第60図-2	京都系土師器／皿	9.1	2.1	—	—	—	手づくね	口縁部ヨコナデ、 体部ナデ	ナデアゲ	良好	径0.1cm以下褐色 ・白色粒子少量	淡橙茶色／淡 橙茶色	塙地編年第2期
SX001 14-N11	第60図-3	京都系土師器／皿	12.0	2.7	—	—	—	手づくね	口縁部ヨコナデ、 体部ナデ	口縁部ヨコナデ、 体部ナデ	良好	径0.1cm以下褐色 ・白色粒子少量	淡橙茶色／淡 橙茶色	塙地編年第2期 内面煤痕 2次被熱により黒化
SX001 14-N10	第60図-4	京都系土師器／皿	12.9	2.2	—	—	—	手づくね	付着物のため調整 不明瞭	ナデアゲ	良好	径0.1cm以下褐色 ・黄金光沢粒子 少量	淡橙茶色／淡 橙茶色	—
SX001 14-N11	第60図-5	京都系土師器／皿	(12.5)	2.9	—	—	—	手づくね	口縁部ヨコナデ、 体部ナデ	付着物のため調整 不明瞭	良好	径0.4cm以下褐色 粒子少量	淡橙茶色／淡 橙茶色	—
SX001 14-L10	第60図-6	青花(景德鎮窯系) ／碗	(12.2)	5.6	5.2	—	—	ロクロ	口縁部下・体部下 半各1条界線内文様 (橋・馬・鹿)、高 台境2条界線、高台 内字款状「富貴佳 器」一施釉、墨付 釉剥ぎ	口縁部下2条界線、 見込み2条界線内端 果文一施釉	良好	径0.1cm以下白色 粒子少量	透明釉／透明 釉	小野分類染付碗E群
SX001 14-I10	第60図-7	青花(漳州窯系) ／皿	10.6	3.0	5.1	—	—	ロクロ	口縁部下2条界線内 「別点文」一施釉、 底部露胎、植物維綴付 着	施釉	良好	径0.1cm以下白色 粒子少量	透明釉(やや黄 味がかかる)／ 透明釉(やや黄 味がかかる)	小野分類染付皿C群
SX001 14-J10	第60図-8	青花(景德鎮窯系) ／皿	(13.0)	3.2	(6.6)	—	—	ロクロ	口縁部下・高台各2 条界線、体部草花 文一施釉、墨付釉 剥ぎ	口縁部下・見込み 各2条界線、体部 草花文、見込み内 文様一施釉	良好	径0.1cm以下白色 粒子少量	透明釉／透明 釉	小野分類染付皿E群
SX001 14-H10	第60図-9	常滑産陶器／壺	(42.4)	12.3+ α	—	—	—	粘土紐 積上げ	ヨコナデ、体部自 然釉	口縁～頭部ヨコナ デ、体部ナデ、口 縁部自然釉	良好	径0.8cm以下白色 粒子、径0.1cm以 下褐色・黑色粒子 少量	茶灰色／灰茶 色	N字状口縁
SX001	第60図-10	備前焼／大壺	(42.8)	11.0+ α	—	—	—	粘土紐 積上げ	ナデ	工具ナデ	良好	径0.1cm以下白 色・褐色粒子少量	青灰色／青灰 色	備岡編年中世3期a
SX001 14-I10	第60図-11	瓦質土器／蓋	(13.2)	1.6+ α	—	—	—	ロクロ	ナデ	ナデ	良好	径0.1cm以下黑 色・黄金光沢粒子 少量	橙灰色／橙灰 色	—
SX001 14-K10	第60図-12	瓦／丸瓦	12.9+ α	10.0+ α	3.3	—	—	タタキ	凸面縁方向のナデ	凹面目痕・九州 タイプの吊り紐 痕・ナデ	良好	径0.1cm以下白 色・褐色粒子少量	凸面 黑灰色／ 凹面 黑灰色	—
SX001 14-J11	第60図-13	瓦質土器／火鉢	34.0	10.9+ α	—	—	—	粘土紐 積上げ	口縁部下3条突 帯、突帯内雷文スタン プ、ミガキ	工具ナデ	良好	径0.1cm以下白 色・黄金光沢粒子 少量	淡橙褐色／淡 橙褐色	—
SX001 14-N10	第60図-14	石製品／粉挽き 臼・上臼	—	16.8+ α	11.8	芯1.0 + α 挽1.8	—	ケズリ	侧面ミガキ・不整 形な割れ・臼面磨 耗・幅0.3~0.6cm 残存主溝1条・副溝 5条、芯棒受け・挽 手孔	上縁部～窪みミガ キ	—	安山岩	灰茶色	—
SX001	第60図-15	青銅製品／筈	5.8+ α	1.5	0.3	—	—	鋳造	—	—	—	—	—	—

表 22 遺物観察表^⑯

遺構 番号	図版 番号	種類／器種	法量(cm) ()は復元					成形	調整・装飾		焼成	胎土(石材)	色調・釉調 外面／内面	備考
			口径／ 最大長	器高／ 最大幅	底径／ 最大厚	孔径	重量		外面	内面				
SX001 14-N10	第60図-16	銭貨／北宋貨	2.4	—	0.2	1辺 0.6	2.7	鋳造	「天禧通寶」真書	無文	—	—	—	初鋳造年1017年
カクラン 14-N10	第61図-1	中国産白磁／壺	—	4.6+ α	—	—	—	粘土紐 積上げ	施釉、底部露胎	施釉	一部 不良	径0.1cm以下白色 粒子少量	暗灰白色(やや 光沢あり)／暗 灰白色(やや光 沢あり)	底部中央焼成不良
カクラン 14-G10	第61図-2	青花／碗	—	2.9+ α	3.8	—	—	ロクロ	施釉、疊付釉剥ぎ	見込み2条界線、花 文・唐草文→施釉	良好	径0.1cm以下白色 粒子少量	透明釉(やや灰 色味あり)／透 明釉(やや灰色 味あり)	小野分類染付碗E群
表土	第61図-3	青花(景德鎮窯 系)／皿	—	0.7+ α	(7.2)	—	—	ロクロ	高台内2条界線「洪 武年(製)」→施 釉、疊付釉剥ぎ	見込み貴人・雲文 →施釉	良好	径0.1cm以下白色 粒子少量	透明釉／透明 釉	小野分類染付皿E群
カクラン 14-M10	第61図-4	青花(景德鎮窯 系)／皿	(10.3)	2.4	6.4	—	—	ロクロ	高台内字款状 「福」→施釉、疊 付釉剥ぎ	見込み1条界線内蛟 龍文→施釉	良好	径0.1cm以下白色 粒子少量	透明釉／透明 釉	小野分類染付皿E群 高台内砂粒付着
表土 14-H11	第61図-5	朝鮮王朝産灰青 釉陶器／碗	(15.8)	5.0+ α	—	—	—	ロクロ	施釉、疊付目痕	施釉	良好	径0.1cm以下白 色・黒色粒子中量	灰緑色／灰綠 色	雜釉陶器
表採	第61図-6	瓦／隅×烏衾瓦	5.0+ α	13.0+ α	2.3	—	—	タタキ	瓦当表面左巻き三 巴文・珠文17、外 緑ミガキ	瓦当裏面ナデ	良好	径0.8cm以下褐色 粒子、径0.5cm以 下灰色粒子、径 0.1cm以下白色粒 子少量	表面 淡橙茶色 ／裏面 淡橙茶 色	—
表土	第61図-7	瓦／軒丸瓦	3.4+ α	10.5	2.3	—	—	タタキ	瓦当表面左巻き三 巴文・残存珠文 13、外緑ミガキ	瓦当裏面ナデ	良好	径0.8cm以下灰色 粒子、径0.1cm以 下白色・褐色・黃 金光沢粒子少量	表面 灰青色／ 裏面 灰青色	—
カクラン 14-111	第61図-8	銭貨／唐錢	2.2	—	0.1	1辺 0.7	2.24	鋳造	「開元通寶」真書	無文	—	—	—	初鋳造年621年

第3節 第73次調査区

1. 基本土層と概要

第73次調査は、北側を平成17年度に実施した第60次調査、南側を平成15年度に実施した第34次調査に挟まれた場所に位置する。

調査区は、大きく南側のA区とその北側のB区に分けることができる。

A区は、東西5m、南北4mの調査区であるが、平成15年度に調査が終了した第34次調査区との遺構のつながりを確認するために、やや北側まで表土を剥ぎ遺構の検出をおこなった。これによって、調査が終了した第34次調査区の遺構の一部を確認し、今回の調査との位置関係を押さえた。

一方のB区は、幅約4m、長さ70mにもおよぶ南北に細長い調査区である。調査区の北端は、第60次調査区と1mほど調査区を重ねているために遺構のつながりを確認している。また、南端は第34次調査区と接する。調査区はほぼ座標北に沿っており、調査区内に4mピッチのグリッドを組むと東西方向では調査区の幅がないためにグリッドは組めないものの、南北方向には調査区の壁に平行して等間隔にグリッドが設置できた。

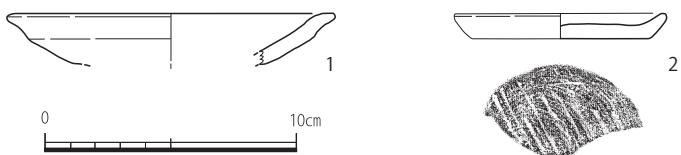
2. A区主要遺構（第1図）

A区は、第34次調査区と第43次調査区の間に位置する。(第2図) 位置的には、第34次調査のSD066の万寿寺西側にあたる堀の東側、万寿寺境内に位置する。主な遺構としては、柱穴や土坑を主体とする遺構が確認されている。A区の堆積層は大きく表土である0層(S001)・1層(S002)、整地層の2層(S003)、整地層の3・4・5・6層(S004)に分けられる。(第3図) 以下遺構の説明は面ごとに解説していく。

1面は、0層(S001)・1層(S002)を除去し、2層(S003)上面で遺構を確認した。(第4図) 遺構としては、2基のピットのみである。0・1層のS001ならびにS002からは、ハコ型のロクロ整形の土師器や非ロクロ整形の京都系土師器(1)、中国産の青磁・白磁・青花なども出土しており、16世紀後葉～末葉に形成された層と考えられる。

2面は、厚さ約20～30cmほどある2層(S003)を除去した3層(S004)上面で遺構を多数検出した。(第5図) 遺構としては、ピット20基、土坑6基、溝状遺構1基を確認した。調査区の西側には、南北に伸びる浅い溝状遺構(S023)が検出されている。これは、第34次調査区で検出された万寿寺跡を区画する堀(SD066)につながるものと考えられる。2層(S003)に含まれる遺物も基本的には中世の遺物を主体としており、1面の遺物と時期差が感じられない。

3面は、3層(S004)を10cm掘り下げた黄茶褐色の基盤層の上面で検出した面である。(第6図) 検出は、14基のピットを中心に1基の土坑(SK038)を検出している。なお、ピットの並びは確認できない。3層(S004)には、瓦のほか、瓦質土器も多数含まれるが、これに混じってロクロ整形の在地系土器も一定量含まれ、土器小皿(2)等14世紀中葉～後葉に相当する遺構が展開していたものと考えられる。また、SK038には、ロクロ整形の土器が出土しており、14世紀中葉から後葉に遡る遺構であろう。

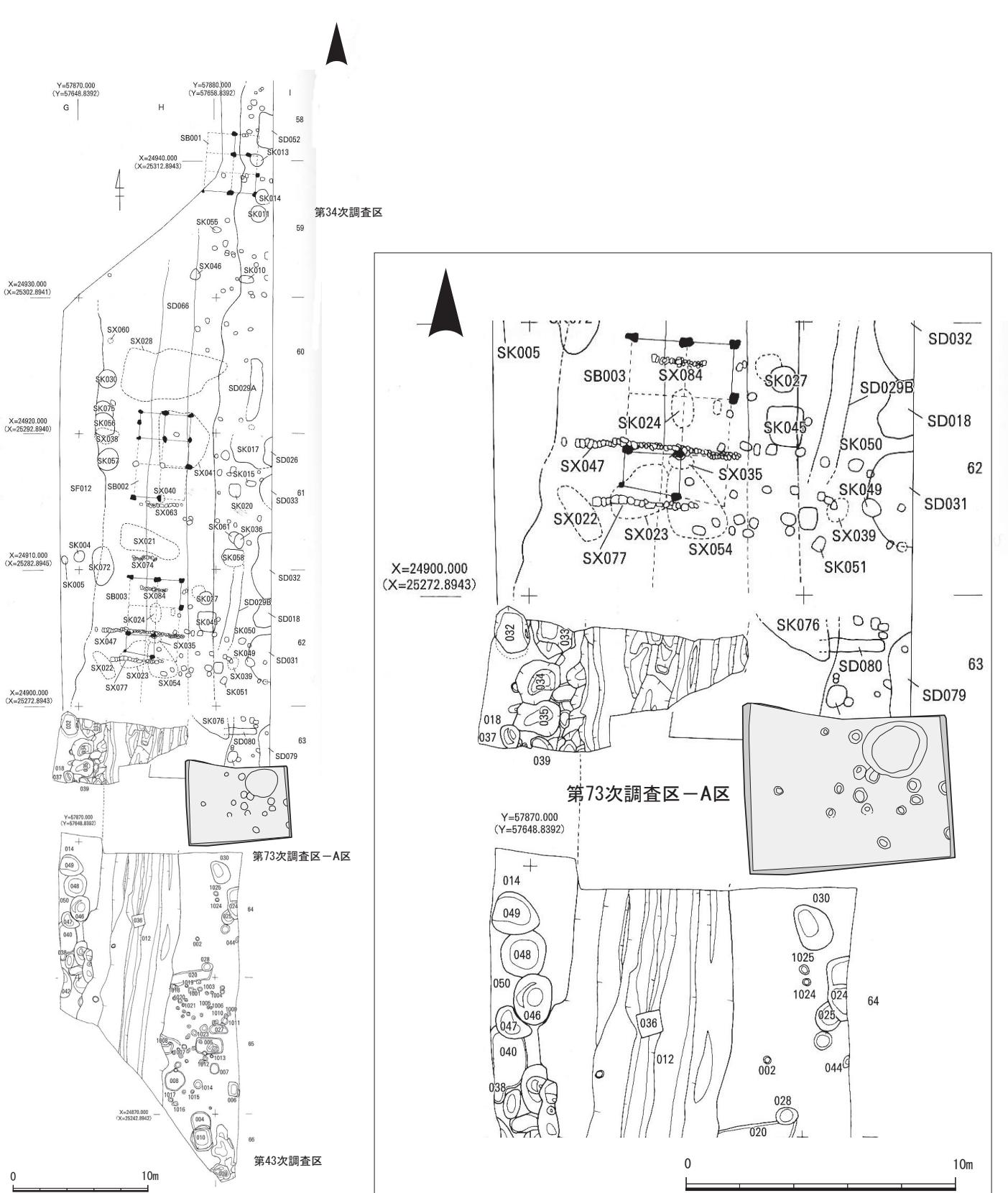


第1図 073S002・S004 出土遺物塞測図 (1/3)

土坑 (SK) (第6・7図)

073SK038

3面で検出された土坑である。長軸 1.57m、短軸 1.41m のやや楕円形の平面を呈する。遺構の深さは 0.42m で、床面はほぼ平らになっており、緩やかに壁面が立ち上がる。出土遺物には、土師器を中心に、龍泉窯系青磁片をはじめ、瓦質土器や平瓦が見られる。3・4は、口クロ整形土師器で 14世紀中葉から後葉の所産である。



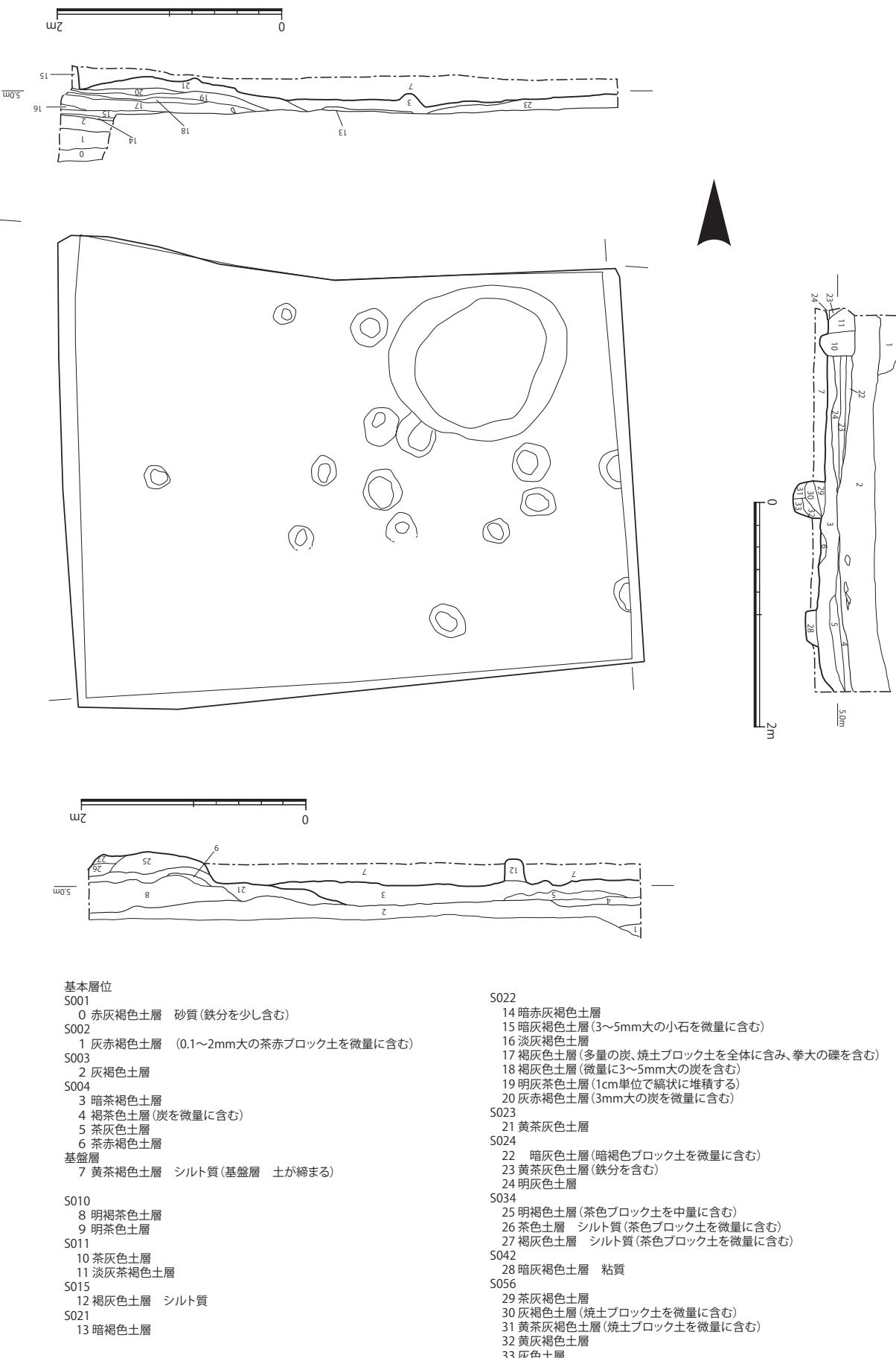
第2図 A区調査地位置図 (1/400・1/200)

表1 A区遺構台帳①

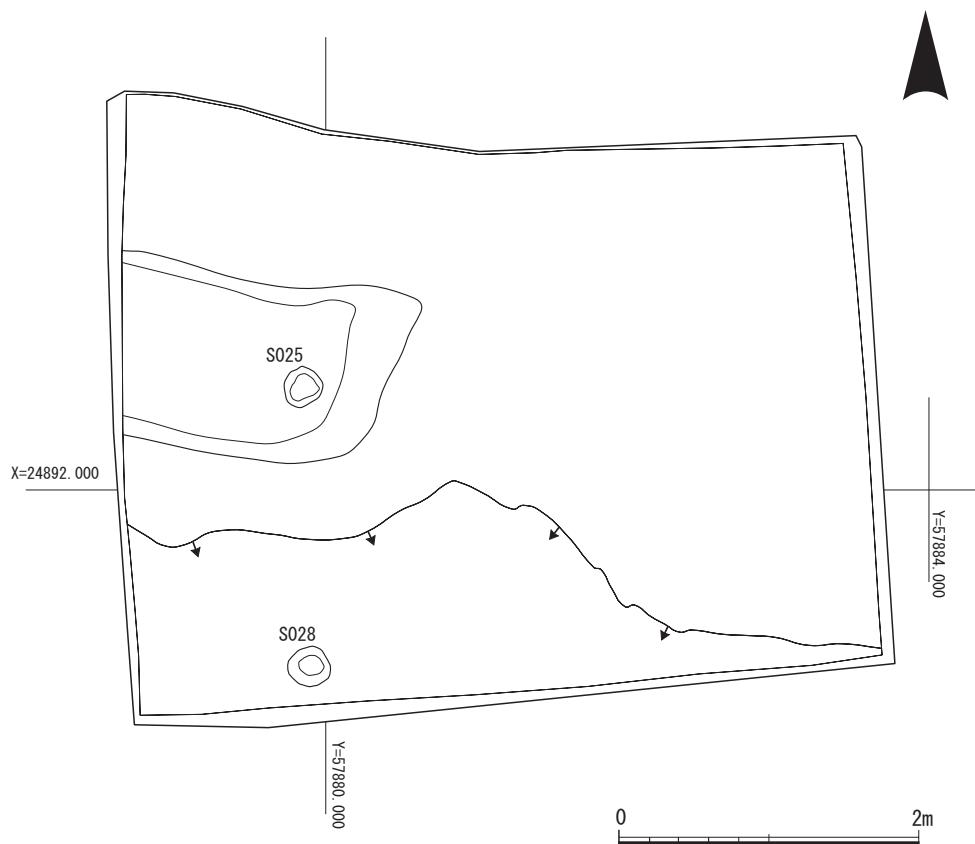
遺構番号	遺構	構造	軸跡形態	標高(m)	傾斜(m)	標高(m)	傾斜(m)	遺構の先後関係	備考	記録
R/000	云偏余								“	“
R/002	云偏余								“	“
R/002	云偏余								“	“
R/014	↑ D	☆☆	/-13	/-13	/-03	/-34			“	“
R/018	↑ D	☆☆	/-17	/-15	/-00	/-41			“	“
R/018	云偏余								“	“
R/000	其<	☆☆	0-1*↓	/-35*↓	/-05	/-3/*↓	R/12y R/18y R/23o /24y R/0/		“	“
R/000	↑ D	☆☆	/-23	/-11*↓	/-06	/-56*↓	R/13y R/00		“	“
R/002	↑ D	呂☆	/-1/	/-1/	/-35	/-26	R/13y R/01		“	“
R/003	↑ D	卯云☆	/-4/	/-17	/-03	/-01	R/13y R/02		“	“
R/004	↑ D	☆☆	/-13	/-1/	/-07	/-24			“	“
R/004	↑ D	☆☆	/-36	/-24	/-08	/-01			“	“
R/006	↑ D	☆☆	/-22	/-2/	/-15	/-63			“	“
R/006	↑ D	倍☆	/-43	/-22	/-5	/-06			“	“
R/008	↑ D	卯云☆	/-54	/-27	/-27	/-07			“	“
R/008	↑ D	☆☆	/-46	/-33	/-7	/-1/			“	“
R/020	↑ D	卯云☆	/-43	/-27	/-3	/-06	R/10y R/1/		“	“
R/020	其<	呂☆	0/1	/-5/	/-3	/-3/*↓	R/10y R/1/		“	“
R/022	其<	倍☆	0-3*↓	/-56*↓	/-01	/-72*↓	R/11y R/22		“	“
R/022	寸						R/12y R/11y R/15y R/12y R/16y R/12y R/25y R/12y R/12y R/0/ R/18y R/12y		“	“
R/024	其<		1-3*↓	0-56*↓			R/12y R/2/ R/12y R/20y R/12y R/21y R/12y R/22		“	“
R/026	↑ D	倍☆	/-3/	/-2/	/-33	/-74	R/15y R/12		“	“
R/026	↑ D	☆☆	/-13	/-13	/-16	/-31	R/16y R/12		“	“
R/028	其<	☆☆	0/7	/-36*↓	/-21	/-34*↓	R/12y R/18y R/23o /24y R/0/		“	“
R/020	↑ D	☆☆	/-17	/-13	/-13	/-41	R/20y R/2/y R/12		“	“
R/020	↑ D	☆☆	/-03*↓	/-05		/-04*↓	R/20y R/2/y R/12		“	“

表2 A区遺構台帳②

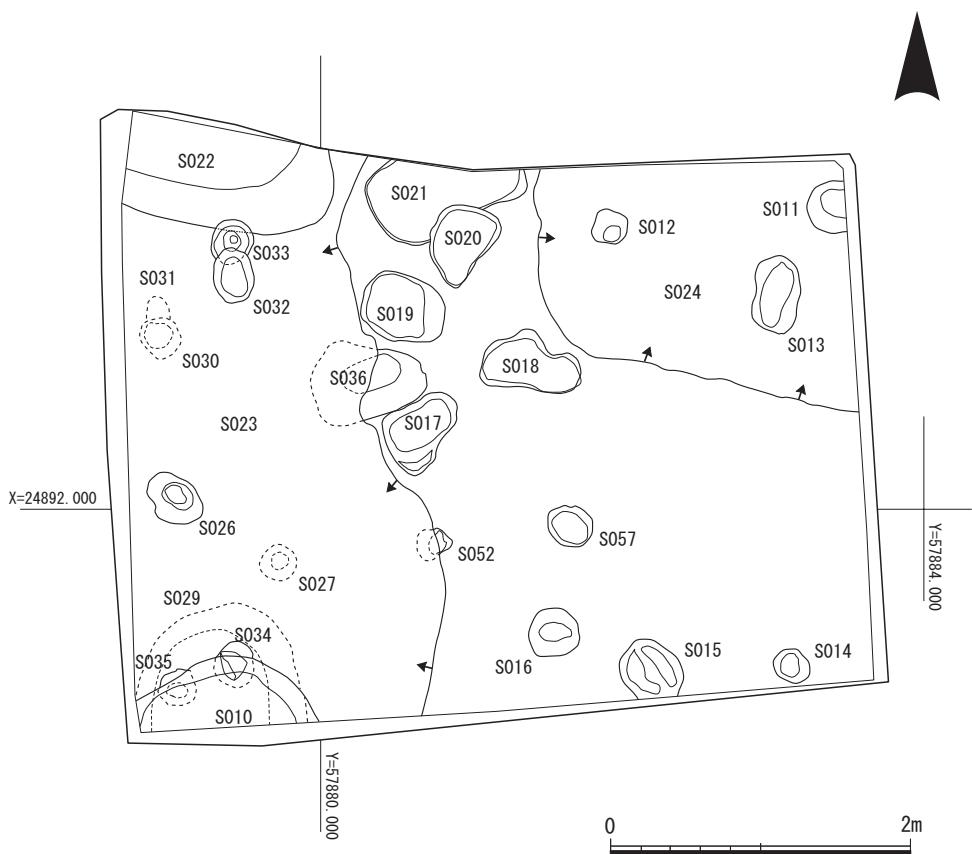
遺構番号	種類	等級形態	標高'(m)	標高'(m)	標高'(m)	遺構の先後関係		備考	成化期
						遺構	遺構		
8022	「 D	告☆	/-25	/-15	/-02	/-61	R/22y R/21y R/12		"
8023	「 D	☆	/-2*☆	/-17	/-12	/-5*☆	R/11y R/22y R/21y R/12		"
8024	「 D	☆	/-18	/-16	/-2	/-47	R/12y R/18y R/23o /24y R/0/	「 D 震懾 ^② 1/漸勢 ^③ 1/2	"
8025	「 D	☆	/-15	/-13	/-07	/-33	R/12y R/18y R/23o /24y R/0/		"
8026	其<	懲 囗☆	/-62	/-44	/-03	/-20*☆	R/25y R/12		"
8027	「 D	☆	/-12	/-11	/-34	/-21	R/41y R/12		"
8028	「 D	☆	/-2/	/-15	/-3	/-46	R/33y R/46		"
8029	「 D	☆	/-22	/-18	/-23	/-58			"
8030	「 D	☆	0-46	0-30	/-31	0-570	R/35y R/27		"
8031	「 D	☆	/-23	/-22	/-32	/-65			"
8032	「 D	☆	/-2/	/-11	/-07	/-43			"
8033	「 D	☆	/-12	/-10	/-07	/-2/			"
8034	「 D	☆	/-20*☆	/-6*☆	/-8	/-4			"
8035	「 D	☆	/-23	/-14	/-20	/-52			"
8036	「 D	☆	/-16	/-1/☆	/-18	/-32	R/33y R/46		"
8037	「 D	☆	/-25	/-23	/-27	/-70			"
8038	「 D	☆	/-24	/-2/*☆	/-14	/-8*☆	R/35y R/27		"
8039	「 D	☆	/-21	/-2/	/-11	/-60			"
8040	「 D	☆	/-1/	/-05	/-14	/-11			"
8041	「 D	☆	/-14	/-1/	/-8	/-25			"
8042	「 D	☆	/-13	/-10	/-23	/-21	R/40y R/41		"
8043	「 D	☆	/-11	/-08	/-54	/-18			"
8044	「 D	☆	/-23	/-07*☆	/-03	/-4			"



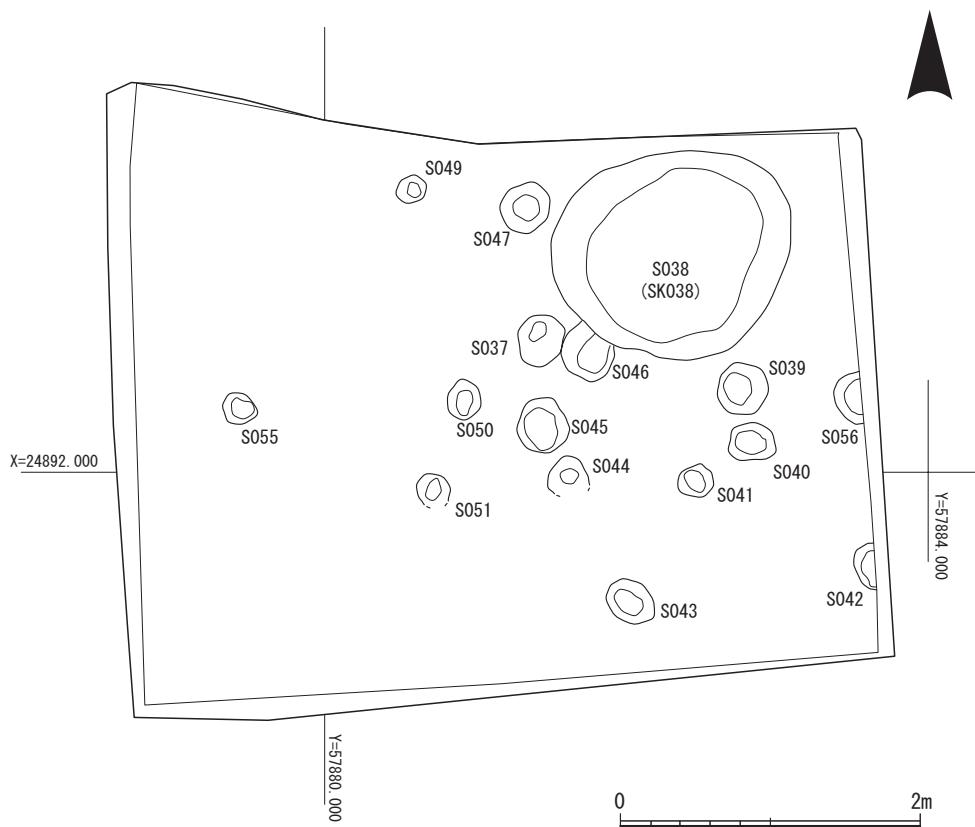
第3図 A区平面・土層断面図 (1/50)



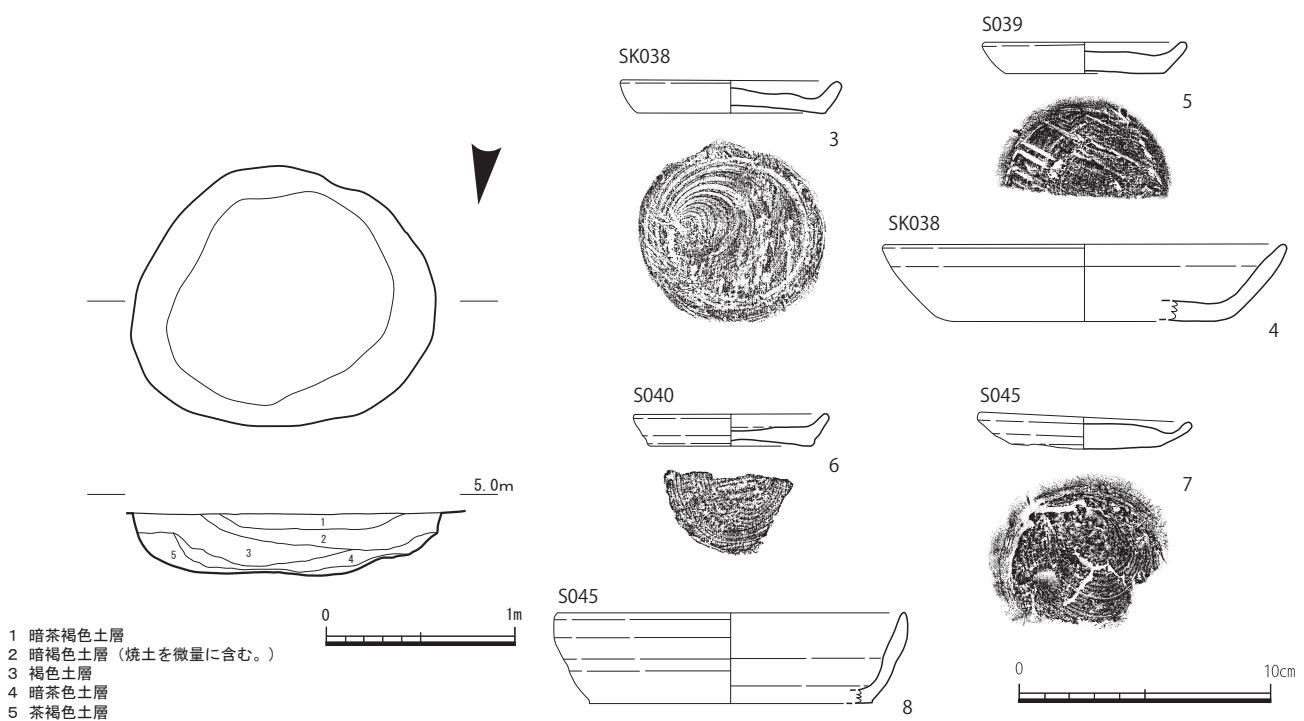
第4図 A区1面遺構配置図 (1/50)



第5図 A区2面遺構配置図 (1/50)

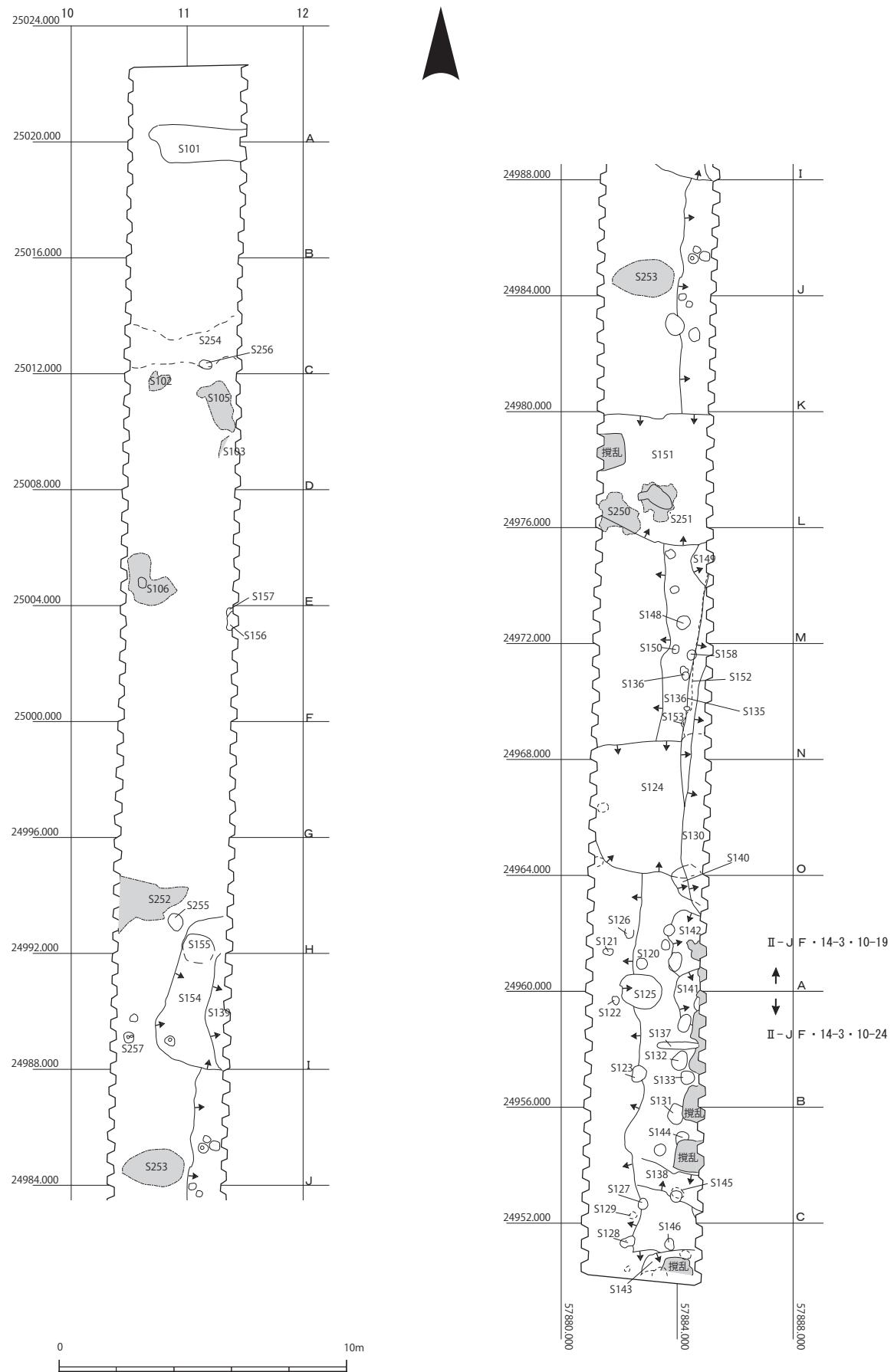


第6図 A区3面遺構配置図 (1/50)



第7図 A区073SK038平面・断面実測図 (1/50)

第8図 073SK038・039・040・045出土遺物実測図 (1/3)



第9図 B区遺構配置図 (1/200)

表3 B区遺構台帳(①)

遺構番号	グリッド	種別	平面形態	長軸(m)	短軸(m)	深さ(m)	面積(m ²)	遺構の先後関係	備考	文化面
S101	14-010・19-A10	溝状遺構	不整形	3. 37	1.29	—	3. 447+ α	—		2
S102	19-C10	焼土	不整形	0. 86	0. 62	0. 324	—		焼土	2
S103	19-C10	石塔	方形	—	—	—	0. 077+ α	—	焼土	2
S104	19-C10	焼土	不整形	0. 30	0. 30	0. 09+ α	—		石塔の一部	2
S105	19-C11	焼土	不整形	1. 80	0. 85	—	1. 279+ α	—	焼土	2
S106	19-E10	焼土	不整形	1. 87	1. 35	1. 769	—		焼土	2
S200		堀	—	—	—	—	—			2
S210		堀埋土					S224→S223→S231・S230→S222→S221→S200	2次埋土層(最終埋土)		2
S221		堀埋土	—	—	—	—	S224→S223→S231・S230→S222→S221→S200	2次の滯水層		2
S222		堀埋土					S224→S223→S231・S230→S222→S221→S200	2次の自然堆積層		2
S223		堀埋土	—	—	—	—	S224→S223→S231・S230→S222→S221→S200	滯水層		2
S224		堀埋土					S224→S223→S231・S230→S222→S221→S200	最下層の自然堆積層		2
S231		堀埋土	—	—	—	—	S224→S223→S231・S230→S222→S221→S200	1次埋土層		2
S250	19-K10	焼土層	不整形	1. 60	1. 20	1. 364	—	S210に含まれる	2中	
S251	19-K10	焼土層	不整形	1. 48	1. 40	1. 189	—	S210に含まれる	2中	
S252	19-G10	焼土層	不整形	2. 4+ α	2. 0+ α	2. 577+ α	—	S210に含まれる	2中	
S120	19-010	柱穴	円形	0. 39	0. 37	0. 80	0. 1	—		2
S121	19-010	柱穴	橢円形	0. 35	0. 20	0. 30	0. 056	—		2
S122	24-A10	柱穴	円形	0. 29	0. 22	0. 14	0. 046	—		2

表4 B区遺構台帳②

遺構番号	グリッド	種別	平面形態	長軸(m)	短軸(m)	深さ(m)	面積(m ²)	遺構の先後関係	備考	文化面
S123	24-A10	柱穴	円形	0.57	0.44	0.80	0. 208	S200→S123		2
S124	19-N10・19-N11	土坑	—	3.7+ α	4.96	1.43	15. 298+ α	S124→S140→S135→S130		2
S125	19-010・24-A10	土坑	楕円形	1.48	1.19	0.75	1.33	S200→S125		2
S126	19-010	柱穴	円形	0.37	0.31	0.11	0. 077+ α	S200→S127		2
S127	24-B10	柱穴	円形	0.38	0.33	0.26	0. 09	S200→S227		2
S128	24-C10	柱穴	楕円形	0.54	0.32	0.51	0. 141	S224→S128		2
S129	24-B10	柱穴	円形	0.29	0.22	0.25	0. 04+ α	S129→S200		2下
S130	19-M11・19-N11	溝状遺構	—	8.5+ α	0.96+ α	—	4. 3133+ α	S124→S130		2
S131	24-B10・24-B11	柱穴	隅丸方形	0.65	0.55	0.12	0.283+ α	攤疊に切られている	柱跡なし	2
S132	24-A11	柱穴	楕円形	0.67	0.53	0.12	0.267	—	柱跡なし	2
S133	24-A11	柱穴	隅丸方形	0.45	0.45	0.75	0.171	—	柱跡なし・二段掘り	2
S135	19-N11・19-M11	溝状遺構	—	7.6+ α	1. 0+ α	—	1. 774+ α	S135→S130		2
S136	19-M11	柱穴	円形	0.27	0.23	0.08	0. 048	—		2
S137	24-A10・24-B11	溝状遺構	楕円形	1.44+ α	0.25	0.12	0.305+ α	カク乱に切られている。	一層のみ長土坑	2
S138	24-B10・24-B11	長土坑	—	2.5+ α	1.00	0.15	1. 967+ α	柱穴が一部切られる・S200に切られる		2
S139	19-H11	溝状遺構	—	4.00	0.85+ α	0.22	1. 135+ α	S154→S139		2
S140	19-011	土坑	不整形	1.5+ α	0.96	0.15	0. 954+ α	S154→S140		2
S141	19-011	土坑	不整形	1.96	1.09	0.15	0. 974+ α	S154→S141		2
S142	19-011	土坑	不整形	2.28+ α	1.3+ α	0.10	1. 459+ α	S154→S142		2

表5 B区遺構台帳③

遺構番号	グリッド	種別	平面形態	長軸(m)	短軸(m)	深さ(m)	面積(m ²)	遺構の先後関係	備考	文化面
S143	24-C10	土坑	不整形	1.80	0.90	0.85	1.266+ α	S154→S143		2
S144	24-B11	柱穴	円形	0.52	0.40	0.40	0.133+ α	壇丘に切られていざる。	柱跡あり・二段掘り	2
S145	24-B10・B11	柱穴	円形	0.45	0.34	0.48	—	S154→S143		2
S146	24-C10	柱穴	楕円形	0.40	0.30	0.56	0.119+ α	S154→S144		2
S148	19-L11	柱穴	楕円形	0.48	0.43	0.38	0.162	—		2
S149	19-L11	土坑	楕円形	1.5+ α	—	—	0.484+ α	S154→S144		2
S150	19-M11	柱穴	円形	0.30	0.22	0.34	0.051	—		2
S151	19-K10・11	土坑	—	3.7+ α	4.50	1.30	14.734+ α	—		2
S152	19-M11	溝状遺構	—	5.4+ α	0.75+ α	0.52	1.917+ α	—		2
S153	19-M11	柱穴	円形	0.23+ α	0.06+ α	0.52	0.010+ α	—		2
S154	19-H10・11	土坑	隅丸長方形	0.23+ α	2.1+ α	1.10	9.05+ α	S200→S144		2
S155	19-G11・19-H11	土坑	円形	1.09	0.55+ α	0.64	0.492+ α	S154→S144		2
S253	19-I10	集石	—	—	—	—	—	S210に含まれる	2中	
S254	19-B10・11	堆積層	—	3.7+ α	1.50		4.129+ α	S210下層より検出		2中
S255	19-G10	柱穴	円形	0.63	0.48	1.00	0.225+ α	S210下層より検出		2中
S256	19-B11	柱穴	楕円形	0.44	0.29	0.27	0.104	S254が切られる	S210下層より検出	2中
S257	19-H10	柱穴	円形	0.37	0.35	0.30	0.103	—	S210下層より検出・クイ痕が2ヶ所有り	2中

3.B 区主要遺構

掘立柱建物跡 (SB)

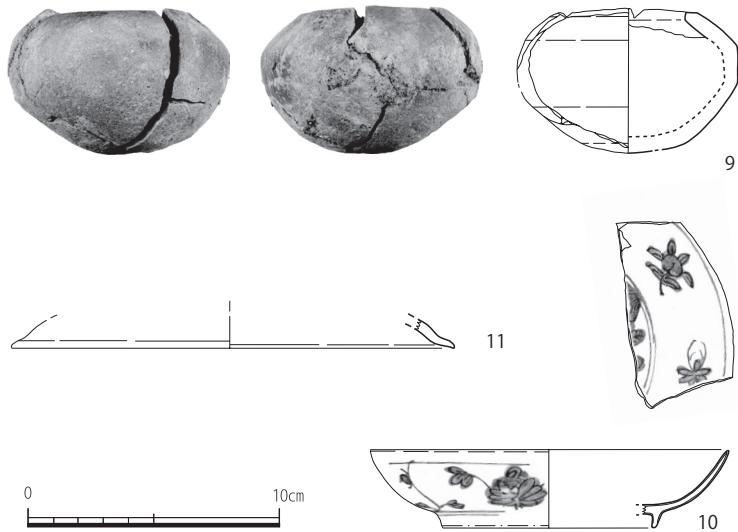
SB001 (S123 + S133 + S144 + S145 + S146 + S128) (第 12 図)

調査区の南側で検出された掘立柱建物跡である。確認できた柱穴は、北側の S123、北東隅 S133、東列 S144・S145、南北隅 S146、南側の S128 であり、西列は調査区外に延びている。そのため、現況で桁行 3 間、梁行は 2 間になるものと考えられる。建物は桁行が 5.8 m、梁行は推定で約 3.2 m の建物軸 N - 5° - E で、柱間は桁行で 1.8 ~ 2.0 m、梁行で 1.6 m である。

柱穴の残存深度は 60 ~ 80cm で、柱穴の S128・S133・S144 では掘り方に段を有するものも見られる。

SB001 出土遺物 (第 10 図)

出土遺物には、柱穴からの出土は少ない。S028 から古代の土師器の蓋 (11) が混入する。S144 からは、景德鎮窯系の青花皿 (10) が出土し、小野分類 E 群に比定され、16 世紀中葉から末葉の年代とされる。9 は小型の壺形形状をなし、内部に鉄成分が充填されており、重量が嵩んでいる。壺内に含まれている鉄が後世の錫びにより膨張したために土器に亀裂が生じ破損している。



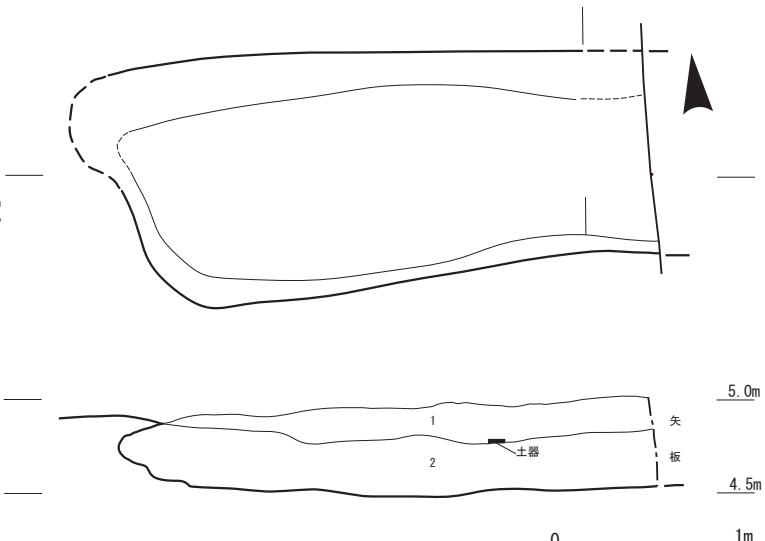
溝状遺構 (SD)

SD101 (第 11 図)

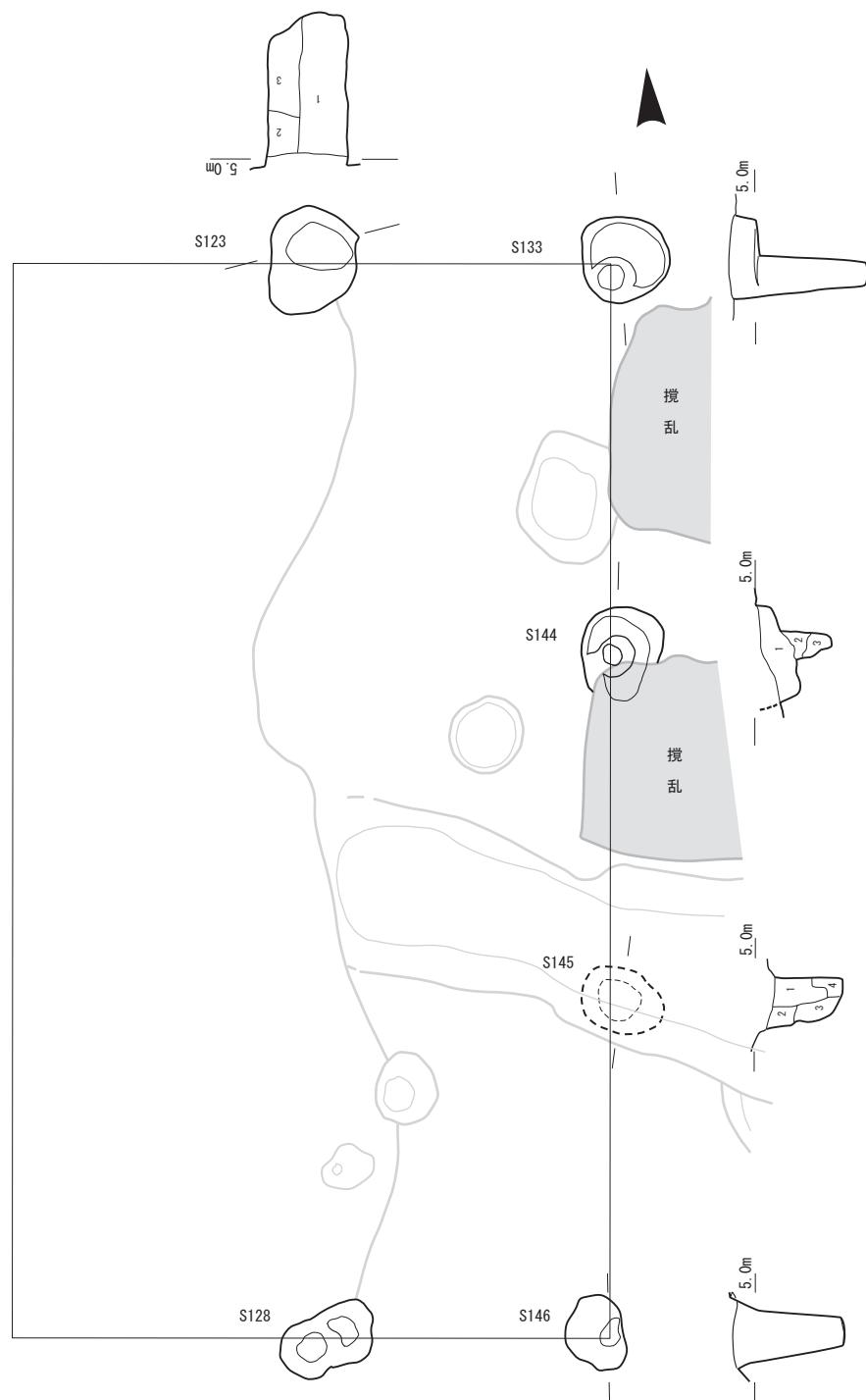
調査区北側で検出された溝状遺構である。遺構は、東西に伸びており西側では床面が立ち上がり途切れる。遺構の規模は、幅 1.1 ~ 1.3 m、検出された長さは約 3 m に及ぶ。遺構の掘り込みは、堀 (SD200) が埋まった後に掘削されており、遺構の深さは 0.5 m で、大きくは上下 2 層からなる。

出土遺物が見られないために時期は不明であるが、整地層 (S001) にパックされていることから、16 世紀代の所産と考えられる。

第 10 図 073SB001 遺物実測図 (1/3)



第 11 図 073SD101 平面・断面実測図 (1/40)



S123

- 1 淡褐色土層 軟質 (橙黄色ブロック土が斑状に混入)
- 2 淡褐色土層 軟質
- 3 橙黄色土層 軟質 (灰褐色ブロック土が斑状に混入)

0

2m

S144

- 1 淡黒灰色土層 軟質 (5mm大の焼土を微量に含む)
- 2 黄茶色土層 軟質
- 3 淡黒色土層 軟質 (バサバサしている)

S145

- 1 黄茶褐色土層 軟質
- 2 黄茶褐色土層 砂質 (2~3mm大の焼土を微量に含む)
- 3 茶灰色土層 軟質 (1~2mm大の砂を微量に含む)
- 4 淡黒色土層 軟質 (3mm大のブロック土を微量に含む)

第 12 図 073SB001 平面・断面実測図 (1/40)

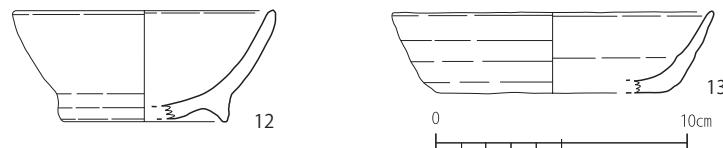
堀跡 (SD)

SD130・135 (第 14 図)

調査区の南よりに検出された溝状遺構 SD130 と SD135 である。調査区の東側が調査区外に伸びていることから規模や形状は明確には確認できていない。また、東側には国道 10 号が走っていることから周辺の遺構とのつながりが不明である。現状では、最大検出幅 0.8 m、検出深さ 0.1 m 程である。SD135 と SD130 には切り合いがあることから最初は S135 の溝状遺構の掘り返しとして形成されたものと考えられる。

SD130・135 出土遺物 (第 13 図)

遺物には、SD135 からは 14 世紀中葉から後葉のロクロ整形土師器の环 (13) などが混入するが、ロクロ整形の高台を持つ土師器塊 (12) などから 16 世紀中葉から後葉に相当する時期が考えられ、SD200 の堀と共に存していた可能性が高い。



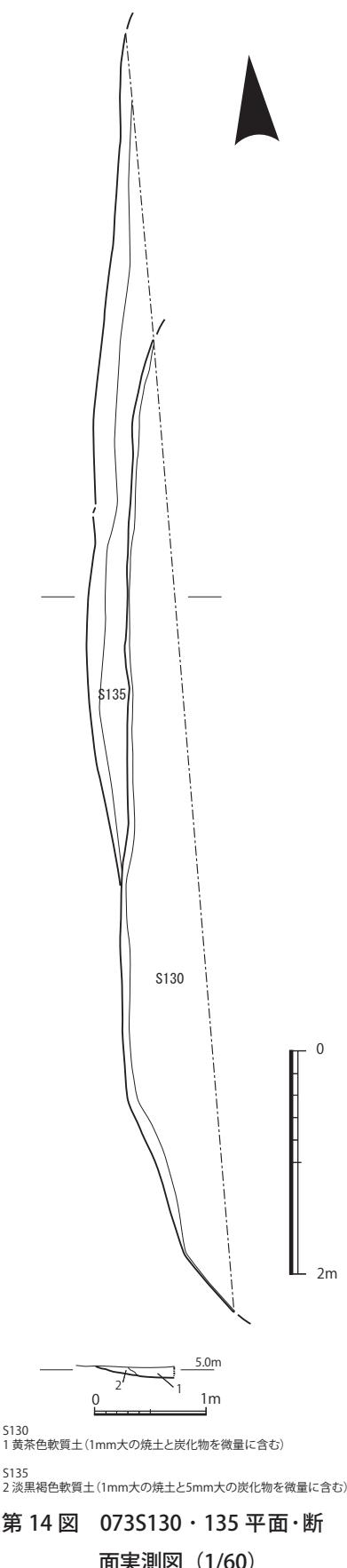
第 13 図 073S135 遺物実測図 (1/3)

SD200 (第 15 ~ 17 図)

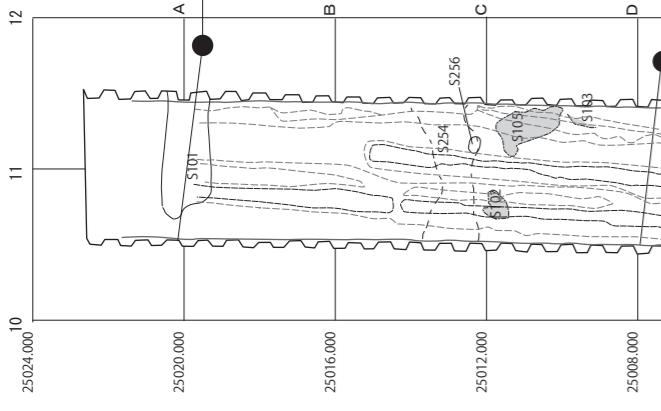
堀跡 (SD200) は、これまで調査区の北側でおこなわれた 53 次調査・60 次調査で検出された堀跡と同一遺構であり、ほぼ直線状に伸びている。また、南側では、第 34 次調査の SD066 とつながる。しかしながら、調査区の幅が 4 m と限定されていることから、調査区北側では、ほぼ堀の中心に位置しており、堀の法面は調査区外となる。調査区南側に行くに従い堀の南北軸が調査区よりも北から東に 5° 振るため、次第に東側の堀の法面が検出するようになる。そのため、調査区南側では、万寿寺の境内地側の遺構が検出された。

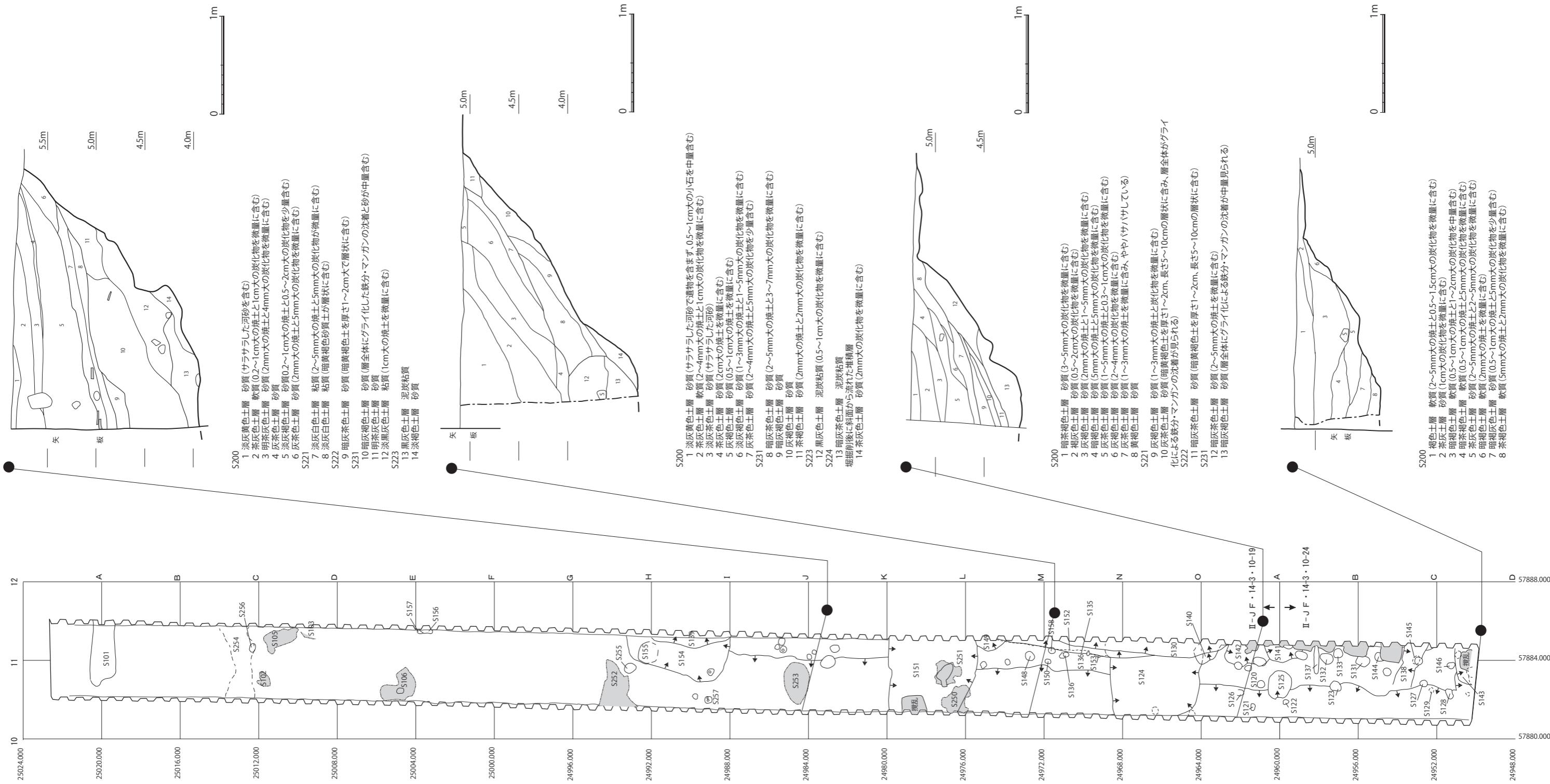
堀の断面形状は、大きくは逆台形状を呈するが、床面に近いところでは掘り方が階段状になっている。これは、堀の滞水によって壁面が削られたために形成されたとも考えられる。19・A-10/11 グリットでは、ほぼ堀の中心に位置しているところで測定すると、堀の底まで約 2.7 m の深度を有する。堀底の標高は 2.2 m であり、堀の検出面は標高 4.9 m である。19・A-10/11 グリットから南に 12 m に位置する 19・D-10/11 グリットでは、堀の深度が 2.4 m で、堀底の標高は 2.5 m である。このため、床面は北側に向かって緩やかに下っていく。一方、検出する標高は南では 5.2 m になっている。

また、堀の堆積状況は、19・A-10/11 グリットや 19・D-10/11 グリットの土層断面にて観察することができる。基本的には第 60 次調査での堀の堆積と同じ状況であった。最下層の S224 層においては、粘性の強い泥



第 14 図 073S130・135 平面・断面実測図 (1/60)



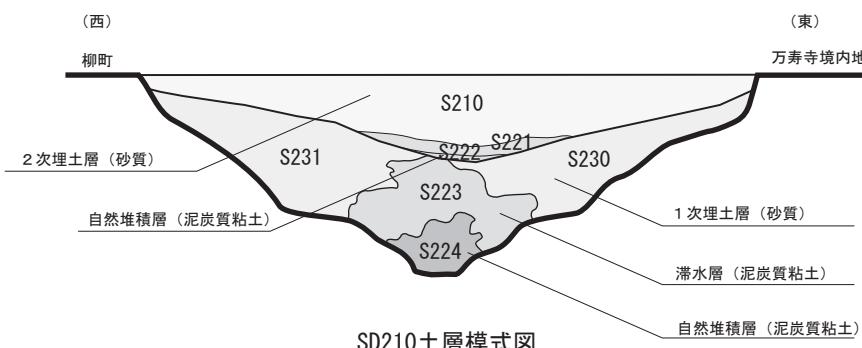


第16図 073SD200 堀土層断面図 (1/40)

炭層が堆積し、堀使用時の堀底の沈殿層である。その上に厚くS223層が60～100cmほどに堆積する。この層も粘性のある泥炭層であり、その上面に覆うS230との境は水平堆積ではなく、上下に大きく波打つ状況が観察できる。このため、S223層は堀を埋める際に滞水しており、埋めた土砂の荷重によるフレーム構造がそれを物語っている。S223における埋め戻しの状況は、堀の中心で盛り上がり、両側がくぼんだ堆積層が見られることがから、堀の東側と西側の左右から埋め戻しをおこなったとみることができる。この堀を埋め戻す段階では、すべて埋め戻しておらず、堀を3分の2の深さまで埋め戻し、一定期間は浅く掘り下がった状態のままであり、その段階で自然堆積した層がS222・S221層である。その後、完全に堀が埋め戻されるようになり、その堆積層S210によって見ることができる。

なお、堀の堆積状況は、南側に向かうに従い堀の中央部分よりも東よりも振っていくが、基本的に堆積の状況は同じである。

出土遺物については、各層毎に主要な遺物に説明をおこなう。



第 17 図 073SD200 土層模式図

S200 出土遺物 (第 18 図)

S200 の出土遺物は、堀の埋土全体から出土したものである。調査時に堀の土層観察をおこなうために残しておいたベルトからの遺物が主である。

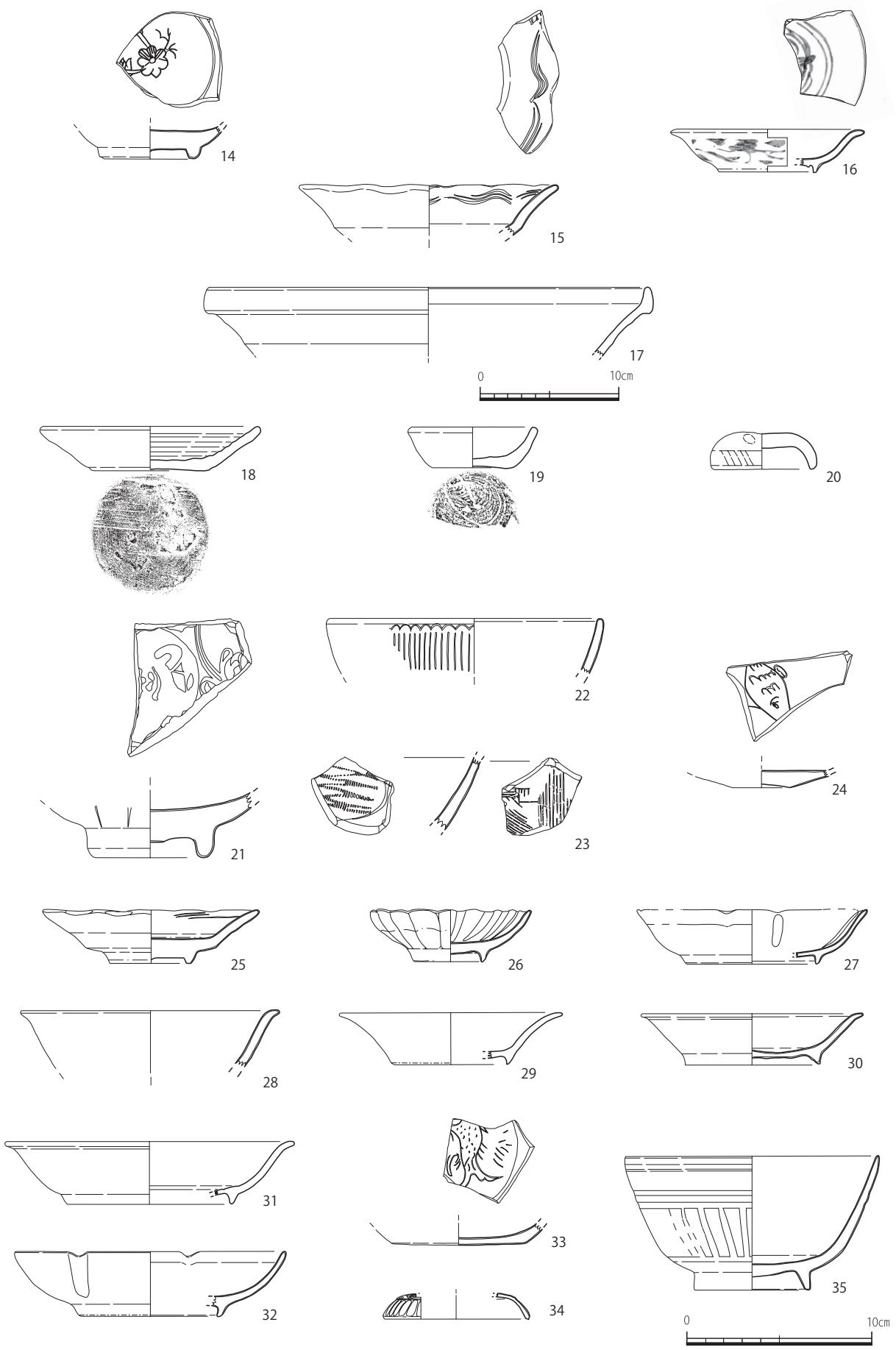
14 は龍泉窯系青磁の碗である。15 は青磁の輪花皿である。16 は漳州窯系青花の皿で、小野分類 B 1 群である。17 は東播系の鉢である。18 はロクロ整形土師器の壺で、体部が斜め上方に伸びる。内側には工具による回転横ナデにより螺旋状の沈線が明瞭に見られる。19 はロクロ整形土師器の小型の壺で、底部糸切り痕が見られる。20 は焼塩壺の蓋である。

S210 出土遺物 (第 18 ~ 28 図)

S210 の出土遺物については、堀の埋土の最上層に位置するのが S210 層から出土したものである。したがって堀 (SD200) の最終埋没土となる。

21 は龍泉窯系の青磁碗で、D 期にあたる。22 は龍泉窯系の青磁蓮弁文碗 C 群で、15 世紀後葉から 16 世紀中葉に相当する。23 は同安窯系青磁の碗である。24 は龍泉窯系の青磁の皿である。体部は底部から口縁に向かって「く」の字に屈曲するタイプで、D 期にあたる。25 は青磁の輪花皿である。26 は龍泉窯系青磁の輪花皿である。27 は龍泉窯系青磁の輪花皿である。

28 は白磁の端反りの碗である。29・30 は白磁の皿で、森田編年の E 類で 16 世紀代である。31 は白磁の端反り皿で、森田編年の E-2 類にあたる。33 は白磁の皿である。35 は白磁の碗である。32 は青白磁の輪花皿である。34 は青白磁の合子の蓋である。36 ~ 39 は、景德鎮窯系青花の碗である。形状は饅頭心碗の系統で小野分類 E



第 18 図 0735200・210 出土遺物実測図 (1/3・1/4)



第19図 073S210出土遺物実測図 (1/3)

群に属する。16世紀後葉の時期にあたる。40は漳州窯系青花の碗である。41～43は、景德鎮窯系青花の皿で小野分類B1群である。44・46・47は、景德鎮窯系青花の皿で小野分類E群である。45は漳州窯系青花の皿で、小野分類E群に属する。48は、景德鎮窯系青花の皿で、小野分類のB1群である。49は漳州窯系青花の皿である。底部が釉剥ぎされた碁笥底で、小野分類C群である。50は景德鎮窯系青花の小坏である。51は景德鎮窯系青花の蓋である。52は朝鮮王朝産陶器碗である。

53は中国南部の焼締陶器の鉢である。54はタイ産四耳壺の肩部である。55～58は備前産の大甕である。59は備前産の壺で、肩に耳が付く。60・61は備前産で、肩部に把手が見られる。60は備前産の水屋甕である。61は備前産の壺で、肩にリング状の耳が付く。62は備前産の大甕である。63は中国南方産焼締陶器の鉢の底部と思われ、底部には墨書きで「萬」と書かれている。64は備前産の筒状を呈する鉢である。65～69は備前産の擂鉢である。いずれも内面には、放射状と斜め方向に擂目が施されており、時期は中世6期に比定される。

70は唐津の見込みに鉄絵が描かれた皿である。1580～1594年の16世紀末と考えられる。71は瀬戸・美濃産の小天目茶碗である。

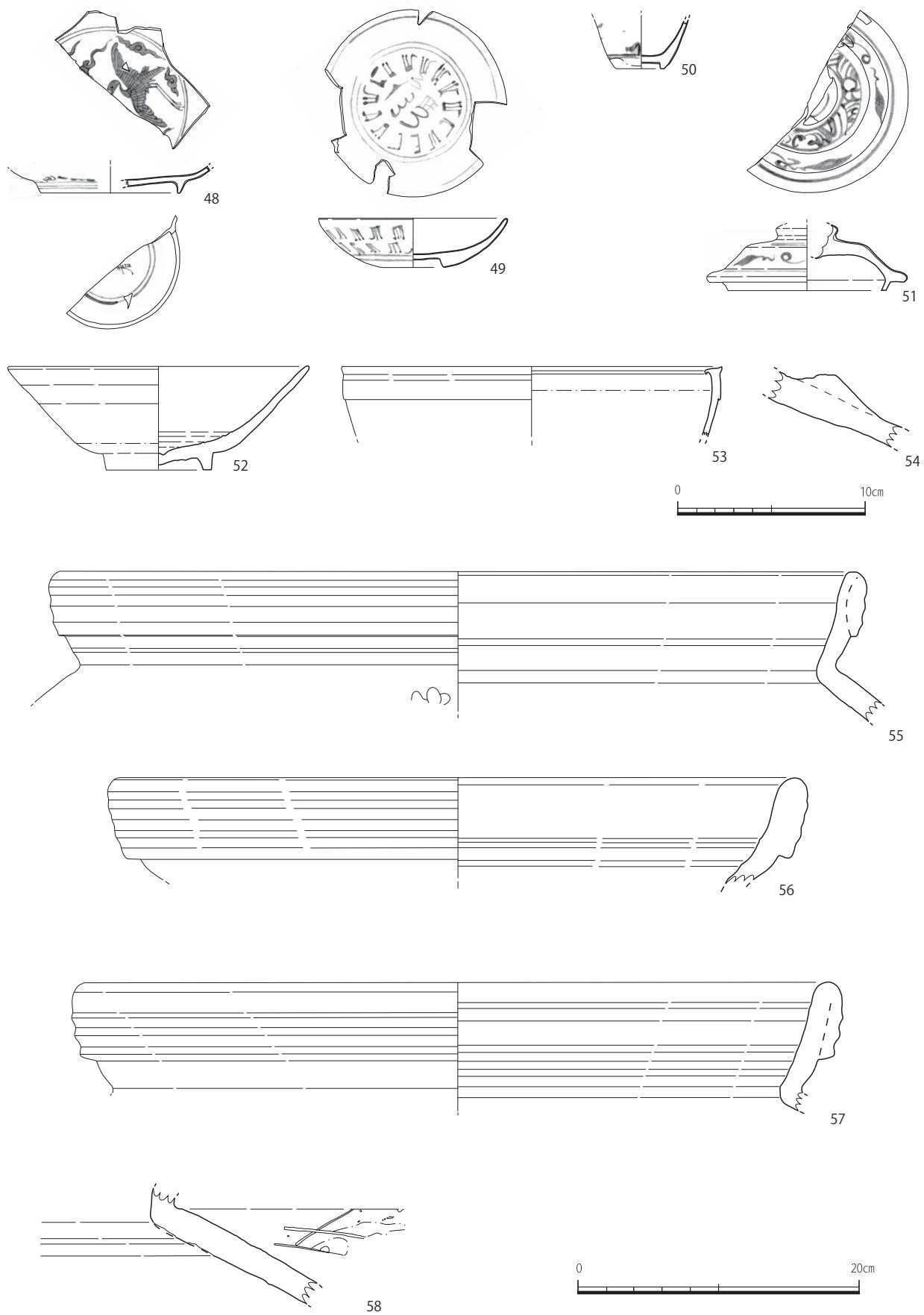
72～92は京都系土師器の皿である。72～88は器壁が厚く16世紀後葉から末葉である。89～92は、口径に比べ器高が高く、坏に近い形状である。一方、在地系土師器も少なからず出土する。93は小型の坏で15世紀後葉のものである。94は土師器の坏で、内面に工具による回転横ナデのために段々状の沈線が見られる。15世紀末葉から16世紀初頭のものと考えられる。96・97は土師器の皿で、14世紀末から15世紀前葉と考えられる。95は吉備系土師器の椀である。

次に瓦質土器であるが、S210を中心に、塊・浅鉢・深鉢・擂鉢・鍋・甕・茶釜・風炉・香炉など、煮炊具・暖房具・喫茶用具・仏用具の多岐にわたってみられる。73次で出土した浅鉢・深鉢・香炉は、色調が橙褐色をおび、中世大友府内町跡の各調査の出土資料との共通性が認められる。浅鉢は器高・調整の相違からいくつかのバリエーションが認められる。100の外面底部は、格子目叩きのち工具状のナデ調整であり、その成形を考えるうえで注目できる資料である。103の鍋は、豊後の広範囲に出土分布が認められる。104の擂鉢と114の甕は、防長系と考えられる。出土した瓦質土器は、おおむね16世紀後半頃を主体とするものと考えられる。汎西日本的に16世紀代の瓦質土器の様相は、多種多様であり、中世大友府内町出土の瓦質土器も同様な傾向が看取される。

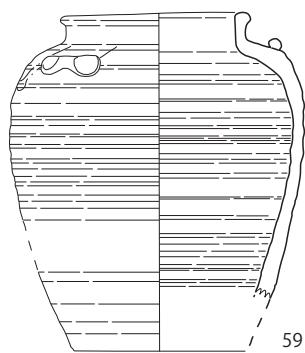
99は浅鉢で、体部は底部から内彎気味に開き、外面底部に離れ砂が付着する。100は浅鉢で、体部は底部から斜上方に開き、口縁部が「く」の字状に外反する。外面底部には格子目叩きのちタテ方向の工具状ナデである。101は甕と考えられ、底部の外端に爪形状圧痕が残る。102の浅鉢は、体部が底部から内彎気味に開き、口縁部端部はまるい。外面体部下半はヘラミガキを施す。103の鍋は、口縁部が「く」の字状に外反し、端部は肥厚する。体部は丸味を帯びる。外面体部下半はヘラケズリを施す。外面体部中位には、煤が付着し、外面底部は赤変する。104は防長系の擂鉢で、口縁部内側の断面が三角形に肥厚する。体部は直線的に伸び、内面に9条単位の擂り目を施す。105の深鉢は、体部は直線的で、口縁部が肥厚する。口縁部下に2条の突帯が付き、突帯間に雷文スタンプ2個一組を連続に施す。106の深鉢は、幅広の逆台形状の脚が3箇所付く。外面体部下半に2条の突帯が付き、突帯間に双頭蕨手飛雲文スタンプ2個一組を等間隔に施す。胴部内外面はヘラミガキを施し、外面底部に離れ砂が付着する。107・108の深鉢は、幅広の逆台形状の脚が3箇所付く。体部は直線的で、口縁部が肥厚する。口縁部下に2条の突帯が付き、突帯間に雷文スタンプ一対4個一組を等間隔に施す。109は風炉と考えられる。胴部外面に円形浮文スタンプを連続に施す。110・111は香炉で、体部は直線的に伸びる。111には、幅広の逆台形状の脚が3箇所付く。112は香炉で、幅広の方形形状の脚が3箇所付く。体部は直線的で厚ぼったく、口唇部はすぼまる。113は甕で、口縁部が「く」の字状に外反する。114は深鉢で、口縁部は内傾し立ち上がり、上端は平坦に仕上げる。115・116は茶釜で、口縁部は垂直気味に立ち上がり、肩部はまるみをおびる。115には肩部に縦耳、下半に鐸部が付く。116には、体部下半に断面三角形の突帯が付く。

瓦は、堀全体から破片点数868点であり、内訳として平瓦689点、丸瓦170点、軒丸瓦1点、軒平瓦8点である。

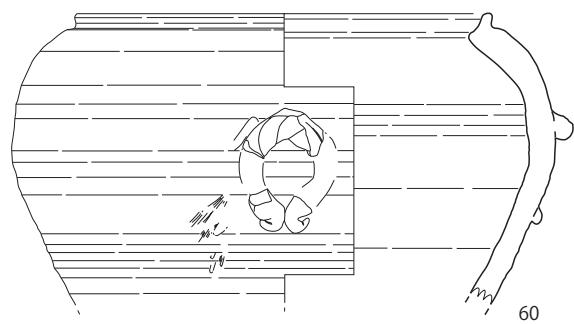
117・118は巴紋文様の軒丸瓦である。



第20図 0735210 出土遺物実測図 (1/3・1/4)



59

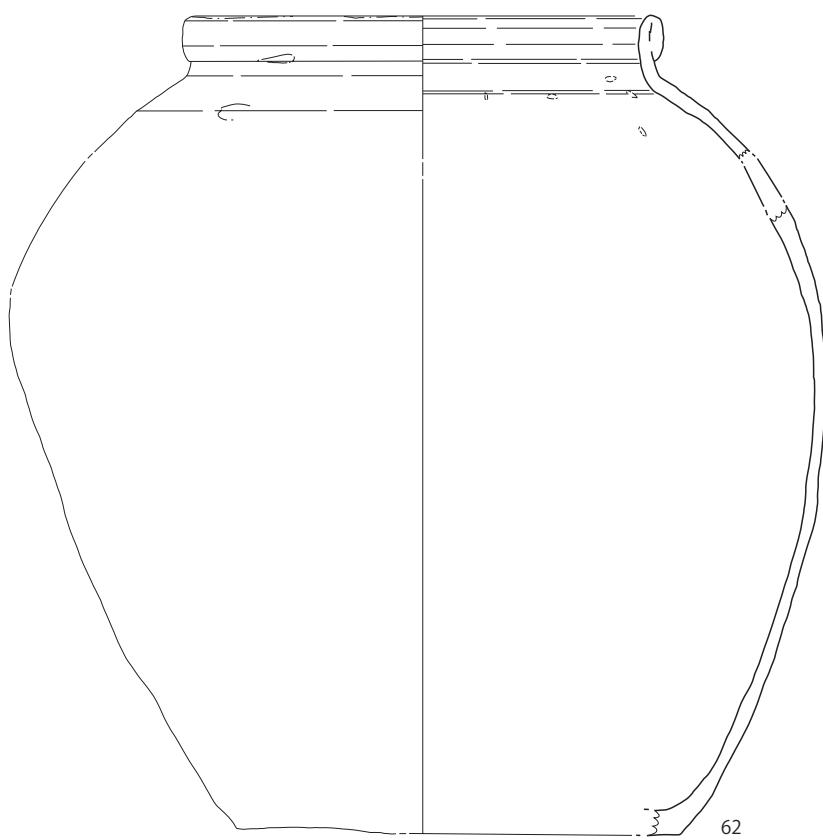


60



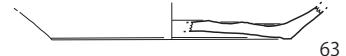
61

0 20cm

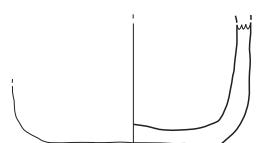


62

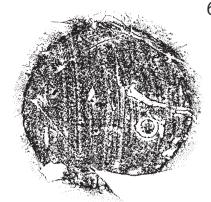
0 20cm



63



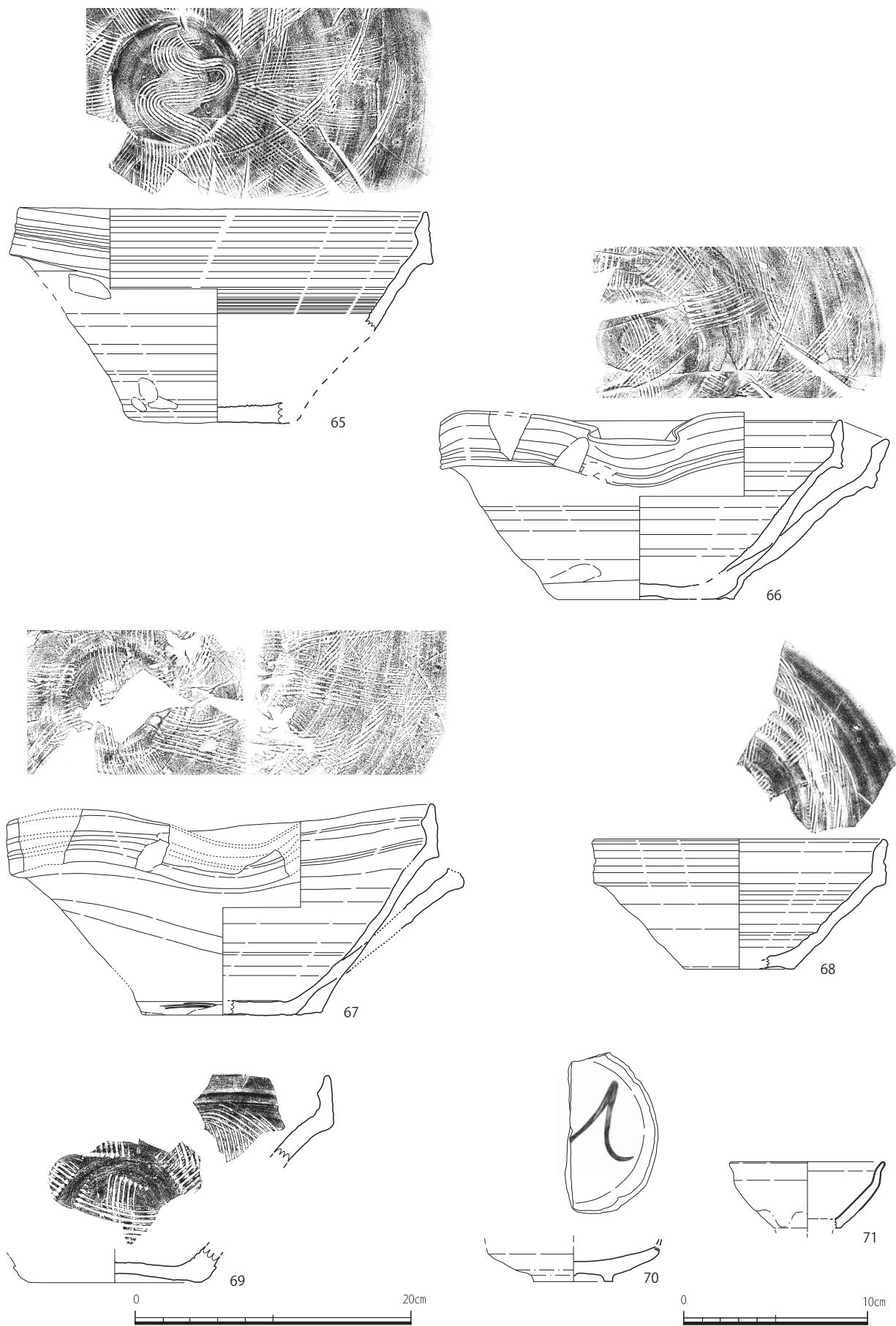
64



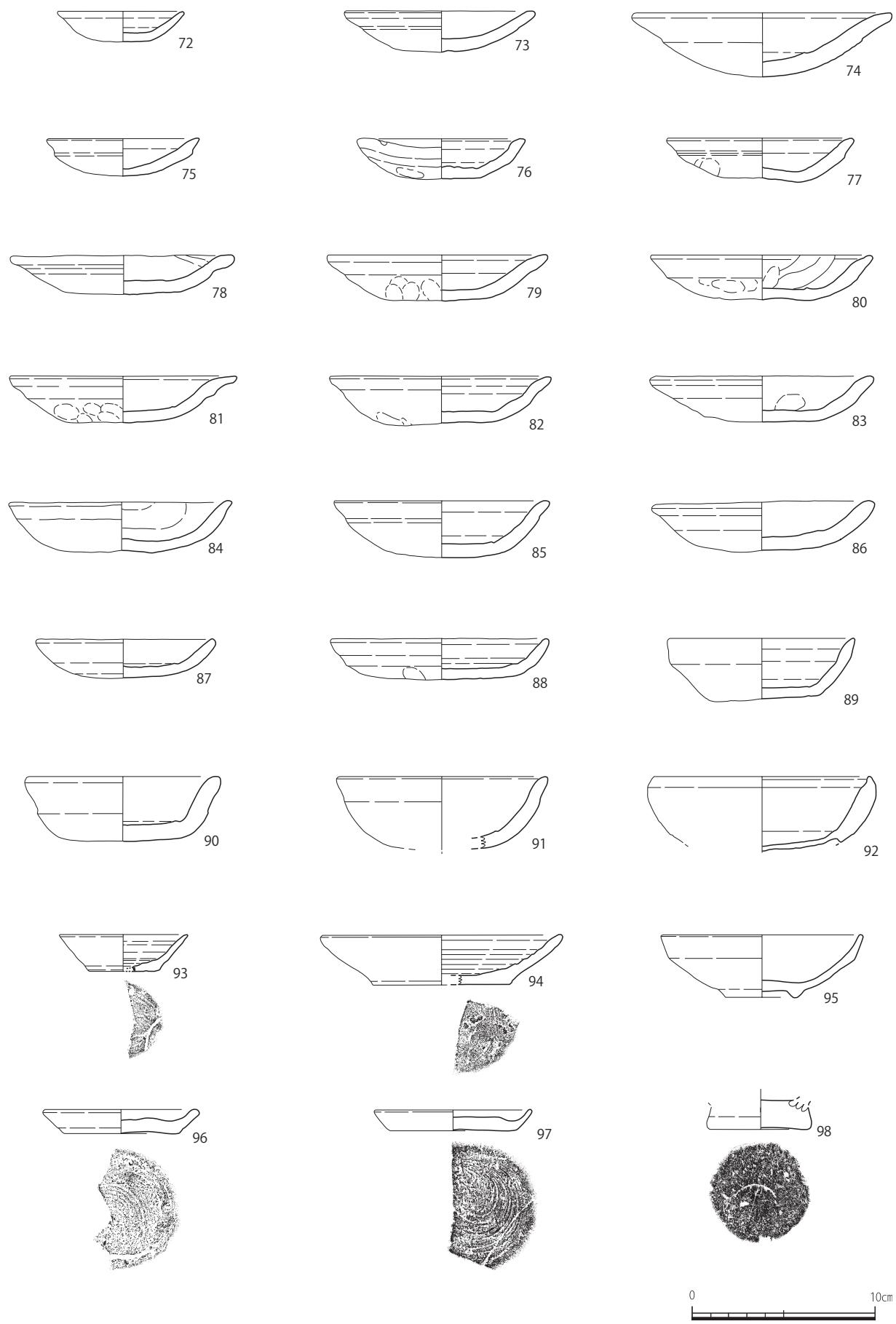
64

0 10cm

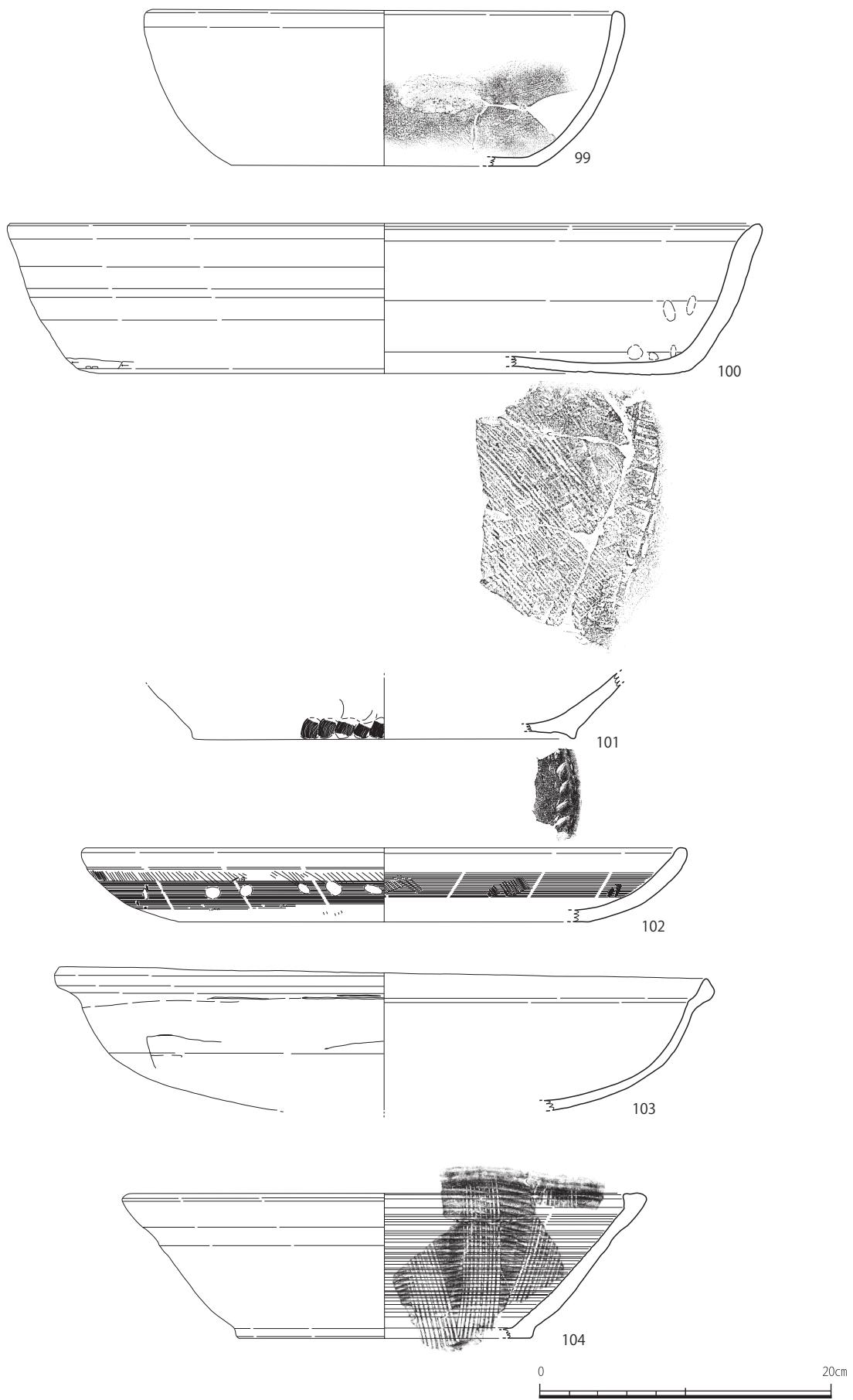
第21図 073S210 出土遺物実測図 (1/3・1/4・1/6)



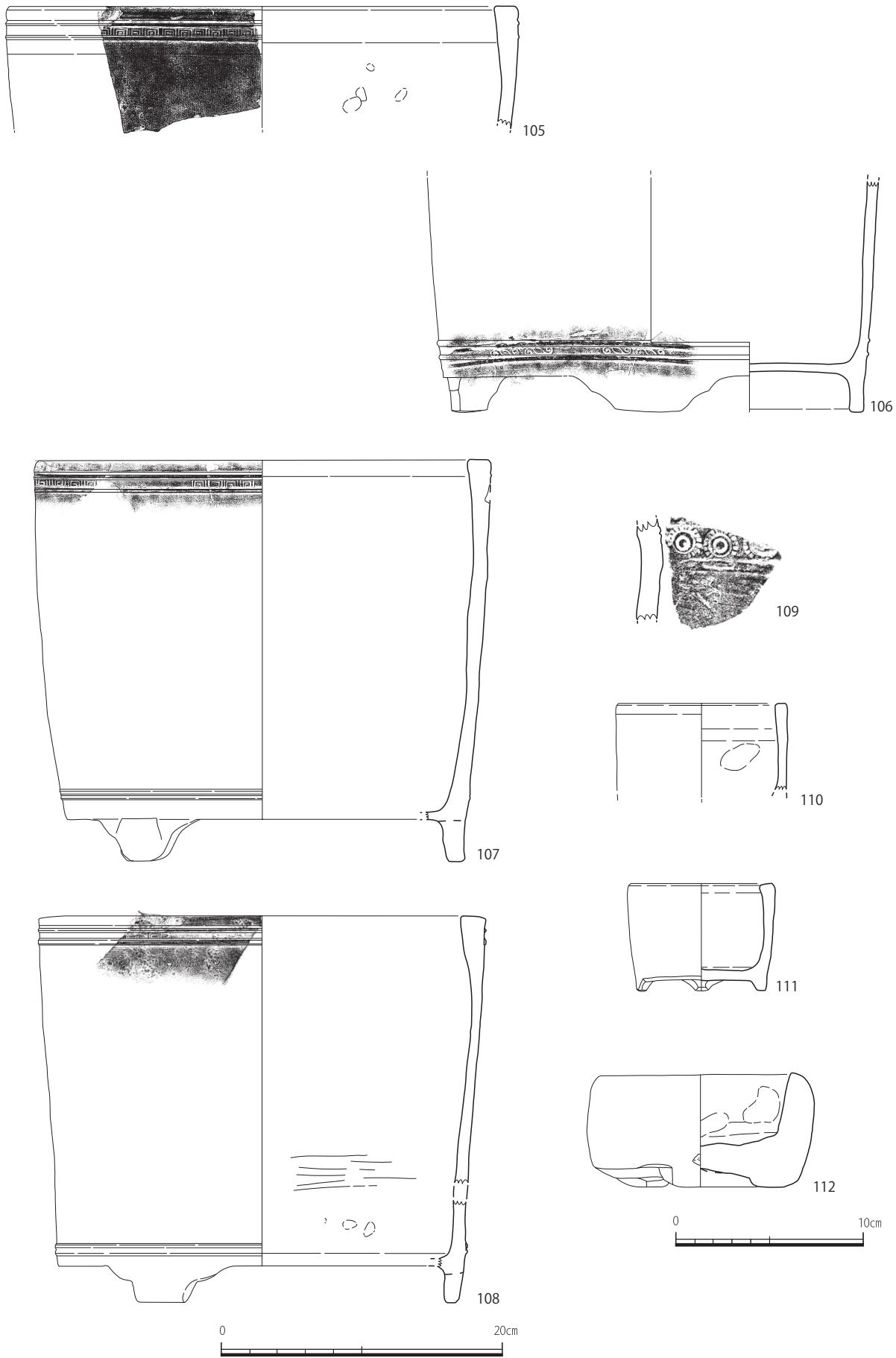
第22図 073S210 出土遺物実測図 (1/3・1/4)



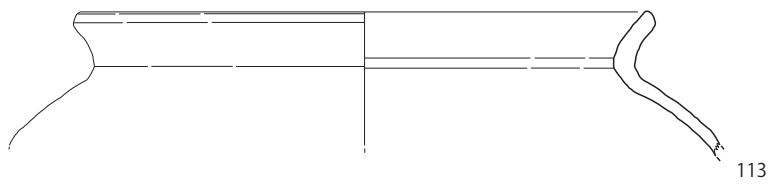
第 23 図 073S210 出土遺物実測図 (1/3)



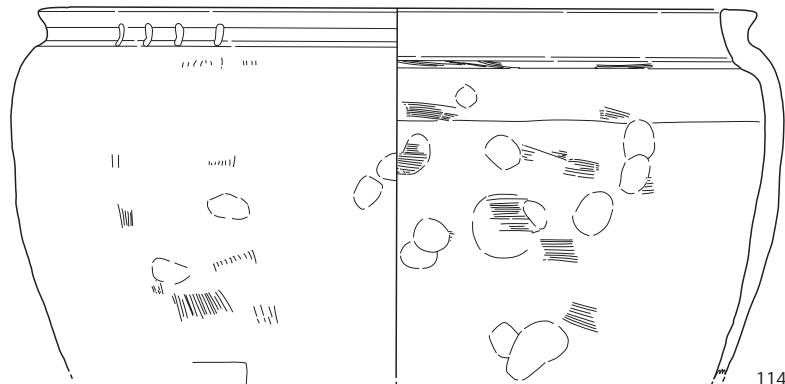
第24図 073S210出土遺物実測図 (1/4)



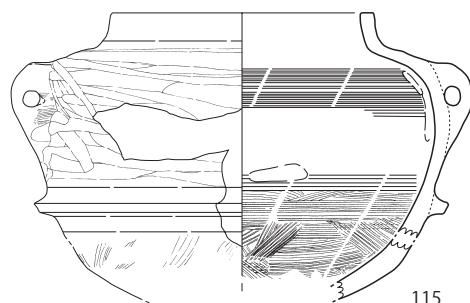
第 25 図 073S210 出土遺物実測図 (1/3・1/4)



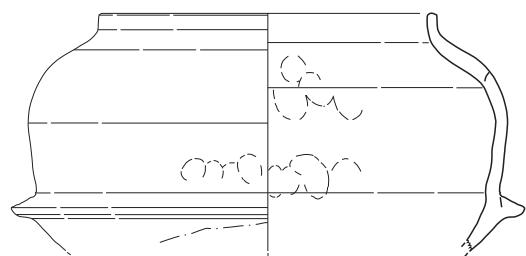
113



114



115

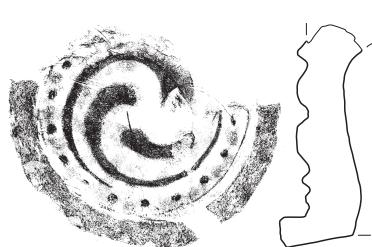


116

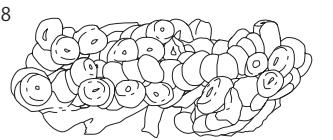
0 20cm



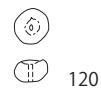
117



118



119



120

0 3cm

第 26 図 073S210 出土遺物実測図 (1/1・1/4)

119・120は、一箇所にガラス玉が固まって出土した。119は、熱によって溶けて癒着したものである。ガラス玉の大きさはどれも同一規格のもので径約4～5mm、厚み約3mmで、中心に紐を通す穴が開く。

石製品では、石臼が数点出土している。122・123・124はいずれも下臼で外側面には鑿跡が明瞭に観察できる。122には摺面があり、8分割され、それに9溝が刻まれた摺り目が見られる。

金属製品には、用途不明なものなど製品の一部分となるものが多い。125・126は鍋の取手部分である。128はピン状の製品、127・129は鉢状の製品である。

銭貨もS210から15点ほど出土している。いずれも中国の北宋時代のものである。131は、銭名が『祥符通寶』、132～136は5枚が癒着した状態で出土し、銭名に『治平元寶』・『皇宋通寶』・『天聖元寶』・『熙寧元寶』が見られる。137は、銭名が『元祐通寶』である。

S221・222 出土遺物（第29図）

S221・222の出土遺物は、堀が最初に埋め戻され途中段階で使用した際に堆積した層から出土したものである。

138は漳州窯系青磁の皿である。底部が釉剥ぎされた碁笥底で、小野分類C群である。139は、瀬戸・美濃産の小皿である。140は、京都系土師器坏でやや厚みのある体部で16世紀後葉～末葉のものである。141は14世紀代の備前産の壺である。

瓦は、破片点数52点の出土である。142の軒丸瓦は、巴紋文様の瓦当で左巻きの三ツ巴文と小さな連珠文の組み合わせである。珠文数は19個である。内区と外区を隔てる圈線が認められる。143の軒平瓦は、瓦当文様が均正唐草文である。

鉄製品では、144・145がセットとなる火箸である。

146は、中国産の饅頭心碗で小野編年の碗C群である。

S223 出土遺物（第30～32図）

S223の出土遺物は、堀に堆積していた泥炭質粘土層から出土した遺物である。

147は中国産五彩の碗で小野分類C群である。148は景德鎮窯系の青花鉢である。149は翡翠釉の小皿で、外面に蓮弁を施す。150は白磁の端反り皿で、森田編年のE-2類にあたる。151は青磁の碗で、高台の内面と外面の一部は露胎している。152は朝鮮王朝産陶器碗である。

153・154は京都系土師器の坏で、器壁が厚く16世紀後葉から末葉と考えられる。155の在地系土師器の坏は器壁の外側面に工具による強い沈線が見られる。

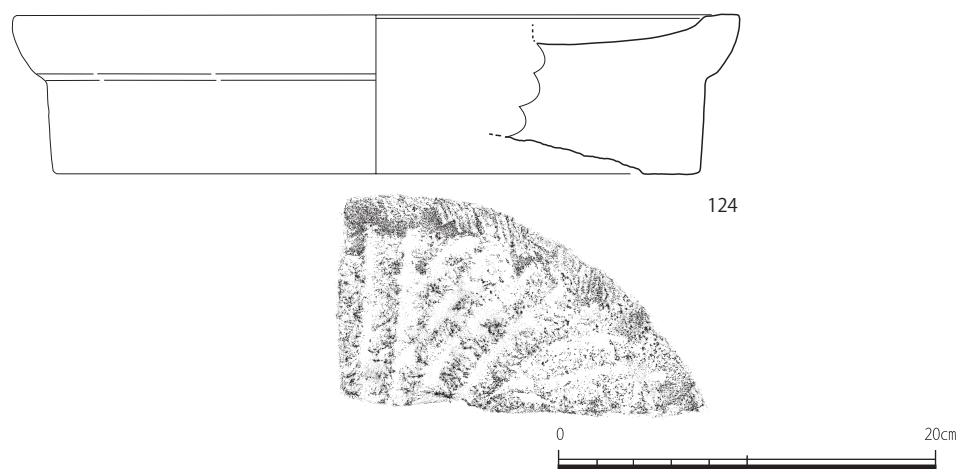
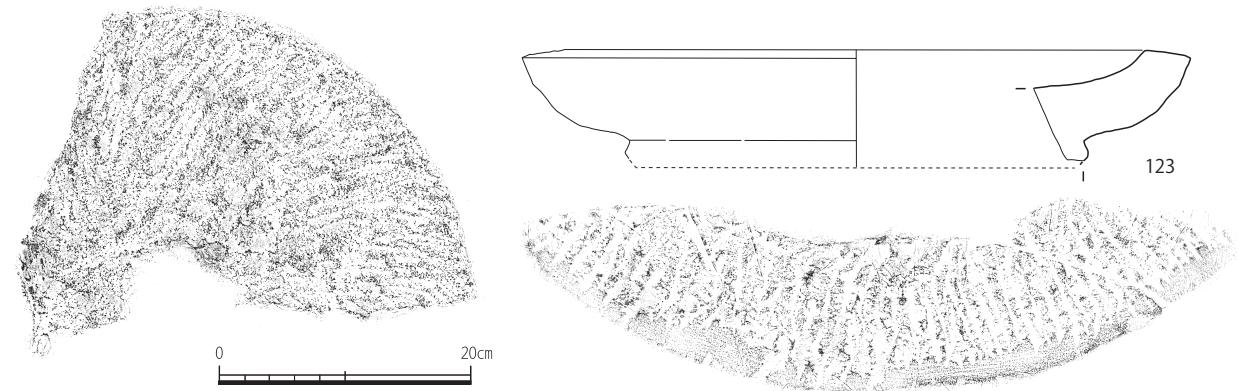
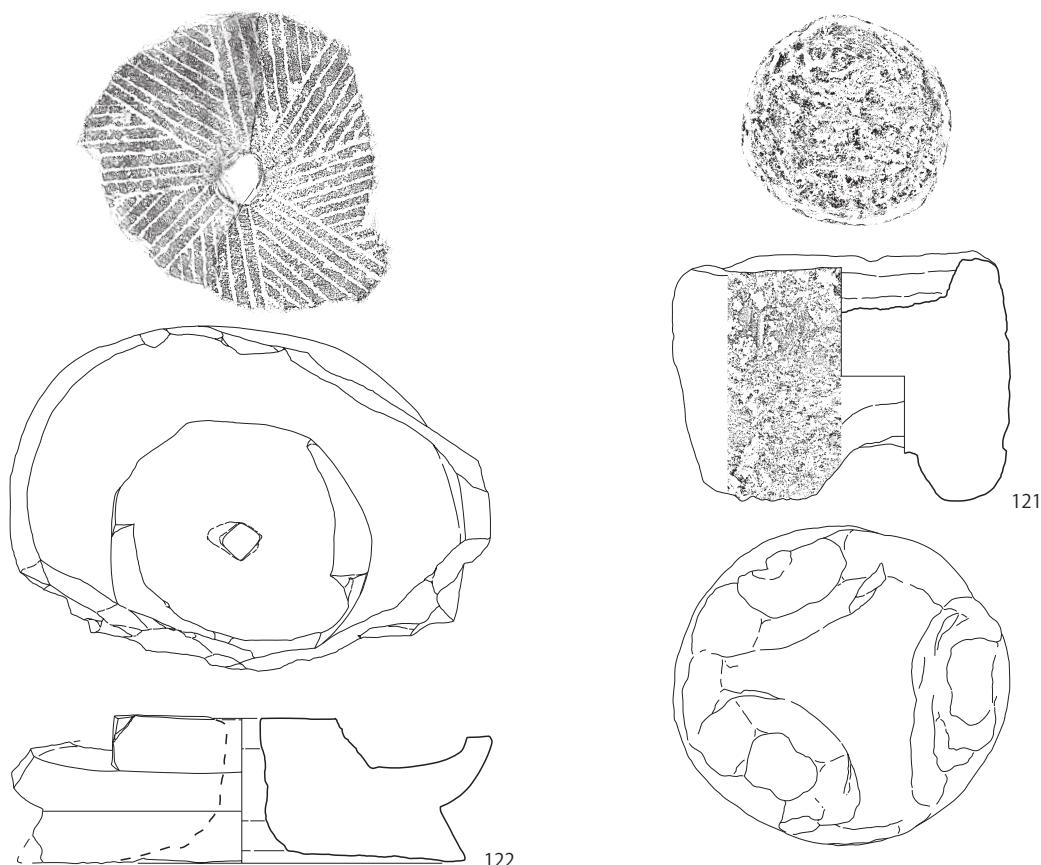
瓦質土器の156の茶釜は、肩部が丸味を帯び、体部中位に鍔部が付く。肩部上位に車輪文単体スタンプを施す。157の浅鉢は、体部が底部から内巻きに開き、口縁部端部は丸味を持つ。

158・159は土師器の燭台である。158には体部には強いナデが付く。

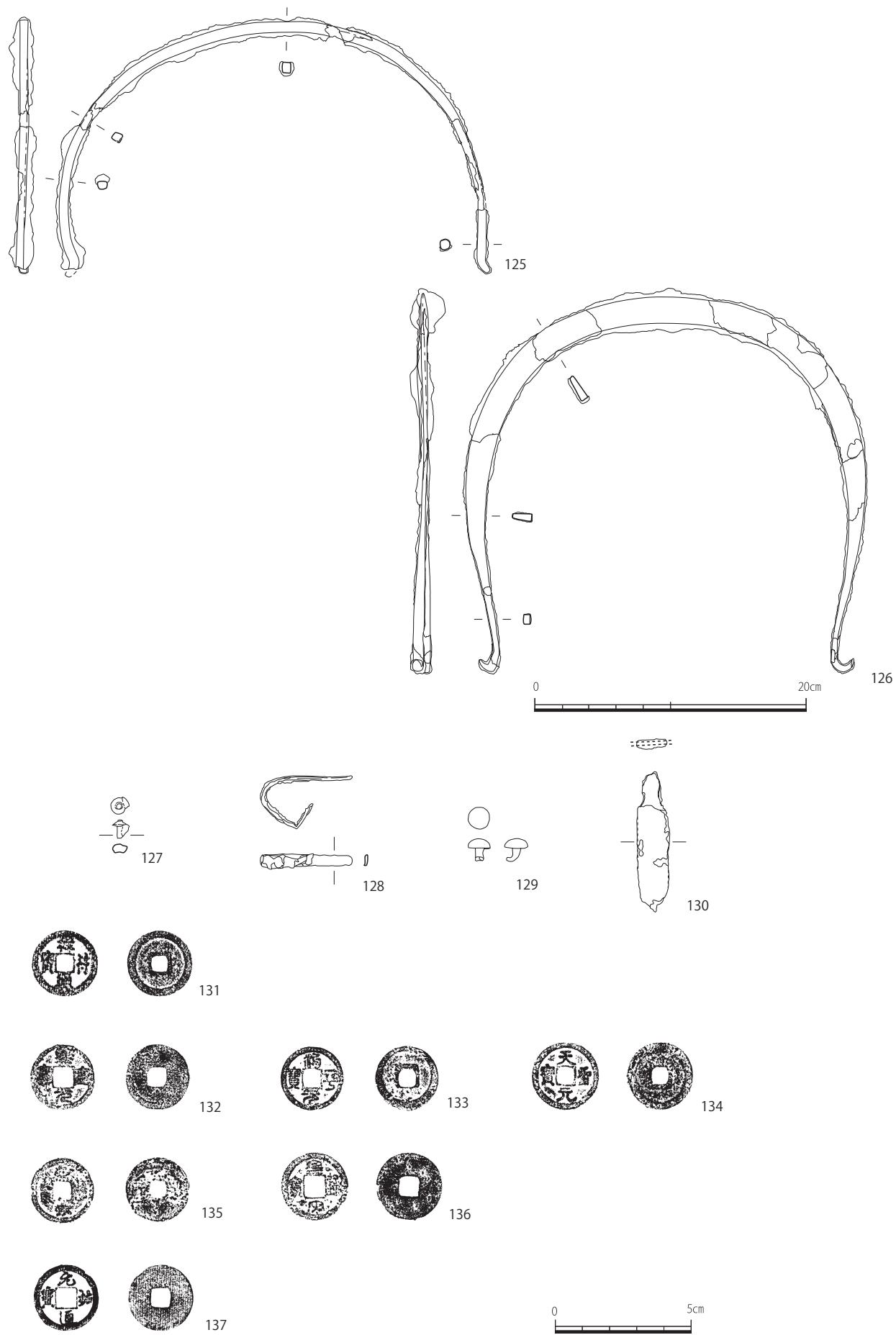
160は備前産の小型の擂鉢である。

162は銅製品の小柄杓である。163は用途不明の鉄製品である。164は銅製品の耳搔で、先端部は薄く匙状になっている。

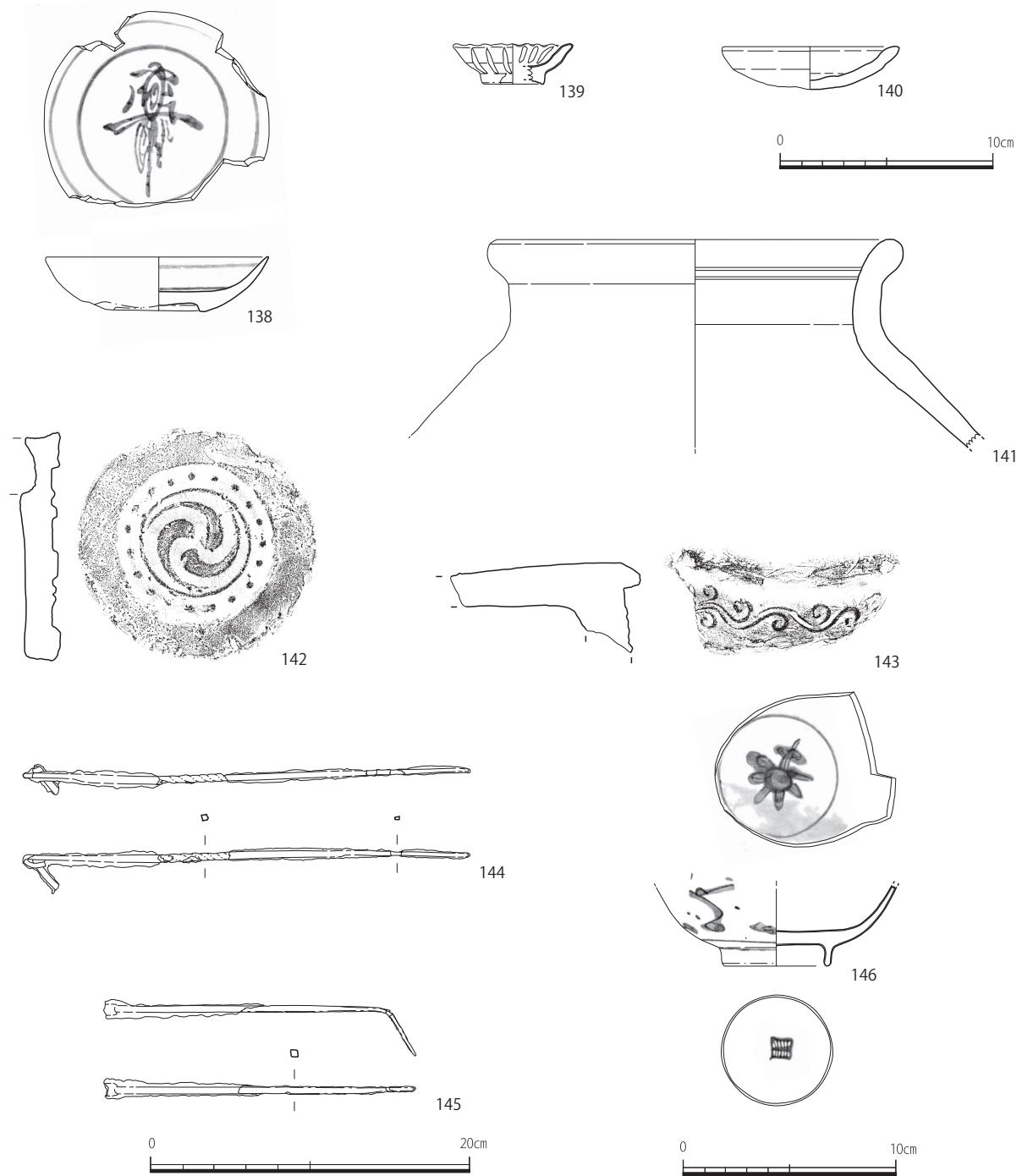
S223は土質が泥炭であることから大量に木製品が出土している。165～171は漆器椀である。172は木札で片面に絵が描かれている。173は大型の木箸である。174は曲物の底板である。175・176は用途不明である。177は櫛で、両側に歯があった痕跡があるもののすべて欠損している。178は杖毬の玉で、大きく3分の2が欠損している。径5cmほどである。179は木製の滑車である。180～183・186は下駄である。180～183は、鼻緒を装着するために3ヶ所に眼を穿っている。前壺は前方中心にあり、横緒孔を後歯の前に穿っている。183には、後歯に墨で「+」が描かれている。186は無限下駄と思われ、下駄の台の周囲に等間隔に小さな穴を穿っている。184・185は、鍬と考えられる。184は刃先が欠損し、185は半分が割れている。



第 27 図 073S210 出土遺物実測図 (1/4)



第28図 073S210出土遺物実測図 (1/2・1/4)



第29図 073S221・222出土遺物実測図 (1/3・1/4)

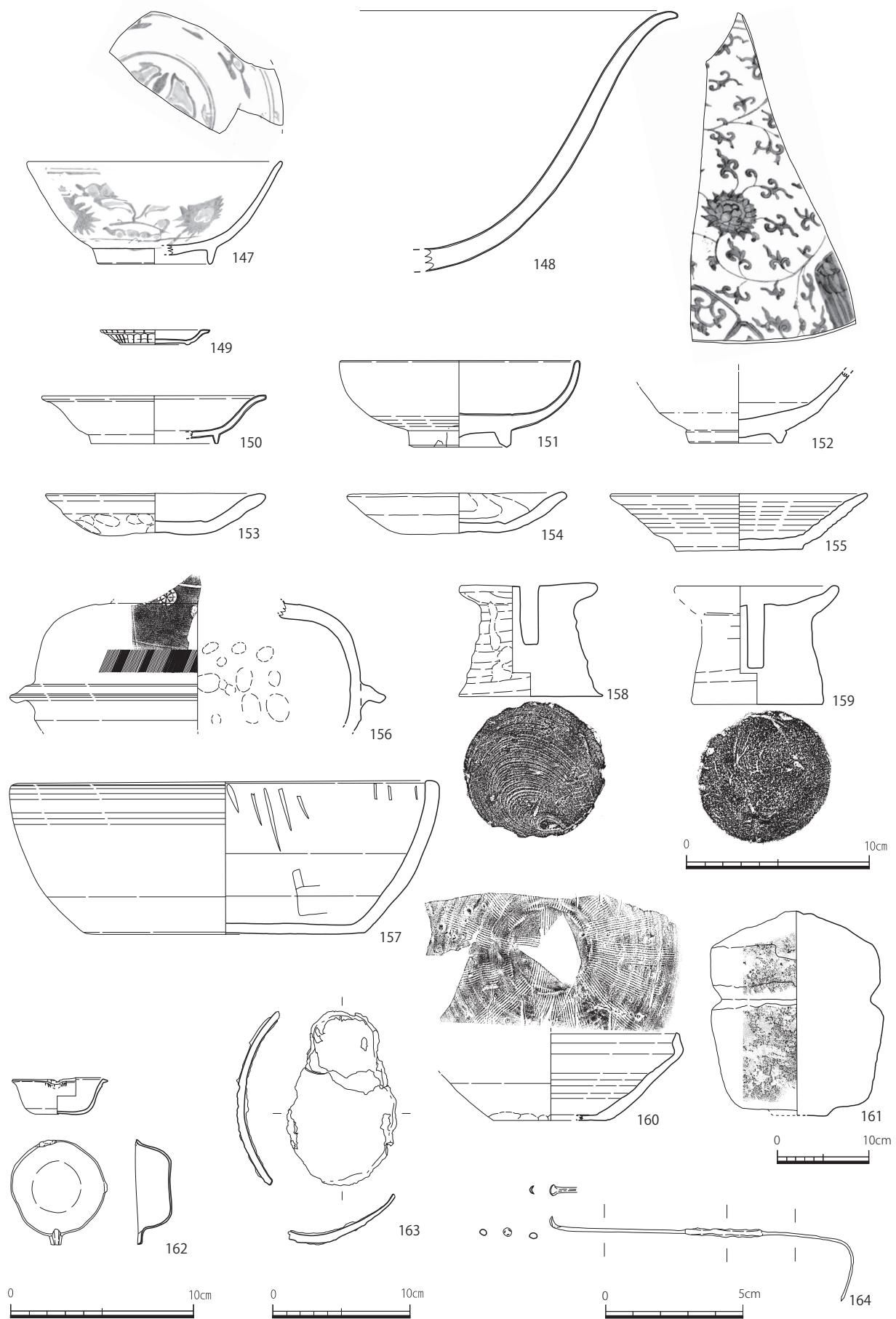
S224 出土遺物 (第33図)

S224の出土遺物は、堀 (S200) の最下層にあたり、自然堆積された中から出土した遺物である。

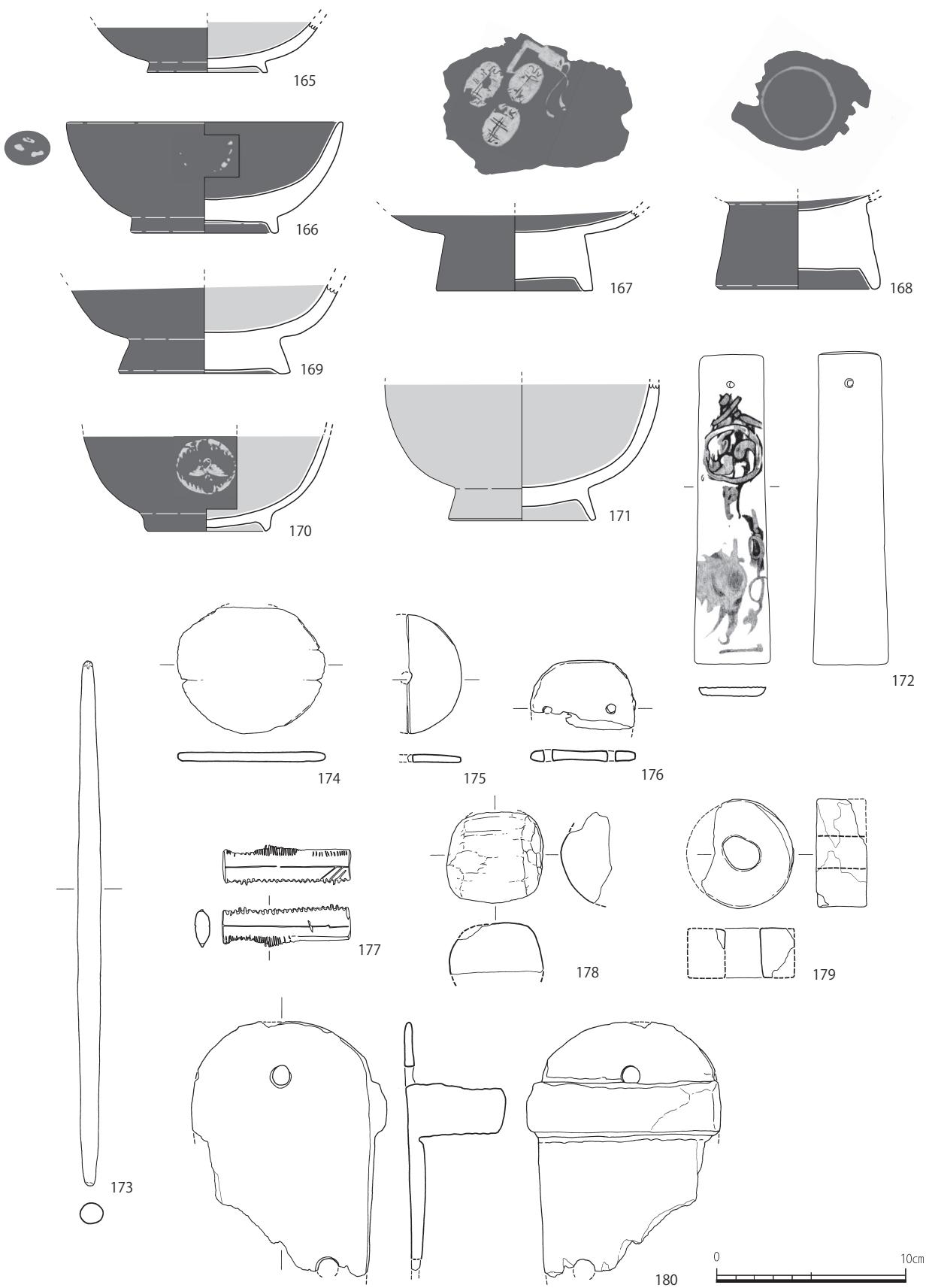
187は備前産の擂鉢である。188は京都系土師器の坏で、口縁部の外側には強いナデが施され、外反している。

16世紀中葉から後葉と考えられる。189は瀬戸・美濃産の天目茶碗である。190は朝鮮王朝産陶器碗である。

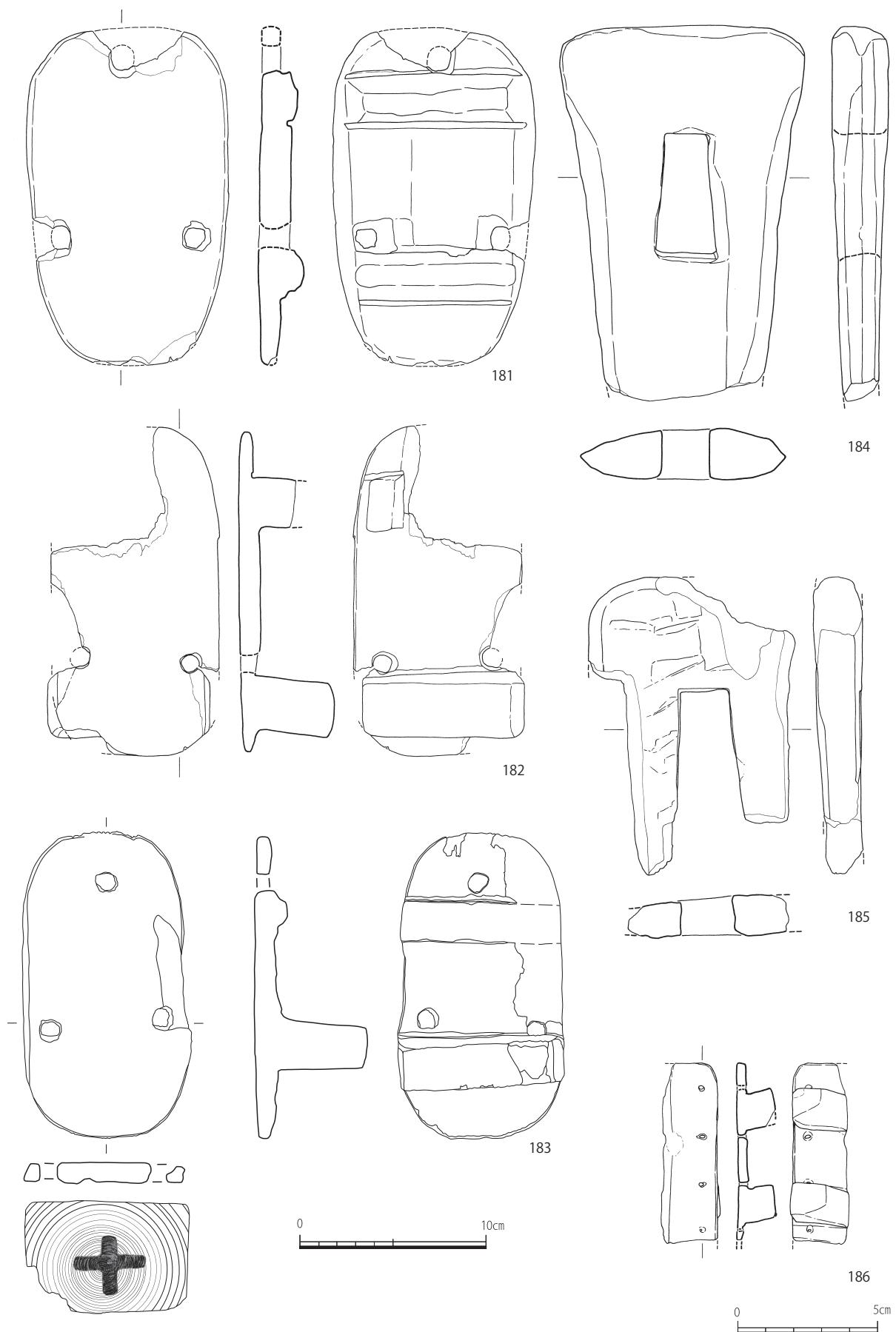
192は用途不明の木製品である。191・193・194は漆器椀である。195は木杭であり、先端を斜めに削っている。



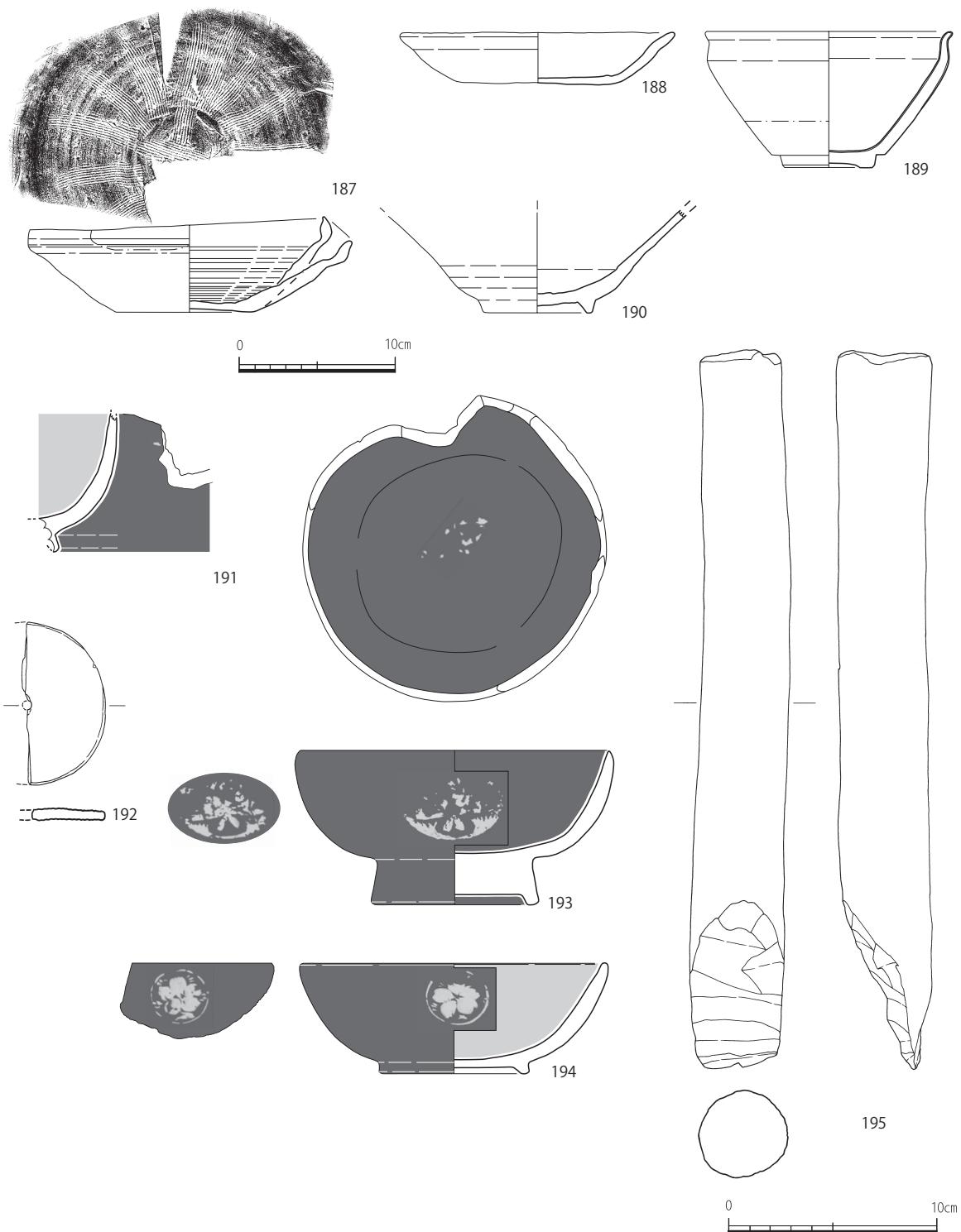
第30図 0735223 出土遺物実測図 (1/3・1/4・1/6)



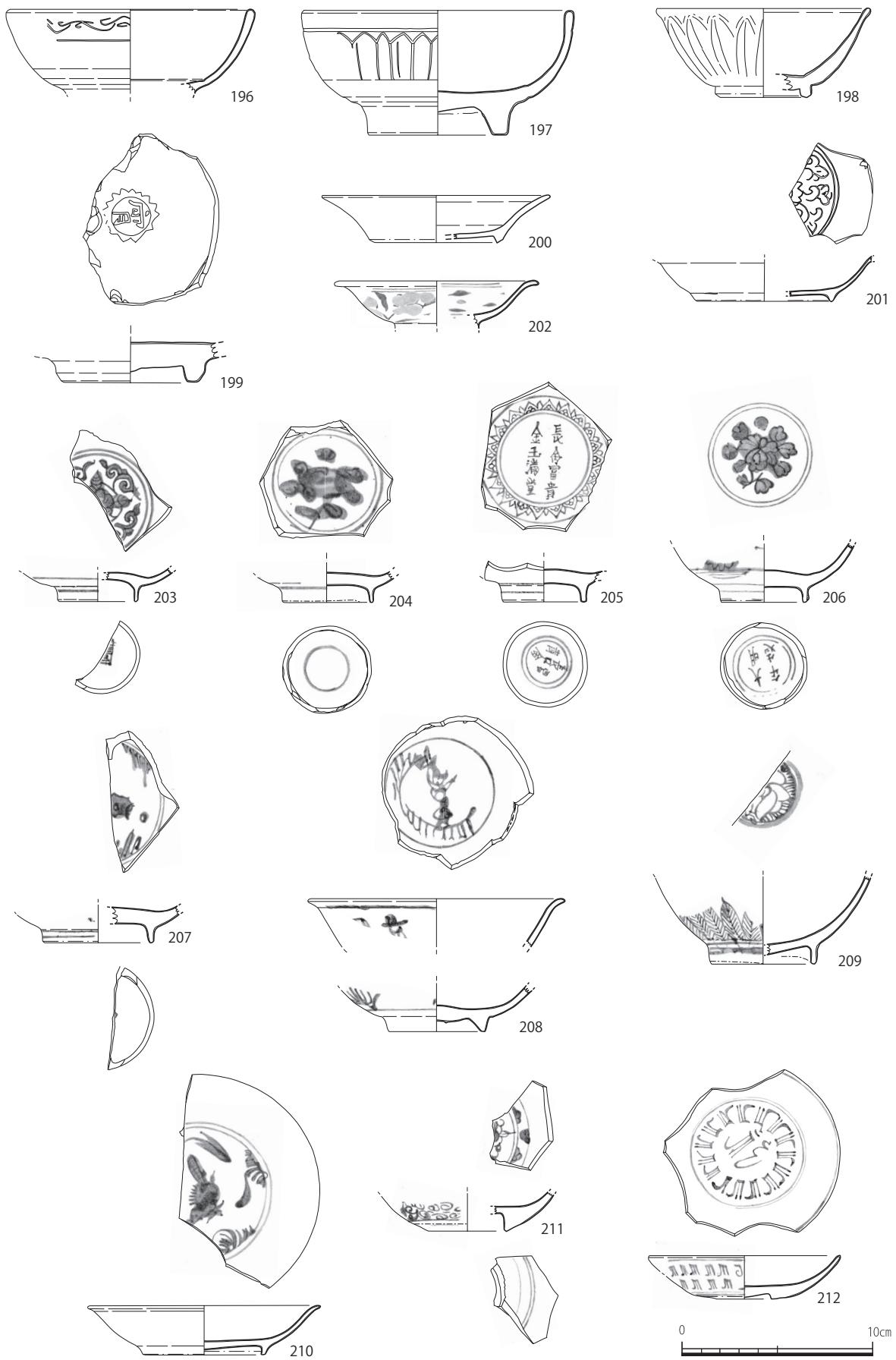
第31図 073S223 出土遺物実測図 (1/3)



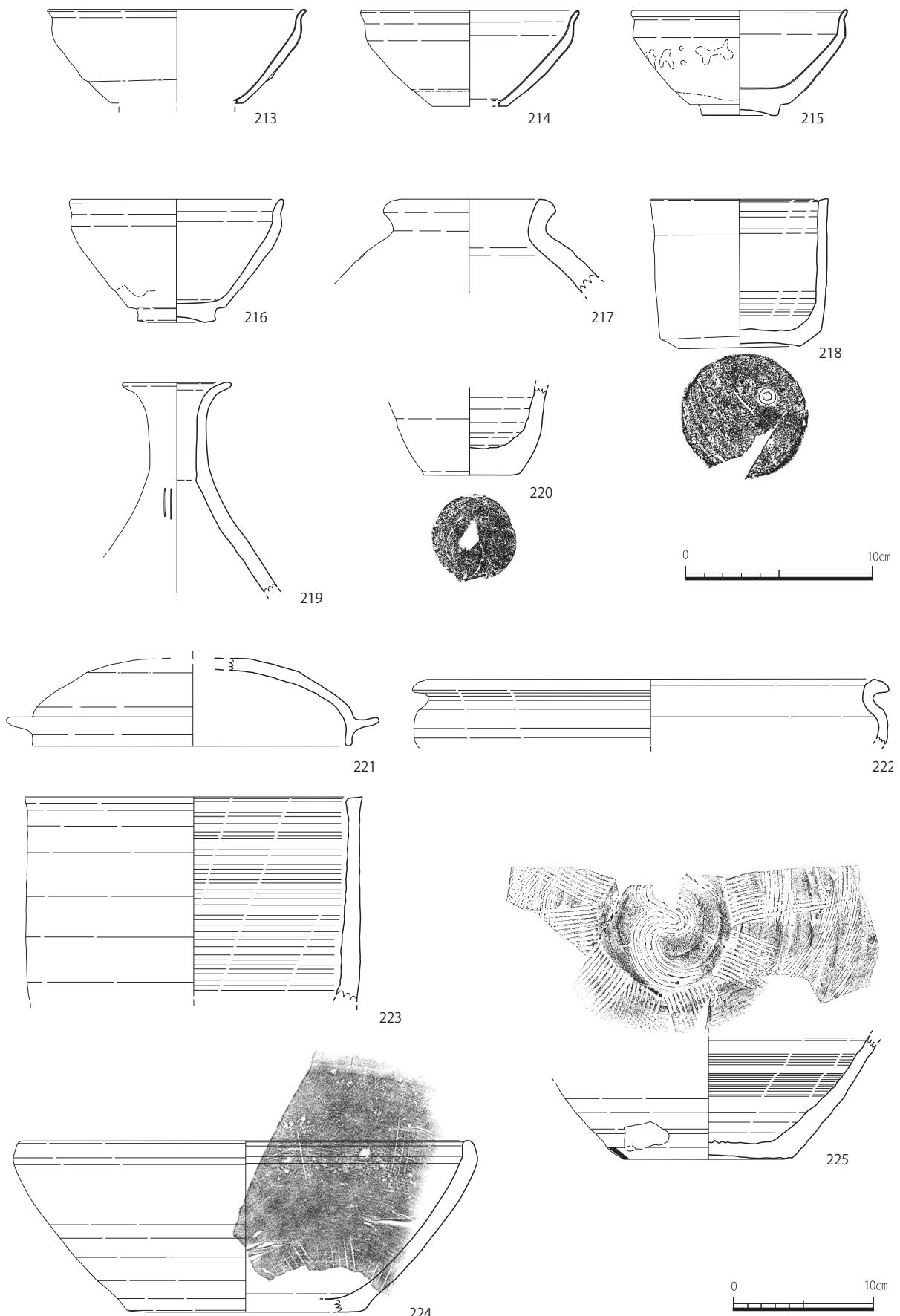
第32図 073S223出土遺物実測図 (1/3)



第33図 073S224 出土遺物実測図 (1/3)



第34図 073S231 出土遺物実測図 (1/3)



第35図 073S231 出土遺物実測図 (1/3・1/4)

S231 出土遺物 (第 34 ~ 36 図)

S231 の出土遺物は、堀を埋め戻す時の埋土であり、この造成土に混ざって出土した遺物である。

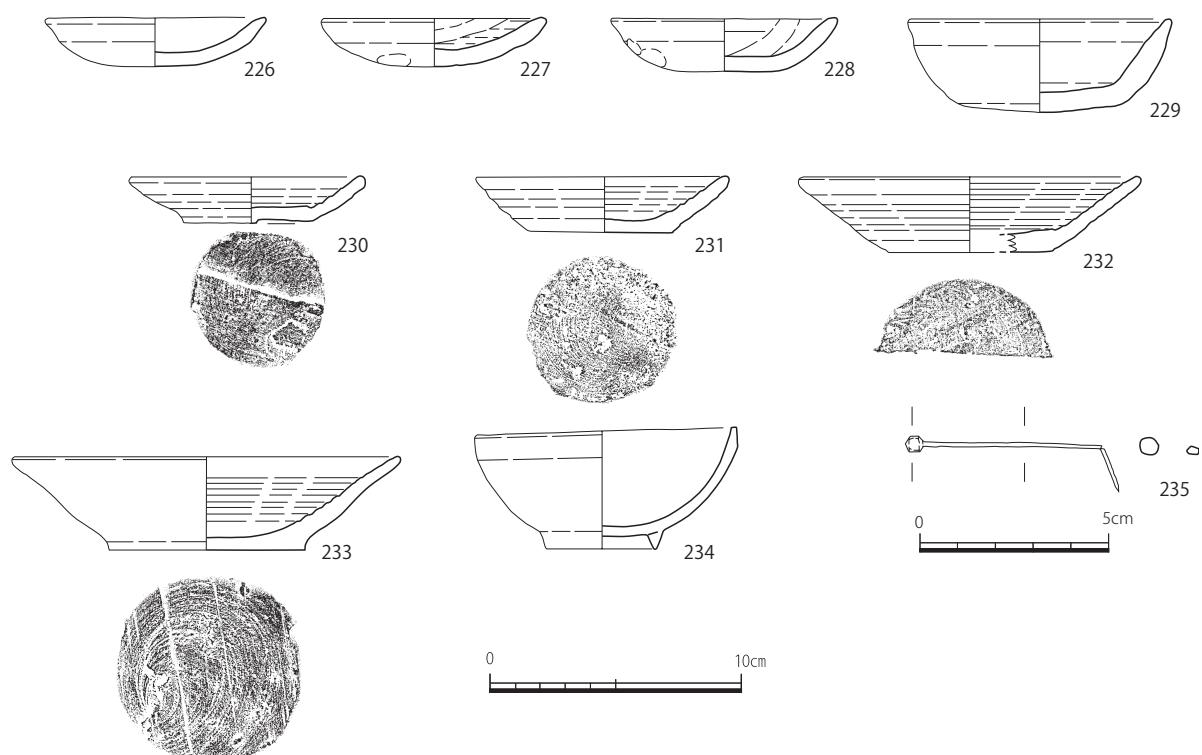
196・198 は龍泉窯系青磁の碗である。197 は龍泉窯系以外の青磁蓮弁文碗で上田分類 B 群となる。199 は龍泉窯系青磁の鎧蓮弁文碗で上田分類 A 群となる。200 は白磁の皿で、森田分類の E-2 群である。201 は白磁の端反り皿で、森田分類の E-2 群である。202 は中国産五彩の皿である。203 ~ 207 は、景德鎮窯系青花の碗である。形状は饅頭心碗の系統で小野編年の E 群に属する。16 世紀後葉の時期にあたる。208 は漳州窯系青花の碗で、小野分類の B 群である。209 は景德鎮窯系青花の蓮子碗で、小野分類の C 群である。210 は漳州窯系青花の皿で、小野分類 B 1 群である。211・212 は、景德鎮窯系青花の皿である。底部が釉剥ぎされた碁笥底で、小野分類 C 群である。

213 は中国産の天目茶碗である。214 ~ 216 は瀬戸・美濃産の天目碗である。217 は備前産の壺である。218 は備前産の筒状を呈する鉢である。219 は備前産の瓶である。220 は備前産の瓶の底部である。221 は中国南部産の蓋である。223 の水差しは備前産で、ほぼ体部が垂直に立ち上がり、底部は欠損している。222 はタイ産メナムノイ窯系焼締陶器の鉢である。225 は備前産の擂鉢である。

224 の瓦質土器擂鉢は、体部が底部から直線的に伸び、口縁部は内傾する。内面には 6 条単位の擂り目を施す。

226 ~ 229 は京都系土師器の壺で、器壁が厚く 16 世紀後葉から末葉と考えられる。229 は口径と比較して器高が高い壺である。230 ~ 233 は在地系土師器の壺で、器壁の内面に工具による強い沈線が見られる。15 世紀末葉から 16 世紀初頭と考えられる。234 の瓦質土器碗は体部が内彎気味に開き、高台が断面三角形を呈する。外面体部にはヘラケズリを施す。

235 はピン状の青銅製品である。



第 36 図 073S231 出土遺物実測図 (1/3)

土坑 (SK)

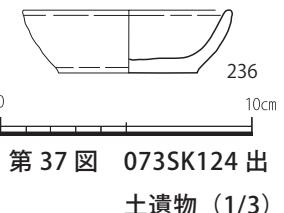
SK124

調査区南よりに検出された土坑で、堀 (SD200) が埋められた後に堀跡の肩の部分に切りあって掘り込まれている。遺構は東西に長いために調査区外に伸びる。東西方向に伸びる溝状遺構とも考えられるが、遺構の堆積状況から細かな水平堆積が観察され、丁寧に埋め戻されたことが判明しており、溝の自然堆積に見られるようなレンズ状堆積は見られない。そのため、現時点では、この遺構を土坑として認識している。

遺構の規模は南北に 4.9 m、深さは 1.3 m であり、南北の断面形状は逆台形となっている。床面はほぼ平らに形成されている。東西方向の堆積では、やや西から東下がりに堆積している。

SK124 出土遺物 (第 37 図)

出土遺物には、主に中世の土師器を大量に含む。種類は、ハコ型の在地系土師器が大半を占め、口クロ整形し、内面に段をもつ土師器や京都系土師器も含まれている。236 は在地系土師器小皿である。これ以外にも瓦質土器などが出土する。中国産の青磁・白磁・青花等も少しながら含まれる。埋戻しの埋土からの遺物であることから、遺物の年代幅が見られるものの、16 世紀前葉の様相を示す。



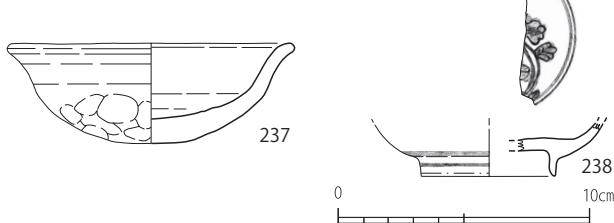
第 37 図 073SK124 出
土遺物 (1/3)

SK125

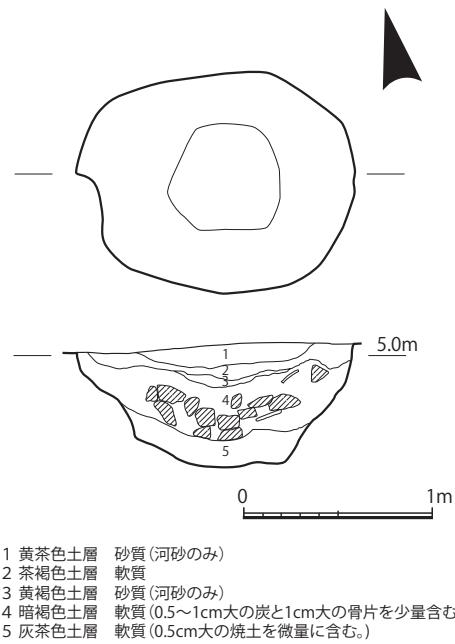
調査区南側で検出された土坑で、堀 (SD210) が埋められた後に堀跡の肩の部分に切りあって掘り込まれている。土坑は、平面形が楕円形を呈し、規模は東西に 1.5 m、南北に 1.15 m である。深度は 0.64 m で擂鉢状の形状を呈する。堆積は大きく 5 層に分層でき、最下層には、灰茶色の層が十数センチほど堆積しており、その上層の 4 層には十数センチ大の礫とともに瓦や土器が厚く含まれている。その上層の 1～3 層は、パサパサした層が堆積する。

SK125 出土遺物 (第 38 図)

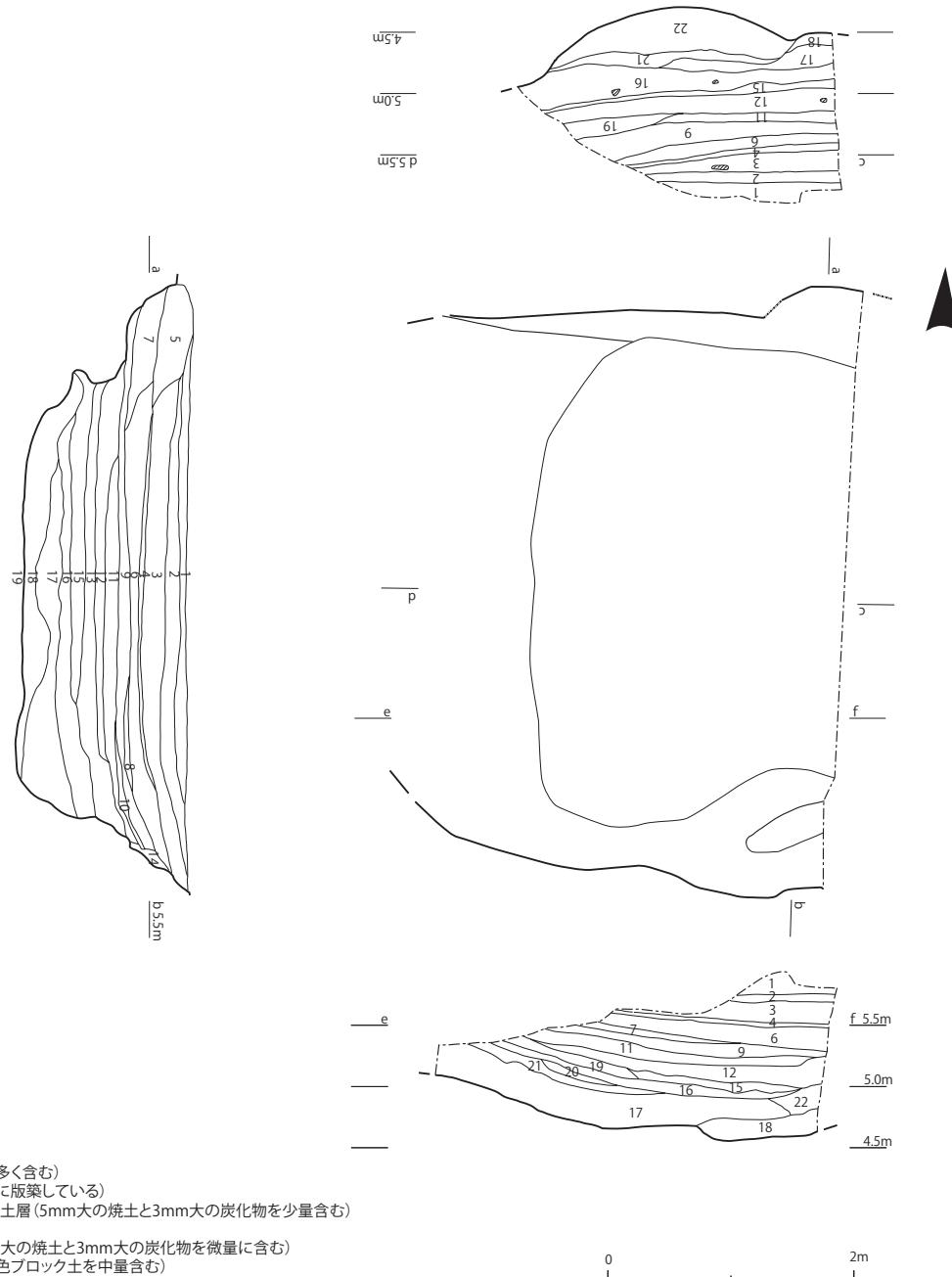
出土遺物には、京都系土師器を含め、ハコ型の在地系土師器壺や白色系の土師器が見られる。237 は器高の高い丸底の京都系土師器の壺で 16 世紀後葉から末葉の年代が考えられる。また、青磁・白磁・青花等の中国産陶磁器も多数含まれる。238 は、景德鎮窯系青花碗で、小野分類の E 群である。平瓦・丸瓦など万寿寺に関連する遺物も見られる。数は少ないもののタイ産陶器や石臼なども出土している。中には須恵質土器・須恵器も多くあり、時期幅のある遺物であることから、埋土は離れた場所からの持込とも考えられる。最終埋没年代は 16 世紀後葉から末葉である。



第 38 図 073SK125 出土遺物 (1/3)



第 39 図 073SK125 遺構平面・断面実測図 (1/40)



第40図 073SK124 遺構平面・断面実測図 (1/60)

SK143

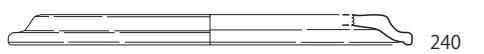
調査区の最も南端で検出された土坑で、遺構の南半分は調査区外に相当するところであったため、遺構の全容は不明である。遺構の規模であるが、東側も調査区外に延びることから、現状で2m、幅も現状で測定可能なのは0.9mであるが、本来の規模は倍の大きさであろう。深さは、0.9mあり、堆積状況はほぼ水平堆積になっていることから人為的堆積状況が見られる。なお、最上層には攪乱が見られる。堀（SD200）との関係であるが、切りあい関係からこの土坑が埋まった後に堀が掘削されたことが土層観察によって判明している。

SK143 出土遺物（第42図）

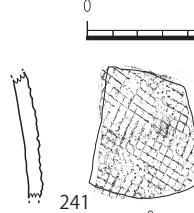
出土遺物には、華南三彩（239）、瓦質土器（241）、丸瓦・平瓦が出土している。京都系土師器が1点も出土していないが、華南三彩等から16世紀後葉から末葉であろう。なお、遺物の中には、古代の土師器蓋（240）なども混入する。



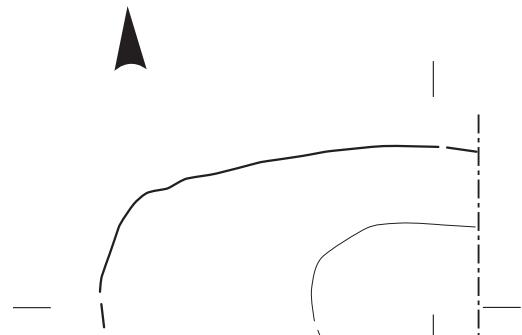
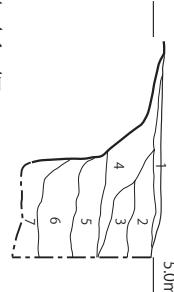
239



240



241

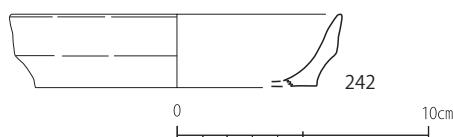


第41図 073SK143 遺構平面・断面実測図（1/40）

第42図 073SK143 出土遺物実測図（1/3・1/4）

SK149

調査区の中央よりやや南側で検出された土坑で、半分以上が調査区東側に延びている。現状では、平面形状は円形と思われ、検出長は南北方向に1.4mある。また掘り方はほぼ垂直で、床面はやや凹凸があるものの平らに仕上げられている。検出面からの深さは、1mほどである。堆積状況は、最下層から上層に従い層位が薄くなっていることから、大雑把な埋め戻しから次第に丁寧な埋め戻しをおこなったことが示唆される。



第43図 073SK149 出土遺物実測図（1/3）

1 淡黒褐色土層 砂質（0.5~1cm大の炭化物と0.2~2cm大の焼土を含む）
2 淡茶色土層 砂質（砂質ブロックが混入）
3 淡黒黄褐色土層 砂質（しまりがある）
4 暗黄褐色土層 砂質（やや粘りがある）
5 暗黄褐色土層 砂質（大部分に砂ブロックが混入し、0.2~0.3cm大の炭化物を微量に含む）
6 暗黄茶褐色土層 砂質（0.1~0.2cm大の炭化物と焼土を微量に含む）

第44図 073SK149 遺構平面・断面実測図（1/40）

SK149 出土遺物（第 43 図）

出土遺物は、ハコ形のロクロ整形土師器壺 (242) などが主体に出土し、須恵質土器や土師質土器なども含まれる。遺物の時期は 14 世紀中葉から後葉頃である。

SK151

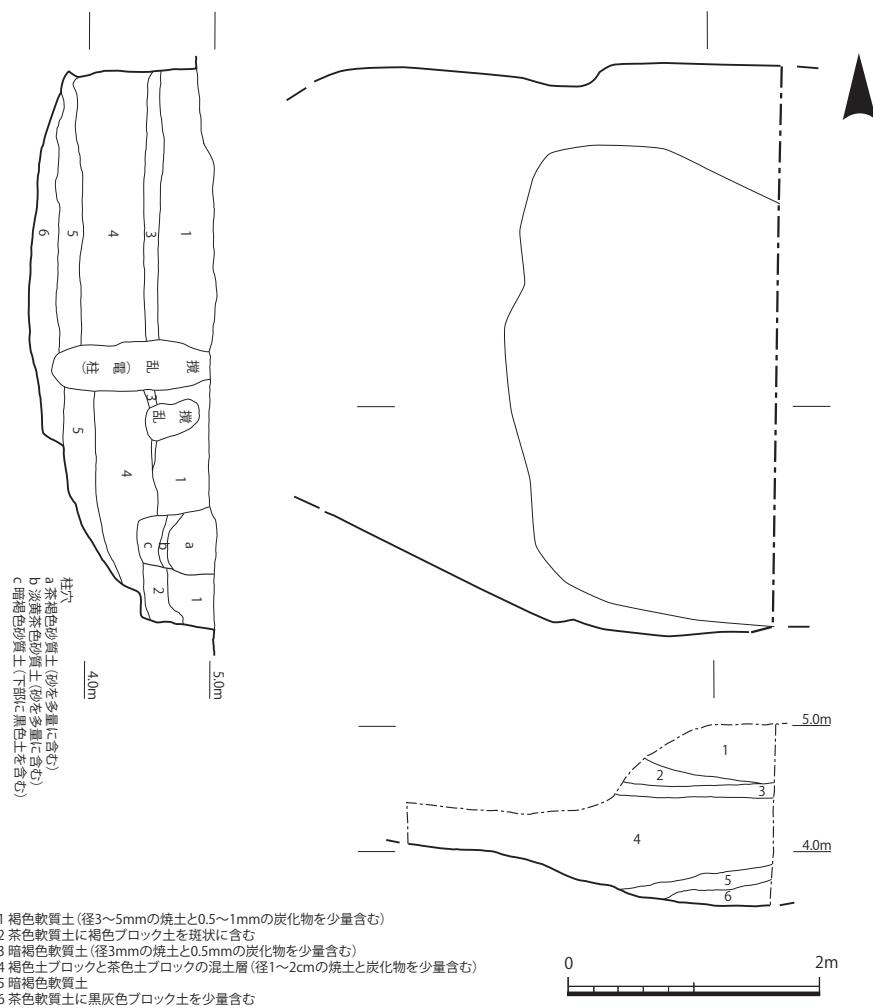
調査区南よりに検出された土坑で、堀 (SD200) が埋められた後に堀跡の肩の部分に切りあって掘り込まれている。SK124 と類似する遺構である。遺構は東西に長いために調査区外に伸びる。東西方向に伸びる溝状遺構とも考えられるが、遺構の堆積状況から細かな水平堆積が観察され、丁寧に埋め戻されたことが判明しており、溝の自然堆積に見られるようなレンズ状堆積は見当たらない。そのため、現時点では、この遺構を土坑として認識している。遺構の規模は南北に 4.5 m、深さは 1.3 m であり、南北の断面形状は北側が比較的垂直に壁が立ち上げり、南側はやや緩やかな傾斜で壁が立ち上がる。床面はほぼ平らに形成されている。東西方向の堆積では、やや西から東下がりに堆積している。

SK151 出土遺物（第 46 図）

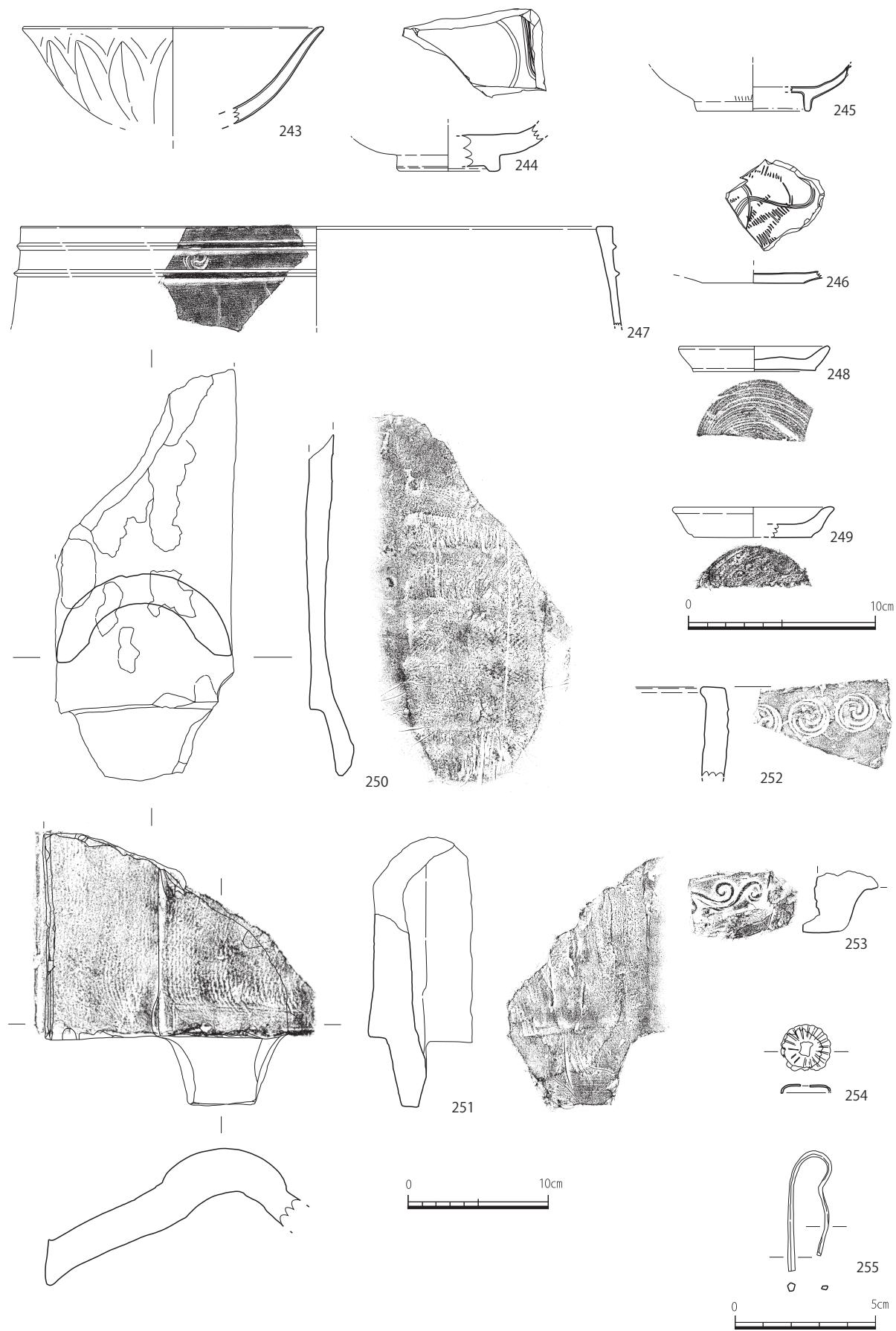
出土遺物は、土師器でハコ形土師器が主体を占め、土師器 (248・249) と京都系土師器が少し含まれる。須恵質土器・土師質土器・瓦質土器も土師器に続いて多い。瓦は、丸瓦 (250)・軒平 (253)、さらには棟瓦 (251) が見られた。これ以外にも龍泉窯系青磁碗 (243～245) や同安窯系の櫛描文青磁平底皿 (246) も混入する。瓦質土器には 247 の深鉢や 252 の浅鉢が見られる。247 は胴部が直線的に伸び、口縁部端部は内傾する。胴部に突帯が 2 条付き、突帯間に巴文単体スタンプを施す。252 は口縁部上端を水平に仕上げ、端部は内側に突出する。体部は直線的である。外面体部に巴文単体スタンプを連続に施す。青銅製品には古錢や釘以外に装飾金具 (254) や毛抜き (255) が見られる。以上から遺構の埋没段階は 16 世紀後半代と考えられる。

SK154

調査区中央付近で検出された土坑で、堀 (SD200) が埋められた後に堀跡の肩の部分に切りあって掘り込まれてい



第 45 図 073SK151 遺構平面・断面実測図 (1/60)

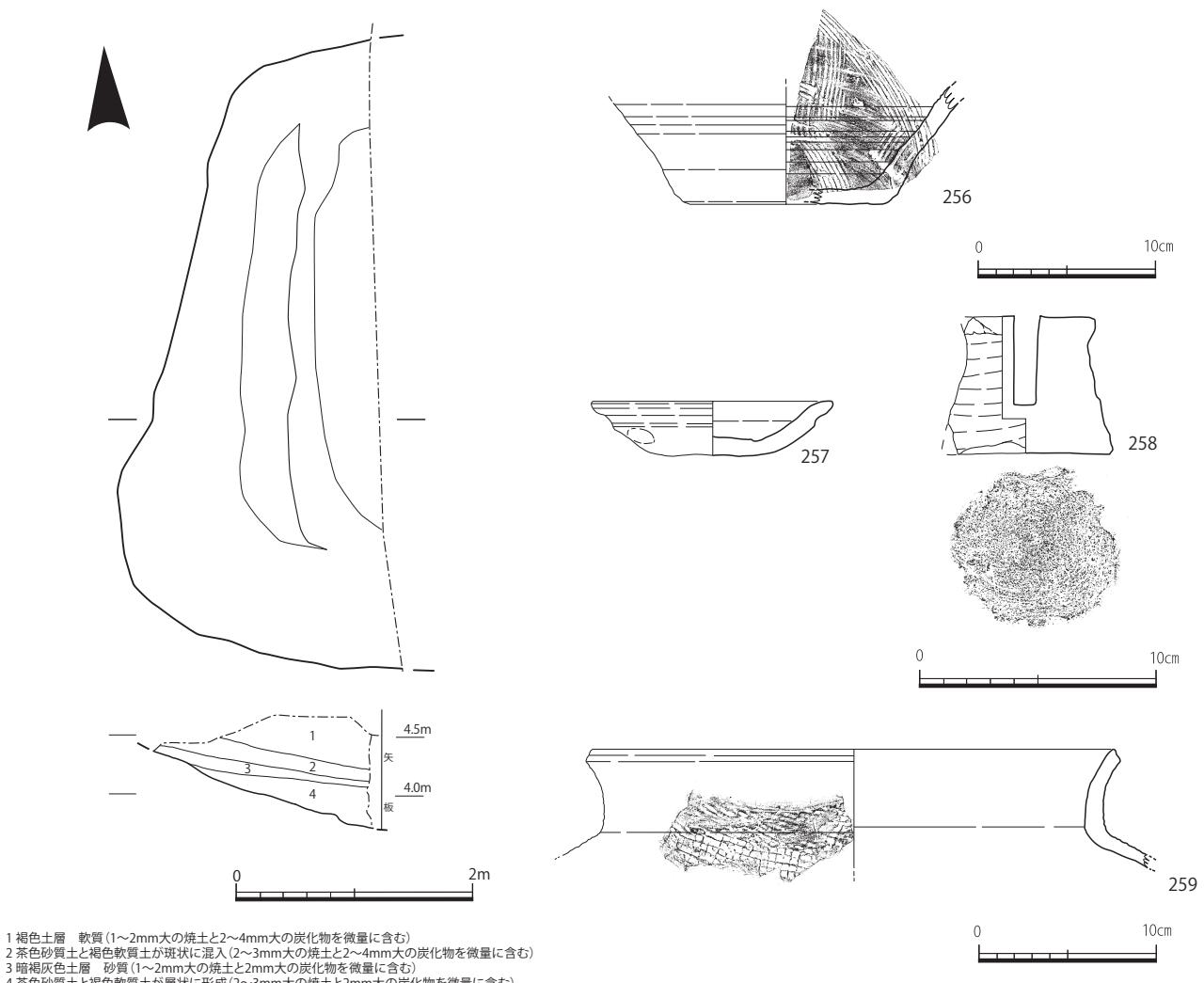


第46図 073S151出土遺物実測図 (1/2・1/3・1/4)

る。S124 や S154 と類似する遺構と考えられる。遺構は東で調査区外に伸び、西側では収束している。S124 や S154 と類似する遺構であるために東方向に伸びる溝状遺構とも考えられるが、検出が一部であるために不明である。堆積状況は東西方向しか判明できないが、西から東に向かってやや傾斜する堆積状況を見せる。遺構の規模は南北に $2.1 + \alpha$ m、深さは 0.52 m である。

SK154 出土遺物（第 48 図）

出土遺物は、土師器のハコ形の在地系土師器が主体を占め、それに京都系土師器が少し含まれる。さらに、須恵質土器・土師質土器・瓦質土器も若干出土する。257 の京都系土師器は口縁端部に強いヨコナデが施され、器壁が厚い。16 世紀後葉～末葉に相当する。258 は土師器の燭台で、体部には強いナデが付く。底部は糸切り痕が見られる。259 は須恵器の甕で、口縁部分が緩やかに外反する。外面には格子状のタタキが見られる。256 は、備前の擂鉢で、内面に放射状擂目と斜め擂目が施され 16 世紀末葉と考えられる。これ以外にも瀬戸・美濃産の陶磁器、龍泉窯系や同安窯系の青磁、白磁などが埋土に混入する。このような遺物により遺構の埋没段階は 16 世紀末以降と考えられる。

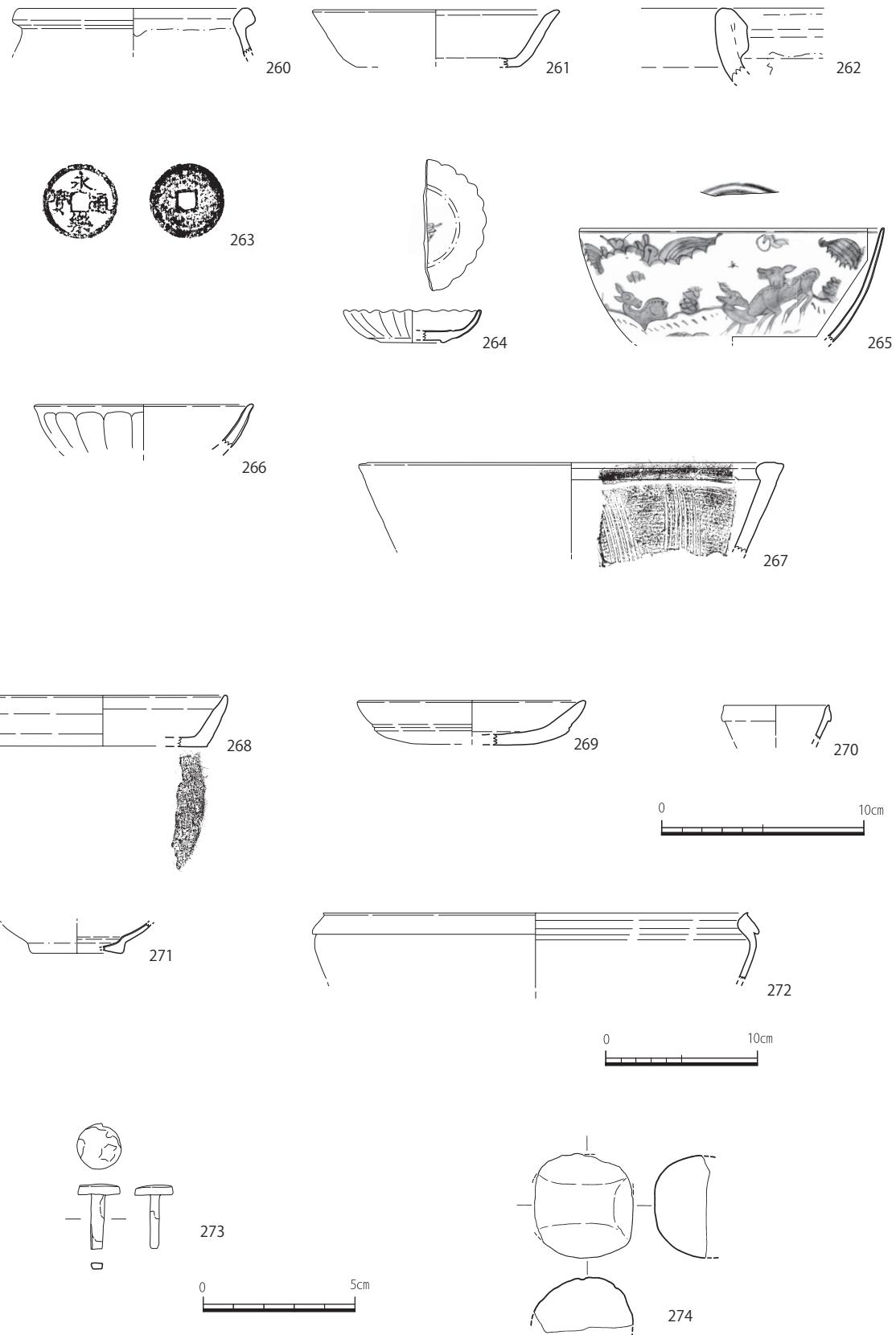


第 47 図 073SK154 平面・断面実測図 (1/60)

その他遺構の出土遺物（第 49 図）

S001 は整地層の遺物である。260 は中国の褐釉陶器の壺である。261 が中国産の白磁皿で口縁端部は口剥げとなっている。262 は信楽産陶器の甕である。263 の錢貨は『永楽通寶』の錢名があり、15 世紀代の明のもの

第 48 図 073SK154 出土遺物実測図 (1/3・1/4)

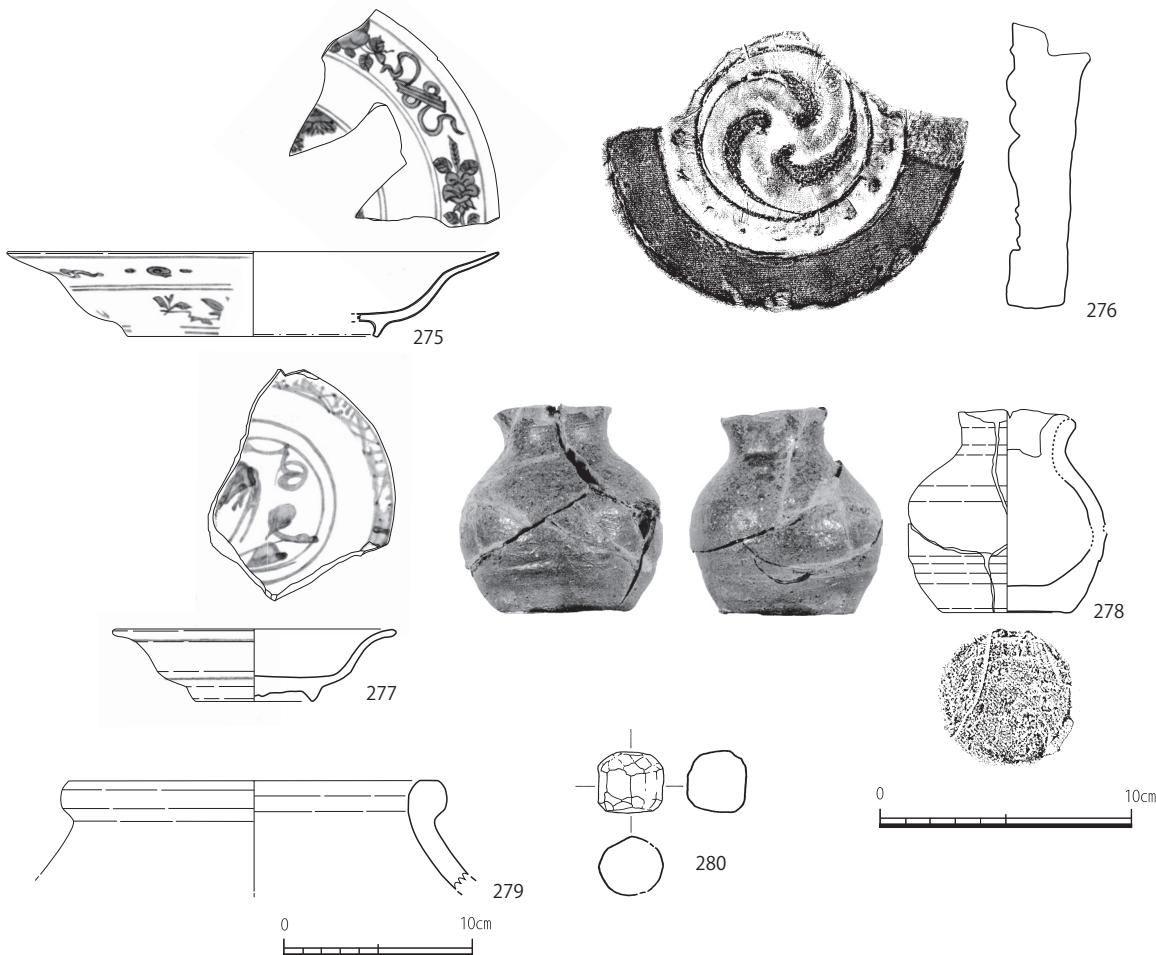


第49図 073S001・106・137・140・142・150・153・155・158・195 出土遺物実測図 (1/2・1/3・1/4)

である。S106 は調査区北側の堀 SD200 の上面に見られた焼土である。264 は景德鎮窯系の青花で輪花皿である。265 は景德鎮窯系の青花碗である。S137 は調査区南側に位置する幅 25cm の細い溝状遺構である。遺物には 266 の青磁碗が見られ体部に連弁文様が見られる。267 は防長系擂鉢で、口縁部内側は断面三角形に肥厚する。体部は直線的にのび、内面に 7 ~ 8 条単位の擂り目を施す。S140 は SD200 の堀の東側に位置する土坑である。268 は在地系の土師器坏で、14 世紀代と考えられる。S142 は SD200 の堀の東側に位置する土坑である。269 は京都系土師器の坏で、器壁が厚く、16 世紀後葉と考えられる。270 は中国の褐釉陶器の壺の口縁部であろうか。S150 は SD200 の堀の上面に広がっていた焼土層である。271 は白磁の碗である。S153 は SD200 の堀の上面に広がっていた焼土層である。273 は青銅製品の鉢である。S158 は SD200 の堀の東側にある柱穴である。272 は中国の焼締陶器鉢である。S155 は土坑で、274 の杖毬の玉が出土している。274 は半分が欠損し、径 5 cm ほどである。S251 は SD200 の堀の上面に広がっていた焼土層である。275 は景德鎮窯系青花の皿で、小野分類の F 群である。S253 は SD200 の堀の上面に広がっていた焼土層である。276 は軒丸瓦で、巴紋文様の瓦当で左巻きの三ツ巴文と小さな連珠文の組み合わせである。

採集出土遺物（第 50 図）

遺跡からの採集品には以下の遺物が見られた。277 は漳州窯系青磁の腰折皿で、小野分類の B 1 群である。278 は備前的小壺で、内部に鉄成分が充填されており、鉄の錆びにより膨張し、破損が生じている。279 は、タイ産の焼締め陶器の壺である。口縁部しかないが、大きさからメナムノイ窯系四耳壺と考えられる。280 は杖毬の玉で、ほぼ完形である。やや小ぶりの大きさで径 2.2 ~ 2.6cm ほどである。



第 50 図 073S251・253・表採出土遺物実測図 (1/3・1/4)

表6 遺物観察表

図版番号	産地	種別	器種	遺構番号	調査区	法量(cm) ()は復元			整形・装飾・文様	色調・釉調 外面/内面	備 考
						口径/最大長	器高/最大幅	底径/最大厚			
73-01図 1	在地	京都系土師器	壺	S002	A区	(13.0)	—	—	非クロ整形	にぶい橙色/にぶい橙色	
73-01図 2	在地	土師器	小皿	S004	A区	8.4	1.0	7.0	ロクロ整形	橙色/橙色	
73-08図 3	在地	土師器	小皿	S038	A区	8.3	1.3	7.4	ロクロ整形	橙色/橙色	
73-08図 4	在地	土師器	壺	S038	A区	(15.7)	(3.08)	(10.3)	ロクロ整形	橙色/橙色	
73-08図 5	在地	土師器	小皿	S039	A区	(8.2)	1.25	(3.1+α)	ロクロ整形	橙色/橙色	
73-08図 6	在地	土師器	小皿	S040	A区	(7.8)	1.2	(3.2+α)	ロクロ整形	橙色/橙色	
73-08図 7	在地	土師器	小皿	S045	A区	8.5	1.3	6.5	ロクロ整形	橙色/橙色	
73-08図 8	在地	土師器	壺	S045	A区	(13.8)	3.6	(11.0)	ロクロ整形	にぶい橙色/にぶい橙色	
73-09図 9	在地	土師器	小壺	S128	B区	5.0	5.5	—		茶褐色/茶褐色	内部に鉄成分が充填
73-09図 10	景德鎮窯系	青花	皿	S144	B区	(14.4)	(8.4)	3.1		透明釉/透明釉	小野分類E群
73-09図 11	在地	土師器	蓋	S146	B区	(17.6)	—	—		明赤褐色/明赤褐色	
73-13図 12	在地	土師器	壺	S135	B区	(10.4)	4.4	(6.4)		橙色～にぶい橙色/橙色～にぶい黄橙色	底部高台付
73-13図 13	在地	土師器	壺	S135	B区	(12.8)	3.2	—	ロクロ整形	にぶい黄橙色/にぶい黄橙色	
73-18図 14	龍泉窯系	青磁	碗	S200	B区	—	—	(4.9)		オリーブ灰色/オリーブ灰色	
73-18図 15	龍泉窯系	青磁	輪花皿	S200	B区	(14.0)	—	—		オリーブ灰色/オリーブ灰色	文様あり
73-18図 16	漳州窯系	青花	皿	S200	B区	(10.4)	2.3	(5.2)		透明釉/透明釉	小野分類B1群
73-18図 17	東播系	須恵質土器	鉢	S200	B区	(31.6)	—	—		灰色/灰色	
73-18図 18	在地	土師器	壺	S200	B区	(12.0)	2.9	(3.0+α)	ロクロ整形	橙色/橙色	
73-18図 19	在地	土師器	壺	S200	B区	(7.2)	2.2	(2.1+α)	ロクロ整形	浅黄橙色/浅黄橙色	
73-18図 20	在地	土師器	蓋	S200	B区	5.5	2.0	—		にぶい黄橙色/にぶい黄橙色	焼塙壺の蓋
73-18図 21	龍泉窯系	青磁	碗	S210	B区	—	(3.5+α)	(5.8)		オリーブ灰色～にぶい褐色/オリーブ灰色	D期
73-18図 22	龍泉窯系	青磁	碗	S210	B区	(14.0)	—	—	蓮弁文	黄褐色/黄褐色	青磁蓮弁文碗C群
73-18図 23	同安窯系	青磁	碗	S210	B区	—	—	—		灰オリーブ/灰オリーブ	
73-18図 24	龍泉窯系	青磁	皿	S210	B区	—	0.9+α	3.0		オリーブ灰色/明緑灰色	D期
73-18図 25	龍泉窯系	青磁	輪花皿	S210	B区	(11.5)	2.9	(4.3)		オリーブ灰色～灰オリーブ色/オリーブ灰色～黄灰色	
73-18図 26	龍泉窯系	青磁	輪花皿	S210	B区	8.7	2.7	3.5		緑釉/高台：灰白釉 他：青磁釉	
73-18図 27	龍泉窯系	青磁	輪花皿	S210	B区	(12.5)	2.95	(7.0)		明緑灰色/明緑灰色	
73-18図 28		白磁	端反り碗	S210	B区	(14.0)	—	—		灰白色/灰白色	
73-18図 29		白磁	皿	S210	B区	(12.0)	3.3	(6.0)		明灰白色・灰釉/灰白色・灰釉	森田編年E類
73-18図 30		白磁	皿	S210	B区	(12.0)	2.8	7.2		灰白色/灰白色	森田編年E類
73-18図 31		白磁	端反り皿	S210	B区	(15.6)	3.4	(4.5+α)		灰白色/灰白色	森田編年E-2類
73-18図 32		青白磁	輪花皿	S210	B区	(14.4)	3.5	(7.4)		明オリーブ灰色～灰白色/明オリーブ灰色	

図版番号	産地	種別	器種	遺構番号	調査区	法量(cm) ()は復元			整形・装飾・文様	色調・釉調 外面/内面	備考
						口径/最大長	器高/最大幅	底径/最大厚			
73-18図 33		白磁	皿	S210	B区	—	(1. 1+ α)	(7. 2)	口禿げ	灰白色/明オリーブ灰色	
73-18図 34		青白磁	合子	S210	B区	(7. 8)	(1. 4+ α)	—		明緑灰釉/明オリーブ灰釉	合子の蓋
73-18図 35		白磁	碗	S210	B区	(13. 6)	7. 2	(3. 1)		灰白色/灰白色	
73-19図 36	景德鎮窯系	青花	碗	S210	B区	(17. 0)	—	—		透明釉/透明釉	小野分類E群
73-19図 37	景德鎮窯系	青花	碗	S210	B区	—	(4. 0+ α)	(4. 2)		透明釉/透明釉	小野分類E群
73-19図 38	景德鎮窯系	青花	碗	S210	B区	10. 6	4. 5	5. 5		透明釉/透明釉	小野分類E群
73-19図 39	景德鎮窯系	青花	碗	S210	B区	12. 35	4. 15	4. 7		明緑灰色/明緑灰色	小野分類E群
73-19図 40	漳州窯系	青花	碗	S210	B区	(14. 0)	(4. 4+ α)	—		透明釉/透明釉	
73-19図 41	景德鎮窯系	青花	皿	S210	B区	(12. 8)	3. 1	(3. 5+ α)		灰白色/灰白色	小野分類B1群
73-19図 42	景德鎮窯系	青花	皿	S210	B区	13. 2	2. 4	6. 4		透明釉/透明釉	小野分類B1群
73-19図 43	景德鎮窯系	青花	小皿	S210	B区	(9. 2)	2. 05	(4. 6)		透明釉/透明釉	小野分類B1群
73-19図 44	景德鎮窯系	青花	皿	S210	B区	(10. 0)	2. 4	5. 6		透明釉/透明釉	小野分類E群
73-19図 45	漳州窯系	青花	皿	S210	B区	12. 25	2. 9	4. 6		灰黄色/灰白色	小野分類E群
73-19図 46	景德鎮窯系	青花	皿	S210	B区	(13. 0)	2. 48	(7. 6)		明緑灰色/明緑灰色	小野分類E群
73-19図 47	景德鎮窯系	青花	皿	S210	B区	13. 2	3. 0	6. 95		明緑灰色/明緑灰色	小野分類E群
73-20図 48	景德鎮窯系	青花	皿	S210	B区	—	(7. 4)	(1. 45+ α)		透明釉/透明釉	小野分類B1群
73-20図 49	漳州窯系	青花	皿	S210	B区	(10. 0)	2. 6	(3. 2)	基筒底	明オリーブ灰色/明オリーブ灰色	小野分類C群
73-20図 50	景德鎮窯系	青花	小杯	S210	B区	—	(2. 6+ α)	2. 5		透明釉/透明釉	
73-20図 51	景德鎮窯系	青花	蓋	S210	B区	(10. 6)	—	(8. 4)		明オリーブ灰色/灰白色	
73-20図 52	朝鮮王朝産	陶器	碗	S210	B区	(16. 0)	5. 5	5. 5		にぶい黄橙色/にぶい黄橙色	
73-20図 53	中国南部産	焼締陶器	鉢	S210	B区	(27. 0)	—	—		灰黄色/灰黄色～暗赤褐色	
73-20図 54	タイ産	陶器	四耳壺	S210	B区					橙色/橙色	
73-20図 55	備前産	陶器	大甕	S210	B区	(56. 6)	—	—		赤褐色/暗赤灰色～赤褐色	
73-20図 56	備前産	陶器	大甕	S210	B区	(48. 0)	—	—		暗赤褐色/暗赤褐色	
73-20図 57	備前産	陶器	大甕	S210	B区	(53. 0)	—	—		灰赤色/灰赤色	
73-20図 58	備前産	陶器	大甕	S210	B区					にぶい赤褐色/灰赤色	
73-21図 59	備前産	陶器	三耳壺	S210	B区	10. 0	17. 9	(9. 1)		にぶい赤褐色/赤灰色	
73-21図 60	備前産	陶器	水屋甕	S210	B区	(22. 2)	—	—		にぶい赤褐色/灰赤色	
73-21図 61	備前産	陶器	壺	S210	B区	(33. 4)	—	(18. 2+ α)		にぶい橙/灰赤	
73-21図 62	備前産	陶器	大甕	S210	B区						
73-21図 63				S210	B区	(12. 6)	(1. 7+ α)	—			底部に墨書有り『萬』
73-21図 64	備前産	陶器	筒状を呈する鉢	S210	B区	—	(4. 8+ α)	6. 8		灰白色/灰色	
73-22図 65	備前産	陶器	擂鉢	S210	B区	30. 5	15. 4	—		橙色/にぶい橙色	

図版番号	産地	種別	器種	遺構番号	調査区	法量(cm) ()は復元			整形・装飾・文様	色調・釉調 外面/内面	備 考
						口径/最大長	器高/最大幅	底径/最大厚			
73-22図 66	備前産	陶器	擂鉢	S210	B区	(19.5+ α)	13.75	11.2		灰赤色/灰赤色	
73-22図 67	備前産	陶器	擂鉢	S210	B区	34.6	15.5	13.0		暗赤褐色/暗赤褐色	
73-22図 68	備前産	陶器	擂鉢	S210	B区	(19.4)	(10.1+ α)	(8.1)		灰色/灰色	
73-22図 69	備前産	陶器	擂鉢	S210	B区	(31.8)	—	(12.6)		灰赤色/明赤褐色	
73-22図 70	唐津産	陶器	絵唐津皿	S210	B区	—	(1.9+ α)	(4.4)		にぶい黄橙色/にぶい 黄橙色	
73-22図 71	瀬戸・美濃産	陶器	天目茶碗	S210	B区	(8.1)	—	—		褐色~黒色~暗赤褐色/ 褐色~黒色	
73-23図 72	在地	京都系土師器	坏	S210	B区	9.4	2.2	—	非口クロ整形	にぶい黄橙色/にぶい 黄橙色	
73-23図 73	在地	京都系土師器	坏	S210	B区	10.5	2.3	—	非口クロ整形	にぶい黄橙色/にぶい 黄橙色	
73-23図 74	在地	京都系土師器	坏	S210	B区	(16.0)	3.5	—	非口クロ整形	にぶい橙色/にぶい橙 色	
73-23図 75	在地	京都系土師器	坏	S210	B区	8.3	2.1	—	非口クロ整形	浅黄色/灰白色	
73-23図 76	在地	京都系土師器	坏	S210	B区	9.3	2.2	—	非口クロ整形	にぶい橙色/にぶい橙 色	
73-23図 77	在地	京都系土師器	坏	S210	B区	10.4	2.5	4.5	非口クロ整形	橙色/橙色	
73-23図 78	在地	京都系土師器	坏	S210	B区	12.1	2.1	—	非口クロ整形	橙色/にぶい橙色	
73-23図 79	在地	京都系土師器	坏	S210	B区	12	2.5	—	非口クロ整形	橙色/橙色	
73-23図 80	在地	京都系土師器	坏	S210	B区	11.9	2.4	4.6	非口クロ整形	にぶい黄橙色/にぶい 黄橙色	
73-23図 81	在地	京都系土師器	坏	S210	B区	12.3	2.6	—	非口クロ整形	橙色/橙色	
73-23図 82	在地	京都系土師器	坏	S210	B区	12.1	2.7	5.8	非口クロ整形	橙色/にぶい橙色	
73-23図 83	在地	京都系土師器	坏	S210	B区	12.0	2.5	—	非口クロ整形	橙色/にぶい黄橙色	
73-23図 84	在地	京都系土師器	坏	S210	B区	12.0	2.7	—	非口クロ整形	にぶい橙色/にぶい橙 色	
73-23図 85	在地	京都系土師器	坏	S210	B区	11.8	3.1	—	非口クロ整形	橙色/橙色	
73-23図 86	在地	京都系土師器	坏	S210	B区	12.1	2.8	—	非口クロ整形	橙色/にぶい黄橙色	
73-23図 87	在地	京都系土師器	坏	S210	B区	9.9	2.1	—	非口クロ整形	橙色/にぶい橙色	
73-23図 88	在地	京都系土師器	坏	S210	B区	12.2	2.2	10.0	非口クロ整形	浅黄橙色/浅黄橙色	
73-23図 89	在地	京都系土師器	坏	S210	B区	10.2	(3.5)	5.6	非口クロ整形	にぶい橙色/にぶい橙 色	
73-23図 90	在地	京都系土師器	坏	S210	B区	(10.8)	3.5	(6.4)	非口クロ整形	橙色/橙色	
73-23図 91	在地	京都系土師器	坏	S210	B区	(11.2)	(3.9)	(4.2)	非口クロ整形	橙色/橙色	
73-23図 92	在地	京都系土師器	坏	S210	B区	(11.6)	(4.1)	(8.6)	非口クロ整形	橙色/橙色	
73-23図 93	在地	土師器	小坏	S210	B区	(7.0)	2.0	(4.0)	ロクロ整形	橙色/橙色	
73-23図 94	在地	土師器	坏	S210	B区	(13.2)	2.7	(3.7+ α)	ロクロ整形	黄橙色/浅黄橙色	
73-23図 95	吉備系	土師器	椀	S210	B区	(11)	3.9	(4.0+ α)		淡黄色/淡黄色	
73-23図 96	在地	土師器	皿	S210	B区	(8.6)	1.3	(3.2+ α)	ロクロ整形	橙色/橙色	
73-23図 97	在地	土師器	皿	S210	B区	(8.6)	1.15	(4.2+ α)	ロクロ整形	浅黄橙色/浅黄橙色	
73-23図 98		土師器	メンコ状土 師	S210	B区	3.9	1.6	5.3	ロクロ整形	橙色/橙色	

図版番号	産地	種別	器種	遺構番号	調査区	法量(cm) ()は復元			整形・装飾・文様	色調・釉調 外面/内面	備考
						口径/最大長	器高/最大幅	底径/最大厚			
73-24図 99		土師質土器	浅鉢	S210	B区	(31.8)	10.7	(21.0)		橙色/橙色	
73-24図 100		土師質土器	浅鉢	S210	B区	(38.6)	(7.8)	(31.5)		橙色/橙色	
73-24図 101		土師質土器	甕	S210	B区	—	(2.6)	(3.7+ α)	底部の外端に爪形 状压痕	にぶい褐/にぶい褐	
73-24図 102		瓦質土器	浅鉢	S210	B区	(40.6)	5.1	(38.0)		黄灰色/灰色	
73-24図 103		瓦質土器	鍋	S210	B区	44.2	—	9.8+ α		黄灰色/黄灰色	
73-24図 104	防長系	瓦質土器	擂鉢	S210	B区	(36.0)	—	—		灰色/灰色	9条の擂目
73-25図 105		瓦質土器	深鉢	S210	B区	(36.0)	—	—	突帯間に雷文スタンプ	黄灰色/黄灰色	
73-25図 106		土師質土器	深鉢	S210	B区		—	—	突帯間に双頭鰐手 飛雲文スタンプ	にぶい黄橙色/橙色	脚が3箇所
73-25図 107		土師質土器	深鉢	S210	B区	32.0	28.75	28.3		橙色/橙色	脚が3箇所
73-25図 108		土師質土器	深鉢	S210	B区	(31.8)	27.7	28.5		にぶい橙色/にぶい橙 色	脚が3箇所
73-25図 109		瓦質土器	風炉	S210	B区	—	—	—	円形浮文スタンプ	浅黄色/灰黄色	
73-25図 110		瓦質土器	香炉	S210	B区	(9.0)	(4.5+ α)	—		明橙色/橙色	
73-25図 111		土師質土器	香炉	S210	B区	(7.9)	(6.8)	5.7		橙/橙	脚が3箇所
73-25図 112		土師質土器	香炉	S210	B区	11.6	8.0	6.0		橙色/橙色	脚が3箇所
73-26図 113		瓦質土器	甕	S210	B区	(30.0)	—	—		灰黄色/浅黄色	
73-26図 114	防長系	瓦質土器	深鉢	S210	B区	(37.8)	—	—		灰色/灰色	
73-26図 115		瓦質土器	茶釜	S210	B区	(13.8)	—	—			
73-26図 116		土師質土器	茶釜	S210	B区	(17.9)	—	—		オリーブ黒色/灰色	
73-26図 117		瓦製品	軒丸瓦	S210	B区	(3.0+ α)	(2.75+ α)	—	巴文	灰色/灰色	
73-26図 118		瓦製品	軒丸瓦	S210	B区	(11.75+ α)	(4.0+ α)	—	巴文	明黄褐色/明黄褐色	
73-26図 119		ガラス製品	小玉	S210	B区	5.45	4.0	1.58		青色	
73-26図 120		ガラス製品	小玉	S210	B区	0.45	0.5	0.29		青色	
73-27図 121		石製品	手水鉢	S210	B区	26.6	20.0	—			溶結凝灰岩製
73-27図 122		石製品	石臼	S210	B区	—	13.0	(27.5+ α)			下臼、擂面が8 分割
73-27図 123		石製品	石臼	S210	B区	(8.4+ α)	(5.8+ α)	(0.9+ α)		橙色	下臼
73-27図 124		石製品	石臼	S210	B区	(38.2)	8.5	(34.0)		黄灰色	下臼
73-28図 125		鉄製品	取手	S210	B区	18.6	31.7	0.75			鍋の取手?
73-28図 126		鉄製品	取手	S210	B区	27.45	29.6	0.8			鍋の取手?
73-28図 127		銅製品	鍤状	S210	B区	0.65	0.6	0.3		緑青色	
73-28図 128		銅製品		S210	B区	3.4	2.0	0.1		茶色	不明青銅製品
73-28図 129		銅製品	ピン状	S210	B区	0.8	0.8	0.8		緑青色	
73-28図 130		銅製品		S210	B区	5.2+ α	1.2+ α	3.5		緑青色	不明青銅製品
73-28図 131	中国産(北宋)	古銭	銭	S210	B区	2.5			『祥符通寶』、書 体は真書		

図版番号	産地	種別	器種	遺構番号	調査区	法量(cm) ()は復元			整形・装飾・文様	色調・釉調 外面/内面	備 考
						口径/最大長	器高/最大幅	底径/最大厚			
73-28図 132	中国産(北宋)	古錢	錢	S210	B区	2.3			『熙寧元寶』、書体は篆書		132~136の5枚が癒着
73-28図 133	中国産(北宋)	古錢	錢	S210	B区	2.3			『治平元寶』、書体は篆書		132~136の5枚が癒着
73-28図 134	中国産(北宋)	古錢	錢	S210	B区	2.4			『天聖元寶』、書体は真書		132~136の5枚が癒着
73-28図 135	中国産(北宋)	古錢	錢	S210	B区	2.4			『皇宋通寶』、書体は篆書		132~136の5枚が癒着
73-28図 136	中国産(北宋)	古錢	錢	S210	B区	2.4			『皇宋通寶』、書体は篆書		132~136の5枚が癒着
73-28図 137	中国産(北宋)	古錢	錢	S210	B区	2.4			『元祐通寶』、書体は行書		
73-29図 138	漳州窯系	青花	皿	S221	B区	10.4	2.5	4.1	透明釉/透明釉	小野分類C群、碁筒底	
73-29図 139	瀬戸・美濃産	陶器	稜花皿	S221	B区	(5.6)	(1.9)	(2.8)	淡黄色/淡黄色		
73-29図 140	在地	京都系土師器	壺	S221	B区	8.4	3.0	2.8	非口クロ整形	にぶい黄褐色/にぶい黄褐色	
73-29図 141	備前産	陶器	壺	S221	B区	(24.0)	—	—		灰色/灰黄色	
73-29図 142		瓦製品	軒丸瓦	S221	B区	—	2.55	14.85	巴文	灰色	珠文数19個
73-29図 143		瓦製品	軒平瓦	S221	B区	(15.1+ α)	(13.6+ α)	(5.6+ α)	均整唐草文	灰色/灰色	
73-29図 144		鉄製品	火箸	S221	B区	27.6	2.2	1.75			
73-29図 145		鉄製品	火箸	S221	B区	18.8	0.5	0.45			
73-29図 146	景德鎮窯系	青花	碗	S222	B区	—	(3.25+ α)	(4.8)	透明釉/透明釉	小野分類C群、饅頭心碗	
73-30図 147	中国産	中国陶器	五彩碗	S223	B区	(14.0)	5.6	6.15		灰白ぎみの透明釉/灰白ぎみの透明釉	小野分類C群
73-30図 148	景德鎮窯系	青花	鉢	S223	B区	—	(13.3+ α)	—	透明釉/透明釉		
73-30図 149	中国産	中国陶器	翡翠釉小皿	S223	B区	(6.0)	1.8	3.7		翡翠釉/翡翠釉	
73-30図 150	景德鎮窯系	白磁	端反り皿	S223	B区	(12.2)	2.6	7.0		灰白色/灰白色	森田編年E-2類
73-30図 151		青磁	碗	S223	B区	(13.0)	4.7	(5.2)		灰オリーブ色~明緑 灰色~オリーブ灰色/ オリーブ色	
73-30図 152	朝鮮王朝産	陶器	碗	S223	B区	—	—	4.8		橙色/橙色	
73-30図 153	在地	京都系土師器	壺	S223	B区	11.9	2.3	—	非口クロ整形	にぶい橙色/にぶい黄 橙色	
73-30図 154	在地	京都系土師器	壺	S223	B区	11.9	2.25	—	非口クロ整形	黒色/灰黄褐色	
73-30図 155	在地	土師器	壺	S223	B区	14.0	3.1	6.8	ロクロ整形	にぶい橙色/にぶい橙 色	
73-30図 156		瓦質土器	茶釜	S223	B区	(27.4)	—	—	車輪文スタンプ	黒色/黒色	
73-30図 157		瓦質土器	浅鉢	S223	B区	29.95	11.05	20.15		黒色/黒色	
73-30図 158		土師器	燭台	S223	B区	7.5	6.2	7.8		灰黄色	
73-30図 159		土師器	燭台	S223	B区	—	6.5	6.95		灰黄色	
73-30図 160	備前産	国産陶磁器	擂鉢	S223	B区	—	6.4	8.5		赤褐色/赤褐色	
73-30図 161		石製品	石塔	S223	B区	21.5	19.0	14.1			溶結凝灰岩製
73-30図 162		銅製品	小柄杓	S223	B区	5.8	2.9	2.0		暗緑灰色	
73-30図 163		鉄製品		S223	B区	12.7	7.95	0.8			

図版番号	産地	種別	器種	造構番号	調査区	法量(cm) ()は復元			整形・装飾・文様	色調・釉調 外面/内面	備 考
						口径/最大長	器高/最大幅	底径/最大厚			
73-30図 164		銅製品	耳搔	S223	B区	13.1	0.3	0.3		緑青色	
73-31図 165		木製品	漆椀	S223	B区	(11.6+ α)	2.7+ α	(6.3)	黒塗り		
73-31図 166		木製品	漆椀	S223	B区	(14.4)	5.9	(7.6)	黒塗り 赤で文様		
73-31図 167		木製品	漆椀	S223	B区	(13.1+ α)	4.25+ α	(8.3)	黒塗り		
73-31図 168		木製品	漆椀	S223	B区	—	5.0+ α	(8.7)	黒塗り		
73-31図 169		木製品	漆椀	S223	B区	(14.0+ α)	4.7	(8.9)	黒塗り		
73-31図 170		木製品	漆椀	S233	B区	—	5.0+ α	(6.2)	黒塗り 赤で文様		
73-31図 171		木製品	漆椀	S223	B区	(14.4+ α)	7.2+ α	(7.2)	赤塗り		
73-31図 172		木製品	札	S223	B区	16.4	4.0	0.5			
73-31図 173		木製品	木箸	S223	B区	27.55	1.2	1.1			
73-31図 174		木製品	曲物	S223	B区	(6.6)	7.7	0.5			曲物の底板
73-31図 175		木製品		S223	B区	6.3	(2.8)	0.4			用途不明
73-31図 176		木製品		S223	B区	(3.6)	5.5	(0.7)			用途不明
73-31図 177		木製品	櫛	S223	B区	6.8	3.5	0.7			
73-31図 178		木製品	杖毬の玉	S223	B区	(4.75)	4.9	(2.55)			
73-31図 179		木製品	滑車	S223	B区	5.75	4.8	2.6			
73-31図 180		木製品	下駄	S223	B区	(13.4)	10.25	5.2			
73-32図 181		木製品	下駄	S223	B区	17.9	10.7	2.4			
73-32図 182		木製品	下駄	S223	B区	(17.7)	9.0	5.0			
73-32図 183		木製品	下駄	S223	B区	16.4	8.9	6.0			後歯外側に 「十」の墨書
73-32図 184		木製品	鍤	S223	B区	(20.2)	13.0	3.0			
73-32図 185		木製品	鍤	S223	B区	16.0	11.0	2.6			
73-32図 186		木製品	下駄	S223	B区	(9.7)	(3.1)	(2.1)			無限下駄
73-33図 187	備前産	陶器	擂鉢	S224	B区	20.5	5.3	8.8		暗赤褐色/褐赤色	
73-33図 188	在地	京都系土師器	坏	S224	B区	12.9	2.4	—		にぶい黄橙色/にぶい 黄橙色	
73-33図 189	瀬戸・美濃産	陶器	天目茶碗	S224	B区	(11.9)	6.5	4.2		暗褐色～にぶい赤褐色/暗渴色	
73-33図 190	朝鮮王朝産	陶器	碗	S224	B区	—	—	5.3		にぶい橙色～明緑灰色/にぶい橙色～明緑 灰色	
73-33図 191		木製品	漆椀	S224	B区	—	6.65+ α	—	黒塗り 赤で文様		
73-33図 192		木製品		S224	B区	7.8	3.9	0.6			不明製品
73-33図 193		木製品	漆椀	S224	B区	(14.8)	7.5	(7.5)	黒塗り 赤で文様		
73-33図 194		木製品	漆椀	S224	B区	(14.4)	5.2	(6.8)	黒塗り 赤で文様		
73-33図 195		木製品	木杭	S224	B区	34.55	4.7	4.6			

図版番号	産地	種別	器種	遺構番号	調査区	法量(cm) ()は復元			整形・装飾・文様	色調・釉調 外面/内面	備 考
						口径/最大長	器高/最大幅	底径/最大厚			
73-34図 196	龍泉窯系	青磁	碗	S231	B区	(13.0)	(5.0)	—		透明釉/透明釉	
73-34図 197		青磁	碗	S231	B区	(13.7)	(6.55)	(7.1)	蓮弁文	灰白色/灰白色	
73-34図 198	龍泉窯系	青磁	碗	S231	B区	(11.2)	4.7	(4.5)		緑灰色/緑灰色	
73-34図 199	龍泉窯系	青磁	碗	S231	B区	—	—	(7.0)	鎬蓮弁文	明オリーブ灰色/明オ リーブ灰色	上田分類A群
73-34図 200		白磁	皿	S231	B区	(12.0)	2.5	(6.4)		灰白色/灰白色	森田編年E-2類
73-34図 201		白磁	端反り皿	S231	B区	—	(2.4+ α)	(7.0)			森田編年E-2類
73-34図 202	中国産	中国陶器	五彩皿	S231	B区	(10.8)	(4.4)	—		透明釉/透明釉	
73-34図 203	漳州窯系	青花	碗	S231	B区	—	—	(4.2)		透明釉/透明釉	饅頭心碗、小野 分類E群
73-34図 204	漳州窯系	青花	碗	S231	B区	—	(1.6+ α)	4.65		透明釉/透明釉	饅頭心碗、小野 分類E群
73-34図 205	景德鎮窯系	青花	碗	S231	B区	—	1.7+ α	5.2		透明釉/透明釉	饅頭心碗、小野 分類E群
73-34図 206	景德鎮窯系	青花	碗	S231	B区	—	(3.0+ α)	4.4		透明釉/透明釉	饅頭心碗、小野 分類E群
73-34図 207	景德鎮窯系	青花	碗	S231	B区	—	(1.9+ α)	(5.6)		透明釉/透明釉	饅頭心碗、小野 分類E群
73-34図 208	漳州窯系	青花	碗	S231	B区	—	(2.35+ α)	5.0		淡黄色/淡黄色	小野分類B群
73-34図 209	景德鎮窯系	青花	碗	S231	B区	—	(4.6)	(5.4)		明緑灰色/明緑灰色	蓮子碗、小野分 類C群
73-34図 210	漳州窯系	青花	皿	S231	B区	(12.2)	2.58	(6.2)		明緑灰色/明緑灰色	小野分類B1群
73-34図 211	景德鎮窯系	青花	皿	S231	B区	—	(2.05+ α)	(4.1)		透明釉/透明釉	基筒底、小野分 類C群
73-34図 212	景德鎮窯系	青花	皿	S231	B区	(10.0)	(2.3)	(2.8)		明緑灰色/明緑灰色	基筒底、小野分 類C群
73-35図 213	中国産	陶器	天目茶碗	S231	B区	(13.8)	—	—		褐色～極暗赤褐色～ 灰赤色/褐色～極暗赤 褐色	
73-35図 214	瀬戸・美濃産	陶器	天目茶碗	S231	B区	(11.7)	5.25	(2.0+ α)		褐色～黒色～にぶい 橙色/褐色～黒色	
73-35図 215	瀬戸・美濃産	陶器	天目茶碗	S231	B区	(11.6)	5.6	4.2		橙色～赤黒色/赤黒色	
73-35図 216	瀬戸・美濃産	陶器	天目茶碗	S231	B区	(11.4)	(6.6)	(4.2)		褐色～黒色～暗赤褐色 /褐色～黒色	
73-35図 217	備前産	陶器	壺	S231	B区	(9.2)	—	—		灰白色/灰色	
73-35図 218	備前産	陶器	筒状を呈す る鉢	S231	B区	9.4	8.0	6.4		暗赤灰色/暗赤褐色	
73-35図 219	備前産	陶器	瓶	S231	B区	—	—	5.1		明赤褐色/明赤褐色	
73-35図 220	備前産	陶器	瓶	S231	B区	(5.6)	—	—		ゴマ淡黄色・黒褐色/ 灰褐色	
73-35図 221	備前産	陶器	蓋	S231	B区	(20.0)	—	—		にぶい赤褐色/にぶい 赤褐色	223の水指の蓋
73-35図 222	タイ産メナム ノイ窯系	陶器	鉢	S231	B区	(31.8)	—	—		にぶい赤褐色/にぶい 赤褐色	
73-35図 223	備前産	陶器	水指	S231	B区	(12.0)	—	—		灰赤色/暗赤灰色	
73-35図 224		瓦質土器	擂鉢	S231	B区	(32.0)	12.3	(16.0)		黄灰色/灰色	6条の擂目
73-35図 225	備前産	陶器	擂鉢	S231	B区	—	(8.85+ α)	12.1		灰褐色/にぶい赤褐色	
73-36図 226	在地	京都系土師器	壺	S231	B区	8.7	1.95	—	非クロ整形	にぶい黄橙色/にぶい 黄橙色	
73-36図 227	在地	京都系土師器	壺	S231	B区	8.9	1.9	—	非クロ整形	にぶい黄橙色/にぶい 黄橙色	
73-36図 228	在地	京都系土師器	壺	S231	B区	9.0	2.2	4.0	非クロ整形	にぶい黄橙色/にぶい 黄橙色	

図版番号	産地	種別	器種	遺構番号	調査区	法量(cm) ()は復元			整形・装飾・文様	色調・釉調 外面/内面	備考
						口径/最大長	器高/最大幅	底径/最大厚			
73-36図 229	在地	京都系土師器	壺	S231	B区	(10.2)	3.7	6.4	非クロ整形	にぶい黄橙色/にぶい黄橙色	
73-36図 230	在地	土師器	壺	S231	B区	9.5	1.9	5.2	クロ整形	橙色/橙色	
73-36図 231	在地	土師器	壺	S231	B区	10.0	2.2	5.7	クロ整形	橙色/橙色	
73-36図 232	在地	土師器	壺	S231	B区	(14.4)	3.0	(3.2+ α)	クロ整形	橙色/橙色	
73-36図 233	在地	土師器	壺	S231	B区	(15.5)	3.7	(7.7)	クロ整形	橙色/橙色	
73-36図 234		瓦質土器	椀	S231	B区	10.2	4.8	4.4		橙色/橙色	
73-36図 235		銅製品	ピン状	S231	B区	5.3	0.4	0.5		緑青色	
73-37図 236	在地	土師器	小皿	S124	B区	(8.4)	2.5	5.5	クロ整形	にぶい橙色/にぶい橙色	二次焼成あり
73-38図 237	在地	京都系土師器	壺	S125	B区	(11.4)	4.0	—	非クロ整形	橙色/橙色	
73-38図 238	景德鎮窯系	青花	碗	S125	B区			(5.4)		透明釉/透明釉	小野分類E群
73-42図 239	中国南部	華南三彩	水注	S143	B区	—	—	—		淡黄灰色/黄・緑色	
73-42図 240	在地	土師器	蓋	S143	B区	(16.0)	—	—		橙色/橙色	
73-42図 241		瓦質土器	甕	S143	B区	—	—	—	格子状叩き	暗灰色/灰色	
73-43図 242	在地	土師器	壺	S149	B区	(13.2)	3.9	(11.1)	クロ整形	にぶい黄橙色/にぶい黄橙色	
73-46図 243	龍泉窯系	青磁	碗	S151	B区	(16.0)	—	—		緑灰色/緑灰色	E期
73-46図 244	龍泉窯系	青磁	碗	S151	B区	—	(2.5+ α)	(5.2)		灰オリーブ色/灰オリーブ色	D期
73-46図 245	龍泉窯系	青磁	碗	S151	B区	—	—	(6.0)		緑白色/緑白色	F期
73-46図 246	同安窯系	青磁	平底皿	S151	B区	—	(0.6+ α)	(5.4)	櫛描文	緑灰色～灰オリーブ色/緑灰色	D期
73-46図 247		瓦質土器	深鉢	S151	B区	(20.0)	—	—	巴文单体スタンプ	灰色/暗灰色	
73-46図 248	在地	土師器	小皿	S151	B区	(8.0)	1.3	(6.4)	クロ整形	橙色/橙色	
73-46図 249	在地	土師器	小皿	S151	B区	(8.6)	1.6	(6.3)	クロ整形	橙色/橙色	
73-46図 250		瓦製品	丸瓦	S151	B区	29.0	12.9	6.3		橙色/にぶい黄橙色	
73-46図 251		瓦製品	棟瓦	S151	B区	(19.4+ α)	(18.6+ α)	—		にぶい黄橙色/橙色	
73-46図 252		瓦質土器	浅鉢	S151	B区	—	(6.3+ α)	—	巴文スタンプ	橙色/橙色	
73-46図 253		瓦製品	軒平瓦	S151	B区	—	5.35+ α	4.4+ α	均整唐草文	灰色/灰色	
73-46図 254		青銅製品	装飾金具	S151	B区	1.7	1.8	0.1		緑青色	
73-46図 255		青銅製品	毛抜き	S151	B区	8.2	0.2	0.3		緑青色	
73-48図 256	備前産	陶器	擂鉢	S154	B区	—	(6.65+ α)	(11.6)		にぶい赤褐色/赤色	
73-48図 257	在地	京都系土師器	壺	S154	B区	10.0	2.3	—	非クロ整形	橙色/橙色	
73-48図 258		土師器	燭台	S154	B区	(5.5+ α)	5.85	(6.5+ α)		明橙色	小柳編年6類(A1)
73-48図 259		須恵器	甕	S154	B区	(29.6)	—	—	格子状叩き	青灰色/青灰色	
73-49図 260	中国産	褐釉陶器	壺	S001	B区	(11.4)	—	—		黒褐色/黒褐色～にぶい黄褐色	
73-49図 261	中国産	白磁	皿	S001	B区	(12.2)	2.8	(7.8)		灰白色/灰白色	白磁IX類

図版番号	産地	種別	器種	遺構番号	調査区	法量(cm) ()は復元			整形・装飾・文様	色調・釉調 外面/内面	備 考
						口径/最大長	器高/最大幅	底径/最大厚			
73-49図 262	信楽産	陶器	甕	S001	B区	—	(4.8+ α)	—		オリーブ灰色/にぶい 褐色	
73-49図 263	中国産(明)	古鏡	鏡	S001	B区	2.5			『永樂通寶』、書 体は行書		
73-49図 264	景德鎮窯系	青花	輪花皿	S106	B区	(6.8)	1.6	(3.2)		灰白色～にぶい黄褐色/灰白色～にぶい黄褐色	
73-49図 265	景德鎮窯系	青花	碗	S106	B区	(15.0)	—	—		透明釉/透明釉	
73-49図 266	龍泉窯系	青磁	碗	S137	B区	(10.8)	—	—	蓮弁文	緑灰色/緑灰色	
73-49図 267	防長系	瓦質土器	擂鉢	S139	B区	(25.6)	—	—		灰色/灰色	7～8条の擂目
73-49図 268	在地	土師器	壺	S140	B区	(12.4)	1.5	10.2	ロクロ整形	橙色/橙色	
73-49図 269	在地	京都系土師器	壺	S142	B区	(11.2)	(2.2)	—		にぶい黄橙色/にぶい 黄橙色	
73-49図 270	中国産	褐釉陶器	壺	S142	B区	(5.6)	—	—		暗赤褐色/暗赤褐色	
73-49図 271	中国産	白磁	皿	S150	B区	—	(4.4)	(1.5+ α)		浅黄橙色/透明釉	
73-49図 272	中国産	焼締陶器	鉢	S158	B区	(28.0)	—	—		灰褐色/にぶい褐色	
73-49図 273		銅製品	鋸状	S153	B区	22.1	1.4	0.2		緑青色	
73-49図 274		木製品	杖毬の玉	S155	B区	5.15	(4.85)	(2.6)			
73-50図 275	景德鎮窯系	青花	皿	S251	B区	(19.6)	3.38	(10.0)		透明釉/透明釉	小野分類F群
73-50図 276		瓦製品	軒丸瓦	S253	B区	(11.3+ α)	(2.1+ α)	—	巴文	にぶい黄橙色/にぶい 黄橙色	
73-50図 277	漳州窯系	青花	腰折皿	—	B区	(10.9)	(2.9)	(4.6)		明オリーブ灰色/明オ リーブ灰色	小野分類B1群
73-50図 278	備前産	陶器	小壺	カクラン	B区	4.3	7.9	5.1			
73-50図 279	タイ産メナム ノイ窯系	焼締陶器	四耳壺	—	B区	(20.0)	—	—		灰赤色/赤灰色・橙色	
73-50図 280		木製品	杖毬の玉	表採	B区	2.4	2.6	2.3			

第4節 第57次調査

1 調査の概要

今回の調査地は、大友氏館の東側に位置し、中世府内町の桜町に比定されている地区の東、さらに名ヶ小路町の南にあたる。(第1図)

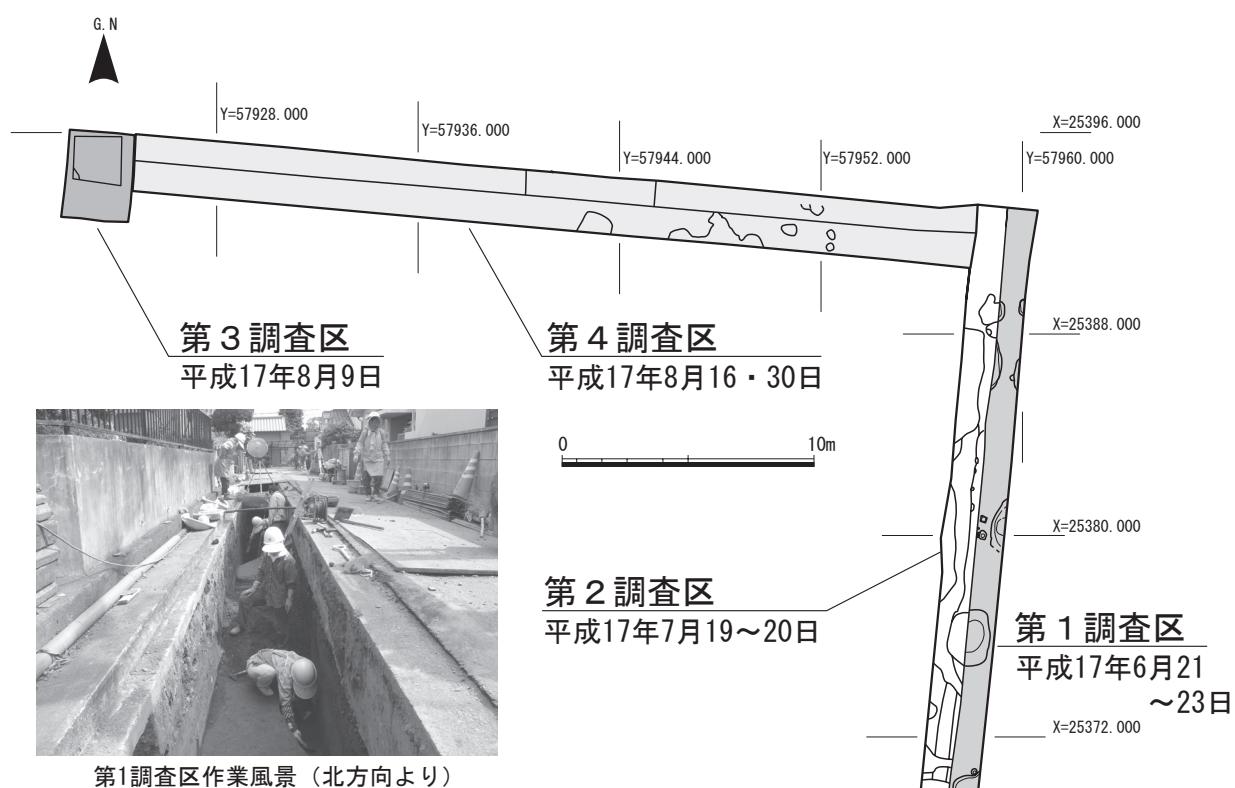
調査は、下水道工事に伴う立会調査として実施したものである。調査は、工事の工程との調整の結果、4回に分けて実施しており、調査期間は第1回が平成17年6月21日～23日(第1調査区)、第2回が平成17年7月19～20日(第2調査区)、第3回が平成17年8月9日(第3調査区)、第4回が平成17年8月16日・30日(第4調査区)である。(第3図)

2 調査方法、基本土層(第2・4図)

下水道用配管を埋設する工事掘削が現道路面から約1.8m(標高約



第1図 調査地点位置図 (1/10,000)

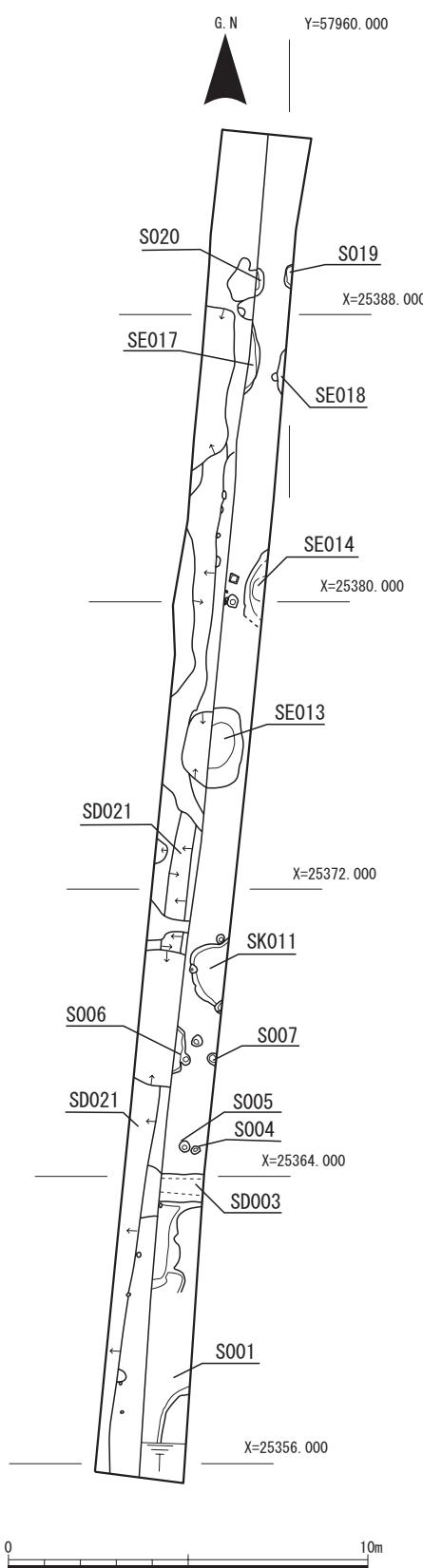


第1調査区作業風景(北方向より)



第2図 土層模式図

第3図 調査進捗状況図・遺構配置図 (1/300)



第4図 第1・第2調査区遺構配置図

(1/200)

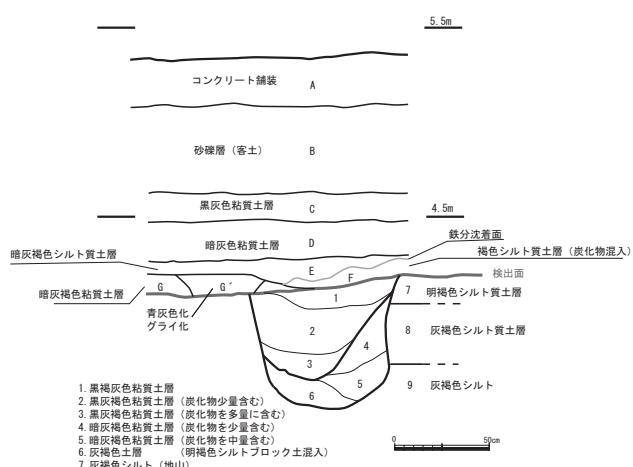
3.6m)まで掘り下げる予定であり、周辺におけるこれまでの調査データから判断して遺構面を掘削する可能性があったため、掘削工事と並行して立会調査を行ったものである。第1調査区での調査開始後、遺構の広がりが確認されたため、今回の調査を第57次とした。

調査はあくまで立会であり、期間的な制約があること、さらに掘削幅が約1mであるのに対し、深度が深く危険があるためほとんどの遺構は完掘に至っていない。また、第2・3・4調査区では、工事掘削深度が検出面以下に達しない予定であったため、SD021の一部を除いて掘り下げを行わず、遺構を検出したのみである。

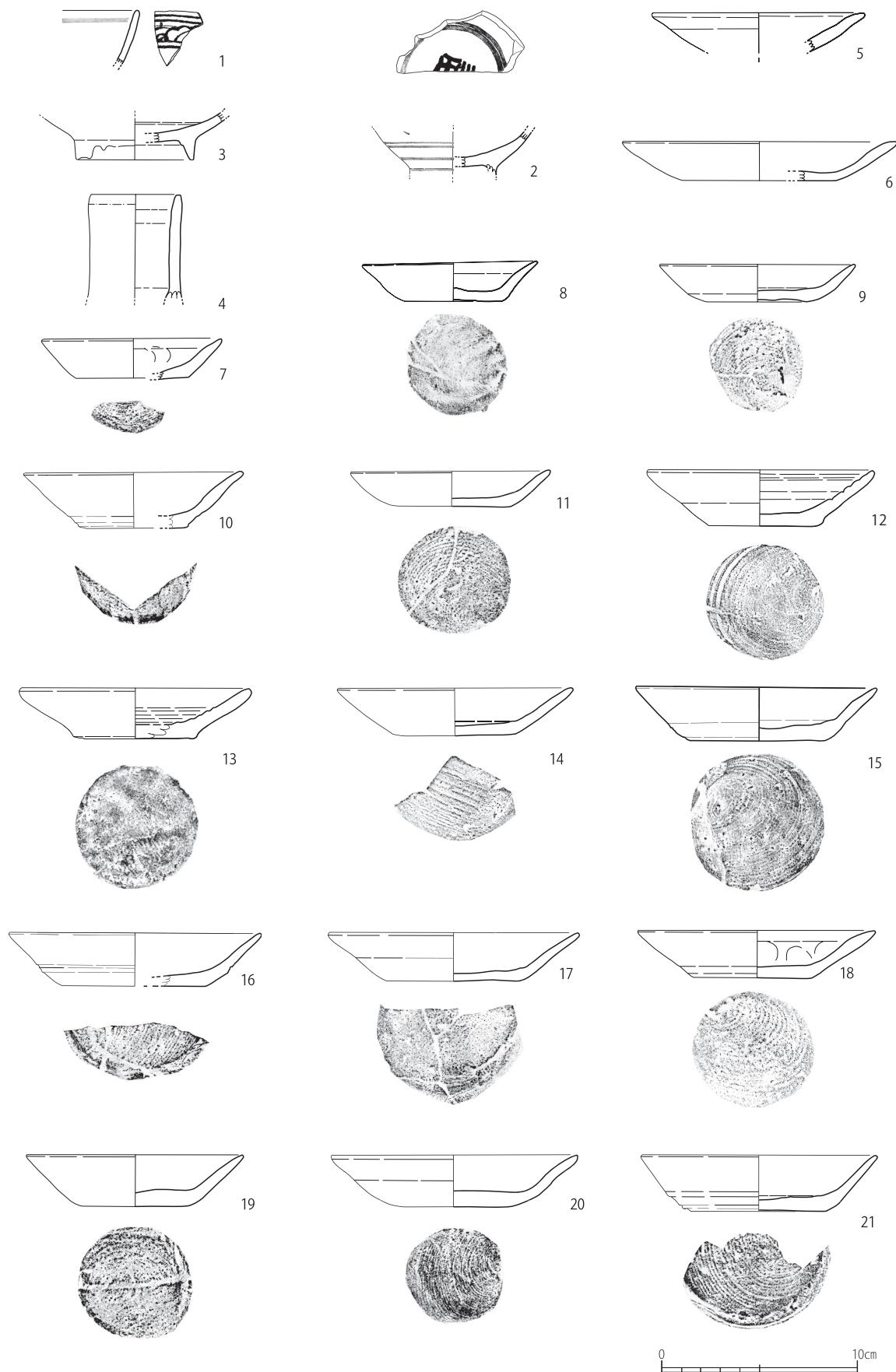
調査の結果、現道路面から約0.8m掘り下げた層から水田層が確認された。さらに約0.2m～0.3m掘り下げるとき包含層（基本土層第3層）が確認され、標高4.2m付近で、溝状遺構（SD003）・土坑（SK011）・井戸もしくは井戸の可能性がある大型遺構4基（SE013・014・017・018）・土坑が数基検出された。上層の水田層や地下水の変動による鉄分沈着によって影響を受けて土層の色調が変化し、遺構検出が難しくなっているが、本来は、標高4.4m付近で検出されるものと考えられる。



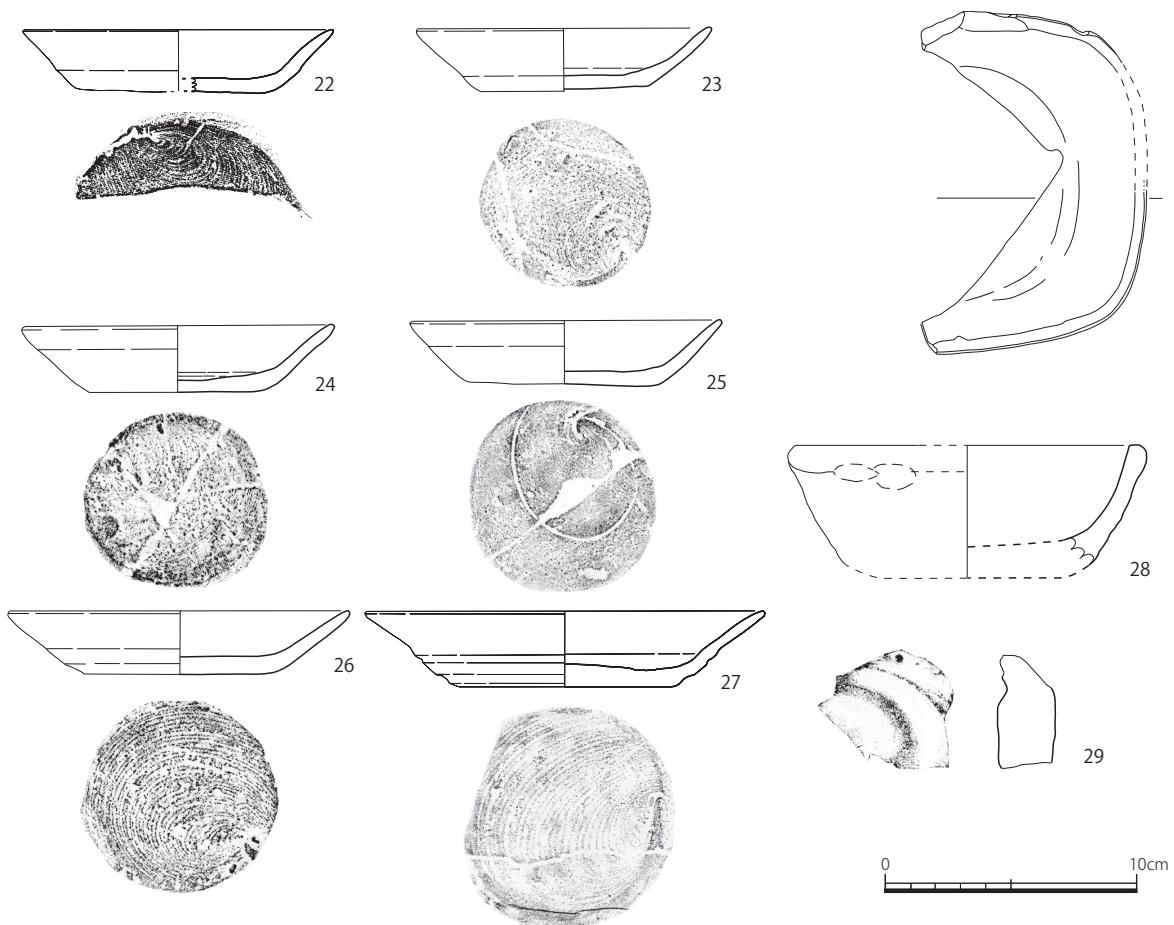
第5図 SD003 完掘状況 (西より)



第6図 SD003 東壁土層 (1/40)



第7図 SD003出土遺物① (1/3)



第8図 SD003 出土遺物② (1/3)

3 遺構と遺物

SD003 (第5図)

東西方向を指向する溝状遺構である。検出面での規模は、幅約0.8m、深さ約0.7mを測る。断面形状はU字形を呈する。2層上面に円礫が多数廃棄されている。また、南側の壁がオーバーハングしているが、これは崩落の為と考えられる。さらに、掘り返しと考えられる不整合面が確認される。黒灰褐色～暗灰褐色の粘質土層で堆積しているが、これらの埋土にはしまりがなく入念に埋め戻した状況ではない。砂礫層も確認されておらず水流があったとも言い難い。(第6図) 極めて限定された情報から遺構の性格を判断するのは危険であるが、なんらかの区画施設であると考えられる。

出土遺物 (第7・8図)

1は景德鎮窯系の青花碗である。口縁部内外面に界線、体部外面に一筆描きの文様を施す。2は景德鎮窯系青花の小碗とみられ、高台が欠損する。体部外面に界線を施す。見込みは界線2条を、その内側に「福」の吉祥文を施す。貫入が著しい。3は産地不明の青磁碗で、高台が高い。釉が薄めにかかり、高台は露胎である。貫入が著しい。4は白磁の掛入れか。筒状の器形をなし、口唇部がすぼまる。口縁部外面は露胎である。貫入が著しい。釉調は白灰色をおびる。

5・6は京都系土師器の皿である。6は体部が直線的に伸び、口縁部内側の段が不明瞭である。

第7図7～21、第8図22～27は在地系の土師質土器である。7～11は小皿、12～27は壺で、いずれも底径に比して口径が開く。

7～11は、体部にロクロ痕をもたないものである。体部は底部から直線的に伸び、口縁部端部はまるみをもつ。内面体部の上位に段が付く。体部と底部の境は明瞭である。内面底部の周囲は同心円、底部中央は不定方向

の指ナデを施す。外面底部は糸切り離しのちナデである。色調は橙褐色～黄橙色を基調とし、胎土に赤色粒を含む。8は口径 8.9cm、器高 1.7cm、底径 5.0cm である。11は口径 9.6cm、器高 1.8cm、底径 6.0cm である。

12・13は、体部内面にロクロ痕が残る、ロクロ土師質土器である。体部は底部から直線的に伸び、口縁部端部はまるみをもつ。底部は円盤状を呈する。体部内面はヘラ状工具のナデ、内面底部は不定方向の指ナデを施す。12は口径 11.5cm、器高 2.7cm、底径 5.8cm である。

14～27は体部が底部から直線的に伸び、口縁部端部はまるみをもつ。内面体部の上位に段が付く。体部と底部の境は明瞭である。内面底部の周囲は同心円、底部中央は不定方向の指ナデを施す。外面底部は糸切り離しのちナデである。色調は橙褐色～黄橙色を基調とし、胎土に赤色粒を含む。15は口径 12.3cm、器高 1.6cm、底径 7.0cm である。19は口径 11.5cm、器高 2.3cm、底径 5.6cm である。

28は土師質土器の鉢と考えられる。平面は正方形形状をなす。器壁は厚手で、口縁部が肥厚する。外面はナデ、ユビオサエ、内面はヨコナデ調整である。29は軒丸瓦で、巴文を施す。

SD003では在地系の土師質土器が多くみられ、そのうち体部にロクロ痕をもたない一群が主体を占めるようである。底径に比して口径が大きく、ロクロ痕をもたない一群は、15世紀後半頃からみられ、中世大友城下町のほか、大分市丹生川坂ノ市条里跡、佐伯市長畑遺跡など県南部を中心にみられる。遺構の時期は共伴資料が明確でないが、土師質土器の法量伸長の傾向から、16世紀中葉を中心とする時期と考えられる。

SE014（第10図）

井戸と考えられるが大半が調査区外にあたるため不明である。深さは、検出面から約 0.7m までは井筒抜き取り痕と考えられる。

出土遺物（第11図1）

1は青花碗の口縁部である。

SE013（第9・10図）

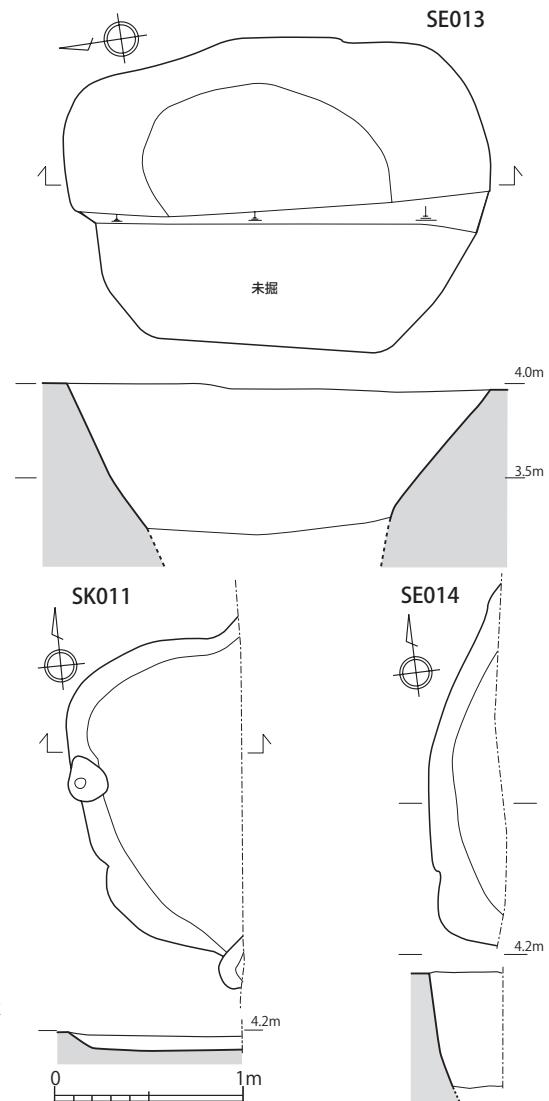
不定円形の井戸である。規模は、調査区内では約 2.0m を測る。深さは、調査期間の関係で完掘は出来なかったものの、検出面から約 0.6m までは井筒抜き取り痕と考えられる。

出土遺物（第11図2～7）

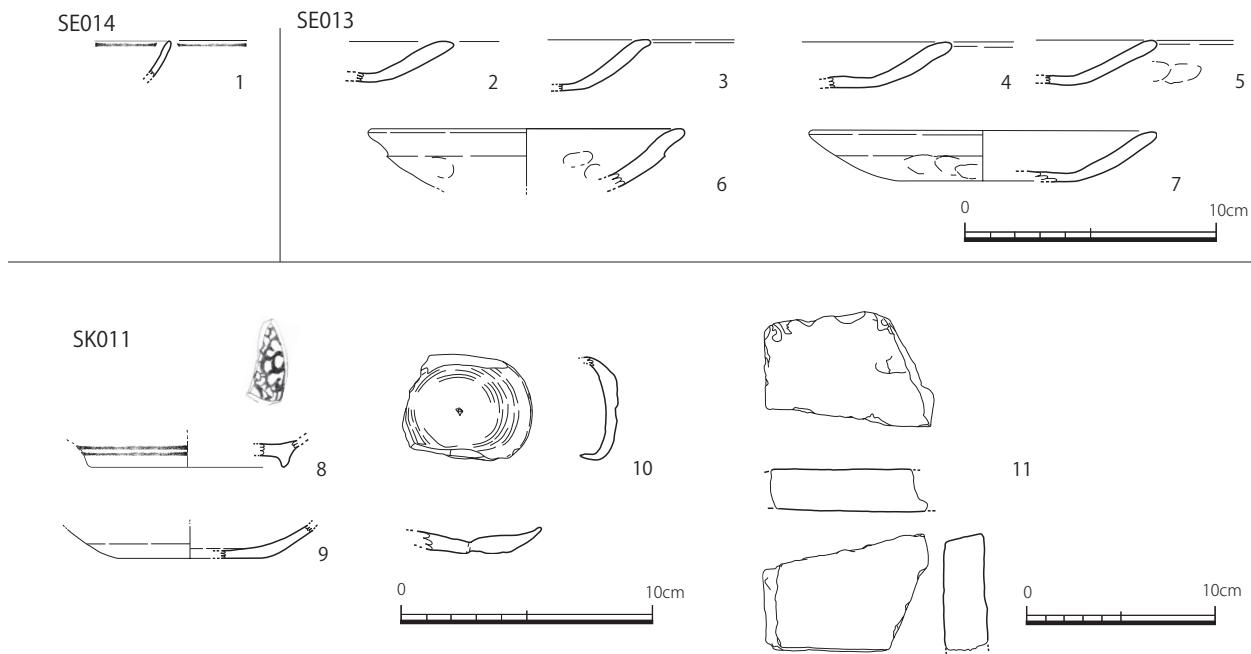
2～7は京都系土師器の皿である。口縁部はヨコナデ、体部はナデ・ユビオサエ調整である。3・4・6は口縁部下に明瞭な段が付く。時期は16世紀中葉頃と考えられる。



第9図 SE013 掘り下げ状況（東より）



第10図 第1調査区検出遺構実測図（1/40）



第11図 SK011・SE013・SE014出土遺物 (1～10 1/3、11 1/4)

SK011 (第10図)

不定円形の土坑である。規模は調査区内では約1.0mを測る。深さは約0.1mを測る。埋土は土師器片、炭化物が大量に混入しており廃棄土坑と考えられる。出土遺物から16世紀後半～末頃に位置づけられる。

出土遺物 (第11図8～11)

8は景德鎮窯系の青花碗である。高台に界線2条、見込みに一筆書きによる花文を施す。9は白色系土師質土器の壊である。体部内外面はナデ調整である。胎土は砂粒を微量含む。10は土師質土器の耳皿である。体部内面に口クロ痕が認められる。底部は糸切り離しが残り、板状圧痕が付く。11は平瓦で、外端は面取りを施す。色調は橙褐色を呈する。

SD021

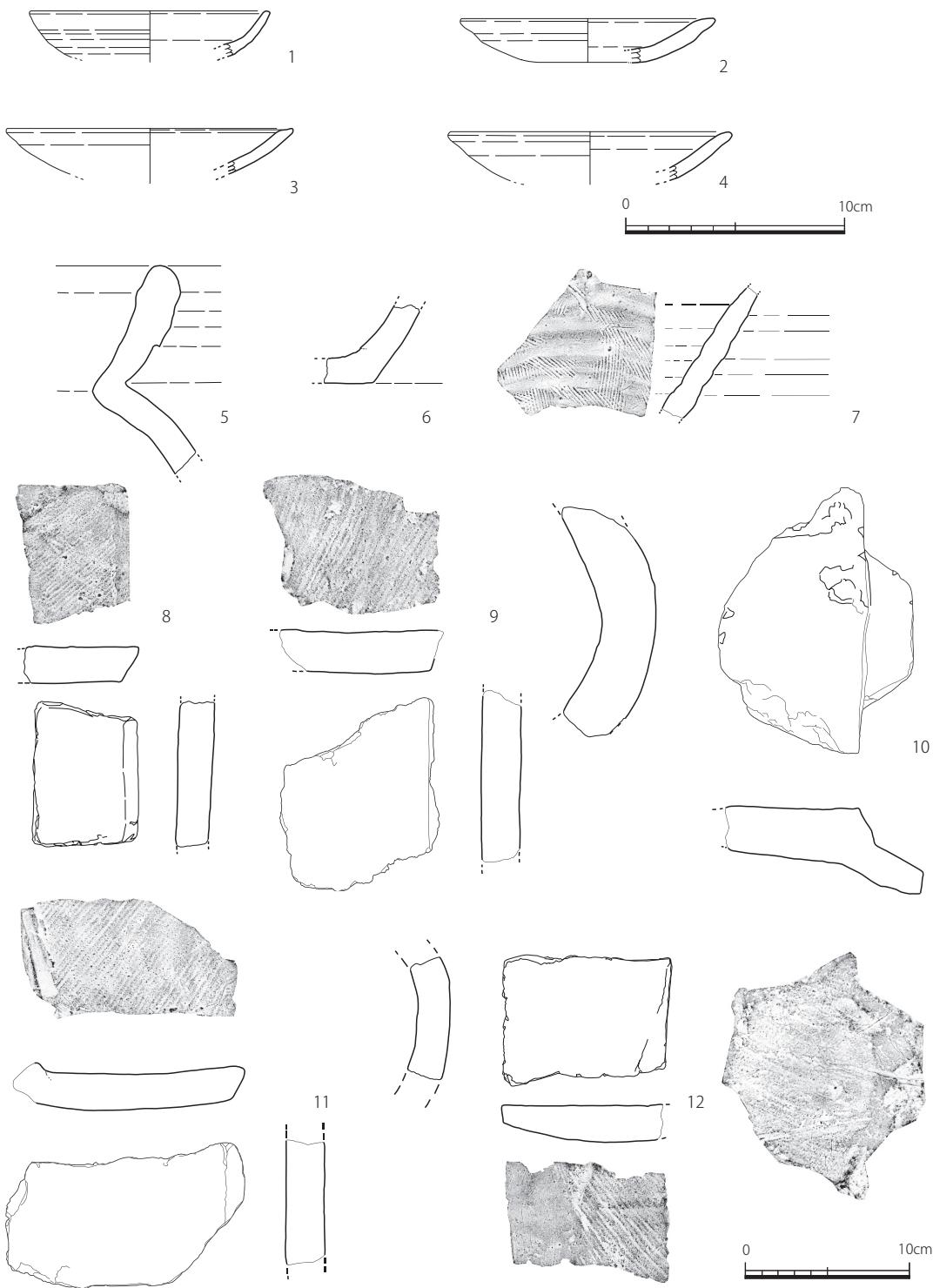
調査区南側から調査区中央にかけて南北に延びる形で確認され、SD003との間に新旧関係が認められている(新しい順にSD021→SD003)。出土遺物としては16世紀後半に比定される土師器片を確認しており、当該期以降に埋め戻されたものと判断される。これはSD003との新旧関係に符合するものである。

第3・第4調査区出土遺物

第3・第4調査区は遺構検出面までの掘り下げしか行っていないため、遺構検出時に包含層(基本土層第3層)から出土した遺物を報告する。

第3調査区出土遺物 (第12図)

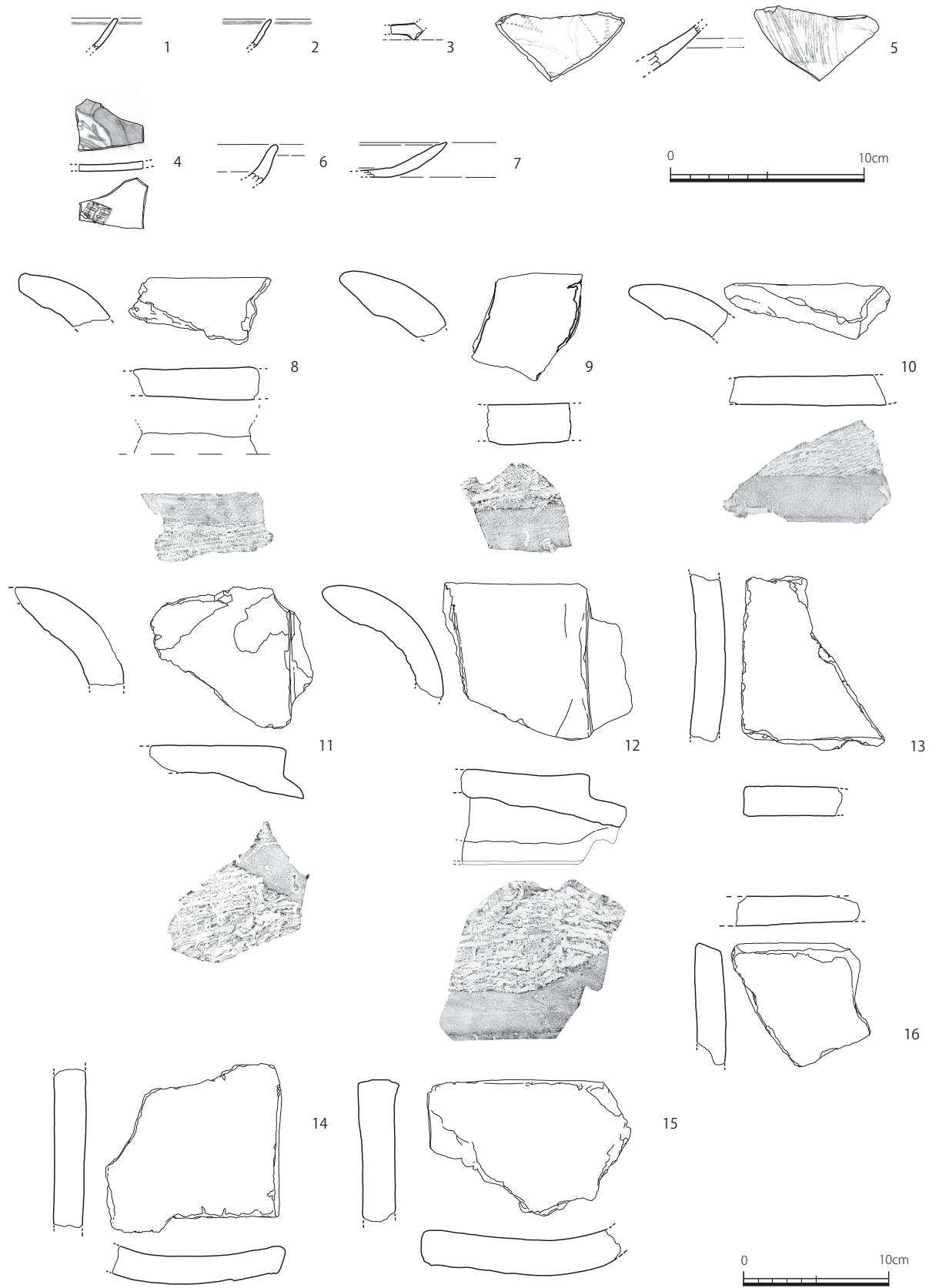
1は瀬戸焼の丸皿で、体部は内彎する器形である。2～4は京都系土師器の皿である。口縁部下に屈曲をもち、口縁部内側に段が付く。5～7は備前焼である。5は甕で、口縁部外面の玉縁は下方に垂れ、下部は角張る。口縁部外面には凹線を施す。6は甕の底部である。7は擂鉢で、体部内外面に口クロ痕が残る。内面体部に縦方向と横方向の掘り目を施す。8～12は丸瓦で、凹面には糸によるコビキ痕が残る。色調は橙褐色、淡灰褐色をおびる。10の玉縁凸面の両側縁は面取りを施す。



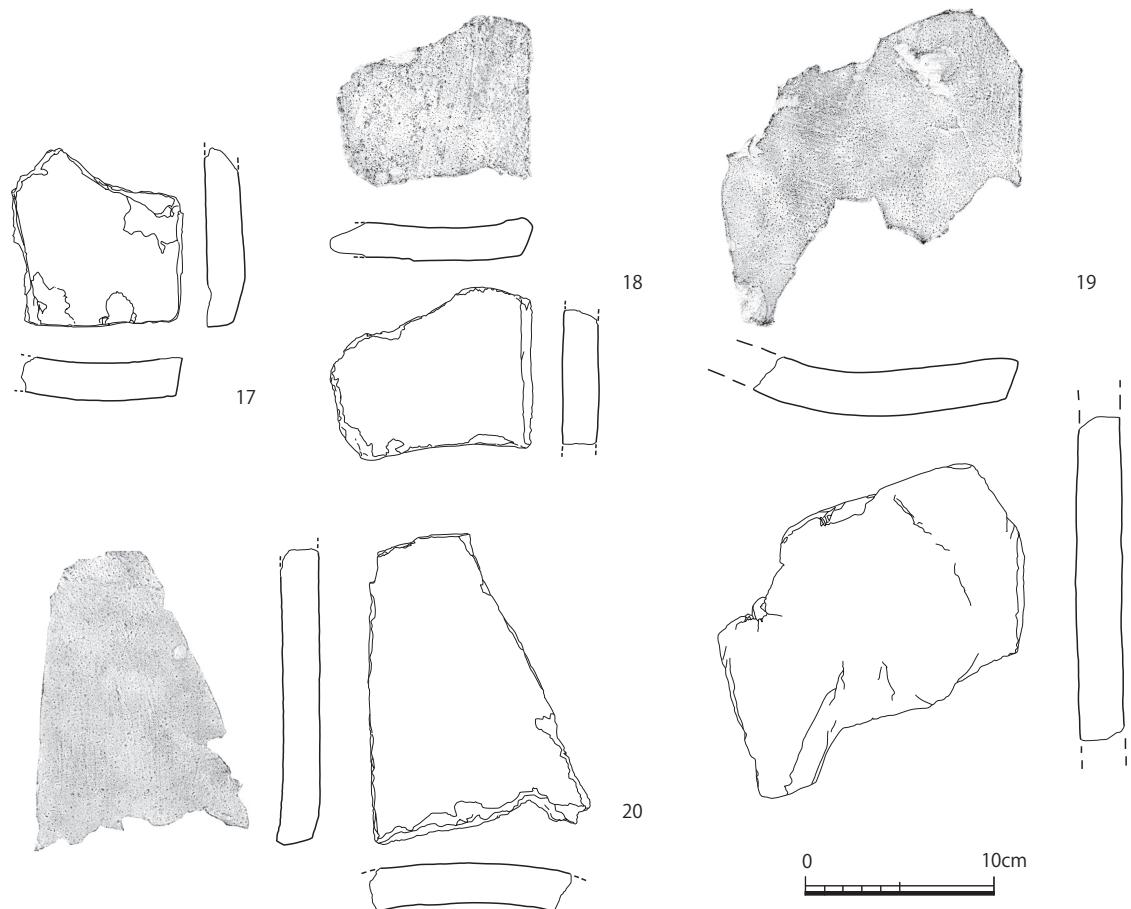
第12図 第3調査区包含層出土遺物 (1~4 1/3、5~12 1/4)

第4調査区出土遺物 (第13・14図)

1・2・4は景德鎮窯系の青花で、1・2は碗、4は皿である。1・2は口縁部内外面に界線を施す。4は底部にあたる。見込みは、輪郭を細線で描いたのち、中を塗りつぶす手法で文様を施す。高台裏に「富貴佳器」？の略字体を描く。3・6は瀬戸焼の丸皿と考えられる。5は同安窯系青磁碗で、外面を櫛描文、内面は幾何学文を施す。7は京都系土師器皿で、体部は直線的に伸びる。内外面に煤が付着する。8～16は瓦である。8～12は丸瓦で、凹面には糸によるコビキ痕が残る。13～20は平瓦である。凸面に離れ砂が付着する。色調は、8・10・11は灰褐色、黒灰色、その他は橙褐色を呈する。



第13図 第4調査区包含層出土遺物① (1~7 1/3, 8~16 1/4)



第14図 第4調査区包含層出土遺物② (1/4)

4 小結

今回の調査成果から、当調査地には16世紀中葉から16世紀末にかけての遺構が確認された。今回の調査地點は、推定桜町の東側および名ヶ小路町の南側に比定される地域であり、建物跡は確認されなかったものの、井戸と考えられる遺構が多数検出されたことから、町屋空間の「裏」にあたると想定される。また、SD003は、形状と方向から町屋を区画する施設の可能性が考えられる。推定名ヶ小路の約45.0～49.0m程度南側に位置するとみられるが、この付近において「府内古図」に見られる町割りが成立した時期とSD003の埋没時期の関係が問題であり、むしろ町割り成立頃に埋没した可能性が高い。従って町屋の「裏」を区画するラインとしてこれが機能したものかどうか、また区画として機能していたとすればどのような町屋であったのかについて今後慎重な検討を要する。溝を挟んで北側では井戸が数基検出されたのに対して、南側は明確な遺構が展開しなかったことは注意されるが、調査区が非常に狭いことに加え、出土遺物も僅少であり、井戸の時期が必ずしも明らかでないことから、慎重な検討が必要であろう。一方、詳細な時期は不明ながら、より新しいSD021も同様の区画溝であった可能性が考えられるものである。SD021は第2南北街路から東に72.0～74.0mの位置にあり、桜町の東限を画する施設であった可能性が考えられる。今後これらの遺構群については限られた資料ではあるが、遺物から判断できる時間的な位置と、遺構の空間的な位置を周辺の調査成果と比較検討し、位置づけを行う必要がある。

今回は遺構を完掘できていないため、町屋の変遷過程のどの段階にどの遺構が展開するのかということまでは解明されなかった。しかし、調査地周辺で当該期の遺構が展開していることが確認され、また、中世府内町中心部付近の町屋内部において、特徴的な土地利用状況の一端が明らかとなった。周辺地における今後の調査が期待される。

表1 遺物観察表

遺構番号	図版番号	種類／器種	法量(cm) ()は復元			成形	調整・装飾		焼成	胎土(石材)	色調・釉調 外面／内面		備考
			口径	器高／最大幅	底径／最大幅		外面	内面					
SE003	図版1-1	青花／碗	-	-	-	ロクロ	文様	圓線	やや不良	白色磁器質、焼成不良により一部掉色	(内)	(外)	
SE003	図版1-2	青花／碗	8.0+α	2.2+α	4.4+α	ロクロ			良好	磁器質、焼成して褐色付着、全体的に土入あり	(内)	(外)	
SE003	図版1-3	青磁／碗	8.8+α	2.4+α	(6.0)	ロクロ			良好	灰色磁器質	(内)	(外)	貫入が全体に見られる
SE003	図版1-4	白磁／掛花人	(4.6)	5.2+α	-		口縁装飾無		やや良好	白色磁器質	(内)	(外)	
SE003	図版1-5	京都系土器／皿	(10.4)	1.9+α	-	手づくね	ヨビオサエ ヨコナデ	ヨコナデ	良好	白色・黒色・赤色粒子	(内) 10YR8/2灰白	(外) 10YR8/6黄橙	口縁(内・外)端部煤付着
SE003	図版1-6	京都系土器／皿	(14.0)	2.0	(7.8)	手づくね	ヨビオサエ ヨコナデ	ヨコナデ	良好	黒色・白色・赤色粒子	(内) 7.5YR8/1灰白	(外) 7.5YR8/2灰白	
SE003	図版1-7	土師器／小皿	(9.1)	2.0	(5.7)	ロクロ	回転ナデ	回転ナデ	良好	黒色・白色・赤色粒子	(内) 10YR7/4にぶい黄橙	(外) 10YR7/4にぶい黄橙	
SE003	図版1-8	土師器／小皿	8.9	2.0	5.0	ロクロ	回転ナデ	回転ナデ	良好	黒色・赤色・白色粒子	(内) 10YR7/4にぶい黄橙	(外) 10YR7/4にぶい黄橙	
SE003	図版1-9	土師器／小皿	(10.0)	1.9	5.2	ロクロ	回転ナデ	回転ナデ	良好	黒色・赤色・白色粒子	(内) 10YR7/4にぶい黄橙	(外) 10YR7/4にぶい黄橙	
SE003	図版1-10	土師器／坏	(11.2)	2.8	(5.6)	ロクロ	回転ナデ	回転ナデ	良好	黒色・白色・赤色粒子	(内) 2.5YR	(外) 2.5YR	
SE003	図版1-11	土師器／坏	10.1	1.9	5.5	ロクロ	回転ナデ	回転ナデ	良好	黒色・赤色・白色粒子	(内) 5YR6/6橙	(外) 5YR6/6橙	
SE003	図版1-12	土師器／坏	(12.0)	2.5	(5.5)	ロクロ	回転ナデ	回転ナデ	良好	赤色・白色粒子	(内) 10YR8/3浅黄橙	(外) 10YR8/3浅黄橙	
SE003	図版1-13	土師器／坏	12.3	2.7	6.8	ロクロ	回転ナデ	回転ナデ	良好	赤色・黒色・白色粒子	(内) 5YR7/6橙	(外) 5YR7/6橙	口縁部ひずみがある
SE003	図版1-14	土師器／坏	(12.8)	2.7	(7.2)	ロクロ	回転ナデ	回転ナデ	良好	赤色・黒色・白色粒子	(内) 7.5/8/2浅黄橙	(外) 7.5/8/2浅黄橙	内面強いヨコナデ
SE003	図版1-15	土師器／坏	(11.8)	2.6	6.3	ロクロ	回転ナデ	回転ナデ	良好	雲母・白色・黒色・赤色粒子	(内) 5YR7/6橙	(外) 5YR7/6橙	内側下部に指顎痕
SE003	図版1-16	土師器／坏	(12.8)	2.5	(6.6)	ロクロ	回転ナデ	回転ナデ	良好	黒色・赤色・白色粒子	(内) 2.5YR	(外) 2.5YR/7/6橙	
SE003	図版1-17	土師器／坏	12.1	2.4	6.0	ロクロ	回転ナデ	回転ナデ	良好	黒色・赤色・白色粒子	(内) 5YR7/6橙	(外) 5YR7/6橙	
SE003	図版1-18	土師器／坏	11.0	2.6	5.4	ロクロ	回転ナデ	回転ナデ	良好	赤色・黒色粒子	(内) 7.5YR8/3浅黄橙	(外) 7.5YR8/3浅黄橙	口縁だ円形
SE003	図版1-19	土師器／坏	(12.5)	2.7	(5.5)	ロクロ	回転ナデ	回転ナデ	良好	雲母・赤色・白色・黒色粒子	(内) 5YR8/4淡橙	(外) 5YR8/4淡橙	
SE003	図版1-20	土師器／坏	11.6	2.9	5.9	ロクロ	回転ナデ	回転ナデ	良好	黒色・白色・赤色粒子	(内) 7.5YR8/6浅黄橙	(外) 7.5YR8/6浅黄橙	
SE003	図版1-21	土師器／坏	(12.0)	2.8	(6.8)	ロクロ	回転ナデ	回転ナデ	良好	赤色・白色・黒色粒子	(内) 7.5YR7/7/6橙	(外) 7.5YR7/8/4浅黄橙	
SE003	図版2-22	土師器／坏	(12.3)	2.4	(7.3)	ロクロ	回転ナデ	回転ナデ	良好	雲母・赤色・白色粒子	(内) 7.5YR8/6浅黄橙	(外) 7.5YR8/6浅黄橙	
SE003	図版2-23	土師器／坏	11.6	2.5	6.8	ロクロ	回転ナデ	回転ナデ	良好	赤色・白色・黒色粒子	(内) 7.5YR8/3浅黄橙	(外) 7.5YR8/3浅黄橙	
SE003	図版2-24	土師器／坏	(12.4)	2.6	6.5	ロクロ	回転ナデ	回転ナデ	良好	赤色・黒色・白色粒子	(内) 7.5YR8/4浅黄橙	(外) 7.5YR8/4浅黄橙	
SE003	図版2-25	土師器／坏	12.3	2.6	7.6	ロクロ	回転ナデ	回転ナデ	良好	黒色・白色・赤色粒子	(内) 5YR7/6橙	(外) 5YR7/6橙	
SE003	図版2-26	土師器／坏	(13.5)	2.5	7.6	ロクロ	回転ナデ	回転ナデ	良好	白色・黒色・赤色粒子	(内) 5YR7/6橙	(外) 5YR7/6橙	
SE003	図版2-27	土師器／坏	(16.8)	3.0	8.5	ロクロ	回転ナデ	回転ナデ	良好	白色・黒色・赤色粒子・雲母	(内) 2.5YR6/6橙	(外) 2.5YR6/6橙	
SE003	図版2-28	土師質土器／鉢	(19.0)	7.0	-	内型?	ユビオサエ	ナデ	良好	白色・黒色・赤色粒子・雲母	(内) 2.5YR6/6橙	(外) 2.5YR6/6橙	
SE003	図版2-29	瓦／軒丸瓦	5.5+α	4.5+α	2.3				良好	白色・赤色・黒色粒子	(内) 10YR8/1灰白	(外) 5YR7/6橙	
SE014	図版3-1	青花／碗	-	-	-	ロクロ	圓線	圓線	良好	白色磁器質	(内)	(外)	
SE013	図版3-2	京都系土器／皿	-	-	-	手づくね	ヨビオサエ ヨコナデ	ヨコナデ	良好		(内) 10YR7/4にぶい黄橙	(外) 10YR7/4にぶい黄橙	
SE013	図版3-3	京都系土器／皿	-	-	-	手づくね	ヨビオサエ ヨコナデ	ヨコナデ	良好		(内)	(外)	
SE013	図版3-4	京都系土器／皿	-	-	-	手づくね	ヨビオサエ ヨコナデ	ヨコナデ	良好	雲母微量	(内) 10YR7/4にぶい黄橙	(外) 10YR7/4にぶい黄橙	
SE013	図版3-5	京都系土器／皿	-	-	-	手づくね	ヨビオサエ ヨコナデ	ヨコナデ	良好		(内) 10YR7/3にぶい黄橙	(外) 10YR7/3にぶい黄橙	
SE013	図版3-6	京都系土器／皿	(12.5)	2.3+α	-	手づくね	ヨビオサエ ヨコナデ	ヨコナデ	良好	角閃石・白色粒子・赤色粒子	(内) 10YR7/3にぶい黄橙	(外) 10YR7/4にぶい黄橙	
SE013	図版3-7	京都系土器／皿	(13.8)	2.0	(7.1)	手づくね	ヨビオサエ ヨコナデ	ヨコナデ	やや良好	白色粒子	(内) 7.5YR7/4にぶい橙	(外) 7.5YR7/4にぶい橙	
SK011	図版3-8	青花／碗	8.8+α	1.0+α	(7.6)	ロクロ	圓線	花文	やや不良	黄白色磁器質	(内)	(外)	
SK011	図版3-9	土師器／坏	9.6+α	1.3+α	(5.8)	ロクロ	回転ナデ	回転ナデ	良好	白色粒子	(内) 10YR8/1灰白	(外) 10YR8/1灰白	白色系
SK011	図版3-10	土師器／耳皿	5.0+α	1.0+α	3.0+α	ロクロ	回転ナデ	回転ナデ	良好	雲母・白色粒子	(内) Hu 5YR6/6橙	(外) Hu 5YR6/6橙	
SK011	図版3-11	瓦／平瓦	8.7+α	6.2+α	2.3		ナデ	ナデ	良好	雲母・白色・赤色粒子	(内) 10YR7/3にぶい黄	(外) 5YR7/6橙	
第3調査区	図版4-1	陶器／丸皿	(11.0)	2.1+α	-	ロクロ			良好		(内) 2.5Y7/4淡黄	(外) 2.5Y7/4淡黄	瀬戸・美濃 灰釉
第3調査区	図版4-2	京都系土器／皿	(11.7)	2.0+α	4.0	手づくね			良好	赤色・白色粒子・金雲母	(内) 10YR7/4にぶい黄橙	(外) 10YR7/4にぶい黄橙	
第3調査区	図版4-3	京都系土器／皿	(13.1)	2.1+α	-	手づくね			良好		(内) 10YR7/3にぶい黄橙	(外) 10YR7/3にぶい黄橙	
第3調査区	図版4-4	京都系土器／皿	(13.0)	2.2+α	-	手づくね			良好	金雲母・白色粒子	(内) 10YR7/3にぶい黄橙	(外) 10YR7/3にぶい黄橙	
第3調査区	図版4-5	備前焼／甕	-	-	-				良好		(内) 7.5R4/2灰赤	(外) 7.5R3/1暗赤	
第3調査区	図版4-6	備前焼／甕	-	4.6+α	-				良好		(内) 2.5Y3/1黒褐	(外) 10YR3/2黒褐	
第3調査区	図版4-7	備前焼／擂鉢	-	8.0+α	-				良好	青色・白色・黒色粒子	(内) Hu 5RP4/1暗紫灰	(外) Hu 5RP6/1紫灰	
第3調査区	図版4-8	瓦／平瓦	8.8+α	6.4+α	2.2				良好	雲母・白色・黒色・赤色粒子	(内) 7.5YR7/2明褐灰	(外) 5YR7/6橙	
第3調査区	図版4-9	瓦／平瓦	11.8+α	9.6+α	2.5				良好	赤色・白色・黒色粒子	(内) 5YR7/6橙	(外) 5YR8/3淡黄	
第3調査区	図版4-10	瓦／棟瓦	8.9+α	12.1+α	2.6				良好	白色・黒色・赤色粒子	(内) 7.5YR7/2明褐灰	(外) 10YR7/1灰白	
第3調査区	図版4-11	瓦／平瓦	14.3+α	7.8+α	2.4				良好	黒色・白色・赤色粒子	(内) 7.5YR8/3浅黄橙	(外) 7.5YR7/6橙	
第3調査区	図版4-12	瓦／丸瓦	10.2+α	8.0+α	2.2				良好	雲母・黒色・白色・赤色粒子	(内) 7.5YR7/4にぶい橙	(外) 7.5YR8/6浅黄橙	
第4調査区	図版5-1	青花／碗	-	-	-	ロクロ	圓線	圓線	良好		(内)	(外)	口縁部一部残存
第4調査区	図版5-2	青花／碗	-	-	-	ロクロ	圓線	圓線	良好		(内) 5B7/1明青灰	(外) N8/0灰白	
第4調査区	図版5-3	陶器／皿	-	-	-	ロクロ			良好		(内) 10YR6/1褐灰	(外) 5Y7/3浅黄	瀬戸・美濃
第4調査区	図版5-4	青花／皿	-	-	-	ロクロ	銘	文様	良好		(内) N8/0灰白	(外) 5B7/1明青灰	
第4調査区	図版5-5	青磁／碗	-	-	-	ロクロ	櫛描文	櫛描文	良好		(内) 5Y6/3オリーブ黄	(外) 5Y6/3オリーブ黄	釉
第4調査区	図版5-6	陶器／皿	-	-	-	ロクロ			良好		(内) 2.5Y7/3淡黄	(外) 2.5Y7/3淡黄	瀬戸・美濃
第4調査区	図版5-7	京都系土器／皿	-	-	-	手づくね	ナデ	ナデ	良好	赤色粒子	(内) 10YR6/4にぶい黄橙	(外) 7.5YR6/4にぶい橙	
第4調査区	図版5-8	瓦／丸瓦	9.8+α	6.7+α	2.2				良好	雲母・白色粒子	(内) N4/0灰	(外) N4/0灰	
第4調査区	図版5-9	瓦／丸瓦	7.4+α	7.5+α	2.8				良好	赤色・黒色・白色粒子	(内) 5YR7/6橙	(外) 5YR7/4にぶい黄橙	
第4調査区	図版5-10	瓦／丸瓦	11.4+α	6.6+α	2.4				良好		(内) N4/0灰	(外) N4/0灰	
第4調査区	図版5-11	瓦／丸瓦	11.0+α	9.5+α	3.2				良好	黒色・赤色・白色粒子	(内) 7/0灰白	(外) 6/0灰	
第4調査区	図版5-12	瓦／丸瓦	12.9+α	10.8+α	3.1				良好	雲母・赤色・黒色・白色粒子	(内) 5YR8/4淡橙	(外) 5YR7/8橙	
第4調査区	図版5-13	瓦／平瓦	9.9+α	11.9+α	2.0				良好		(内) 10YR7/1灰白	(外) 10YR7/3にぶい黄橙	
第4調査区	図版5-14	瓦／平瓦	11.6+α	12.1+α	2.2				良好	白色・赤色・黒色粒子	(内) 7.5Y8/6淡黄橙	(外) 7.5Y8/7/6淡黄	
第4調査区	図版5-15	瓦／平瓦	9.5+α	8.5+α	2.0				良好	黒色・赤色・白色粒子	(内) 7.5YR7/4にぶい橙	(外) 5YR7/6橙	
第4調査区	図版5-16	瓦／平瓦	14.0+α	9.3+α	2.8				良好	雲母・白色・黒色・赤色粒子	(内) 7.5YR6/4にぶい橙	(外) 7.5YR6/3にぶい橙	
第4調査区	図版5-17	瓦／平瓦	9.0+α	9.5+α	2.0				良好		(内) N3/0暗灰	(外) N3/0暗灰	
第4調査区	図版5-18	瓦／平瓦	9.1+α	10.7+α	1.9				良好	白色・黒色粒子	(内) 7.5YR7/6橙	(外) 7.5YR6/2灰褐	
第4調査区	図版5-19	瓦／平瓦	17.5+α	16.3+α	2.4				良好	白色・黒色・赤色粒子・雲母	(内) 7.5YR8/2灰白	(外) 7.5YR8/2灰白	
第4調査区	図版5-20	瓦／平瓦	16.0+α	11.9+α	2.3				良好		(内) N4/0灰	(外) 5B63/1暗青灰	

第5節 第59次調査

調査の概要

本調査区は、大分川下流西岸の沖積平野に位置し、古絵図および明治期の字図から推定される「桜町」の一画に想定される。調査は、下水道建設に伴って実施された。現況では道路が通っている為、調査区を2分割して調査を実施した。東側調査区の規模は、幅1.2m、長さ3.3mの狭小な範囲であり、なおかつ水道管・鉄パイプ・排水路・下水管がそれぞれ埋設されていた。攪乱による遺跡への影響も危惧されたが、地表下約1.2mにおいてピット・土坑が確認され、周辺の調査の状況から町屋の遺構群に相当することが考えられる。さらに約40cm掘り下げを行った結果、中央部分から東西方向にのびる遺構が確認された。また、西側調査区でも幅1.45m、長さ3.4mの範囲ではあるが、東側調査区と同様に、地表下約1.2mよりピット・土坑が確認された。遺物を含む遺構の下約40cmの掘り下げを行い、東側調査区から続く遺構を検出したところ、深さ約80cmの大きな土坑の上面に溝と考えられる遺構が確認された。遺物については16世紀後葉を中心とする京都系土師器をはじめ、瓦質土器・軒丸瓦・土錘・輸入陶磁器などが出土している。周辺地における近年の調査により町屋の広がり状況が明らかになりつつあり、町屋の状況を示す調査結果を得ることができた。

主要遺構について

遺物包含層

S001

調査は、現況の道路下に公共下水道管を設置することから、道路面のアスファルト剥ぎ取りを行い、表土を除去した。アスファルトの下は、約0.9mもの厚い現在の埋土があり、その中に既存の水道管や配水管が埋設されている。その下部の2・3層は近年の水田耕作層である。その下位にあたる厚さ約10cmの4-1層(1)から多数の遺物を含有する。

遺物には、中国産の青磁・青花、京都系土師器皿(1)・ロクロ系土師器皿、瓦など多数含まれるが、近世の陶磁器も混じっている。このことから近世段階で中世の文化面を少し削平して整地した層であると考えられる。

S004

4-1層(S001)の下層には、厚さ約14cmの4-2層(S004)の堆積が確認された。この上面での遺構の確認はない。遺物には、中国産の青磁・白磁(5)・青花、備前産の小壺(2)、京都系土師器皿(3・4)、ロクロ系土師器皿、瓦・瓦質土器等、16世紀後半を中心とした遺物が出土している。なお、取瓶や土壁等町屋の状況を示す遺物も興味深い。

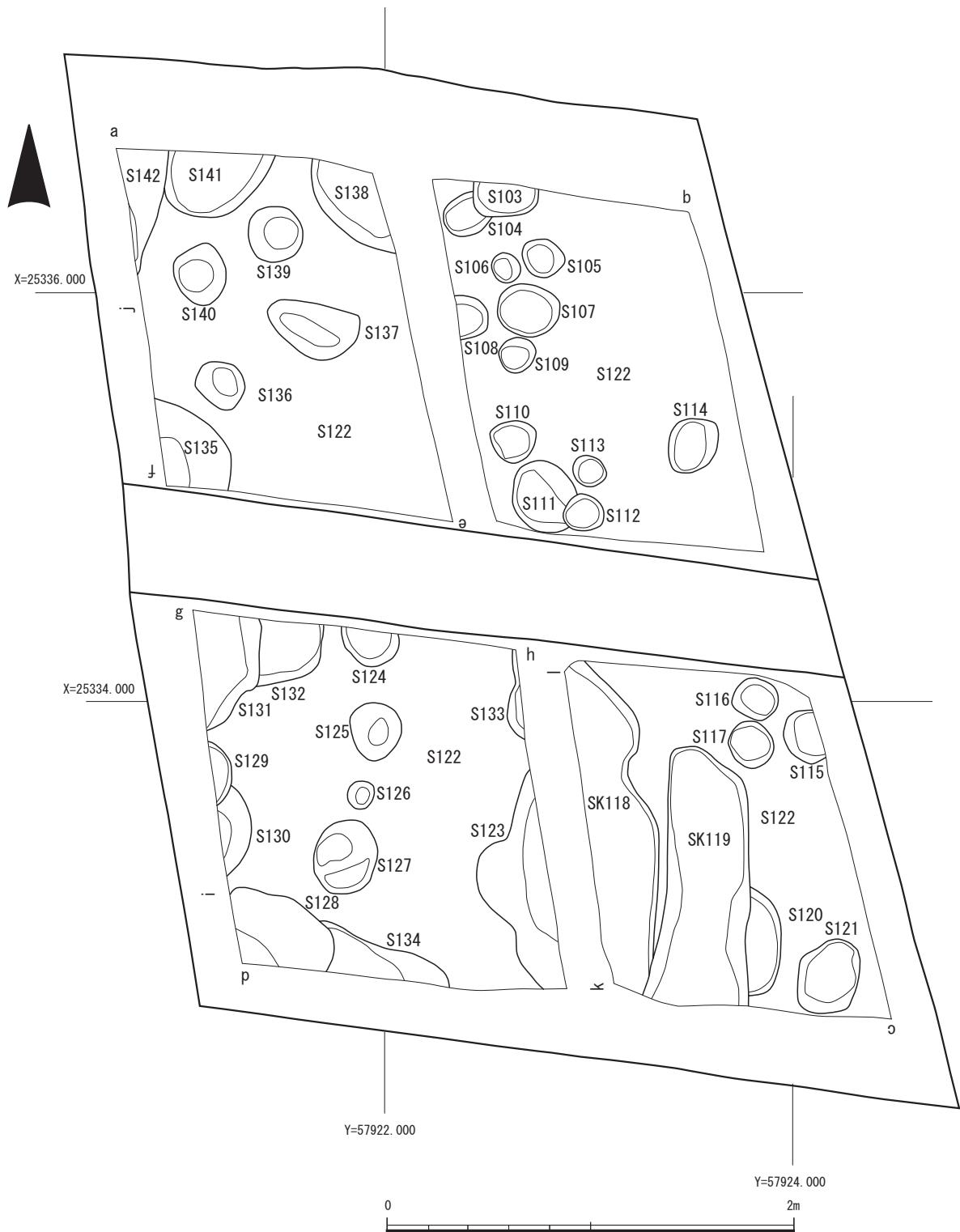
S122

4-2層(S004)の下部に堆積する整地層である。約0.5mの厚みを持ち、その上面に大半の遺構が形成されている。また、この層を除去すると井戸跡(S147)と考えられる遺構や土坑(S145)も確認される。さらにその下層(S142)においても中国産景德鎮窯系の青花が含まれるなど、16世紀中頃に形成された整地層であることが判明している。

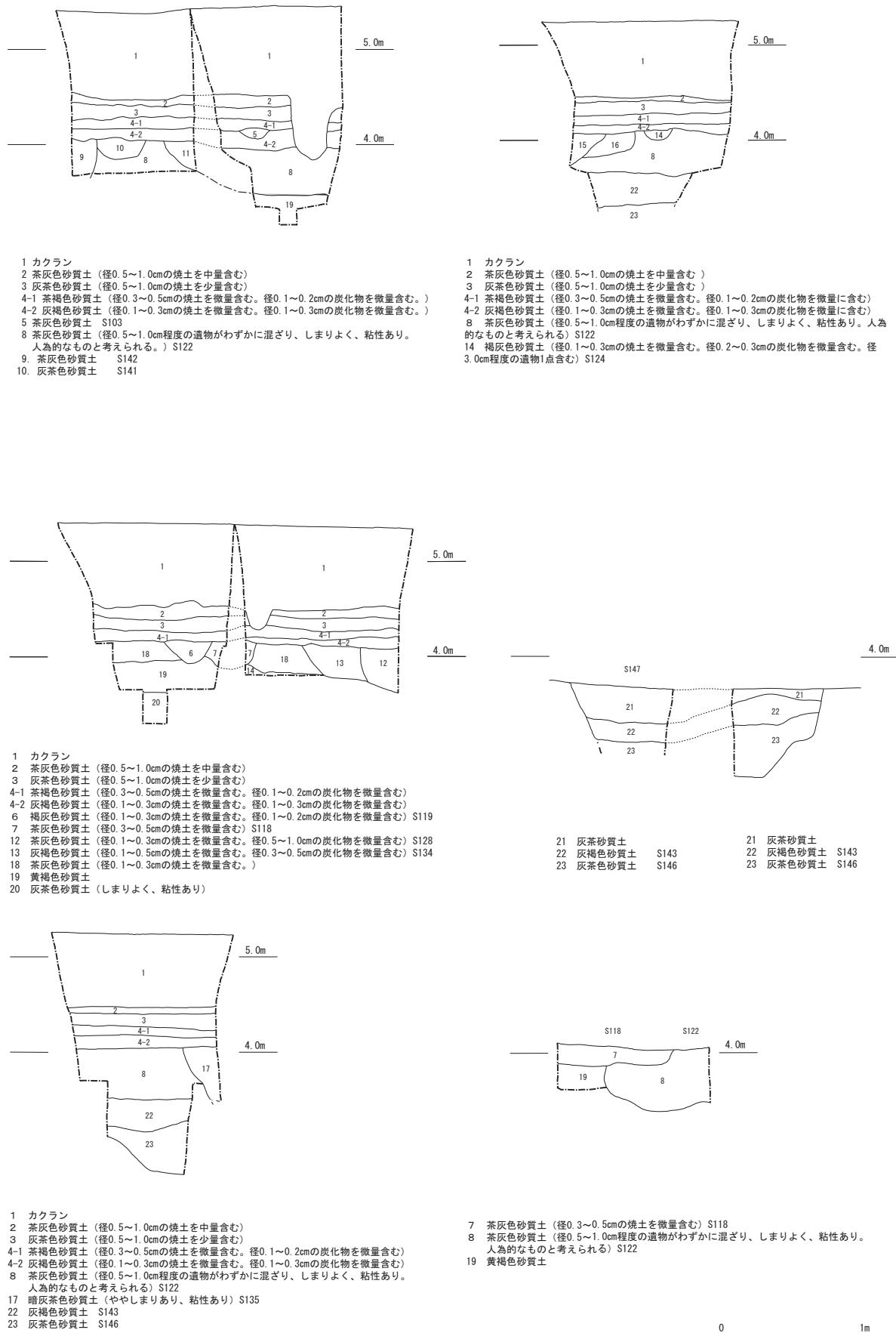
土坑(SK)

SK119(第1図)

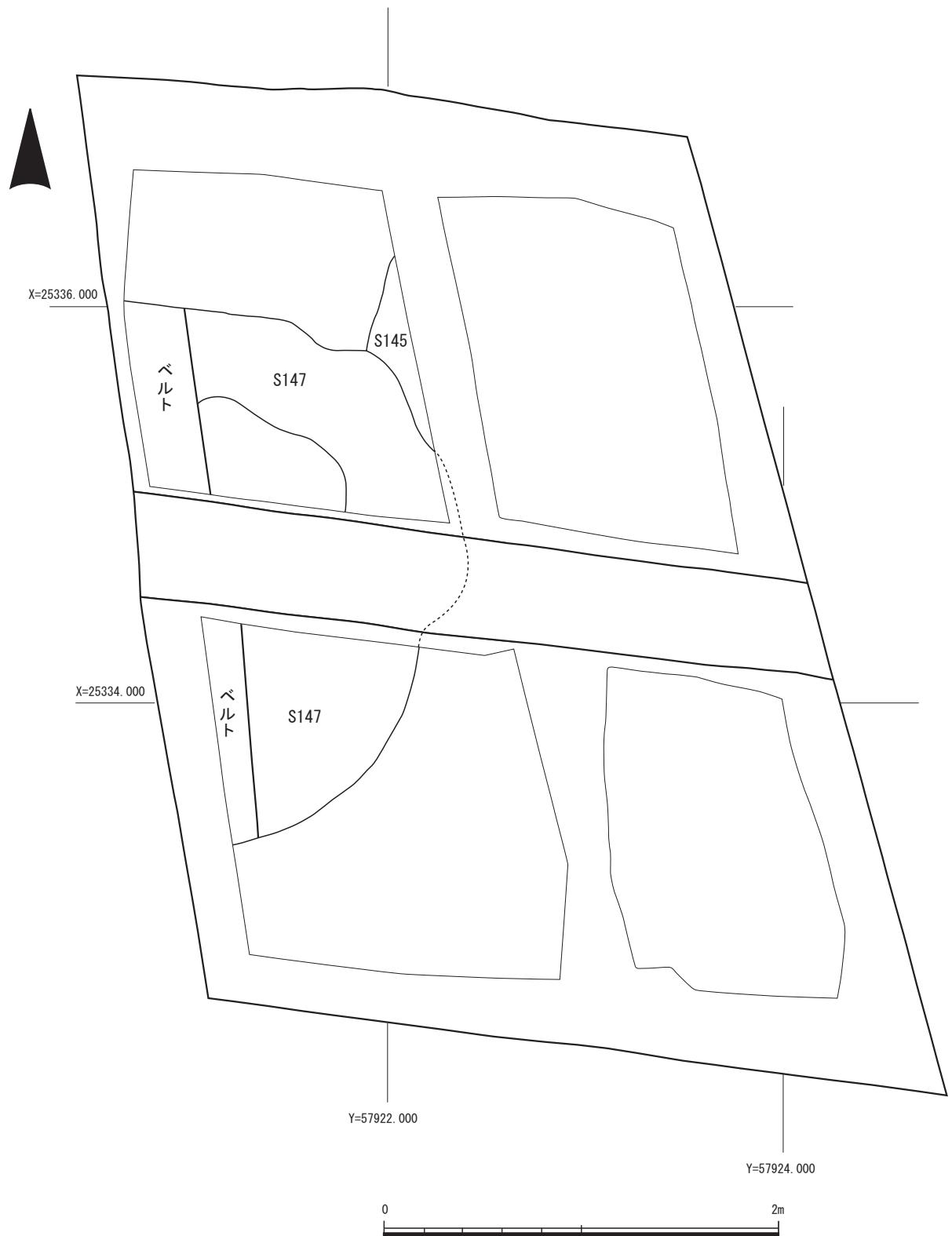
調査区南側で確認された、南北に長い土坑である。現況で長さ1.17m、幅0.29m、深さ0.27mである。遺物には、中国産景德鎮窯系の青花碗(6)、京都系土師器皿等16世紀後半代の遺物が出土する。また、取瓶にスラグなど鍛冶関連の遺物や土壁といった建物に関連する遺物も含まれている。



第1図 第1面平面図 (1/30)



第2図 調査区土層断面実測図 (1/60)



第3図 第2面平面図 (1/30)

表1 遺構台帳

遺構番号	種別	帶面形態	儀軸(m)	煙軸(m)	深さ(m)	面積(m ²)	遺構の先後関係	遺構番号	備考	変化面
R000	△双肩余		,	,	,	,		0	3.0余	,
R002	口勾		,	,	,	,		-		,
R003	口勾		,	,	,	,		-		,
R004	△双肩余		,	,	,	,		1k 4	3.1余	,
R005	口勾		,	,	,	,		K	R036lb 治C	,
R006	傀!		/-03	/-34	,	,	R0/1y R0/0	K		,
R007	其く		/-5/	/-3/	,	,	R0/1y R0/0	K		,
R008	0hs	卍 傀 呂☆	/-22*♦	/-08*♦	/-0/	/-77*♦	R0/3y R0/2	K		" 噴
R009	0hs	卍 傀 呂☆	/-12*♦	/-10	/-00	/-1*♦	R0/3y R0/2	K		" 噴
R010	0hs	卍☆	/-5	/-5	/-00	/-2		K		" 噴
R011	0hs	卍☆	/-02	/-02	/-8	/-0		K		" 噴
R012	0hs	卍 傀 呂☆	/-18	/-14	/-01	/-5		K		" 噴
R013	0hs	卍 傀 呂☆	/-07*♦	/-06	/-8	/-1*♦		K		" 噴
R014	0hs	卍☆	/-08	/-04	/-02	/-1		K		" 噴
R015	0hs	卍☆	/-12	/-08	/-04	/-2		K		" 噴
R016	0hs	卍☆	/-2/	/-2/	/-4	/-8*♦	R000y R001	K		" 噴
R017	0hs	卍☆	/-07	/-05	/-4	/-2	R000y R001	K		" 噴
R018	0hs	卍☆	/-02	/-02	/-6	/-06		K		" 噴
R019	0hs	卍 傀 呂☆	/-10	/-07	/-18	/-3		K		" 噴
R020	0hs	卍☆	/-24	/-1/*♦	/-1/	/-3*♦		K		" 噴
R021	0hs	卍☆	/-08	/-06	/-02	/-3		K		" 噴
R022	0hs	卍☆	/-13	/-12	/-3/	/-3		K		" 噴
R023	其く	卵云☆	0-25*♦	/-34*♦	/-5	/-22*♦	R007y R008	K	R012lb 治C	" 噴
R024	其く	卵云☆	0-06	/-18	/-16	/-34*♦	R007y R008 R01/y R008	5		" 噴
R025	0hs	卍 傀 呂☆	/-31	/-07*♦	/-16	/-6*♦	R007y R008 R01/y R008	K		" 噴
R026	0hs	卍 傀 呂☆	/-30	/-23	/-11	/-8		K		" 噴
R027	云偏余		,	,	,	,		K		" 噴
R028	其く	卵云☆	0-00*♦	/-34*♦	/-02	/-12*♦	R011y R007y R008	6	R007lb 治C	" 噴
R029	0hs	卍 傀 呂☆	/-14	/-07	/-8	/-3*♦		K		" 噴
R030	0hs	卍☆	/-15	/-11	/-26	/-4		K		" 噴
R031	0hs	卍☆	/-01	/-00	/-4	/-0		7		" 噴
R032	0hs	卍☆	/-22	/-2/	/-33	/-8		K		" 噴
R033	其く	卍 傀 呂☆	/-42*♦	/-32*♦	/-20	/-04*♦	R023y R017	8o 0/		" 噴
R034	0hs	卍☆	/-23	/-12	/-01	/-1*♦	R02/y R018	K		" 噴
R035	0hs	卍☆	/-20*♦	/-18*♦	/-8	/-1*♦	R02/y R018	K		" 噴
R036	其く	卵云☆	/-37*♦	/-3/*♦	/-11	/-02*♦	R021y R020	K		" 噴
R037	其く	卵云☆	/-24*♦	/-18*♦	/-04	/-7*♦	R021y R020	K		" 噴
R038	其く	卵云☆	/-34*♦	/-04*♦	/-20	/-1*♦		K		" 噴
R039	其く	卵云☆	/-28*♦	/-2/*♦	/-10	/-5	R023y R017	K		" 噴
R040	其く	卍 傀 呂☆	/-34*♦	/-28*♦	/-4/*♦	/-05*♦		K		" 噴
R041	0hs	卍 傀 呂☆	/-10	/-10	/-21	/-3		K		" 噴
R042	0hs	卵云☆	/-35	/-14	/-05	/-8		K		" 噴
R043	其く	卍 傀 呂☆	/-26*♦	/-26*♦	/-1/	/-01*♦		K		" 噴
R044	0hs	卍☆	/-12	/-12	/-04	/-4		K		" 噴
R045	0hs	卍 呂☆	/-08	/-07	/-5	/-5		K		" 噴
R046	0hs	卍 傀 呂☆	/-33*♦	/-22*♦	/-06	/-01*♦	R030y R031	K		" 噴
R047	其く	卵云☆	/-55*♦	/-14*♦	/-5	/-0/*♦	R030y R031	K		" 噴
R048	其く		,	,	,	,	R032y R035	00k 03	R036kt余	" 噴
R049	口勾		,	,	,	,		K	R032lb 富ま	,
R050	其く	卵云☆	0-//*♦	/-13*♦	,	/-6*♦	R034y R033	K		" 噴
R051	其く		,	,	,	,	R032y R035	K	R036(l7)余	" 噴
R052	其く	卍☆	1-7/	0-3*♦	/-8*♦	,	R032y R035	04k 07	R032h R035	" 噴

SK118 (S123) (第1図)

調査区南側でS119に遺構の一部が切られた状況で確認された不整形の土坑である。遺構の底部は丸底になっているものと考えられる。

遺物には、万頭心タイプの青花碗（7）をはじめ、京都系土師器皿、瓦が出土する。瓦は北側に位置する称名寺によるものであろう。時期的にはS119と大差なく16世紀後半となる。

S128 (第1図)

調査区の南西角で検出された土坑である。検出できた長さは0.53m、深さは0.31mである。遺物には、京都系土師器皿（9・10）、ロクロ系土師器皿等が出土し、16世紀中頃と考えられる。

S147 (S143) (第3図)

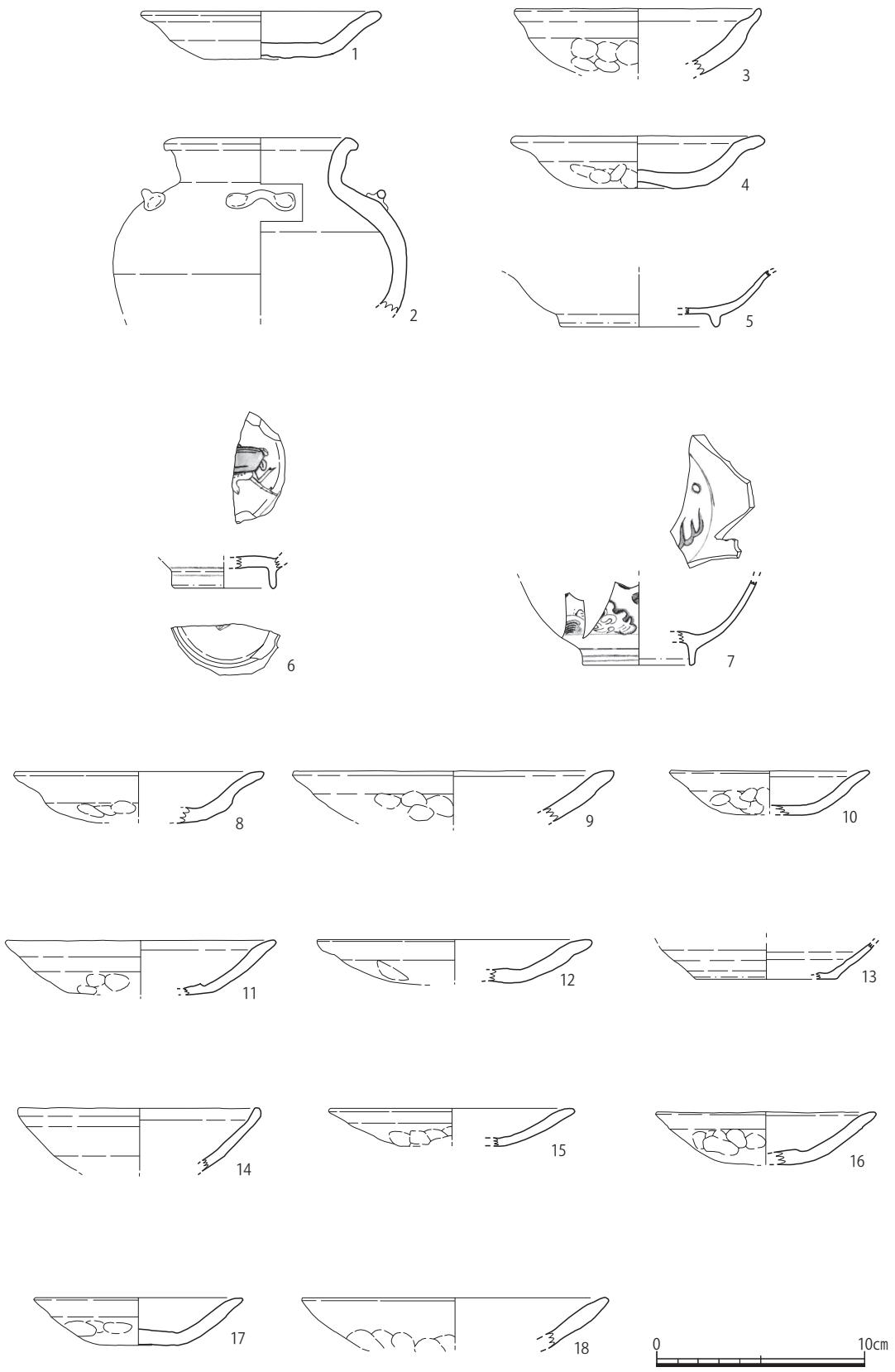
整地層（S112）を除去した段階で、調査区の西側で確認された井戸跡と考えられる遺構である。遺構の西半分は調査区外に延びているが、現状で半径約2.8mにおよび、深さは0.9mであるが完掘していないためさらに深くなるものと思われる。なお、堆積層は現状で大きく3層に分けることができ、上層（S143）からは、京都系土師器皿（11・13）・白色系土師器皿（12）・瓦器碗（14）などの出土が見られる。また、下層（S146）からも京都系土師器皿（15～18）が出土しており、16世紀中頃と考えられる。

小結

この調査区は、狭小な調査面積であるために遺構の状況や性格を確認することはできなかった。しかしながら、最も古い遺構としてS147の井戸跡等16世紀中頃に形成された遺構が確認できた。さらに、S122とする厚さ50cmにもおよぶ厚い整地層が16世紀中頃以降に大規模に形成された様子を伺うことができる。その後には、取瓶やスラグなど鍛冶関連に関する遺物や随所の土坑に土壁が出土するなど職人町の町屋の様子を顕著に表していると言えよう。府内絵図によれば桜町に属するものと考えられるが、道沿いではなく大友館の東を南北に走る街路から約40.0m裏手にあたる場所に位置している。

表2 遺物観察表

備考	伝丹 勾ぼ	蕊唇	凜像	☆2日	彌唐	呑器'bi' (削削	財偏	匱つ
						"	⊕	■ベ			
0	倭3丹	其④■	窓八*	(月)	R//0	00-3	1-2	,	05乳。偲嗽k ×嗽	ボ偏財	
1	倭3丹	治■	匪伙財	kℓ姆	R//3	'8-3(,		匪伙財	宍②巻
2	倭3丹	其④■	窓八*	(月)	R//3	'00-7('2-0(,	05乳。×嗽k 啾嗽	ボ偏財	
3	倭3丹	其④■	窓八*	(月)	R//3	'01-1(1-4	,	05乳。×嗽k 啾嗽	ボ偏財	
4	倭3丹	⑦■	劬⑦	(月)	R//3	,	,	,	05乳。劬		べ劬'6-3(
5	倭3丹	⑦■	享(c)・	圩	R008	,	,	,	05乳。×嗽k 啾嗽	*準備	べ劬'4-/(*D+)
6	倭3丹	⑦■	享(c)・	圩	R012	,	,	,	05乳。×嗽k 啾嗽	*準備	べ劬'4-3(*D+)
7	倭3丹	其④■	窓八*	(月)	R015	'01-7(1-4	,	05乳。×嗽k 啾嗽	ボ偏財	
8	倭3丹	其④■	窓八*	(月)	R017	'04-3('1-5(,	05乳。偲嗽k ×嗽	ボ偏財	
0/	倭3丹	其④■	窓八*	(月)	R017	'0-5('1-0(,	05乳。偲嗽k ×嗽	ボ偏財	
00	倭3丹	其④■	窓八*	(月)	R032	'02-7('1-5(,	05乳。伙嗽	ボ偏財	
01	倭3丹	其④■	劬18*	(月)	R032	,	,	'5-5(05乳。伙嗽	* 匪*	(F)克匱今工傲
02	倭3丹	其④■	窓八*	(月)	R032	'02-1('1-1(,	05乳。偲嗽k ×嗽	ボ偏財	
03	倭3丹	十■		圧	R032	'00-5('2-7(,	05乳。偲嗽k ×嗽		
04	倭3丹	其④■	窓八*	(月)	R036	'0-5('1-4(,	05乳。偲嗽k ×嗽	ボ偏財	
05	倭3丹	其④■	窓八*	(月)	R036	'0-7(1-2	,	05乳。偲嗽k ×嗽	ボ偏財	
06	倭3丹	其④■	窓八*	(月)	R036	'03-6('1-4(,	05乳。偲嗽k ×嗽	ボ偏財	
07	倭3丹	其④■	窓八*	(月)	R036	'03-6('1-4(,	05乳。偲嗽k ×嗽	ボ偏財	



第4図 059 出土遺物実測図 (1/3)

第4章 自然科学分析

第1節 大分市中世大友府内町跡の出土品に関する自然科学調査

別府大学大学院 文学研究科

魯 視瑛 藤村里香 平尾良光

はじめに

大分県に位置する中世大友府内町跡はキリスト教大名であった大友宗麟の領国経営の拠点となり、守護所がおかれていたところで、1996年に中世大友府内町跡に関する発掘調査が始まって以来、現在まで調査が続いている。16世紀の中世大友府内町跡は商業地と政治・宗教の中心地の二つの構造で成り立っていたところで、博多、堺、安土、大阪と共に商業貿易都市として栄えた。このことを示すように、中世大友府内町跡では中国、朝鮮半島産の製品だけではなく、タイ、ミャンマー、ベトナムなどの東南アジア産の製品も出土している。

大友宗麟は外国との貿易から得られる利益のため、府内でのキリスト教の布教を許可した。大友宗麟がイエズス会の宣教師を受け入れ、布教活動を許すことで、より順調な南蛮貿易を願った。実際に中世大友府内町跡では外国製品と共にメダイ、ロザリオなどのキリスト教遺物も出土した。特に、中世大友府内町跡から出土したメダイは独特な形態を成しており、他地域で出土している製品とは異なることから、国内産の製品である可能性が指摘されている。

中世大友府内町跡から出土したキリスト教遺物そして金属製品に関しては2005年から自然科学的な調査が今まで持続的に行われている。これまでの中世大友府内町跡出土の製品に関する自然科学的な研究成果からみると、中世大友府内町跡から出土したキリスト教遺物には材料的にこれまで知られていない未知の材料も含まれていることがわかっている。一般的な他の金属製品に関しては中国、朝鮮半島、日本の東アジア産材料が幅広く利用されていることがわかった。特に注目される特徴は東アジアではない未知の材料が新しく使われたことで、当時の貿易ルートを示唆しているとも言える。ただし、これまでに測定された中世大友府内町跡出土の金属製品は少ないため、その結果がキリスト教との関連がある製品のみにみられることなのかどうかを理解するためにはより深い研究が必要である。

このような状況の中で、今回中世大友府内町跡から出土したキリスト教関連製品を含め、他の金属製品に関して自然科学的な調査を大分市教育委員会の依頼を受け、化学組成および鉛同位体比分析法を用いた産地推定の研究を行うことにした。

資料

今回、研究対象になったのは中世大友府内町跡（大分市調査区域）から出土した金属製品40点、ガラス製品10点、小壺2点で、総数52点である。その中で、ガラス1点はガラス製小玉であり、10点が一つのセットとなっているので、これらを一つの資料とした。すべての資料に関して蛍光X線分析を行い、その化学組成を調べた。また、鉛が含まれている資料に関しては鉛同位体比分析を行い、材料の産地を推定してみた。そのため、各資料から少量の試料を採取し、鉛同位体比分析用の試料とした。資料の記載は表1に示した。

鉛同位体比の原理1)

地球が誕生したのは45.6億年前とされている。そして、この時にすべての元素の同位体組成は地球上で各元素毎にある値になっていて、その値は地球のどこでも同じ値であったとされている。ほとんどの元素の同位体比は時間が経っても変化しなかったが、例外的ないくつかの元素は変化した。鉛はその例外的な元素の一つである。

鉛（Pb）には ^{204}Pb , ^{206}Pb , ^{207}Pb , ^{208}Pb の同位体があり、地球が誕生した時にできた岩石中に他の元素と

表1 中世大友府内町跡から出土した資料の掲載（測定番号は鉛同位体比測定用）

番号	資料名	遺跡	出土遺構	グリッド	測定番号	図版番号
1	不明青銅製品	町53次	SX001	9-011	BP1319	第40図-8
2	不明青銅製品	町53次	SX001	14-A11	BP1320	第40図-9
3	青銅製鍵	町53次	SX001		BP1321	第40図-7
4	鉛製メダイ	町53次	SX101	P-71	BP1322	第26図-6
5-1	青銅製繭型分銅	町53次	SX126		BP1323	
5-2	青銅製繭型分銅	町53次	SX126		BP1814	
6	鉛製メダイ様	町53次	SX140		BP1324	第36図-23
7	青銅製留金具	町53次	SX140下層		BP1325	第36図-22
8	青銅製金具	町53次	S-200-3	9-I11	BP1326	第16図-152
9	青銅製鍵	町53次	S-200-3	9-J11 P-113	BP1327	第16図-166
10	青銅製鉢	町53次	S-200-3	9-K11	BP1328	第16図-151
11	鉛製鉄砲玉	町53次	S-200-3	9-M11 P-102	BP1329	第16図-147
12	不明青銅製品	町53次	S-200-3	9-M11 P-200	BP1330	第16図-167
13	青銅製太鼓分銅	町53次	S-200-3	9-M11 P-210	BP1331	第16図-149
14	青銅製繭型分銅	町53次	S-200上層	14-B11	BP1332	第16図-148
15	青銅製留め針	町53次	S-200下層	14-D11 P-27	BP1333	第16図-153
16	青銅製留め具	町53次	S-200		BP1334	第16図-168
17	青銅製太鼓分銅	町53次	S-203	9-I11	BP1335	第16図-150
18	青銅製太鼓分銅	町53次	S-205	9-L11	BP1336	第18図-53
19	青銅製石突	町53次	S-205	9-M11	BP1337	第18図-52
20	青銅製仏具付属品	町53次	S-205	14-C11	BP1338	第18図-54
21	不明青銅製品	町53次	S-206	9-I11	BP1339	第19図-30
22	不明青銅製品	町53次	S-206	14-C11	BP1340	第19図-31
23	青銅製金具	町53次	SD210j-2		BP1341	第20図-7
25	ガラス製小玉	町53次	S-200-3	9-J11 P-145	BP1343	第16図-146
26	不明青銅製品	町60次	S-177	14-G11	BP1344	不明棹被熱
27	青銅製鍵	町60次	S-200	14-J11	BP1345	
28	不明ガラス製品	町60次	S-223	14-K11 P-26	BP1346	不明ガラス片
29	装飾青銅製品	町73次	S151	19-I10 P-2	BP1347	
30	鉢状青銅製品	町73次	S153		BP1348	
31	鉢状青銅製品	町73次	S210	19-A10 P-17	BP1349	
32	不明青銅製品	町73次	S210	19-E11 P-22	BP1350	
33	ピン状青銅品	町73次	S210	19-A10	BP1351	
34	青銅製毛抜き	町73次	S151	19-K10・K11	BP1352	
35	不明青銅製品	町73次	S210	19-J10	BP1353	
36	耳かき状青銅製品	町73次	S223	P-23	BP1354	
37	青銅製笄	町73次	S231	P-22	BP1355	
38	不明ガラス製品	町73次	S210	19-D11 P-8		
39	ガラス板製品	町73次	S210	19-D10 P-53		
40	ガラス板製品	町73次	S210	19-D10 P-54		
41	ガラス板製品	町73次	S210	19-E10		
42	ガラス製小玉(10点)	町73次	S210	19-E10	BP1356-67	
43	ガラス板製品	町73次	S231	P-8		
44	不明ガラス製品	町73次	S231	19-D10 P-11		
45	土師器小壺	町73次	S128	24-C10 P-1		
46	陶器壺	町73次	カクラン	19-D10		

表1 中世大友府内町跡から出土した資料の掲載（測定番号は鉛同位体比測定用）

匂ぽ	匂嚙唐	匂仍	匂其匂ご	X↑ 1 ⊕	削仰	侘儉匂ぽ
36	17.划 ^キ 歴 ^リ 口	傳 08 7月	乃兒余敵 ¹⁷		05B >	A00254
37	命 ^ミ 2日享減 ^リ	傳 15h 1A 7月	A, 0 R, 074 ⑦ 其		05B >	A00255
38	允呈 ^ミ	傳 28 7月	≤ ⑦ 其		05B >	
4/	卵 ^ミ 2日享減 ^リ	傳 34 7月	A, 2 ≤ ⑦ 18日		05B 哇 ^カ	A00257
40	収減	傳 54 7月	価 ^カ 18日			A00258

一緒に含まれていた。時間が経つと岩石中に含まれていた ^{238}U は ^{206}Pb に、 ^{235}U は ^{207}Pb に、 ^{232}Th は ^{208}Pb に変化する。よって、U（ウラン）と Th（トリウム）が減少した量だけ鉛の量は増えてくる。各鉛同位体の量は岩石中の U、Th、Pb の量比および岩石中で Pb と U、Th が共存していた時間の長さによって、それぞれの増加量が異なるため、鉛同位体比の違いとして表わすことができる。

それ故、同位体の量が地球の誕生から変わっていない ^{204}Pb 量と、変化した ^{206}Pb , ^{207}Pb , ^{208}Pb 量との比を調査し、これを世界の鉛鉱山の同位体比と比較することによって鉛の産地の違いを判別することができる。

測定値の表し方 2)

鉛同位体比測定の結果を理解するため、資料の同位体比を次のように示した。鉛には ^{204}Pb , ^{206}Pb , ^{207}Pb , ^{208}Pb の独立した 4 つの同位体があり、同位体比は $^{206}\text{Pb}/^{204}\text{Pb}$, $^{207}\text{Pb}/^{204}\text{Pb}$, $^{208}\text{Pb}/^{204}\text{Pb}$, $^{204}\text{Pb}/^{206}\text{Pb}$, $^{207}\text{Pb}/^{206}\text{Pb}$, $^{208}\text{Pb}/^{206}\text{Pb}$, $^{204}\text{Pb}/^{207}\text{Pb}$, $^{206}\text{Pb}/^{207}\text{Pb}$, $^{208}\text{Pb}/^{207}\text{Pb}$, $^{204}\text{Pb}/^{208}\text{Pb}$, $^{206}\text{Pb}/^{208}\text{Pb}$, $^{207}\text{Pb}/^{208}\text{Pb}$ という 12 の方法で表現される。この方法の中で一番整った図で表現でき、4 種類の同位体を含む $^{206}\text{Pb}/^{204}\text{Pb} - 207\text{Pb}/^{204}\text{Pb}$ (B 式図) と $^{207}\text{Pb}/^{206}\text{Pb} - 208\text{Pb}/^{206}\text{Pb}$ (A 式図) という 2 つの図を用いた表現方法を利用して測定結果を図化した。

中国の前漢時代、後漢時代・三国時代の銅鏡を分析して、これらを図 1 と図 3 の中にプロットすると、前漢時代の銅鏡と後漢・三国時代の銅鏡の材料が、はっきり区分されて分布した。そこで前漢時代の銅鏡が分布した領域を、他の出土資料と比較して華北産材料の領域 (A と A') と表し、後漢時代・三国時代の銅鏡が分布する領域を華南産材料の領域 (B と B') と表した。弥生時代後期の突線鉢銅鐸や広形銅矛などの青銅器の中でもより後期とされる資料は華北産材料の領域の中で一定な範囲に集まって分布するので、この領域を特定領域 'a' と表した。

日本産材料の領域を設定する場合、西暦 6 世紀頃までの遺物で日本産の材料を用いたと断定できる資料は今のところ確認できていないので、8 世紀以降に作られた銭貨と現代の鉛鉱山が示す分布を日本産材料の領域 (C と C') とした。

朝鮮半島産材料の領域には、朝鮮半島で製作されたと考えられる多鉢細文鏡を用い、それらが示す分布領域を朝鮮半島産材料の範囲 (D と D') とした。

鉛材料の産地は当然鉛鉱山が示す値から設定するべきであるが、文化財資料が製作された当時に利用された鉱山を探すことは無理であり、現実的にも限界がある。そのため、文化財資料が製作された当時の鉛材料を資料から取り、それを基準に領域を仮定し、設定した。この仮定した領域は弥生時代資料に関して利用していたが他の時代に関しても、新しい鉱山が加わることを考慮すると、かなりの場合に応用できることがわかった。

分析方法

採取した試料に関しては鉛同位体比を次のような処理をして測定した。

まず、金属資料の場合、試料をアルコールで洗浄した後、石英製ビーカーに入れ、硝酸で溶解した。これを蒸留水で約 5ml に希釈し、これを直流 2V で電気分解した。約 1 日の時間をかけて電気分解を続け、析出した二酸化鉛を硝酸と過酸化水素水で溶解した。

表2 中世大友府内町跡出土の金属製品の化学組成 (%)

番号	資料名	Cu	Sn	Pb	Fe	As	備考	測定番号
1	不明青銅製品	36	44	5.8	9.7	4.0		BP1319
2	不明青銅製品	12	19	65	2.5	1.2		BP1320
3	青銅製鍵	23	1.4	44	29	0.1	Zn1.4	BP1321
4	鉛製メダイ	0.1	4.8	95	0.4	<0.1		BP1322
5-1	青銅製繭型分銅	11	1.5	76	9.5	1.9		BP1323
5-2	青銅製繭型分銅	81	3.6	11	1.3	<0.1	Zn2.3	BP1814
6	鉛製メダイ様	<0.1	<0.1	99	0.4	<0.1		BP1324
7	青銅製留金具	87	0.4	4.8	3.2	1.5	Zn1.0 Ag1.6	BP1325
8	青銅製金具	93	0.2	1.7	2.5	0.5	Zn1.0 Ag1.6	BP1326
9	青銅製鍵	52	0.1	37	9.5	0.1	Zn1.7	BP1327
10	青銅製鉈	92	<0.1	6.8	<0.1	<0.1	Zn1.1	BP1328
11	鉛製鉄砲玉	<0.1	<0.1	99	0.5	0.1		BP1329
12	不明青銅製品	95	0.1	0.7	3.3	0.1	Zn1.0	BP1330
13	青銅製太鼓分銅	19	26	52	2.3	0.8		BP1331
14	青銅製繭型分銅	89	<0.1	8.4	0.4	0.1	Zn1.8	BP1332
15	青銅製留め針	97	<0.1	0.1	0.7	0.1	Zn1.0 Ag0.9	BP1333
16	青銅製留め具	98	<0.1	<0.1	0.1	0.1		BP1334
17	青銅製太鼓分銅	39	27	25	1.5	4.0	Ag2.6	BP1335
18	青銅製太鼓分銅	51	23	21	0.4	2.4	Ag1.5	BP1336
19	青銅製石突	64	<0.1	20	2.5	0.1	Zn11 Ag1.8	BP1337
20	青銅製仏具付属品	0.1	47	50	2.9	<0.1		BP1338
21	不明青銅製品	98	<0.1	<0.1	1.6	0.1		BP1339
22	不明青銅製品	34	0.8	50	13	0.1	Zn1.5	BP1340
23	青銅製金具	88	<0.1	6.0	1.0	1.6	Ag2.7	BP1341
26	不明青銅製品	56	43	0.1	0.4	<0.1		BP1344
27	青銅製鍵	47	0.3	45	5.6	0.1	Zn1.9	BP1345
29	装飾青銅製品	87	<0.1	6.3	4.9	0.5		BP1347
30	鉈状青銅製品	92	<0.1	5.1	0.3	1.1		BP1348
31	鉈状青銅製品	83	9.6	1.1	2.9	0.2	Ag2.2	BP1349
32	不明青銅製品	93	<0.1	0.4	0.1	0.5	Ag4.8	BP1350
33	ピン状青銅品	98	<0.1	<0.1	0.3	0.3		BP1351
34	青銅製毛抜き	80	<0.1	15	0.1	3.9		BP1352
35	不明青銅製品	93	<0.1	3.8	0.5	0.7		BP1353
36	耳かき状青銅製品	73	<0.1	2.5	0.2	<0.1	Zn25	BP1354
37	青銅製笄	81	<0.1	12	0.5	1.2	Zn5.1	BP1355
47	火繩銃部品	87	5.3	3.6	0.7	1.9		BP1365
48	棒状青銅品	88	0.4	2.6	0.6	0.9	Ag2.0 Au4.6	BP1366
49	鉄砲玉	0.7	<0.1	0.5	99	<0.1		-
50	不明青銅片	94	<0.1	<0.1	2.9	0.9		BP1368
51	分銅	34	33	23	8.2	0.8		BP1369

ガラス試料はアセトンで超音波洗浄した後、テフロン製ビーカーに入れ、硝酸と弗化水素酸で溶解した。溶解した試料をテフロンビーカーに入れたまま、ホットプレートの上に載せ、弗化水素酸と硝酸を蒸発させた。これにまた硝酸を2滴（約0.1ml）入れ、蒸留水約5mlで希釀した。この溶液試料を直流2Vで電気分解した。約1日の時間をかけて電気分解を続け、析出した二酸化鉛を硝酸と過酸化水素水で溶解した。

この溶液から0.2μgの鉛を分取し、これにリン酸とシリカゲルを加えてレニウムフィラメント上に乗せた。以上のように準備したフィラメントを質量分析計（本学に設置されているサーモエレクトロン社の表面電離型質量分析計 MAT262）の中にセットし、条件を整え、鉛同位体比を1200°Cで測定した。また、同一条件で標準鉛

表2 中世大友府内町跡出土のガラス製品の化学組成 (%)

匁ば	國語唐	RhN ₁	B`N	EdN	OaN	M`N	J ₁ N	@k ₁ N ₂	LfN	LmN	BtN	Bk	Bn ₁ N ₂	ShN ₁	R	検査匁ば
13	・ix 22 VI ⁴ 並 ¹ 口	68	7-/	/-1	;/-0	;/-0	4-2	4-2	/-5	;/-0	;/-0	0-8	;/-0	/-0	/-0	/-0
14	VI ⁴ 並 ¹ 口	76	/-2	/-0	4-5	;/-0	0-2	2-6	;/-0	;/-0	;/-0	0-7	;/-0	;/-0	;/-0	A00232
17	卵嘆VI ⁴ 並 ¹ 口	76	2-1	/-5	;/-0	0-4	5-/	;/-0	;/-0	;/-0	0-3	;/-0	;/-0	;/-0	;/-0	A00235
27	卵嘆VI ⁴ 並 ¹ 口	73	5-7	;/-0	;/-0	2-4	0-0	2-2	;/-0	;/-0	;/-0	0-0	;/-0	;/-0	;/-0	,
28	VI ⁴ 並 ¹ 口	75	4-0	;/-0	;/-0	1-5	/-3	2-/	1-/	;/-0	;/-0	0-0	;/-0	;/-0	/-1	,
3/	VI ⁴ 並 ¹ 口	74	5-4	/-0	;/-0	;/-0	/-3	5-7	/-0	;/-0	;/-0	0-0	;/-0	;/-0	/-1	,
30	VI ⁴ 並 ¹ 口	74	4-3	/-0	;/-0	0-0	/-6	3-6	0-1	;/-0	;/-0	0-2	;/-0	;/-0	/-0	,
31, 0	VI ⁴ 並 ¹ 口	37	0-5	/-0	10	;/-0	2-2	4-8	;/-0	;/-0	;/-0	00	;/-0	/-1	7-2	,
31, 1	VI ⁴ 並 ¹ 口	46	/-8	/-0	02	;/-0	2-6	5-1	;/-0	;/-1	;/-0	7-2	;/-0	;/-0	6-6	,
31, 2	VI ⁴ 並 ¹ 口	56	1-5	/-2	02	;/-0	2-/	6-6	;/-0	;/-0	;/-1	4-8	;/-0	;/-0	,	,
31, 3	VI ⁴ 並 ¹ 口	38	/-7	/-1	07	;/-0	2-1	7-/	;/-0	;/-1	;/-0	01	;/-0	;/-2	7-1	,
32	VI ⁴ 並 ¹ 口	73	4-/	/-0	;/-1	2-8	/-3	2-0	1-3	;/-0	;/-0	0-0	;/-0	/-1	/-0	,
33	卵嘆VI ⁴ 並 ¹ 口	72	5-5	/-0	;/-0	1-8	0-/	3-2	;/-2	;/-0	;/-0	0-1	;/-0	;/-0	/-0	,

表2 中世大友府内町跡出土の小壺の化学組成 (%)

匁ば	國語唐	Ed	B`	Sh	Bk	Rh	J	検査匁ば
34	其 ⁴ 口 k ¹ 姆	53	3-/	1-0	8-7	06	1-4	,
35	治 ⁴ 口 k ¹ 姆	61	0-7	;/-0	4-7	08	/-8	,

試料 NBS-SRM981 を測定し、規格化した。

化学組成

中世大友府内町跡から出土した資料 52 点に関して蛍光 X 線分析法を用いてその化学組成を調べた。測定は本学に設置されている SII ナノテクノロジー（株）製微小部蛍光 X 線分析計 SEA5230A で行った。測定された蛍光 X 線スペクトルを付録として末尾に付し、その化学組成を表 2 でまとめた。なお、これらの測定は資料の表面錆を含んだままで行ったため、金属組成そのものとは異なる可能性がある。

中世大友府内町跡から出土した金属製品の場合、純銅製品や銅と鉛の合金、銅と鉛とスズの合金、銅とスズの合金などがほとんどである。資料の中でメダイ 2 点は純鉛製品であり、中世大友府内町跡出土のメダイが示す傾向に類似していることがわかった。一部の資料からは亜鉛が検出されたが、5%以上含まれているものは真鍮と判断した。その結果、真鍮製品は 3 点があり、亜鉛の含有量が 5%以下のものは不純物として含まれたと考えるほうが良いと考えられる。

また、いくつかの資料からは銀の成分が検出されたが、亜鉛と同様にその含有量が 5%以下の場合は不純物として含まれたと判断した。ただし、1 点だけが銀の含有量が 4.8%であり、この資料は意図的に銀を銅に入れて鋳造した製品とみたほうが良いであろう。

今回の資料の中で 1 点の資料から、銅に銀と金が入っていることが確認されたのは注目される。一般的に銅に約 3 ~ 5%の金が含まれた合金は赤銅と呼ばれるが³⁾、この中世大友府内町跡出土の資料（番号 48 の棒状青銅品）は金が 4.6%含まれており、赤銅とみても良いと考えられる。赤銅は刀装具や装身具、建具などに用いられたといわれており、今回の赤銅である棒状青銅品もそれらの一部であるかもしれない。

ガラス製品の場合、K₂O-CaO-SiO₂ 系のカリ石灰ガラスと SiO₂-CaO 系の石灰ガラス、Na₂O-Al₂O₃-CaO-SiO₂ 系のソーダ石灰ガラス、SiO₂-PbO 系の鉛ガラスであることが確認された。ガラス製小玉 10 点はその内 4 点を測定したが、鉛ガラスであった。

鉛同位体比測定の結果

中世大友府内町跡から出土した資料の中で、鉛が含まれている資料に関して鉛同位体比測定を行い、得られた値を表 3 にまとめ、図 1 ~ 図 2 に図化した。今回の資料は大きくみて、中国の華南産材料、日本産材料、朝鮮半島産材料、N 領域の材料を利用したことがわかり、これは今まで測定した中世大友府内町跡出土の製品と類似した結果であった。今回の資料には金属資料と共にガラス資料も含まれているため、金属資料とガラス資料にわけて、分析結果を整理した。

図 3 ~ 図 6 は中世大友府内町跡出土の金属製品の測定結果をまとめた図式である。これまでの研究成果から

表3 中世大友府内町跡出土の金属製品およびガラス製品の鉛同位体比

番号	資料名	$^{206}\text{Pb}/^{204}\text{Pb}$	$^{207}\text{Pb}/^{204}\text{Pb}$	$^{208}\text{Pb}/^{204}\text{Pb}$	$^{207}\text{Pb}/^{206}\text{Pb}$	$^{208}\text{Pb}/^{206}\text{Pb}$	測定番号
1	不明青銅製品	18.393	15.691	38.877	0.8531	2.1137	BP1319
2	不明青銅製品	18.307	15.682	38.800	0.8566	2.1194	BP1320
3	青銅製鍵	18.715	15.752	39.167	0.8417	2.0928	BP1321
4	鉛製メダイ	18.257	15.750	38.515	0.8627	2.1097	BP1322
5-1	青銅製繭型分銅	18.673	15.758	39.188	0.8439	2.0986	BP1323
5-2	青銅製繭型分銅	18.382	15.753	38.873	0.8570	2.1147	BP1814
6	鉛製メダイ様	18.251	15.757	38.516	0.8634	2.1103	BP1324
7	青銅製留金具	18.355	15.683	38.833	0.8544	2.1157	BP1325
8	青銅製金具	18.390	15.639	38.733	0.8504	2.1062	BP1326
9	青銅製鍵	18.345	15.749	38.842	0.8585	2.1173	BP1327
11	鉛製鉄砲玉	18.767	15.774	39.368	0.8405	2.0977	BP1329
12	不明青銅製品	18.421	15.711	38.848	0.8529	2.1089	BP1330
13	青銅製太鼓分銅	18.476	15.713	38.956	0.8504	2.1084	BP1331
14	青銅製繭型分銅	18.451	15.781	39.000	0.8553	2.1137	BP1332
15	青銅製留め針	18.387	15.709	38.856	0.8543	2.1132	BP1333
16	青銅製留め具	18.493	15.721	38.962	0.8501	2.1069	BP1334
17	青銅製太鼓分銅	18.305	15.719	38.692	0.8587	2.1137	BP1335
18	青銅製太鼓分銅	18.350	15.727	38.800	0.8570	2.1144	BP1336
19	青銅製石突	18.305	15.735	38.789	0.8596	2.1190	BP1337
20	青銅製仏具付属品	18.682	15.751	39.196	0.8431	2.0981	BP1338
21	不明青銅製品	18.345	15.721	39.782	0.8570	2.1141	BP1339
22	不明青銅製品	18.569	15.740	39.046	0.8476	2.1028	BP1340
23	青銅製金具	18.365	15.671	38.808	0.8533	2.1132	BP1341
25	ガラス製小玉	18.574	15.706	38.972	0.8456	2.0982	BP1343
26	不明青銅製品	18.358	15.698	38.681	0.8551	2.1071	BP1344
27	青銅製鍵	18.302	15.743	38.795	0.8602	2.1197	BP1345
29	装飾青銅製品	18.314	15.683	38.816	0.8563	2.1194	BP1347
30	鉛状青銅製品	18.316	15.679	38.816	0.8561	2.1193	BP1348
31	鉛状青銅製品	19.284	15.781	39.818	0.8183	2.0648	BP1349
32	不明青銅製品	18.404	15.647	38.762	0.8502	2.1062	BP1350
33	ピン状青銅品	18.345	15.674	38.753	0.8544	2.1124	BP1351
34	青銅製毛抜き	18.302	15.678	38.797	0.8567	2.1198	BP1352
35	不明青銅製品	18.520	15.695	38.954	0.8475	2.1033	BP1353
36	耳かき状青銅製品	18.280	15.737	38.761	0.8609	2.1205	BP1354
37	青銅製笄	18.277	15.745	38.780	0.8615	2.1218	BP1355
42-1	ガラス製小玉	18.537	15.787	39.107	0.8517	2.1097	BP1356
42-2	ガラス製小玉	18.507	15.671	38.865	0.8468	2.1000	BP1357
42-3	ガラス製小玉	18.563	15.756	39.185	0.8488	2.1109	BP1358
42-4	ガラス製小玉	18.508	15.674	38.877	0.8469	2.1005	BP1359
42-5	ガラス製小玉	18.704	15.763	39.343	0.8428	2.1035	BP1360
42-6	ガラス製小玉	18.639	15.764	39.168	0.8458	2.1015	BP1361
42-7	ガラス製小玉	18.556	15.691	38.940	0.8456	2.0985	BP1362
42-8	ガラス製小玉	18.451	15.811	39.034	0.8569	2.1156	BP1363
42-9	ガラス製小玉	18.547	15.757	39.004	0.8496	2.1030	BP1364
47	火縄銃部品	18.356	15.682	38.787	0.8543	2.1131	BP1365
誤 差		±0.010	±0.010	±0.030	±0.0003	±0.0006	

みると、中世大友府内町跡出土のキリスト教関連の遺物はN領域と強い関連性がみられたため、メダイは別項に区分してまとめた。まず、今回の資料の中ではメダイが2点含まれていたが、N領域の中に分布することが

表3 中世大友府内町跡出土の金属製品およびガラス製品の鉛同位体比

名	年	1/50a.	1/30a	1/60a.	1/30a	1/70a.	1/30a	1/60a.	1/50a	1/70a.	1/50a	名
37	命20享減	07-280	04-536	27-637		/-74/7		1-0/57		A00255		
31, 0/	VI ⁴ iii ⁺ k ⁶ 5	07-446	04-581	27-834		/-7345		1-875		A00256		
4/	卵20享減	07-360	04-578	27-680		/-7383		1-0//0		A00257		
40	収減	07-256	04-581	27-743		/-7432		1-0043		A00258		
『	ザ	€ /-/0/	€ /-/0/	€ /-/2/		€ /-//2		€ /-//5				

わかった。これまで測定された中世大友府内町跡出土の資料をみると、N領域に分布する資料はすべてキリスト教との関連性がある製品で4)、今回の測定結果もこれまでの研究成果に一致することがわかった。

金属製品の場合、華南産材料がほとんどで、一部は設定された領域から離れたところか朝鮮半島産材料の領域に分布した。資料番号2、29、30、34は二つの図で分布した位置が華南産材料の領域の中でもかなり狭い範囲に分布し、華南産材料でも同一あるいは近いところから採鉱した材料を利用した可能性があるか、鋳造時期が同一か近接している可能性が考えられる。資料番号8、32、48も同様に二つの図で分布位置が近いため、材料あるいは鋳造時期がお互いに密接な関係がある可能性がある。ただし、両図で分布した領域がことなるため、今のところその材料の産地を推定するのには無理がある。資料番号3、5-1、11、20も材料的に類似している。ただし、両図で分布する位置が少し異なるが、これらの資料は資料番号31と同様に朝鮮半島産材料である可能性がある。また、もしこれらの資料が朝鮮半島産材料であれば、31の材料とは同じ朝鮮半島産材料としてもその産地は異なると考えられる。資料番号19、27、36、37はA式図では華南領域より少し下のところに、B式図ではN領域の近くに分布したが、これまでの中世大友府内町跡出土の金属製品の鉛同位体比測定の結果をみると、いくつかの資料がこの位置にまとめて分布することがわかっている5)。この分布位置に関してはより研究が必要である。そして、資料番号33と50はほぼ純銅製品であり、鉛同位体比測定の結果、誤差が大きかったため、産地に関してはその正確さが落ちるので参考にしておきたい。

図7～図10は鉛が含まれているガラスに関して鉛同位体比測定の結果をまとめた図である。測定は測定番号25と42-1～10までを行った。その結果、資料番号42-2と42-4、42-7と42-10が同一あるいは類似した材料であり、鋳造時期も近い可能性があった。また、資料番号25もこれらの資料と近接したところに分布するので、材料的に関連性があるかもしれない。資料番号42-5は朝鮮半島産材料の可能性がある。資料番号42-9は華南産材料の領域に分布した。しかし、それ以外の資料は両図で分布位置が異なっており、今のところでは材料の産地を推定することには無理がある。

8. 考 察

本研究では大分市教育委員会が発掘した中世大友府内町跡出土の金属製品とガラス製品に関して自然科学的な研究を行った。その結果、これまで測定された中世大友府内町跡出土の製品(大分県埋蔵文化財センター発掘)とほぼ同様の傾向が現れた5、6、7、8)。今までの研究からみると、キリスト教製品であるメダイはほとんどがN領域の中に分布しており、今回の2点のメダイもN領域の材料であることがわかった。N領域という産地がどこであるかはまだわからないが、これまでの研究成果からみると、東南アジアにその産地がある可能性が高く考えられる。

また、以前測定された資料からはA式図では華南領域の下に、B式図ではN領域の中かその付近に集まって分布する資料がいくつか確認されたが、今回の資料からもこの位置に分布する資料が確認できた。これはこの位置に新たな材料の産地があったことを意味することで、今後より多くの資料に関して研究を続けると、その産地に関しての理解がより深くなると考えられる。

また、ガラス製品の鉛同位体比分析の結果を理解する際、現在設定されている東アジア産材料の領域は金属製品で設定されたため、ガラス製品もこの領域に代入できるかどうかは今後の課題である。今のところではガラス

材料の産地の領域が設定されていない状況であるため、今回は金属製品と同じ領域に代入し、今後、ガラス材料の領域が設定されたら、考え直したい。

参考・引用文献

- 1) 平尾良光編、1999「古代青銅の流通と鋳造」鶴山堂（東京）p.31～p.33
- 2) 平尾良光編、1999「古代青銅の流通と鋳造」鶴山堂（東京）p.35～p.39
- 3) 馬淵久夫・杉下龍一郎・三輪嘉六・沢田正昭・三浦定俊、2003「文化財化学の事典」p.71～p.72
- 4) 魯 祐珍、2007「南蛮貿易と金属材料—自然科学的方法を用いた中世キリスト教関連遺物の研究」『キリスト大名の考古学』九州考古学会夏季（大分）大会、p.97～p.107
- 5) 魯 祐珍・平尾良光、2008「中世中世大友府内町跡出土金属製品に関する自然科学的調査」『豊後府内8』大分県教育庁埋蔵文化財センター、p.291～p.298
- 6) 魯 祐珍・平尾良光、2007「中世中世大友府内町跡出土金属製品に関する自然科学的調査」『豊後府内7』大分県教育庁埋蔵文化財センター、p.324～p.331
- 7) 魯 祐珍・平尾良光、2007「中世中世大友府内町跡出土金属製品に関する自然科学的調査」『豊後府内6』大分県教育庁埋蔵文化財センター、p.303～p.310
- 8) 魯 祐珍・平尾良光、2006「中世中世大友府内町跡出土金属製品・ガラス玉の鉛同位体比分析」『豊後府内4－第3分冊』大分県教育庁埋蔵文化財センター、p.303～p.310

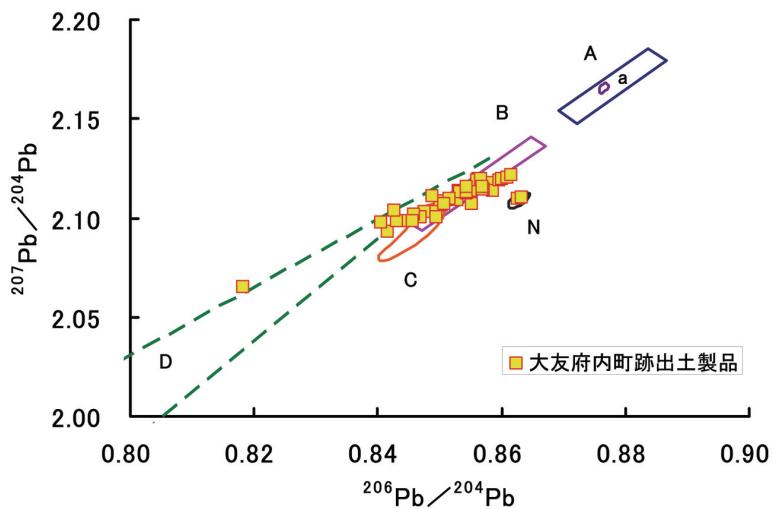


図1 大友府内町跡出土製品の鉛同位体比 ($^{207}\text{Pb}/^{206}\text{Pb}$ – $^{208}\text{Pb}/^{206}\text{Pb}$)

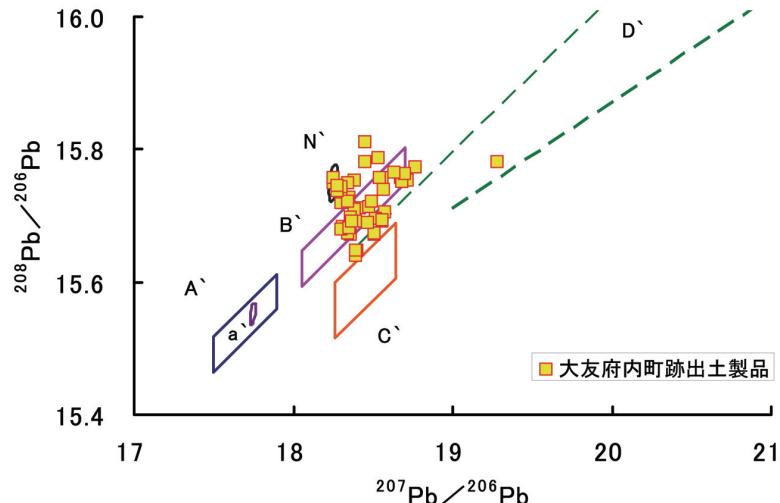


図2 大友府内町跡出土製品の鉛同位体比 ($^{206}\text{Pb}/^{204}\text{Pb}$ – $^{207}\text{Pb}/^{204}\text{Pb}$)

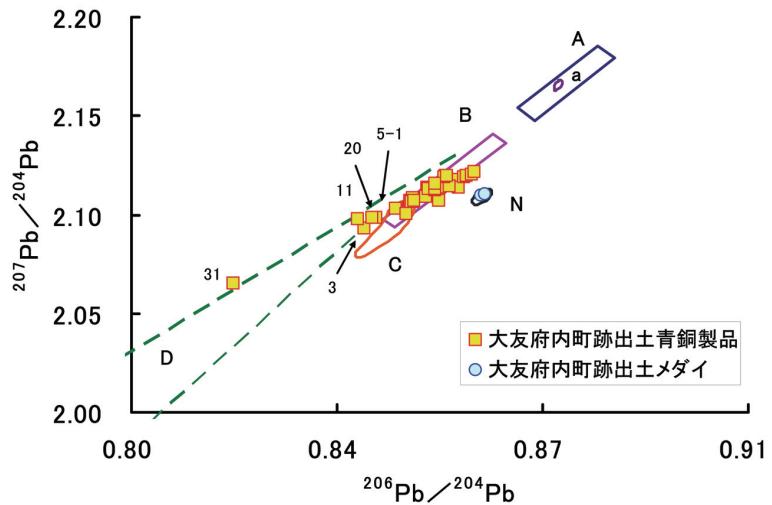


図3 大友府内町跡出土金属製品の鉛同位体比 ($^{207}\text{Pb}/^{206}\text{Pb}$ – $^{208}\text{Pb}/^{206}\text{Pb}$)

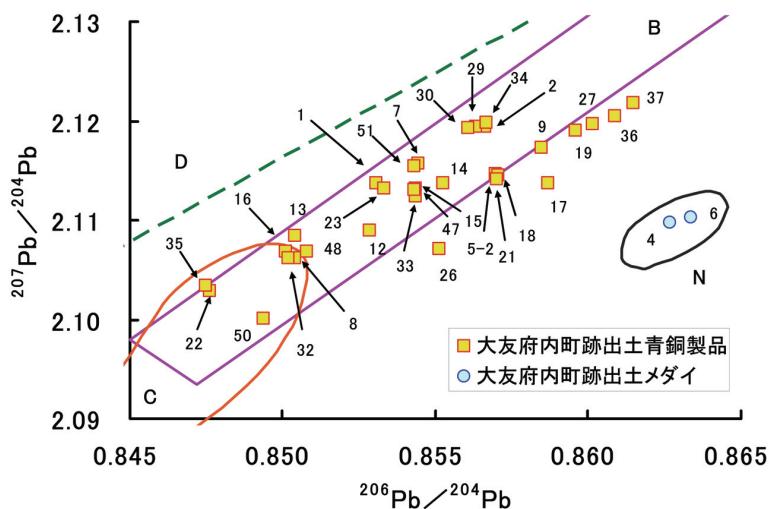


図4 図3の拡大図 ($^{207}\text{Pb}/^{206}\text{Pb}$ – $^{208}\text{Pb}/^{206}\text{Pb}$)

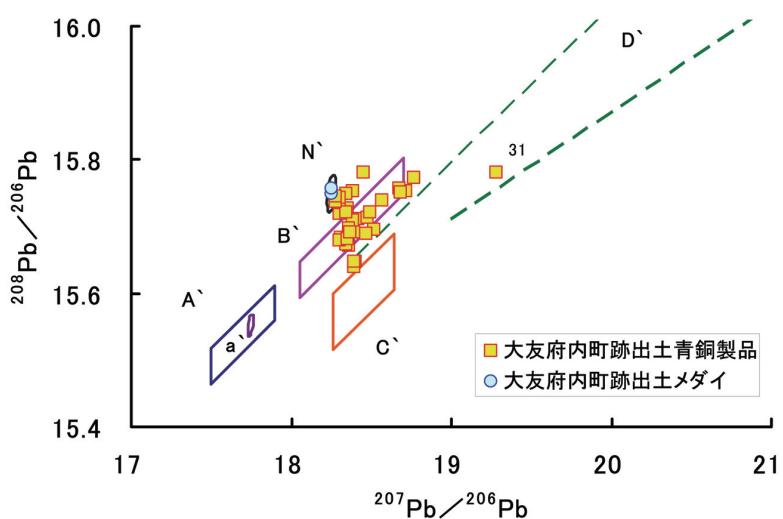


図5 大友府内町跡出土金属製品の鉛同位体比 ($^{206}\text{Pb}/^{204}\text{Pb}$ – $^{207}\text{Pb}/^{204}\text{Pb}$)

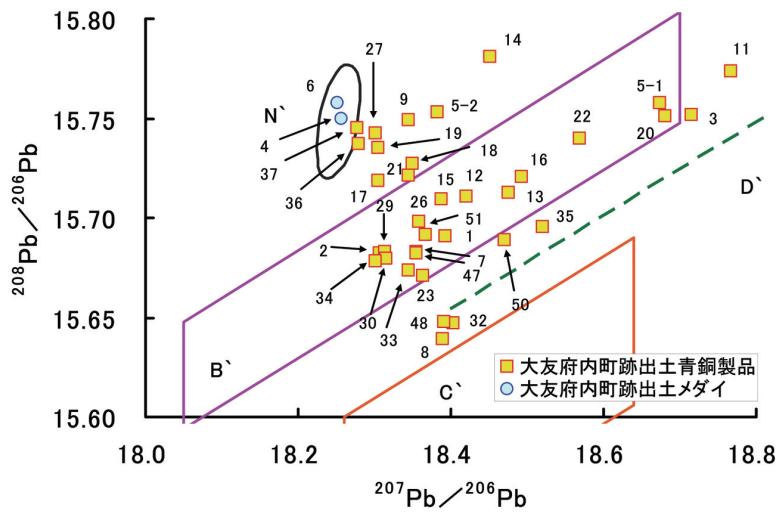


図6 図5の拡大図 ($^{206}\text{Pb}/^{204}\text{Pb}$ - $^{207}\text{Pb}/^{204}\text{Pb}$)

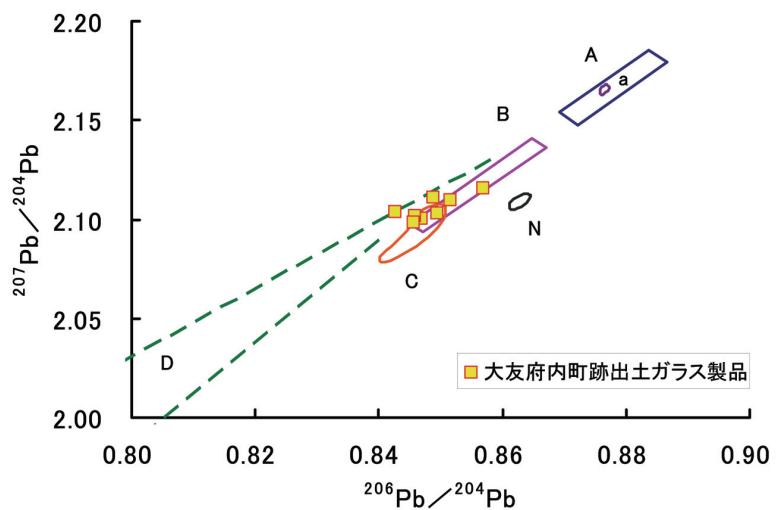


図7 大友府内町跡出土ガラス製品の鉛同位体比 ($^{207}\text{Pb}/^{206}\text{Pb}$ - $^{208}\text{Pb}/^{206}\text{Pb}$)

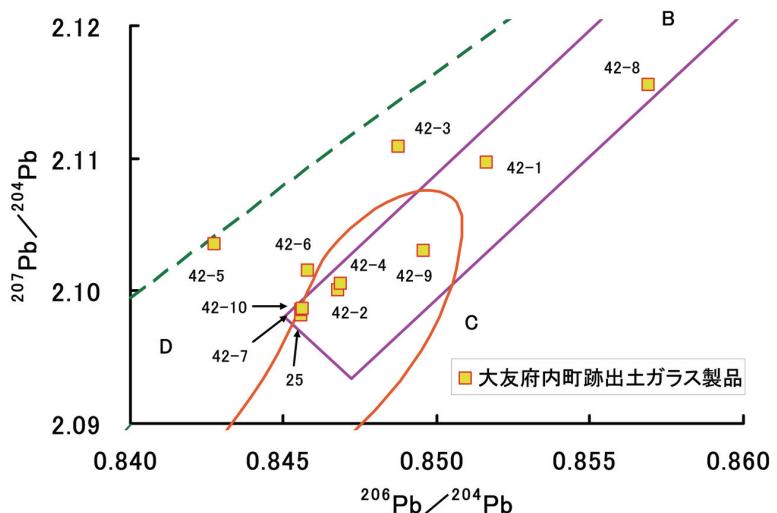


図8 図7の拡大図 ($^{207}\text{Pb}/^{206}\text{Pb}$ - $^{208}\text{Pb}/^{206}\text{Pb}$)

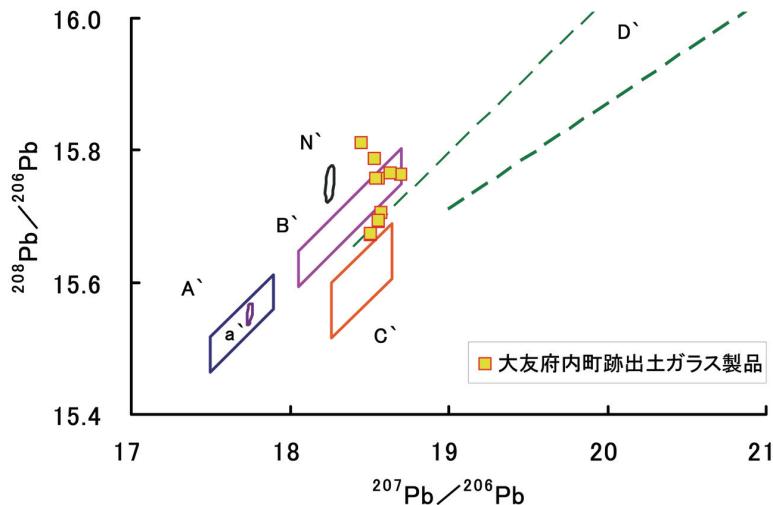


図9 大友府内町跡出土ガラス製品の鉛同位体比 ($^{206}\text{Pb}/^{204}\text{Pb}$ – $^{207}\text{Pb}/^{204}\text{Pb}$)

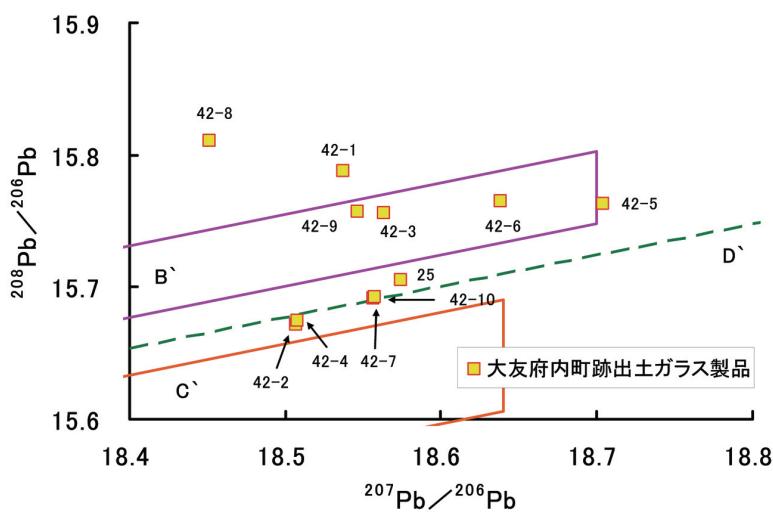


図10 図9の拡大図 ($^{206}\text{Pb}/^{204}\text{Pb}$ – $^{207}\text{Pb}/^{204}\text{Pb}$)

なお、本文中に掲載した町19・26-2・39・45・65次については、以下の表を参照のこと。

表4 中世大友府内町跡発掘調査一覧

調査次数	調査機関	調査年度	事業名	調査場所	調査内容	調査面積	報告書	報告書刊行日
府内町跡19次	大分市教育委員会	平成13年度	国庫補助 範囲確認	柳町	陶製井筒の井戸	106m ²	大分市埋蔵文化財調査年報 Vol.13	平成13年3月
府内町跡26-2次	大分市教育委員会	平成17年度	市道六坊新中島線拡幅	中町・ダイウス堂付近	南北方向の溝状造構	150m ²	大友府内12	平成20年3月
府内町跡39次	大分市教育委員会	平成15年度	国庫補助 範囲確認(アパート建設)	中町	石組み造構・小穴	15m ²	大友府内12	平成20年3月
府内町跡45次	大分市教育委員会	平成16年度	国庫補助 範囲確認(アパート建設)	中町・コレジオ	16世紀前半の建物跡 井戸跡・柱穴列・埋蔵造構	250m ²	大友府内12	平成20年3月
府内町跡65次	大分市教育委員会	平成17年度	国庫補助 範囲確認	妙巣寺推定地	大型掘り込み造構・柱穴跡	9m ²	大分市埋蔵文化財調査年報 Vol.17	平成17年3月

第2節 中世大友府内町跡遺跡第53次調査・第60次調査の花粉分析と珪藻分析

金原正明（奈良教育大学）、古環境研究所

1. 試料

分析試料は、第53次調査53SD210（堀）から採取された試料SA-01～SA-14、第60次調査中央トレンチより採取された試料1から試料12、北側トレンチより採取された堀最下層、南側トレンチより採取された試料1から試料17の12点、S500南北トレンチより採取された試料1から試料13、以上計52点である。これらのうち、珪藻分析には第53次調査53SD210（堀）から採取された試料SA-01～SA-14と第60次調査中央トレンチより採取された試料1から試料12を用いた。

2. 方法

（1）花粉分析

花粉粒の分離抽出は、基本的には中村（1973）を参考にして、試料に以下の物理化学処理を施して行った。
1) 5%水酸化カリウム溶液を加え15分間湯煎する。2) 水洗した後、0.5mmの篩で礫などの大きな粒子を取り除き、沈澱法を用いて砂粒の除去を行う。3) 25%フッ化水素酸溶液を加えて30分放置する。4) 水洗した後、冰酢酸によって脱水し、アセトトリシス処理（無水酢酸9:濃硫酸1のエルドマン氏液を加え1分間湯煎）を施す。5) 再び冰酢酸を加えた後、水洗を行う。6) 沈渣に石炭酸フクシンを加えて染色を行い、グリセリンゼリーで封入しプレパラートを作製する。以上の物理・化学の各処理間の水洗は、遠心分離（1500rpm、2分間）の後、上澄みを捨ててという操作を3回繰り返して行った。

検鏡はプレパラート作製後直ちに、生物顕微鏡によって300～1000倍で行った。花粉の同定は、所有の現生標本との対比で行った。結果は同定レベルによって、科・亜科・属・亜属・節および種の階級で分類した。複数の分類群にまたがるものはハイフン（-）で結んで示した。なお、科・亜科や属の階級の分類群で一部が属や節に細分できる場合はそれらを別の分類群とした。なお、伴って寄生虫卵の観察・同定・計数を行った。以下に、検出された主要な分類群を示す。

〔樹木花粉〕

モミ属、ツガ属、マツ属複維管束亜属、スギ、イチイ科-イヌガヤ科-ヒノキ科、ヤナギ属、クルミ属、ハンノキ属、カバノキ属、ハシバミ属、クマシデ属-アサダ、クリ、シイ属-マテバシイ属、ブナ属、コナラ属コナラ亜属、コナラ属アカガシ亜属、ニレ属-ケヤキ、エノキ属-ムクノキ、シキミ属、センダン属、キハダ属、ブドウ属、モクセイ科、スイカズラ属

〔樹木と草本を含むもの〕

クワ科-イラクサ科、バラ科、マメ科、ウコギ科、ニワトコ属-ガマズミ属

〔草本花粉〕

ガマ属-ミクリ属、イネ科、イネ属型、カヤツリグサ科、ネギ属、タデ属、タデ属サナエタデ節、ギシギシ属、ソバ属、アカザ科-ヒユ科、ナデシコ科、キンポウゲ属、カラマツソウ属、アブラナ科、ササゲ属、ツリフネソウ属、アリノトウグサ属-フサモ属、チドメグサ亜科、セリ亜科、シソ科、キツネノマゴ、オオバコ属、タンポポ亜科、キク亜科、ヨモギ属、ベニバナ

〔寄生虫卵〕

回虫卵、鞭虫卵、肝吸虫卵？、異形吸虫卵、異形吸虫卵？、マンソン裂頭条虫卵

（2）珪藻分析

試料には以下の物理化学処理を施し、プレパラートを作成した。

1) 試料から 1cm³ を秤量する。2) 10%過酸化水素水を加え、加温し反応させながら、1 晩放置する。3) 上澄みを捨て、細粒のコロイドおよび薬品の水洗を行う。水を加え、1.5 時間静置後、上澄みを捨てる。この操作を 5、6 回繰り返す。4) 残渣をマイクロピペットでカバーガラスに滴下し乾燥させる。マウントメディアによって封入しプレパラートを作成する。5) プレパラートは生物顕微鏡で 600 ~ 1500 倍で検鏡し、直線視野法により計数を行う。計数は、同定・計数は珪藻被殻が 100 個体以上になるまで行い、少ない試料についてはプレパラート全面について精査を行った。

珪藻ダイアグラムと解析は、生態性は Lowe(1974) や渡辺 (2005) 等の記載、陸生珪藻は小杉 (1986)、環境指標種群は海水生種と汽水生種は小杉 (1988)、淡水生種は安藤 (1990) の分類を用いた。以下に検出された主要珪藻を示す。

〔貧塩性種〕

Achnanthes exigua、*Achnanthes hungarica*、*Achnanthes lanceolata*、*Amphora copulata*、*Amphora montana*、*Aulacoseira nipponica*、*Aulacoseira* spp.、*Coccconeis placentula*、*Cyclotella bodanica-radiosa*、*Cyclotella* spp.、*Cymbella silesiaca*、*Eunotia minor*、*Fragilaria capucina*、*Fragilaria construens*、*Gomphonema minutum*、*Gomphonema parvulum*、*Hantzschia amphioxys*、*Navicula confervacea*、*Navicula contenta*、*Navicula cryptocephala*、*Navicula cryptotenella*、*Navicula elginensis*、*Navicula gallica*、*Navicula ignota*、*Navicula mutica*、*Navicula pupula*、*Navicula* spp.、*Nitzschia amphibia*、*Nitzschia debilis*、*Nitzschia palea*、*Nitzschia umbonata*、*Orthoseira roeseana*、*Pinnularia borealis*、*Pinnularia gibba*、*Pinnularia microstauron*、*Pinnularia schroederii*、*Pinnularia subcapitata*、*Rhoicosphenia abbreviata*、*Surirella angusta*、*Surirella ovata*

〔中-貧塩性種〕

Achnanthes brevipes

3. 結果

(1) 第 53 次調査 53SD-210 (堀)

1) 花粉分析結果

北、中、南の各地点の各層準とも、花粉が検出されないか極めて低密度であった。SA-09、SA-12、SA-13 でやや検出され、南側の S-205 は多少保存性がよい。

2) 珪藻分析結果

・北地点

貧塩性種（淡水生種）でほとんどが占め、好止水性種の *Cyclotella bodanica-radiosa* がやや優占し、*Amphora montana* を主とする陸生珪藻や流水不定性種も多く、真・好流水性種は少ない。優占種の *Cyclotella bodanica-radiosa* は増減を繰り返す。

・中地点

貧塩性種（淡水生種）でほとんどが占め、*Amphora montana*、*Navicula contenta*、*Navicula mutica* を主とする陸生珪藻が優占し、好止水性種の *Cyclotella bodanica-radiosa*、流水不定性種が伴われる。北地点同様に増減を繰り返し、上部は陸生珪藻が極めて優占する。

・南地点

貧塩性種（淡水生種）がほとんどを占め、*Amphora montana* を主とする陸生珪藻と *Nitzschia palea* などの流水不定性種が多い。

(2) 第 60 次調査

1) 花粉分析結果

・中央トレンチ

下部より、試料 12 は花粉がほとんど検出されない。試料 11 では、エノキ属—ムクノキ、コナラ属アカガシ亜属、マツ属複維管束亜属の樹木花粉、イネ属型を含むイネ科を主にアカザ科—ヒユ科、ヨモギ属、アブラナ科、カヤツリグサ科の草本花粉が伴われる。他に樹木花粉ではセンダン属、草本花粉ではベニバナやネギ属、ギシギシ属、ナデシコ科、ツリフネソウ属、キツネノマゴ、オオバコ属、タンポポ亜科、キク亜科が検出された。試料 12 より上位は、コナラ属アカガシ亜属が低率となり、マツ属複維管束亜属が増加し、鞭虫卵と回虫卵を主に寄生虫卵が低密度に検出される。寄生虫卵は他に肝吸虫卵、マンソン裂頭条虫卵が検出された。試料 6 になると、マツ属複維管束亜属がやや低率になる。この間に検出される栽培植物はイネ属型以外にソバ属とササゲ属がある。試料 1・2 ではマツ属複維管束亜属が著しく増加し優占する。

・南北トレンチ

堀の掘り込まれる 22 層以下の試料 9～試料 17 は花粉が検出されないかほとんど含まれていない。試料 7・8 そ層準 (S-223) では、エノキ属—ムクノキ、マツ属複維管束亜属の樹木花粉、イネ属型を含むイネ科を主にアカザ科—ヒユ科、アカザ科—ヒユ科、ヨモギ属の草本花粉が出現し、ソバ属、ベニバナ、寄生虫卵が伴われる。試料 1～試料 6 (S-200、S-222、S-231) は花粉がほとんど検出されない。

・北① S-235

花粉がほとんど検出されない。

・自然流路 (S-500)

I 地点、II 地点とも、基本的には樹木花粉の割合が高く、コナラ属アカガシ亜属を主にシイ属—マテバシイ属、コナラ属コナラ亜属、モミ属などが伴われる。草本花粉はやや低率で、イネ科、ヨモギ属、カヤツリグサ科を主にガマ属—ミクリ属などが伴われる。I 地点の試料 2 ではカヤツリグサ科、II 地点の試料 13 ではクワ科—イラクサ科の出現率が高い。

2) 珪藻分析結果

・中央トレンチ

貧塩性種（淡水生種）のみが検出される。下部より、試料 12 は、珪藻が低密度である。試料 5 から試料 11 は優占種がなく、*Amphora montana* などの陸生珪藻と *Nitzschia palea* などの流水不定性種が多く、好止水性種、真・好流水性種が伴われる。試料 4 では、*Nitzschia palea* などの流水不定性種が優占し、*Surirella ovata* などの真・好流水性種がやや増加する。試料 3 では *Nitzschia umbonata* が優占し、流水不定性種の割合が高い。試料 1・2 では、*Hantzschia amphioxys*、*Navicula contenta*、*Navicula mutica* の陸生珪藻が優占し、他は低率になる。

4. 考察

(1) 堀 SD210 の堆積環境

第 53 次調査 53SD210 では、北、中、南の各地点とも花粉が検出されないか極めて低密度であり、花粉の分解が考えられ、花粉などの有機質の分解される乾燥と湿潤を繰り返す環境が示唆される。また、SA-09、SA-12、SA-13 および南側の S-205 は花粉の多少保存性がよく、SA-09、SA-12、SA-13 の中層および南側の方がより安定した環境であったとみなされる。珪藻群集は各地点とも貧塩性種（淡水生種）で占められ、海水や汽水の影響は認められない。北地点では、好止水性種と陸生珪藻が多く、優占種の好止水性種の *Cyclotella bodanica-radiosa* は増減を繰り返し、水域となる時期と湿った環境の時期とが繰り返されたとみなされる。中地点では、陸生珪藻が優占し、付随する好止水性種の *Cyclotella bodanica-radiosa* は増減を繰り返し、湿った環境が支配的であるが、水域の拡大縮小が繰り返された。南地点では、陸生珪藻と流水不定性種で占められ、湿った環境から浅い水域を呈していた。第 60 次調査中央トレンチでは、下部では陸生珪藻と流水不定性種が優占し真・好止水性種、真・好流水性種が伴われ、湿った環境から浅い水域であり流水の多少の影響がみられる。中部では流水

不定性種が多いが真・好流水性種がやや増加し、多少は流れていいたとみなされる。上部では流水不定性種が優占し、湿った環境になる。また、第60次調査中央トレンチでは花粉の密度もやや高く保存性もよく、比較的安定した環境であった。また、回虫卵と鞭虫卵を主に寄生虫卵が検出され、居住域の汚染以上であり、堀に排泄物が投棄されたとみなされ、堀は下水状でもあったと考えられる。

第60次調査南北トレンチでは、堀の掘り込まれる22層以下は花粉が検出されないかほとんど含まれず、水成の堆積ではなく、土壌層と考えられる。また、上部は花粉がほとんど検出されず、中央トレンチの上部と同様に水の影響はなくなり、土壌層か堆積速度が速い埋土と考えられる。

以上から、堀SD210は、北側は水域と湿った環境が入れ替わる不安定な環境であり、南側ほど湿った環境から浅い水域および水流が伴い、やや安定した環境であったとみなされる。寄生虫卵の検出から排泄物が投棄され、下水として使われていたとみなされるが、前述のようにやや停滞していた。なお、堀SD210には海水および汽水の影響はなく、干溝の影響もなかったみなされる。上部は堀の機能を失い土壌化する。

(2) 堀SD210周辺の植生

第60次調査中央トレンチおよび南北トレンチの花粉分析結果から、樹木ではエノキ属ムクノキとマツ属複維管束亜属が多く、堀の周囲に成育し、植栽されていたとみなされる。エノキ属ムクノキは九州に多いムクノキの可能性が高い。マツ属複維管束亜属はアカマツないしクロマツがあり、アカマツは二次林性で中世後半以降特に多くなり、クロマツは海岸林を形成し庭園木としても用いられる。周辺には、イネ科を主にアカザ科ヒュウ科、ヨモギ属、アブラナ科、カヤツリグサ科の草本が分布し、いずれも路傍などに成育する人里植物であり、堀の縁辺および近隣の道路等に成育していた。他にネギ属、ギシギシ属、ナデシコ科、ツリフネソウ属、キツネノマゴ、オオバコ属、タンポポ亜科、キク亜科などが成育していた。樹木ではセンダン属が検出され、暖地の海岸沿いに多い種類である。ベニバナが検出され、染織や紅の生成などが行われたか、頻繁に薬用などに用いられていた。栽培植物としてはイネ属型、ソバ属、ササゲ属の花粉が検出された。

中央トレンチ上部では、マツ属複維管束亜属が著しく増加し、マツ林の安定した成立がみられ、里山の成立が示唆される。

(3) 自然流路(S-500)の時期の植生

樹木花粉の割合が高く、森林が優勢な時期であり、周辺地域はコナラ属アカガシ亜属を主にシイ属マテバシイ属を主とする照葉樹林が分布していた。クワ科一イラクサ科やカヤツリグサ科が優勢になる層準もあり、流路沿いが氾濫原状であり、これら草本が一時に多くなったり、コナラ属コナラ亜属の二次林要素や低湿なところではカヤツリグサ科に加えガマ属ミクリ属が分布していた。山地部ではモミ属やトチノキなどが伴わっていた。栽培植物は検出されず、森林状態が復元されるため、人の居住以前の時期とみられる。

5. まとめ

(1) 堀SD210は、北側は水域と湿った環境が入れ替わる不安定な環境であり、南側ほど湿った環境から浅い水域および水流が伴うやや安定した環境であった。海水および汽水の影響はなく、干溝の影響もなかった。寄生虫卵の検出から排泄物が投棄され、下水として使われていた。

(2) 堀SD210周囲には、エノキ属ムクノキ(生態上からムクノキ)とマツ属複維管束亜属(アカマツないしクロマツ)が成育し植栽されていた。周辺にはイネ科を主にアカザ科ヒュウ科、ヨモギ属、アブラナ科、カヤツリグサ科を主とする人里植物が堀の縁辺および近隣の道路等に成育していた。

(3) ベニバナ花粉が虫媒花としては多く、染織や紅の生成や薬用などに用いられていた。栽培植物としては花

粉ではイネ属型、ソバ属、ササゲ属が検出された。

(4) 自然流路 (S-500) の時期は、周辺にコナラ属アカガシ亜属を主にシイ属ーマテバシイ属を主とする照葉樹林が分布し、自然度の高い森林に覆われていた。

参考文献

金原正明 (1993) 花粉分析法による古環境復原. 新版古代の日本第 10 卷古代資料研究の方法, 角川書店, p.248-262.

中村純 (1967) 花粉分析. 古今書院, p.82-110.

中村純 (1974) イネ科花粉について、とくにイネ (*Oryza sativa*) を中心として. 第四紀研究, 13, p.187-193.

中村純 (1977) 稲作とイネ花粉. 考古学と自然科学, 第 10 号, p.21-30.

Hustedt,F.(1937?1938)Systematische und ologische Untersuchungen über die DiatomeenFlora von Java,Bali und Sumatra nach dem Material der Deutschen Limnologischen Sunda-Expedition. Arch.Hydrobiol,Suppl.15, p.131?506.

Lowe,R.L.(1974)Environmental Requirements and pollution tolerance of fresh?water diatoms. 333p., National Environmental Reserch.Center.

K. Krammer • H.Lange-Bertalot(1986-1991) Bacillariophyceae • 1 – 4.

Asai,K.&,Watanabe,T.(1995)Statistic Classification of Epilithic Diatom Species into Three Ecological Groups relaiting to Organic Water Pollution(2) Saprophilous and saproxenous taxa.Diatom,10,p.35-47.

安藤一男 (1990) 淡水産珪藻による環境指標種群の設定と古環境復原への応用. 東北地理, 42, p.73-88.

伊藤良永・堀内誠示 (1991) 陸生珪藻の現在に於ける分布と古環境解析への応用. 硅藻学会誌, 6,p.23-45.

小杉正人 (1986) 陸生珪藻による古環境解析とその意義—わが国への導入とその展望—. 植生史研究, 第 1 号, 植生史研究会, p.29-44.

小杉正人 (1988) 硅藻の環境指標種群の設定と古環境復原への応用. 第四紀研究, 27, p.1-20.

金子清俊・谷口博一 (1987) 線形動物・扁形動物. 医動物学, 新版臨床検査講座, 8, 医歯薬出版, p.9-55.

金原正明・金原正子 (1992) 花粉分析および寄生虫. 藤原京跡の便所遺構—藤原京 7 条 1 坊—, 奈良国立文化財研究所, p.14-15.

金原正明 (1999) 寄生虫. 考古学と動物学, 考古学と自然科学, 2, 同成社, p.151-158.

表1 第53次調査の花粉分析結果

分類群		53SD210														
		S-200	S-205	S-206	S-200	S-205	S-206	S-200	S-205	S-206	S-200	S-205	S-206			
学名	和名	SA-01	SA-02	SA-03	SA-04	SA-05	SA-06	SA-07	SA-08	SA-09	SA-10	SA-11	SA-12	SA-13	SA-14	
Arboreal pollen	樹木花粉						1					2				
<i>Pinus</i> subgen. <i>Diploxyylon</i>	マツ属複維管束亜属															
<i>Quercus</i> subgen. <i>Cyclobalanopsis</i>	コナラ属アカガシ亜属													1		
<i>Celtis-Aphananthe aspera</i>	エノキ属-ムクノキ													4		
Arboreal- Nonarboreal pollen	樹木・草本花粉															
Moraceae-Urticaceae	クワ科-イラクサ科										1			1		
Nonarboreal pollen	草本花粉															
Gramineae	イネ科									5	1		10	21		
<i>Oryza</i> type	イネ属型									1						
Chenopodiaceae-Amaranthaceae	アカザ科-ヒユ科									1		1	1			
Cruciferae	アブラナ科											1	3			
Lactucoideae	タンボボ亜科												1			
Astroideae	キク亜科										1		1			
<i>Artemisia</i>	ヨモギ属											1	1			
Fern spore	シダ植物胞子															
Monolate type spore	単条溝胞子									2		1	2			
Trilate type spore	三条溝胞子											1				
Arboreal pollen	樹木花粉	0	0	0	0	0	1	0	0	0	0	0	6	1	0	
Arboreal- Nonarboreal pollen	樹木・草本花粉	0	0	0	0	0	0	0	0	1	0	0	0	1	0	
Nonarboreal pollen	草本花粉	0	0	0	0	0	0	0	0	0	8	1	0	14	27	0
Total pollen	花粉総数	0	0	0	0	0	1	0	0	9	1	0	20	29	0	
Pollen frequencies of 1cm ³	試料1cm ³ 中の花粉密度	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.8	0.0	0.0	6.3	0.7	0.0	1.5	2.2	0.0	
									×10		×10		×10 ²	×10 ²		
Unknown pollen	未同定花粉	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	1	3	0
Fern spore	シダ植物胞子	0	0	0	0	0	0	2	0	0	0	0	0	2	2	0
Helminth eggs	寄生虫卵															
<i>Ascaris(lumbricoides)</i>	回虫卵												2	5		
<i>Trichuris(trichiura)</i>	鞭虫卵												2			
Total	計	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	2	7	0	
Helminth eggs frequencies of 1cm ³	試料1cm ³ 中の寄生虫卵密度	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	1.4	4.9	0.0	
													×10	×10		
Digestion rimeins	明らかな消化残渣	(-)	(-)	(-)	(-)	(-)	(-)	(-)	(-)	(-)	(-)	(-)	(-)	(-)	(-)	
Charcoal fragments	微細炭化物	(++)	(+)	(+)	(+)	(+)	(+)	(+)	(+)	(+)	(+)	(+)	(+)	(+)	(+)	

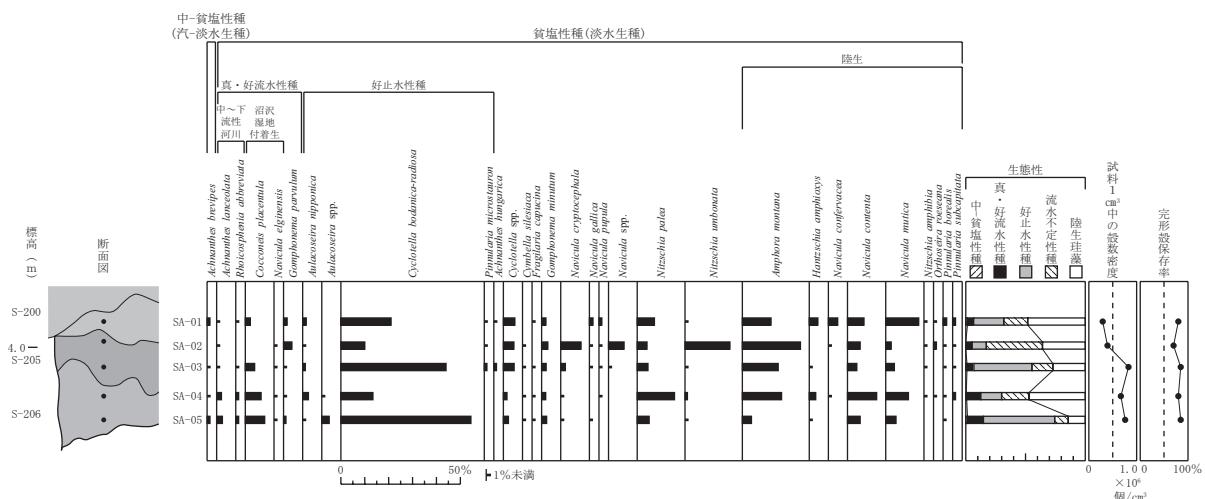


表2 第53次調査の53SD210(堀)、北地点の主要珪藻ダイアグラム